

四国横断自動車道建設に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告

第二十三冊

龍川五条遺跡Ⅰ
第1分冊

1996.12

香 川 県 教 育 委 員 会
財団法人香川県埋蔵文化財調査センター
日 本 道 路 公 団

四国横断自動車道建設に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告

第二十三冊

龍川五条遺跡Ⅰ
第1分冊

1996.12

香 川 県 教 育 委 員 会
財団法人香川県埋蔵文化財調査センター
日 本 道 路 公 団



(1) III A区全景 (東から)



(2) III B・IV A区全景 (東から)



(1) II C区全景 (西から)



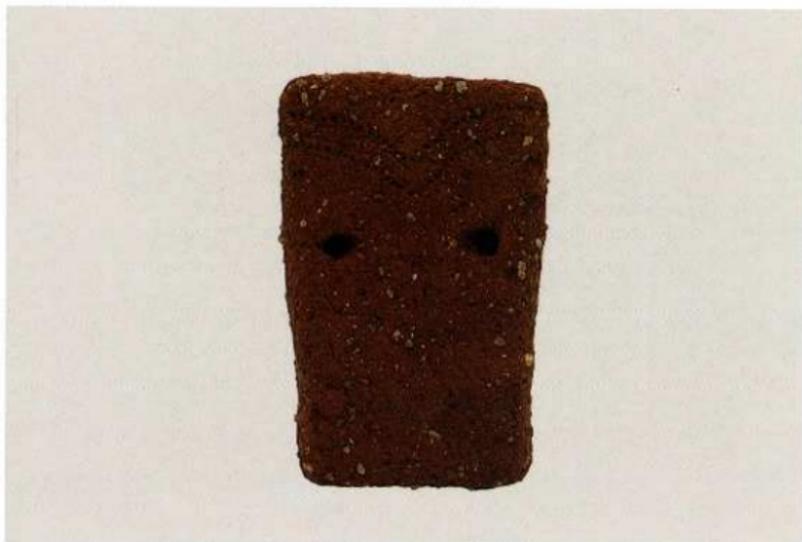
(2) II B・C区全景 (南東から)



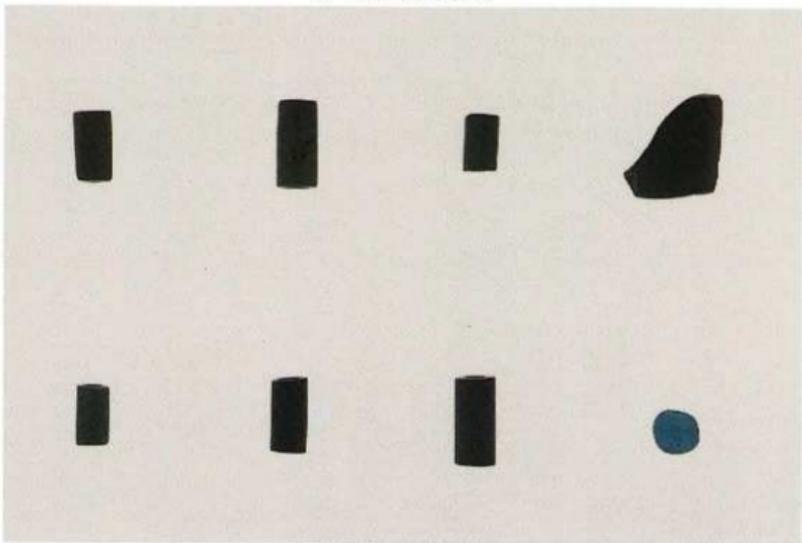
(1) 壺形土器 (1018)



(2) 壺形土器 (99)



(1) 顔形土製品 (795)



(2) 玉類 (95・221~226・1689)

序 文

四国横断自動車道は、高松～普通寺間が平成4年5月に開通しました。これにより、瀬戸大橋と香川県の高速道路が直結することになり、香川県は本格的な高速交通の時代を迎えております。

香川県教育委員会では、四国横断自動車道（高松～普通寺間）の建設に伴い、昭和63年度から財団法人香川県埋蔵文化財調査センターに委託して、用地内の埋蔵文化財の発掘調査を行ってまいりました。3年6か月の期間を要して28遺跡の発掘調査を実施し、平成3年9月に発掘調査を終了いたしました。また、平成3年度からは同センターにおきまして発掘調査の出土品の整理を順次行っているところであり、平成4年度からは発掘調査報告書の刊行をいたしております。

このたび「四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第二十三冊」として刊行いたしますのは、普通寺市原田町に所在する龍川五条遺跡についてであります。この遺跡の調査では、縄文時代から近世までの遺構・遺物が出土しております。とくに、大溝をめぐらした弥生時代前期の環濠集落と墳墓を検出しており、これらは県内における弥生文化の定着、発展ならびに当時の社会構造を考えるうえで、見過ごせない資料となるものと思われます。

本報告書が、本県の歴史研究の資料として広く活用されるとともに、埋蔵文化財に対する理解と関心が一層深められる一助となれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査から出土品の整理・報告にいたるまでの間、日本道路公団及び関係機関並びに地元関係各位には多大の御協力と御指導をいただきました。ここに深く感謝の意を表しますとともに、今後ともよろしく御支援賜りますようお願い申し上げます。

平成6年12月

香川県教育委員会

教育長 田中壮一郎

例 言

1. 本報告書は、四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書の第23冊で、香川県善通寺市原田町に所在する龍川五条遺跡（たつかわごじょういせき）の平成元年度発掘調査の報告を収録した。

2. 発掘調査は、香川県教育委員会が日本道路公団から委託され、香川県教育委員会が調査主体、財団法人香川県埋蔵文化財調査センターが調査担当者として実施した。

3. 発掘調査は、予備調査を平成元年4月から同年5月まで実施し、本調査を平成元年6月26日から平成2年3月31日まで実施した。発掘調査の担当は以下のとおりである。

財団法人香川県埋蔵文化財調査センター

金丸真明・真鍋嘉宏・藤川善規・大谷伸一・宮崎哲治・細川ルミ・
高橋加奈子・片山恭子

4. 発掘調査及び本報告書の作成にあたっては、下記の関係諸機関ならびに下記の方々の御協力・御教示を得た。記して謝意を表したい。（順不同、敬称略）

香川県土木部横断道対策室・同善通寺土木事務所横断道対策課・善通寺市都市計画課・四国横断自動車道建設善通寺龍川地区対策協議会・各地元自治会・善通寺市教育委員会・石野博信・古市光信・薬科哲男・東村武信

5. 本報告書の作成は、財団法人香川県埋蔵文化財調査センターが実施した。

本報告書の編集・執筆は宮崎が担当した。

6. 本報告書で用いる方位の北は、国土座標第IV系の北であり、標高はT.P.を基準としている。

また、遺構は下記の略号により表示している。

SB 掘立柱建物跡	SD 溝状遺構	SE 井戸
SH 堅穴住居跡	SK 土坑・土壕	SP 柱穴
SR 自然河川	ST 埋葬遺構	SX 不明遺構

7. 本遺跡の報告にあたっては、樹種同定をバリノ・サーヴェイ株式会社に委託・実施した。
8. 挿図の一部に建設省国土地理院地形図「丸亀」・「普通寺」(1/50,000)を使用した。
9. 本報告書の土器実測図のうち、断面が黒く塗りつぶされているものは須恵器を、断面が空白のものは弥生土器・土師器・土師質土器・黒色土器・陶器・磁器を表す。
また、石器実測図の網目は摩滅痕を、輪郭線の周囲の破線は摩滅痕・擦痕を、実線は敲打痕の範囲を表す。

第1分冊 本文目次

巻頭図版

序文

例言

第1章 調査の経緯

- 第1節 調査にいたる経緯 (1)
- 第2節 調査の経過 (5)
 - (1) 発掘調査の経過 (5)
 - (2) 調査の方法 (7)
 - (3) 整理作業の経過 (10)

第2章 立地と環境

- 第1節 地理的環境 (12)
- 第2節 歴史的環境 (13)

第3章 調査の成果

- 第1節 地形と土層序 (17)
 - (1) 地形 (17)
 - (2) 土層序 (18)
- 第2節 遺構・遺物 (29)
 - (1) 縄文時代晩期の遺構・遺物 (29)
 - (2) 弥生時代前期から中期の遺構・遺物 (32)
 - (3) 弥生時代後期から古墳時代初頭の遺構・遺物 (192)
 - (4) 古代から中世の遺構・遺物 (205)
 - (5) 近世の遺構・遺物 (245)
 - (6) 包含層の遺物 (254)

第4章 自然科学調査の成果

- 龍川五条遺跡から出土した木製品の樹種 (283)

第5章 まとめ

- 第1節 遺構について (292)
 - (1) 遺構の変遷 (292)

(2) 環濠集落	(299)
(3) 墓域	(301)
第2節 遺物について	(302)
(1) 弥生時代前期の土器	(302)
(2) 弥生時代前期の石器	(305)

挿図目次

第1図 四国横断自動車道 埋蔵文化財包蔵地	(2)	第21図 SB08平・断面図	(35)
第2図 グリッド配置図	(8)	第22図 SB09平・断面図	(36)
第3図 龍川五条遺跡位置図	(12)	第23図 SK11平・断面図	(36)
第4図 周辺の遺跡分布図	(14)	第24図 SK11出土遺物	(36)
第5図 土層模式図	(19)	第25図 SK12平・断面図	(37)
第6図 土層断面位置図	(20)	第26図 SK12出土遺物	(38)
第7図 土層断面図①	(21)	第27図 SK13平・断面図	(39)
第8図 土層断面図②	(22)	第28図 SK14平・断面図	(39)
第9図 土層断面図③	(23)	第29図 SK15平・断面図	(39)
第10図 土層断面図④	(24)	第30図 SK16平・断面図	(40)
第11図 土層断面図⑤	(25)	第31図 SK16出土遺物	(40)
第12図 土層断面図⑥	(26)	第32図 SK17平・断面図	(40)
第13図 土層断面図⑦	(27)	第33図 SK18平・断面図	(41)
第14図 土層断面図⑧	(28)	第34図 SK18出土遺物	(41)
第15図 SR01断面図	(29)	第35図 SK22平・断面図	(41)
第16図 SR01出土遺物①	(30)	第36図 SK23平・断面図	(41)
第17図 SR01出土遺物②	(31)	第37図 SK24平・断面図	(42)
第18図 SH02平・断面図	(32)	第38図 SK24出土遺物	(42)
第19図 SH03平・断面図	(33)	第39図 SK25平・断面図	(42)
第20図 SH04平・断面図	(34)	第40図 SK26平・断面図	(42)
		第41図 SK27平・断面図	(43)

第42图	SK 2 7 出土遺物	(43)	第72图	SK 4 5 出土遺物①	(55)
第43图	SK 2 8 平・断面図	(43)	第73图	SK 4 5 出土遺物②	(56)
第44图	SK 2 8 出土遺物	(43)	第74图	SK 4 6 平・断面図	(56)
第45图	SK 2 9 平・断面図	(44)	第75图	SK 4 6 出土遺物	(57)
第46图	SK 3 0 平・断面図	(44)	第76图	SK 4 7 平・断面図	(57)
第47图	SK 3 0 出土遺物	(44)	第77图	SK 4 7 出土遺物	(58)
第48图	SK 3 1 平・断面図	(44)	第78图	SK 4 8 平・断面図	(58)
第49图	SK 3 2 平・断面図	(45)	第79图	SK 5 0 平・断面図	(58)
第50图	SK 3 2 出土遺物	(45)	第80图	SK 5 0 出土遺物	(59)
第51图	SK 3 3 平・断面図	(45)	第81图	SK 5 1 平・断面図	(59)
第52图	SK 3 3 出土遺物	(45)	第82图	SK 5 2 平・断面図	(60)
第53图	SK 3 4 平・断面図	(46)	第83图	SK 5 2 出土遺物	(61)
第54图	SK 3 5 平・断面図	(46)	第84图	SK 5 3 平・断面図	(62)
第55图	SK 3 5 出土遺物	(46)	第85图	SK 5 3 出土遺物	(62)
第56图	SK 3 6 平・断面図	(47)	第86图	SK 5 4 平・断面図	(62)
第57图	SK 3 7 平・断面図	(47)	第87图	SK 5 4 出土遺物	(62)
第58图	SK 3 8 平・断面図	(47)	第88图	SK 5 5 平・断面図	(63)
第59图	SK 3 8 出土遺物	(48)	第89图	SK 5 5 出土遺物	(63)
第60图	SK 3 9 平・断面図	(48)	第90图	SK 5 6 平・断面図	(63)
第61图	SK 4 0 平・断面図	(49)	第91图	SK 5 7 平・断面図	(64)
第62图	SK 3 9・4 0 出土遺物	...	(49)	第92图	SK 5 7 出土遺物	(64)
第63图	SK 4 1 平・断面図	(50)	第93图	SK 5 8 平・断面図	(65)
第64图	SK 4 1 出土遺物①	(51)	第94图	SK 5 8 出土遺物	(65)
第65图	SK 4 1 出土遺物②	(52)	第95图	SK 5 9 平・断面図	(65)
第66图	SK 4 2 平・断面図	(52)	第96图	SK 5 9 出土遺物	(66)
第67图	SK 4 2 出土遺物	(52)	第97图	SK 6 0 平・断面図	(66)
第68图	SK 4 3 平・断面図	(53)	第98图	SK 6 1 平・断面図	(67)
第69图	SK 4 3 出土遺物	(53)	第99图	SK 6 2 平・断面図	(67)
第70图	SK 4 4 平・断面図	(53)	第100图	SK 6 2 出土遺物	(67)
第71图	SK 4 5 平・断面図	(54)	第101图	SK 6 3 平・断面図	(68)

第102图 SK 6 3 出土遺物 (68)	第132图 SK 8 2 平・断面图 (78)
第103图 SK 6 4 平・断面图 (68)	第133图 SK 8 3 平・断面图 (78)
第104图 SK 6 5 平・断面图 (69)	第134图 SK 8 4 平・断面图 (79)
第105图 SK 6 5 出土遺物 (69)	第135图 SK 8 4 出土遺物 (79)
第106图 SK 6 6 平・断面图 (70)	第136图 SK 8 5 出土遺物 (79)
第107图 SK 6 6 出土遺物 (70)	第137图 SK 8 5 平・断面图 (80)
第108图 SK 6 7 平・断面图 (70)	第138图 SK 8 6 平・断面图 (80)
第109图 SK 6 7 出土遺物 (70)	第139图 ST 0 1 平・断面图 (81)
第110图 SK 6 8 平・断面图 (70)	第140图 ST 0 1 出土遺物 (82)
第111图 SK 6 9 平・断面图 (71)	第141图 ST 0 2 主体部平・断面图 (83)
第112图 SK 6 9 出土遺物 (71)	第142图 ST 0 2 平・断面图 (84)
第113图 SK 7 0 平・断面图 (71)	第143图 ST 0 2 主体部出土遺物 (84)
第114图 SK 7 0 出土遺物 (72)	第144图 ST 0 2 出土遺物 (85)
第115图 SK 7 1 平・断面图 (72)	第145图 ST 0 3 出土遺物 (85)
第116图 SK 7 2 平・断面图 (72)	第146图 ST 0 3 平・断面图 (86)
第117图 SK 7 2 出土遺物 (73)	第147图 ST 0 4 平・断面图 (87)
第118图 SK 7 3 平・断面图 (73)	第148图 ST 0 4 出土遺物 (87)
第119图 SK 7 4 平・断面图 (73)	第149图 ST 0 5 平・断面图 (88)
第120图 SK 7 5 平・断面图 (73)	第150图 ST 0 6 平・断面图 (88)
第121图 SK 7 6 平・断面图 (74)	第151图 SD 3 2 断面图 (89)
第122图 SK 7 6 出土遺物 (74)	第152图 SD 3 3 断面图 (89)
第123图 SK 7 7 平・断面图 (74)	第153图 SD 3 4 断面图 (89)
第124图 SK 7 8 平・断面图 (75)	第154图 SD 3 4 出土遺物 (90)
第125图 SK 7 8 出土遺物 (75)	第155图 SD 3 5 断面图 (91)
第126图 SK 7 9 平・断面图 (75)	第156图 SD 3 6 断面图 (91)
第127图 SK 7 9 出土遺物 (76)	第157图 SD 3 6 出土遺物 (91)
第128图 SK 8 0 平・断面图 (77)	第158图 SD 4 0 断面图 (91)
第129图 SK 8 0 出土遺物 (77)	第159图 SD 4 0 出土遺物 (91)
第130图 SK 8 1 平・断面图 (78)	第160图 SD 4 1 断面图 (92)
第131图 SK 8 1 出土遺物 (78)	第161图 SD 4 8 断面图 (93)

第162図 SD 4 8 出土遺物① (94)	第192図 SD 5 0 出土遺物⑬ (126)
第163図 SD 4 8 出土遺物② (95)	第193図 SD 5 0 出土遺物⑭ (127)
第164図 SD 4 8 出土遺物③ (96)	第194図 SD 5 0 出土遺物⑮ (128)
第165図 SD 4 8 出土遺物④ (97)	第195図 SD 5 0 出土遺物⑯ (129)
第166図 SD 4 8 出土遺物⑤ (98)	第196図 SD 5 0 出土遺物⑰ (130)
第167図 SD 4 8 出土遺物⑥ (99)	第197図 SR 0 3 断面図 (131)
第168図 SD 4 9 断面図 (100)	第198図 SR 0 3 出土遺物① (132)
第169図 SD 4 9 出土遺物① (101)	第199図 SR 0 3 出土遺物② (133)
第170図 SD 4 9 出土遺物② (102)	第200図 SR 0 3 出土遺物③ (134)
第171図 SD 4 9 出土遺物③ (103)	第201図 SR 0 3 出土遺物④ (135)
第172図 SD 4 9 出土遺物④ (104)	第202図 SR 0 3 出土遺物⑤ (136)
第173図 SD 4 9 出土遺物⑤ (105)	第203図 SR 0 3 出土遺物⑥ (137)
第174図 SD 5 0 断面図 (106)	第204図 SR 0 4 断面図 (139)
第175図 SD 5 0 出土遺物① (109)	第205図 SR 0 4 下層出土遺物①	... (141)
第176図 SD 5 0 出土遺物② (110)	第206図 SR 0 4 下層出土遺物②	... (142)
第177図 SD 5 0 出土遺物③ (111)	第207図 SR 0 4 下層出土遺物③	... (143)
第178図 SD 5 0 出土遺物④ (112)	第208図 SR 0 4 下層出土遺物④	... (144)
第179図 SD 5 0 出土遺物⑤ (113)	第209図 SR 0 4 下層出土遺物⑤	... (145)
第180図 SD 5 0 出土遺物⑥ (114)	第210図 SR 0 4 下層出土遺物⑥	... (146)
第181図 SD 5 0 出土遺物⑦ (115)	第211図 SR 0 4 下層出土遺物⑦	... (147)
第182図 SD 5 0 出土遺物⑧ (116)	第212図 SR 0 4 下層出土遺物⑧	... (148)
第183図 SD 5 0 出土遺物⑨ (117)	第213図 SR 0 4 下層出土遺物⑨	... (149)
第184図 SD 5 0 出土遺物⑩ (118)	第214図 SR 0 4 下層出土遺物⑩	... (150)
第185図 SD 5 0 出土遺物⑪ (119)	第215図 SR 0 4 下層出土遺物⑪	... (151)
第186図 SD 5 0 出土遺物⑫ (120)	第216図 SR 0 4 下層出土遺物⑫	... (152)
第187図 SD 5 0 出土遺物⑬ (121)	第217図 SR 0 4 下層出土遺物⑬	... (153)
第188図 SD 5 0 出土遺物⑭ (122)	第218図 SR 0 4 下層出土遺物⑭	... (154)
第189図 SD 5 0 出土遺物⑮ (123)	第219図 SR 0 4 中層出土遺物①	... (157)
第190図 SD 5 0 出土遺物⑯ (124)	第220図 SR 0 4 中層出土遺物②	... (158)
第191図 SD 5 0 出土遺物⑰ (125)	第221図 SR 0 4 中層出土遺物③	... (159)

第222图	SR04中層出土遺物④	… (160)	第252图	SX03出土遺物	…………… (190)
第223图	SR04中層出土遺物⑤	… (161)	第253图	SX04断面图	…………… (191)
第224图	SR04中層出土遺物⑥	… (162)	第254图	SX04出土遺物	…………… (191)
第225图	SR04中層出土遺物⑦	… (163)	第255图	SX05出土遺物	…………… (192)
第226图	SR04中層出土遺物⑧	… (164)	第256图	SH01遺物出土狀況平面图	(193)
第227图	SR04中層出土遺物⑨	… (165)	第257图	SH01平·断面图	…………… (194)
第228图	SR04中層出土遺物⑩	… (166)	第258图	SH01出土遺物	…………… (195)
第229图	SR04中層出土遺物⑪	… (167)	第259图	SD04断面图	…………… (196)
第230图	SR04中層出土遺物⑫	… (168)	第260图	SD05断面图	…………… (196)
第231图	SR04中層出土遺物⑬	… (169)	第261图	SD07·08断面图	……… (196)
第232图	SR04中層出土遺物⑭	… (170)	第262图	SD07出土遺物①	……… (198)
第233图	SR04中層出土遺物⑮	… (171)	第263图	SD07出土遺物②	……… (199)
第234图	SR04中層出土遺物⑯	… (172)	第264图	SD07出土遺物③	……… (200)
第235图	SR04中層出土遺物⑰	… (173)	第265图	SD26·27断面图	……… (200)
第236图	SR04中層出土遺物⑱	… (174)	第266图	SD27出土遺物	…………… (201)
第237图	SR04中層出土遺物⑲	… (175)	第267图	SD38断面图	…………… (202)
第238图	SR04中層出土遺物⑳	… (176)	第268图	SD38出土遺物①	……… (202)
第239图	SR04中層出土遺物㉑	… (177)	第269图	SD38出土遺物②	……… (203)
第240图	SR04中層出土遺物㉒	… (178)	第270图	SD39断面图	…………… (204)
第241图	SR04中層出土遺物㉓	… (179)	第271图	SD39出土遺物	…………… (204)
第242图	SR04中層出土遺物㉔	… (180)	第272图	SD43断面图	…………… (205)
第243图	SR04上層·支流出土遺物①	(182)	第273图	SB01平·断面图	……… (205)
第244图	SR04上層·支流出土遺物②	(183)	第274图	SB02平·断面图	……… (206)
第245图	SR04上層·支流出土遺物③	(184)	第275图	SB03平·断面图	……… (207)
第246图	SR04上層·支流出土遺物④	(185)	第276图	SB04平·断面图	……… (208)
第247图	SR04上層·支流出土遺物⑤	(186)	第277图	SB05平·断面图	……… (209)
第248图	SR04層位不明遺物①	… (187)	第278图	SB06平·断面图	……… (210)
第249图	SR04層位不明遺物②	… (188)	第279图	SB07平·断面图	……… (211)
第250图	SP出土遺物①	…………… (189)	第280图	SK01平·断面图	……… (212)
第251图	SX03平·断面图	…………… (190)	第281图	SK01出土遺物①	……… (213)

第282图 SK 0 1 出土遺物②	(214)	第312图 SD 2 5 出土遺物	(229)
第283图 SK 1 9 平・断面图	(214)	第313图 SD 2 6 出土遺物	(229)
第284图 SK 2 0・2 1 平・断面图	(215)	第314图 SD 24・25・29・30断面图	(230)
第285图 SK 2 0 出土遺物	(215)	第315图 SD 24・25・29・30出土遺物	(231)
第286图 SD 2 1 出土遺物	(216)	第316图 SD 4 4 断面图	(231)
第287图 SK 4 9 平・断面图	(216)	第317图 SD 4 4 出土遺物	(232)
第288图 SD 0 2 断面图	(216)	第318图 SD 4 5 断面图	(232)
第289图 SD 0 3 断面图	(216)	第319图 SD 4 5 出土遺物①	(233)
第290图 SD 0 6 断面图	(217)	第320图 SD 4 5 出土遺物②	(234)
第291图 SD 0 6 出土遺物	(217)	第321图 SD 4 5 出土遺物③	(235)
第292图 SD 1 0 断面图	(218)	第322图 SD 4 6 断面图	(235)
第293图 SD 1 0 出土遺物①	(219)	第323图 SD 4 7 断面图	(236)
第294图 SD 1 0 出土遺物②	(220)	第324图 SR 0 2 断面图	(236)
第295图 SD 1 0 出土遺物③	(221)	第325图 SR 0 2 出土遺物①	(237)
第296图 SD 1 1 出土遺物	(222)	第326图 SD 0 2 出土遺物②	(238)
第297图 SD 1 2 断面图	(222)	第327图 SR 0 2 出土遺物③	(239)
第298图 SD 1 3 断面图	(222)	第328图 SP 出土遺物②	(240)
第299图 SD 1 4 出土遺物①	(223)	第329图 SX 0 1 断面图	(241)
第300图 SD 1 4 出土遺物②	(224)	第330图 SX 0 1 出土遺物	(241)
第301图 SD 1 4 断面图	(224)	第331图 SX 0 6 出土遺物	(242)
第302图 SD 1 5 断面图	(224)	第332图 SX 0 6 平・断面图	(243・244)
第303图 SD 1 6 断面图	(225)	第333图 SK 0 2 平・断面图	(245)
第304图 SD 1 7 断面图	(225)	第334图 SK 0 3 平・断面图	(245)
第305图 SD 2 0 断面图	(226)	第335图 SK 0 4 平・断面图	(246)
第306图 SD 2 0 出土遺物	(226)	第336图 SK 0 5 平・断面图	(246)
第307图 SD 2 1 断面图	(226)	第337图 SK 0 6 平・断面图	(246)
第308图 SD 2 2 断面图	(226)	第338图 SK 0 7 平・断面图	(247)
第309图 SD 2 3 断面图	(227)	第339图 SK 0 7 出土遺物	(247)
第310图 SD 2 3 出土遺物	(228)	第340图 SK 0 8 平・断面图	(248)
第311图 SD 2 5 断面图	(229)	第341图 SK 0 9 平・断面图	(248)

第342図 SK09 出土遺物 …………… (248)	第372図 IV区包含層出土遺物② …… (278)
第343図 SK10平・断面図 …………… (249)	第373図 IV区包含層出土遺物③ …… (279)
第344図 SD01 断面図 …………… (249)	第374図 IV区包含層出土遺物④ …… (280)
第345図 SD01 出土遺物 …………… (249)	第375図 木材(1) …………… (289)
第346図 SD09 断面図 …………… (250)	第376図 木材(2) …………… (290)
第347図 SD09 出土遺物 …………… (250)	第377図 木材(3) …………… (291)
第348図 SD31 断面図 …………… (250)	第378図 遺構変遷図① …………… (295・296)
第349図 SE01 平面図 …………… (251)	第379図 遺構変遷図② …………… (297・298)
第350図 SE02平・断面図 …………… (252)	第380図 遺跡周辺の旧地形復元図 … (299)
第351図 SE02 出土遺物 …………… (253)	
第352図 IA区包含層出土遺物 …… (258)	
第353図 IA～C区包含層出土遺物① (259)	
第354図 IA～C区包含層出土遺物② (260)	
第355図 IIA・B区包含層出土遺物 (261)	
第356図 IIC区包含層出土遺物① … (262)	
第357図 IIC区包含層出土遺物② … (263)	
第358図 IIC区包含層出土遺物③ … (264)	
第359図 IIC区包含層出土遺物④ … (265)	
第360図 IIC区包含層出土遺物⑤ … (266)	
第361図 IIC区包含層出土遺物⑥ … (267)	
第362図 IIC区包含層出土遺物⑦ … (268)	
第363図 IIIA区包含層出土遺物① … (269)	
第364図 IIIA区包含層出土遺物② … (270)	
第365図 IIIA区包含層出土遺物③ … (271)	
第366図 IIIA区包含層出土遺物④ … (272)	
第367図 IIIA区包含層出土遺物⑤ … (273)	
第368図 IIIA区包含層出土遺物⑥ … (274)	
第369図 IIIB区包含層出土遺物① … (275)	
第370図 IIIB区包含層出土遺物② … (276)	
第371図 IV区包含層出土遺物① …… (277)	

巻頭図版目次

巻頭図版 1	(1) III A区全景(東から)	巻頭図版 3	(1)壺形土器(1018)
	(2) III B・IV A区全景(東から)		(2)甕形土器(99)
巻頭図版 2	(1) II C区全景(西から)	巻頭図版 4	(1)顔形土製品(795)
	(2) II B・C区全景(南東から)		(2)玉類(95・221～226・1689)

表目次

表 1	四国横断自動車道(高松～善通寺) 建設に伴う発掘調査の概要① …… (3)	表 5	土器の器種組成 …… (302)
表 2	四国横断自動車道(高松～善通寺) 建設に伴う発掘調査の概要② …… (4)	表 6	壺形土器の文様 …… (303)
表 3	整理作業工程 …… (11)	表 7	甕形土器の口縁形態 …… (304)
表 4	木製品の樹種同定結果 …… (285)	表 8	甕形土器の文様 …… (304)
		表 9	石器の器種組成と石材 …… (306)

第2分冊 目次

遺物観察表	表10 土器観察表
	表11 石器観察表
	表12 玉類観察表
	表13 木器観察表
図版	
付図	付図 1 I・II区下層遺構配置図
	付図 2 III・IV区下層遺構配置図
	付図 3 I区上層遺構配置図
	付図 4 II・III区上層遺構配置図

第1章 調査の経緯

第1節 調査にいたる経緯

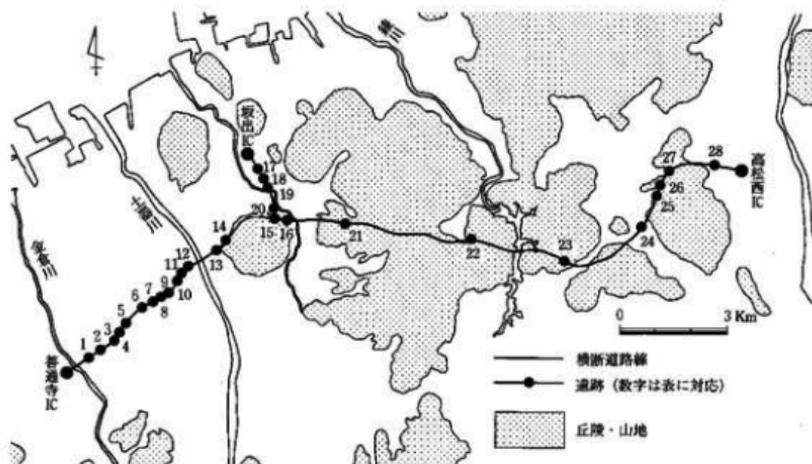
四国横断自動車道高松～善通寺間の建設は、同善通寺～豊浜間に引き続き、昭和57年1月8日に整備計画が決定され、昭和59年11月30日に建設大臣から日本道路公団総裁に対し施工命令が下された。

これを受けた香川県教育委員会では、路線内における埋蔵文化財包蔵地の確認を目的として、国庫補助事業として分布調査¹⁾を実施した。この成果をもとに、路線内に所在する埋蔵文化財包蔵地の取り扱いについて、日本道路公団と文化庁の協議が行われ、調査対象面積を39万㎡余りと判断し、基本的には記録保存で対応することが決定した。香川県教育委員会では、これを受けて同事業に対応するため香川県土木部横断道対策室及び日本道路公団高松建設局管理課、同高松工事事務所と、昭和62年度から調査体制等について協議を開始した。協議の結果、昭和63年度当初から2ヵ年の予定で本調査を実施すること、整理報告は発掘調査の終了後に実施することなどが決定した。このため香川県教育委員会では調査体制の充実を図ることを目的として、昭和62年11月に財団法人香川県埋蔵文化財調査センターを設立し、それと同時に専門職員の増員などの措置を実施して、きたるべき本調査に対する備えをはかった。

善通寺市の龍川地区の調査は、本調査の開始から2年目にあたる平成元年度に着手した。同地区は、路線内の埋蔵文化財包蔵地の具体的な内容を把握するために、平成元年4月27日から5月18日の期間で予備調査を行い、同地区の龍川五条遺跡と龍川四条遺跡の本調査面積を44,700㎡に確定した。本調査は、香川県教育委員会が日本道路公団高松建設局から委託を受け、財団法人香川県埋蔵文化財調査センターが調査担当者として実施した。

龍川五条遺跡は、龍川地区のおよそ西半分にあたり、調査対象面積は22,500㎡をはかる。本調査は、未退去家屋部分を除く12,300㎡を平成元年6月26日から平成2年3月31日までを行い、未退去家屋部分10,200㎡については、平成2年4月9日に着手し同年12月5日をもって龍川五条遺跡全体の調査を終了した。今回は、龍川五条遺跡のうち平成元年度に調査した部分の調査対象面積12,300㎡について報告する。

註(1) 香川県教育委員会 『国道バイパス及び四国横断自動車道建設予定地内埋蔵文化財詳細分布・試掘調査概報』(1987年)



第1図 四国横断自動車道埋蔵文化財包蔵地(高松～善通寺)

No.	遺跡名	所在地	調査面積㎡	調査期間	主な遺構	主な遺物
1	龍川五条遺跡	普通寺市原田町	12,300 元	6.26～2.3.31 2.4.9～2.12.5	弥生時代環濠・竪穴住居・周溝墓・土坑・自然河川, 古代竪立柱建物・溝	弥生土器, 土師器, 須恵器, 石器, 玉類, 木製品
2	龍川四条遺跡	普通寺市原田町 ・木徳町	20,200 元	7.1～2.3.31 2.5.28～2.10.24	古代竪立柱建物, 中世竪立柱建物・土坑墓・溝, 自然河川	縄文土器, 土師器, 須恵器, 瓦器, 磁器, 中世鏡
3	三条番ノ原遺跡	丸亀市三条町	12,041 元	63.4.18～元.3.31 4.10～2.3.31	弥生時代竪穴住居・溝, 自然河川	弥生土器, 石器
4	三条黒島遺跡	丸亀市三条町	7,677 元	63.5.15～63.11.26	旧石器ユニット, 近世建物跡	旧石器, 弥生土器, 陶磁器
5	郡家原遺跡	丸亀市三条町 ・郡家町	17,099 元	63.4.18～元.3.31 4.10～2.3.31	弥生時代竪穴住居・竪立柱建物・溝, 古代竪立柱建物・溝	弥生土器, 土師器, 須恵器, 緑釉陶器, 漆串
6	郡家一里屋遺跡	丸亀市郡家町	14,067 元	63.4.18～元.3.31 4.10～2.3.31	古代竪立柱建物・溝, 自然河川	弥生土器, 土師器, 須恵器, 緑釉・灰輪陶器, 有舌尖頭器
7	郡家大林上遺跡	丸亀市郡家町	11,175 元	63.6.15～元.3.22	古代竪立柱建物・溝, 中近世竪立柱建物・溝, 自然河川	須恵器, 漆串
8	郡家田代遺跡	丸亀市郡家町	12,741 元	63.6.15～元.2.17	古代火葬墓, 近世竪立柱建物・器	弥生土器, 須恵器, 須恵器骨董, 陶磁器, ナイフ形石器
9	川西北・原遺跡	丸亀市川西町	3,033 元	63.12.12～元.3.25	中近世竪立柱建物・溝	土師器, 須恵器
10	川西北・七条Ⅰ遺跡	丸亀市川西町	4,034 元	63.12.13～元.3.27	古代溝, 中近世自然河川	土師器
11	川西北・七条Ⅱ遺跡	丸亀市川西町	4,760 元	2.2～元.3.31	中近世竪立柱建物・溝	土師器
12	川西北・観治屋遺跡	丸亀市川西町	12,208 元	4.10～元.8.11	中世竪立柱建物・溝・自然河川	土師器, 須恵器, 陶磁器
13	飯野・東二瓦礫遺跡	丸亀市飯野町	3,366 元	63.12.13～元.3.27	古代竪立柱建物・溝, 中世竪立柱建物	土師器, 須恵器
14	飯野・東分山崎南遺跡	丸亀市飯野町	300 元	2.3.1～2.3.31		
15	川津東山田遺跡	坂出市川津町 ・緑歌郡飯山町	28,100 元	2.8.2～3.3.20 3.9.2～3.9.4	弥生時代竪穴住居, 古墳時代竪穴住居・竪立柱建物	弥生土器, 土師器, 須恵器

表1 四国横断自動車道(高松～普通寺)建設に伴う発掘調査の概要①

No	遺跡名	所在地	調査面積	調査期間	主な遺構	主な遺物
16	川津川西遺跡	坂出市川津町	5,400	2. 5.10～3. 1.17	古墳時代竪穴住居, 古代～中世掘立柱建物・溝	縄文土器, 土師器, 須恵器, 墨書土器, 土馬, 耳環
17	川津中塚遺跡	坂出市川津町	15,290 5,700	2. 5.10～3. 2.28 3. 4. 4～3. 9.13	弥生時代竪穴住居, 古代～中世掘立柱建物・溝・土坑	弥生土器, 土師器, 須恵器, 耳環, 鉄器(小刀)
18	川津下樋遺跡	坂出市川津町	9,650 200	2. 5.10～3. 1.31 3. 7. 1～3. 7.16	弥生時代水田・井堰・溝・自然河川	縄文土器, 弥生土器, 石器, 木製品
19	川津二代政遺跡	坂出市川津町	10,400	2. 5.10～3. 3. 8	弥生時代溝・自然河川, 中世掘立柱建物・溝	弥生土器, 土師器, 石器
20	川津一ノ又遺跡	坂出市川津町	35,160 1,350	2. 4.12～3. 3.28 3. 7.18～3. 9.27	弥生時代竪穴住居, 掘立柱建物・溝・自然河川, 古代～中世掘立柱建物・溝	弥生土器, 土師器, 須恵器, 漆軸陶器, 石器, 木製品, 帯金具
21	飯山一本松遺跡	綾歌郡飯山町	2,200	元. 4.17～元. 5.16		弥生土器, 土師器, 須恵器
22	府中地区	坂出市府中町	3,000	2.10.30～2.12.26	時期不明柱穴・土坑	須恵器
23	藤南裏下池南遺跡	綾歌郡藤南町	2,900	元. 5.22～元. 7.24	古代須恵器窯跡	須恵器
24	国分寺下日名代遺跡	綾歌郡国分寺町	11,350	元. 8.19～2. 2.28	弥生時代溝, 古代水田・動物足跡	弥生土器, 土師器, 須恵器
25	国分寺楠井遺跡	綾歌郡国分寺町	4,400	2. 4.11～2.10. 2	古墳時代円墳(横穴式石室), 中世土師器窯・掘立柱建物	土師器, 須恵器, 瓦質土器, 耳環
26	国分寺六ツ目古墳	綾歌郡国分寺町	900	元. 9. 1～元.12.28	古墳時代前方後円墳(主体部3基)	土師器, 鉄器
27	国分寺六ツ目遺跡	綾歌郡国分寺町	5,600	元.10. 1～2. 2.28	中近世掘立柱建物	弥生土器, 陶磁器, 石器
28	中間西井坪遺跡	高松市中間町	11,600 8,680 1,270	元. 8.19～2. 3.25 2. 5.10～3. 3.25 3. 4. 5～3. 7.18	旧石器ブロック, 弥生時代竪穴住居・掘立柱建物・溝, 古墳時代埴輪焼成土坑・古墳・竪穴, 中近世掘立柱建物	弥生土器, 土師器, 埴輪(円筒・形象), 陶棺(組合式土製棺), ナイフ形・船底形石器, 木製品(組・人形)

表2 四国横断自動車道(高松～善通寺)建設に伴う発掘調査の概要②

第2節 調査の経過

(1) 発掘調査の経過

龍川地区(善通寺市原田町・木徳町)として調査対象地に挙げられていた部分は、予備調査によって、龍川五条遺跡と龍川四条遺跡に分けられ、それぞれの調査面積が確定した。予備調査は、龍川地区の約41,600㎡について、平成元年4月27日から5月18日の期間で実施した。予備調査の方法は、四国横断自動車道路線幅の境界沿いに幅2mのトレンチを設定し、重機と人力を併用して遺構の有無や密度・遺物の包含状況などを調査した。その結果、龍川五条遺跡は保留部分を含む22,500㎡が調査対象となり、平成元年6月26日から本調査を開始した。平成元年度は平成2年3月31日までの期間で、遺跡の西半部12,300㎡の調査を行った。なお、今回の報告には含まれていないが、残りの東半部10,200㎡については平成2年度に継続して調査を行い、平成2年12月5日に調査を終了した。

平成元年度期間中の調査体制は、以下のとおりである。

香川県教育委員会文化行政課

総括	課長	太田彰一
	課長補佐	高木 尚
	副主幹	野網朝二郎
総務	係長	宮内 憲生
	主事	横田 秀幸
	主事	水本久美子
埋蔵文化財	係長	大山 真充
	技師	岩橋 孝
		國木 健司

財団法人香川県埋蔵文化財調査センター

総括	所長	十川 泉
	次長	安藤 道雄
総務	係長(事務)	加藤 正司
	主査(土木)	山地 修
	主事	三宅 浩司
	参事	見勢 護
調査	係長	真鍋 昌宏
	主任技師	金丸 真明
	主任技師	真鍋 嘉宏
	技師	藤川 善規
	技師	大谷 伸一
	技師	宮崎 哲治
	調査技術員	細川 ルミ
	調査技術員	高橋加奈子
	調査技術員	片山 恭子

発掘作業は、予備調査終了後の平成元年6月22日に重機による表土剥ぎを行い、同6月26日より作業員を投入してI A区から開始した。以下、調査区ごとにまとめる。

- I A区 6月22日から遺構検出を開始し、多数の溝状遺構の重なりを確認。8月9日に上層の航空測量を行い、下層遺構の検出・掘り下げにはいる。10月6日に下層の航空測量を行う。その後、井戸の断ち割り等の補足調査を行い、11月22日に埋め戻して調査終了。
- I B区 10月12日から表土剥ぎを開始し、自然河川と溝状遺構を検出。11月30日に航空測量を行い、12月12日に埋め戻して調査終了。
- I C区 8月22日に竈塚の測量を行う。10月23日から着手し、自然河川と溝状遺構を検出。11月30日の航空測量後、12月30日に埋め戻して調査終了。
- II A区 8月23日から表土剥ぎを開始し、わずかな土坑を検出。10月6日に航空測量を行い、調査終了。
- II B区 8月24日から表土剥ぎを行い、方形・円形周溝・土坑を検出。10月6日の航空測量後、調査区を東へ拡張。11月2日・12月19日に航空測量を行い、調査終了。
- II C区 9月21日から表土剥ぎを開始し、多数の土坑・柱穴を検出。11月2日に航空測量を行い、包含層の残りを除去して遺構を検出。12月19日に航空測量を行い、下層の自然河川の掘り下げに入る。2月27日・3月9日に自然河川の航空測量を実施。3月6日から仮設道下の調査に着手。3月20日の航空測量をもって調査終了。
- III A区 11月2日から表土剥ぎを開始し、竪穴住居・土坑・溝状遺構を検出。12月19日に上層遺構の航空測量を行い、下層遺構の掘り下げに入る。2月6日に下層遺構の航空測量を行った後、仮設道下の調査に着手。3月20日に航空測量を実施して調査終了。
- III B区 1月26日から東半部の表土剥ぎを開始し、柱穴・土坑・溝状遺構を検出。2月14日から西半部に着手し、柱穴・土坑・溝状遺構を検出。2月27日に東半部、3月9日に西半部の航空測量を実施。3月5日から仮設道下の調査を開始し、3月20日の航空測量をもって調査終了。
- IV A区 1月24日から調査を開始し、わずかに溝状遺構の残存を検出。2月27日に航空測量を実施して、調査終了。

その他 8月17日から8月31日の2週間にわたって、四国学院大学考古学実習の学生5名を受け入れてその指導を行った。

平成2年度の調査対象である龍川五条遺跡の東半部(Ⅳ・Ⅴ区)の予備調査を10月17日～19日(Ⅳ区)、3月23日(Ⅴ区)の2回に分けて実施した。

また、3月20日には、ⅡC区からⅢB区の現地説明会を行い、約200名の見学者が参加した。

3月30日に調査機材等を搬出し、現地における調査を完了した。

(2) 調査の方法

調査は、作業員の雇用から労務管理まで当方で行う直営調査方式を採用している。

調査対象地は東西に細長く延びており、複数の市道・峠道と用水路が調査対象地を横断していることを考慮して、それらの道路や用水路を境として、便宜上ⅠからⅤまでの調査区を設定した。さらに調査区によっては、現地形を反映していると考えられる農業用の用水路などが存在していることから、さらに小区画を設定して調査を行った。

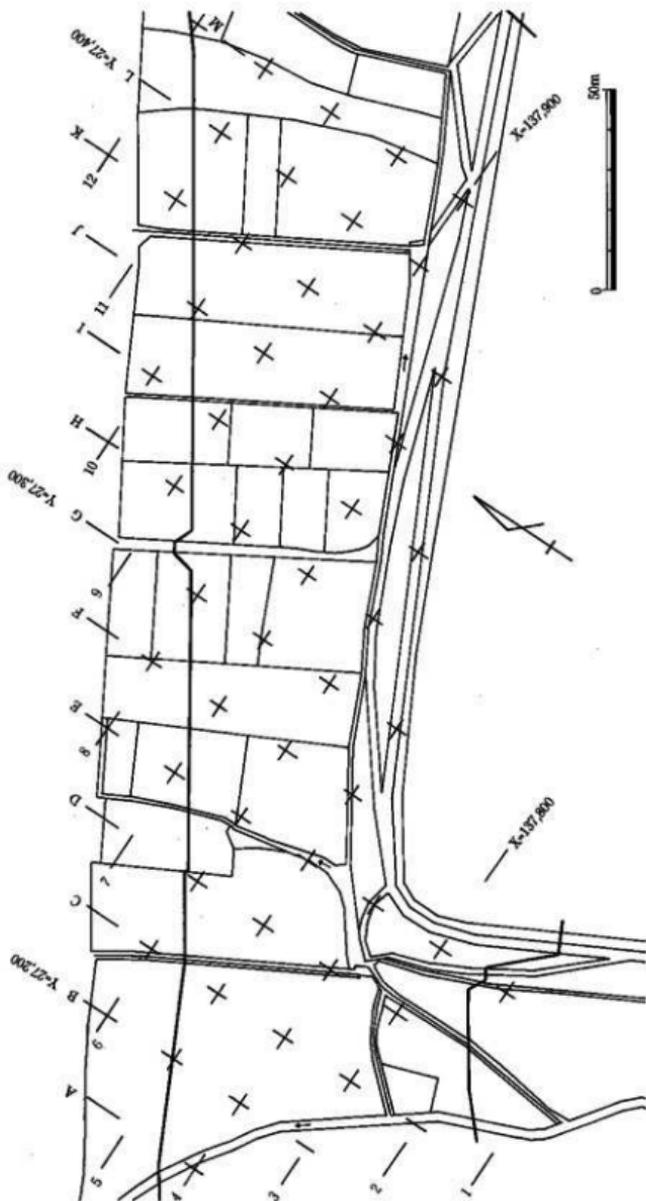
また、四国横断自動車道関連の他遺跡や、今後に予想される周辺の開発に伴う発掘調査の遺構などとの関連を図ることを目的として、調査区全体に国土座標第Ⅳ系に基づく20m方眼のグリッドを設定している。

掘り下げは、原則として人力で行ったが、表土層及び遺物の希薄な包含層の一部については、重機を使用して作業の効率化を図った。

調査区及び検出遺構の測量は、主として航空写真測量を業者に委託して行った。航空写真測量によって、調査区全体を縮尺1/50の平面図に図化し、必要に応じて縮尺1/20の平面図の作成を行っている。また、断面図や個別の遺構の平面図などについては、調査担当者が実測を行い、図面を作成した。

写真撮影は、35mmフィルム(白黒・カラーリバーサル)と60×70mmフィルム(白黒)を用いて調査担当者が行った。

出土遺物・図面・写真は、財団法人香川県埋蔵文化財調査センターにおいて保管している。



第2図 グリッド配置図

発掘調査に従事した方々（平成元年度のみ）

現場整理作業員 山地 真理子

作業員	嬰庭 澄夫	石村 守	一蒸 直義	植田愛次郎
	大西 智	大西 武	大西 信夫	川西 哲生
	黒川 実	杉原 喬	瀬川 阜月	関 宏
	竹内 文雄	富田 広武	奈良 保男	野保 和義
	長谷川正幸	藤村 親雄	分木 信行	松原 忠俊
	松本 明義	真鍋 森雪	宮武 吉栄	森岡 富明
	山下 和博	横田 恒	池田やよい	大西 文
	大林チエ子	岡崎 愛子	岡崎キヨコ	小野 春代
	香川 和代	香川 貞美	唐住 和子	木下 シズ
	佐藤 紀江	正 嘉代子	高木 一江	中村八重子
	西川アキノ	平畑ユキエ	藤井 悦子	堀家 静子
	松田 君子	丸岡富士子	森岡ミチ子	山地ツル子
	横田キヨミ	横田八重子	吉井 絢子	吉岡 愛子
	吉川 和子			

四国学院大学考古学実習生

大藤小百合

高松 悦子

中山 豪

古本 寛

三上あけ美

(3) 整理作業の経過

平成6年度期間中の整理体制は、以下のとおりである。

香川県教育委員会文化行政課			財団法人香川県埋蔵文化財調査センター		
総括	課長	高木 尚	総括	所長	松本 豊胤
	主幹	小原 克己		次長	真鍋 隆幸
総務	課長補佐	高木 一義	総務	係長(事務)	前田 和也
	係長	源田 和幸		主査	西村 厚二
	主査	星加 宏明	整理	主任文化財専門員	
	主事	高倉 秀子			渡部 明夫
埋蔵文化財	係長	藤好 史郎	係長	廣瀬 常雄	
	主任技師	國木 健司	主任技師	宮崎 哲治	
	主任技師	森下 英治			

平成7年度期間中の整理体制は、以下のとおりである。

香川県教育委員会文化行政課			財団法人香川県埋蔵文化財調査センター		
総括	課長	高木 尚 (～10.24)	総括	所長	大森 忠彦
		藤原 章夫(10.25～)		次長	真鍋 隆幸
総務	課長補佐	高木 一義	総務	係長(事務)	前田 和也
	副主幹	渡部 明夫		主査	西村 厚二
	係長	山崎 隆	整理	主任文化財専門員	
	主査	星加 宏明			廣瀬 常雄
埋蔵文化財	主事	高倉 秀子	主任技師	宮崎 哲治	
	主任技師	森下 英治			
	技師	塩崎 誠司			

整理作業は平成6年10月1日から平成8年3月31日までの18月間の期間で、財団法人香川県埋蔵文化財調査センターにおいて実施した。整理作業の主な内容および経過については表3にまとめて掲げる。

	平成6年度						平成7年度											
	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
遺物注記	—																	
遺物接合・復元	—	—	—															
遺物実測・拓本				—	—	—	—	—	—	—								
レイアウト										—	—							
遺物観察表													—	—	—			
遺物写真撮影													—	—				
ト レ ース													—	—	—			
図 版 作 成																	—	—
原稿執筆													—	—	—	—		
編 集																		—
整理取納																		—

表3 整理作業工程

整理作業に従事した方々

整理作業員	青木 民江	猪木原美恵子	岩崎 美穂
	岡野 雅子	佐々木博子	増田江里子
	水谷 葉子	交谷 見和	

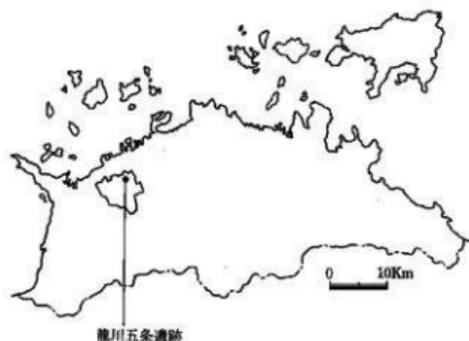
第2章 立地と環境

第1節 地理的環境

普通寺市は、香川県のほぼ中央部に広がる丸亀平野に所在する。丸亀平野は、西から弘田川・金倉川・土器川・大東川によって形成された緩扇状地・氾濫原と、沖積地からなる県下最大級の平野で、いわゆる条里制に起源する方格地割りが良く遺存している。普通寺市は、主として土器川・弘田川によって形成された緩扇状地の西部に位置している。

龍川五条遺跡は、普通寺市原田町に所在しており、金倉川中流域の東岸に位置する。当該地周辺は未だのどかな田園風景をよく残している。遺跡の西端には、比高差 1.6m 程度の崖（段丘崖）が存在している。この段丘崖は金倉川の東岸に特に顕著にみられ、崖下には金倉川の氾濫原が広がっている。段丘崖から東には微高地が広がるが、これらの微高地は、扇状地形成段階の堆積物である礫層上に黄色系の粘土層が堆積して形成されたもので、ときに始良Tn火山灰層や旧石器包含層が地表下1m程度で確認できることがあり、微高地の形成（平坦地化）は相当古い時期であると考えられる。これらの微高地は、かつて網状に奔走する旧河道（旧流路）によって分断されていたようである。

龍川五条遺跡はこのような微高地上の平坦面に存在するものであり、標高は約23mをはかる。当遺跡が立地する微高地も、当遺跡内において2つの旧河道によって分断され、連続してはいない。



第3図 龍川五条遺跡位置図

第2節 歴史的環境

丸亀平野では、近年、四国横断自動車道をはじめとする開発行為に伴う埋蔵文化財発掘調査が数多く実施され、新たな知見が続々と得られている。ここでは龍川五条遺跡の周辺に存在する遺跡を時代ごとに概観したい。

旧石器時代

香川県の中央部に位置する五色台・金山は、サヌカイトの原産地として著名であり、五色台山頂には多数の製品・未製品が散布する围分台遺跡が所在する。丸亀平野においては三条黒島遺跡で、サヌカイト片が集中する石器ブロックが検出された。この石器ブロックからは船底形石器・スクレイパー・横長剥片など多量の剥片が出土し、その中には瀬戸内技法を反映した接合資料が抽出された。三条黒島遺跡に隣接する三条番ノ原遺跡では、土坑状の落ち込みから剥片や石核が出土した。また、郡家田代遺跡ではナイフ形石器を中心とした石器群が出土している。これらの資料は、当該期の資料の少ない香川県においては重要な資料であると同時に、丸亀平野の形成を考察する上でも重要な資料である。

縄文時代

丸亀平野における縄文時代の遺跡は、中期以前の資料が現在のところ確認されており、後期に属する永井遺跡が初現である。金倉川西岸に位置する永井遺跡では、居住域は確認できなかったものの、旧河道から堅果類とともに多数の土器・石器が出土している。石器では打製石斧の比重が高いことが特徴的であり、内陸部における集団の生業活動を示すものと思われる。三条番ノ原遺跡では当該期と推定される石器の製作跡が見つかっている。

晩期の遺跡としては龍川四条遺跡がある。旧河道からは晩期後半の凸帯文土器が出土している。この他に永井遺跡・稲木遺跡A地区・乾遺跡・金蔵寺下所遺跡などでも少量ながら晩期の土器が出土しており、後期に比べて遺跡数は増加していることがわかる。

弥生時代

弥生時代に入ると、さらに遺跡数は増加し、多様な遺跡内容を示すようになる。

前期では旧練兵場遺跡・甲山北遺跡・乾遺跡・永井遺跡・三井遺跡・稲木遺跡・五条遺跡・龍川五条遺跡・中の池遺跡・三条番ノ原遺跡・三条黒島遺跡などがあげられる。前期前半段階としては、永井遺跡や稲木遺跡A地区の旧河道上層から出土した土器があり、外彎刃の磨製石庖丁が伴っている。乾遺跡では広楕の未製品が出土している。前半段階の集落遺跡は検出されていないが、今後周辺地域で確認される可能性は高い。前期後半段階と



- | | | | | |
|------------|----------|------------|---------------|-----------------|
| 1 龍川五条遺跡 | 11 郡木遺跡 | 21 田村遺跡 | 31 仲村廃寺(伝導寺跡) | 41 王薙山古墳 |
| 2 龍川四条遺跡 | 12 永井遺跡 | 22 五条遺跡 | 32 菩提寺伽藍 | 42 宮が尾古墳 |
| 3 三条砦ノ原遺跡 | 13 中村遺跡 | 23 宝幢寺跡 | 33 菩提寺西遺跡 | 43 御座神社古墳 |
| 4 三条馬島遺跡 | 14 乾遺跡 | 24 鉢伏山古墳群 | 34 仙遊遺跡 | 44 夏谷1号墳 |
| 5 郡家原遺跡 | 15 上一坊遺跡 | 25 陣山遺跡 | 35 鏡ノ宗遺跡 | 45 互谷遺跡 |
| 6 郡家一里屋遺跡 | 16 三井遺跡 | 26 和霊神社古墳 | 36 弘田川西岸遺跡 | 46 関古墳群 |
| 7 郡家大林上遺跡 | 17 瀬下遺跡 | 27 石川遺跡 | 37 青龍古墳 | 47 若宮八幡古墳(丸山古墳) |
| 8 郡家田代遺跡 | 18 中の池遺跡 | 28 九頭神遺跡 | 38 北原シンネバエ遺跡 | 48 鏡ヶ峰4号墳 |
| 9 川西北原遺跡 | 19 平地南遺跡 | 29 甲山北遺跡 | 39 北原古墳 | 49 磐臼山古墳(遺跡塚) |
| 10 金蔵寺下所遺跡 | 20 田村廃寺 | 30 旧陣兵場遺跡群 | 40 薙家古墳 | |

第4図 周辺の遺跡分布図

しては、環濠をもつ集落として中の池遺跡・龍川五条遺跡があり、その可能性のあるものに三井遺跡・五条遺跡がある。中の池遺跡では3条の環濠が、龍川五条遺跡では2条の環濠が確認されている。これらの環濠集落は、いずれも前期後半段階に形成され、中期初頭段階で廃絶することが指摘できる。この他に、旧練兵場遺跡では平成5年度の発掘調査で当該期の袋状土坑が検出されている。甲山北遺跡・道下遺跡・三条番ノ原遺跡・三条黒島遺跡・郡家田代遺跡などでは散発的に土器が出土している。

中期では確認されている遺跡数がやや減少し、丘陵上を指向する遺跡が多くなる傾向が見られる。低地部では、旧練兵場遺跡の彼ノ宗地区・仲村庵寺で堅穴住居が検出されており、拠点集落である旧練兵場遺跡の本格的な集落形成はこの段階から始まる。これ以外には、雨霧山山裾の丘陵上に立地する矢ノ塚遺跡・西碑殿遺跡・月信遺跡や、火上山北麓に立地する吉原火上山遺跡などがある。矢ノ塚遺跡や西碑殿遺跡では多数の掘立柱建物が確認されている。これらは中期後半の時期が与えられており、この時期は瀬戸内海沿岸を中心に紫雲山遺跡に代表される「高地性集落」が出現する時期にあたる。この段階において、遺跡が生産基盤である平野から離れて丘陵上を指向する傾向は、県内各地において認められる。その要因については、「高地性集落」の出現要因と短絡的に結び付けるのではなく、自然的・社会的・経済的な様々な角度からの検討が必要であろう。青銅器関連遺跡では、大麻山北麓の瓦谷遺跡で中細形銅剣・中細形銅矛・中広形銅剣・平形銅剣の一括埋納が知られている。我拝師山北麓の我拝師山C遺跡では、大阪府茨木市東奈良遺跡出土の2号銅鐸型によって製作された外縁付紐式流水文銅鐸が、我拝師山南麓の北原シンネバエ遺跡では、扁平紐式銅鐸が出土している。

後期に入ると、遺跡は丘陵上から再び平野に立地するようになる。特に後半段階になると急激に遺跡の数が増加し、その規模も大形化する。旧練兵場遺跡ではこの時期の堅穴住居が40棟以上検出されており、極めて大規模な拠点集落として展開している。石川遺跡・九頭神遺跡・稲木遺跡など周辺の微高地上に集落遺跡が立地しており、集落単位による周辺地域での大規模な土地開発がうかがえる。金倉川東岸では、三条番ノ原遺跡・三条黒島遺跡・郡家原遺跡などでも集落が形成されている。この段階で成立した集落は、基本的に古墳時代初頭まで継続する傾向が見られる。墓制関連では、稲木遺跡で横石墓や前方後方形周溝墓が検出されており、旧練兵場遺跡仙遊地区では人面の線刻を持つ箱式石棺墓と小児用壺棺墓が、王墓山古墳周辺では当該期の箱式石棺墓や小堅穴式石室が検出されており、多種多様な墓制が展開していたことがうかがえる。青銅器関連遺跡としては、我拝師山A・

B遺跡、陣山遺跡で平形銅剣の一括埋納が知られている。この他に弘田川西岸遺跡では小銅鐸の破片が、旧練兵場遺跡彼ノ宗地区では銅鐵が出土している。

古墳時代

古墳時代には、弥生時代後期後半から継続する勢力が築造した、多数の前方後円墳が存在する。前期に属する古墳としては、この地域で最古に位置付けられる大麻山中腹の標高405mに位置する全長46mの野田院古墳をはじめ、大麻山東麓に大麻山経塚古墳・大麻山椀袋塚古墳・丸山1号墳・火上山北麓の大窪経塚古墳などの全長30mクラスの積石塚の前方後円墳が集中している。また、大麻山北方の独立丘陵上には鷲ノ山産の凝灰岩を用いた刳抜式石棺が出土した磨臼山古墳（遠藤塚古墳）をはじめ、丸山古墳（北向八幡社古墳）・鶴ヶ峰2号墳・同4号墳などの盛り土の前方後円墳も集中している。

中期に属する古墳としては、大形円墳である青龍古墳・生野雉子塚古墳などがあるが、埋葬施設などの詳細は明らかでない。

後期に属する古墳としては、県内最古の横穴式石室を主体部に持つ全長43mの前方後円墳の王墓山古墳がある。小口積みの古式の横穴式石室には石屋形を造り出しており、金銅装の馬具や冠帽をはじめとする多種多様の副葬品が出土している。宮ヶ尾古墳は横穴式石室墳で、玄室奥壁に線刻壁画を持つ。この他には、大麻山東麓に小規模な群集墳である岡古墳群や寺岡古墳群などが築かれている。

集落としては、中期の普通寺西遺跡で旧河道から多数の土師器とともに木製品が出土している。後期には稲木遺跡・旧練兵場遺跡仲村廃寺で竈を付設した竪穴住居や掘立柱建物を確認しているが、遺跡数としては少ない。

古代

古代に入ると、県内でも多数の寺院が建築される。白鳳期には、田村廃寺や宝幢寺跡などの古代寺院が知られている。この他に、仲村廃寺・普通寺などがあげられる。

集落は、四国横断自動車道関連の発掘調査によって郡家原遺跡・郡家一里屋遺跡などで6世紀後半から7世紀にかけての多数の掘立柱建物を検出している。

また、いわゆる条里関連の遺構についても、三条番ノ原遺跡をはじめとして方格地割りに伴う溝を確認している。これらは、現在、丸亀平野一円に遺存する地割りと同じ方向を示しており、現段階においては、最も古いもので9世紀頃に相当することがわかってきている。

第3章 調査の成果

第1節 地形と土層序

(1) 地形

今回の調査対象地の現地表面は西端のⅠ区で標高22.5m、中央部のⅡ・Ⅲ区で23.2m、東端のⅣ区で22.8mをはかり、西方へは0.7m、東方へは0.4mの比高を持つ。対象地の西方には比高差1.6mの段丘崖が存在し、さらに氾濫原を経て金倉川に至る。この段丘崖は、扇状地上を網状に奔走していた多数の旧河道の一つが、河床の低下によって1条の有力な河道（当該地の場合は金倉川）になる際に河岸を侵食した結果形成されたと考えられ、その形成時期は弥生時代中期と古代末の2時期と推定されている^{註(1)}。一方、東方は大規模な地下げを受けたⅣ区西半に隣接した凹地（平成2年度調査で埋没した旧河道を検出）に向かって傾斜している。微高地にあたるⅡ・Ⅲ区は埋没した旧河道によって東西に二分されている。西側の微高地を西微高地、東側の微高地を東微高地^{註(2)}とし、以下この呼称を使用することとする。東西微高地間に存在する旧河道は、当該地の南方については後に築造された溜池（前池）が存在するため不明であるが、北方においても全く現地表に痕跡をとどめておらず、比較的早い段階に完全に埋没したことがうかがえる。また、当該地の北方約200mに位置する龍川小学校の南から東側にかけて大きく湾曲する凹地が存在しており、ここに一つの埋没旧河道を想定する事ができる。昭和34年に弥生時代前期から中期の遺物が不時発見された五条遺跡は、この旧河道の北方に位置する微高地上に位置するものと思われる。当該地の東微高地はこの旧河道を北限として、北に向かって緩やかに傾斜している。先述した当該地東方の凹地（旧河道）は北方に連続してみられ、龍川小学校の南東でこの旧河道と合流するが、東西微高地間の旧河道との連続性については不明である。

註(1) 高橋 学 「地形環境分析からみた条里遺構年代決定の問題点」（『条里制研究』第6号、1990年）

(2) 地理的な地形区分からいえば、西微高地は旧中州あるいは自然堤防にあたるが、ここでは煩雑さを避けるため微高地として扱う。

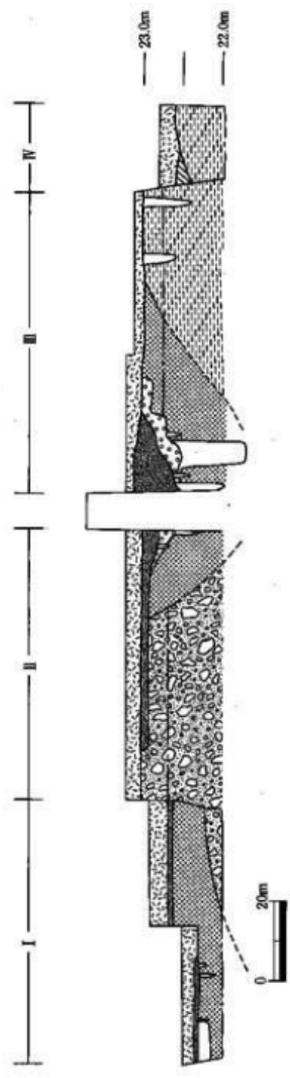
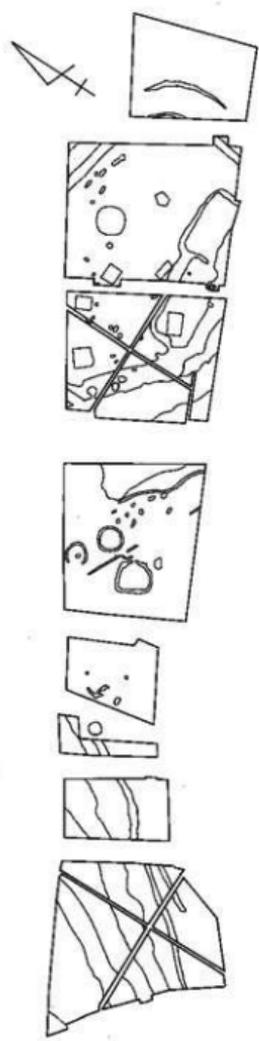
(2) 土層序

ここでは遺跡全体の土層序を、各調査区の断面図を基に作成した模式図(第5図)によって巨視的に概観する。

当該地の土層は微高地西側斜面、西微高地、東微高地の三つに大別することができる。旧河道によって分断された東微高地は、四国横断自動車道をはじめとする丸亀平野の発掘調査で確認される黄色系粘質土が堆積している。当該地では確認されていないが、この黄色系粘質土層の下層には始良Tn火山灰と考えられる火山灰層が堆積していることがあり、龍川四条遺跡¹⁴や郡家一里屋遺跡¹⁵などで検出されている。これに対し、西微高地は黄色系粘質土層はほとんど見られず、拳大の亜円礫を多く含んだ灰色砂礫層が堆積している。この砂礫層は網条に奔走していた旧河道の旧中州あるいは自然堤防堆積物に相当するものと考えられ、概ね南北方向に連続している。この砂礫層の上面は土壌化作用によって弱粘性を帯びている。三条番ノ原遺跡¹⁶で検出した遺構面においても同様の灰色砂礫層が存在しており、当該地と同様に自然堤防堆積物に相当すると考えられる。金倉川に向かって傾斜する微高地西斜面は西微高地でみられた灰色砂礫層上に弱粘性の黄灰色系シルト層が堆積している。この黄灰色系シルト層は下位ほど粘性が強くなり級化構造が見られることから、旧河道の氾濫によって堆積したものと考えられ、さらに西に下がるにつれて厚みを増していることから、旧河道が次第に西方へ移動したことが想定できよう¹⁶。同様の黄灰色系シルト層は東西微高地間にもみられる。この部分ではシルト層が西微高地の灰色砂礫層、東微高地の黄色系粘質土層の上位に幅約90mにわたって凹地状に堆積しており、微高地間を流下していた旧河道の埋積作用によって堆積したものと考えられる。

上記の黄色系粘質土層、灰色砂礫層、黄灰色系シルト層は堆積状況から、西微高地の灰色砂礫層→東微高地の黄色系粘質土層→東西微高地間の黄灰色系シルト層の順に形成されたことがわかる。いずれの層からも遺物の出土をみていないため、その形成時期についての手ごかりは得られていない。先述したように当該地では確認されていないが、黄色系粘質土層の下層で部分的に火山灰層を確認していることや、三条黒島遺跡で黄色系粘質土層中から旧石器を検出していること¹⁷などが、形成時期を考察する上での一つの手ごかりとなろう。

調査対象地内は東端の住宅街(弘徳団地)以外は農耕地として土地利用されていることから、全体に遺構が削平を受けているであろうことが予想された。調査の結果、大部分の遺構を耕作土及び床土の直下で検出している。このことは、当該地内が比較的早い段階か



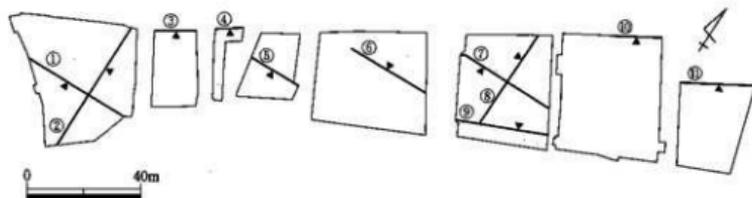
- 耕作土
- 包含層
- 黄灰色系シルト
- 黄灰色粘質土
- 灰色砂礫
- 埋戻土 (地上げによる)

第 5 図 土層模式図

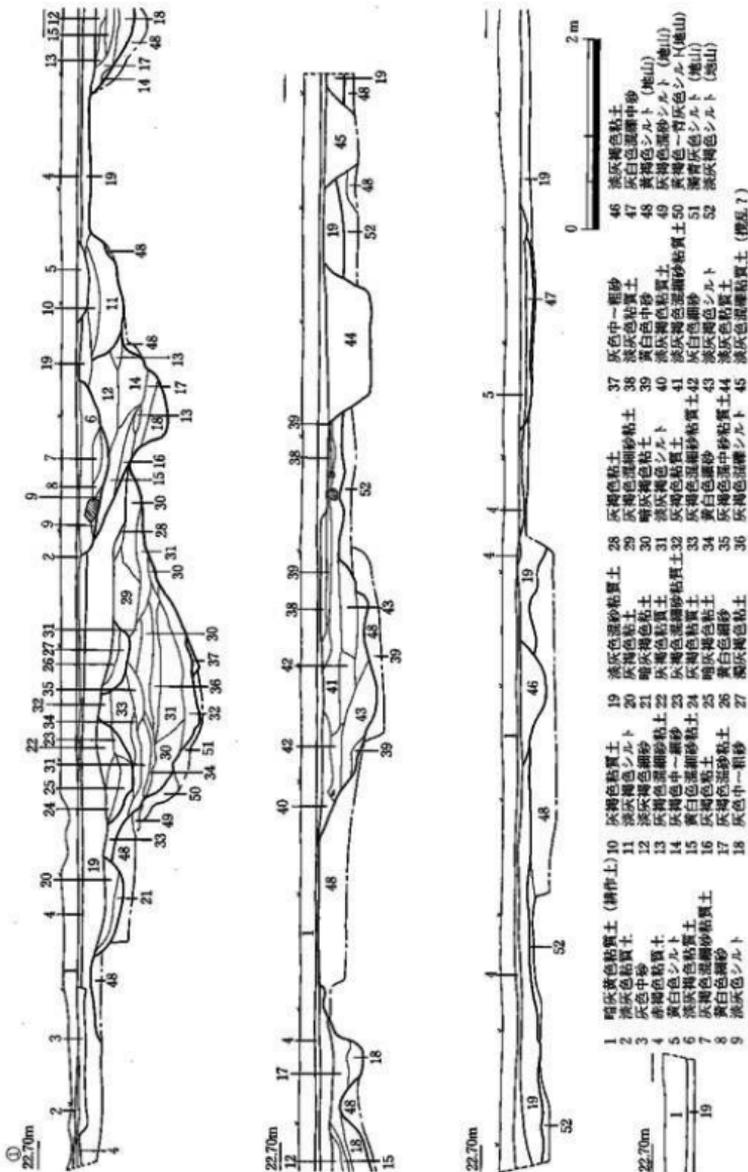
ら農耕地として継続的に土地利用されてきたために、土砂などの堆積による新たな土壌生成が滞ったためと理解できる。そのため、微高地上では包含層がほとんど形成されていない。模式図で包含層とした層は、鉄分やマンガン粒を多量に含んだ弱粘性の黄白色粘質土であり、中世以降の水田耕作土と考えられるものである。

各調査区の土層序については断面図を掲げておく。(第7～14図)

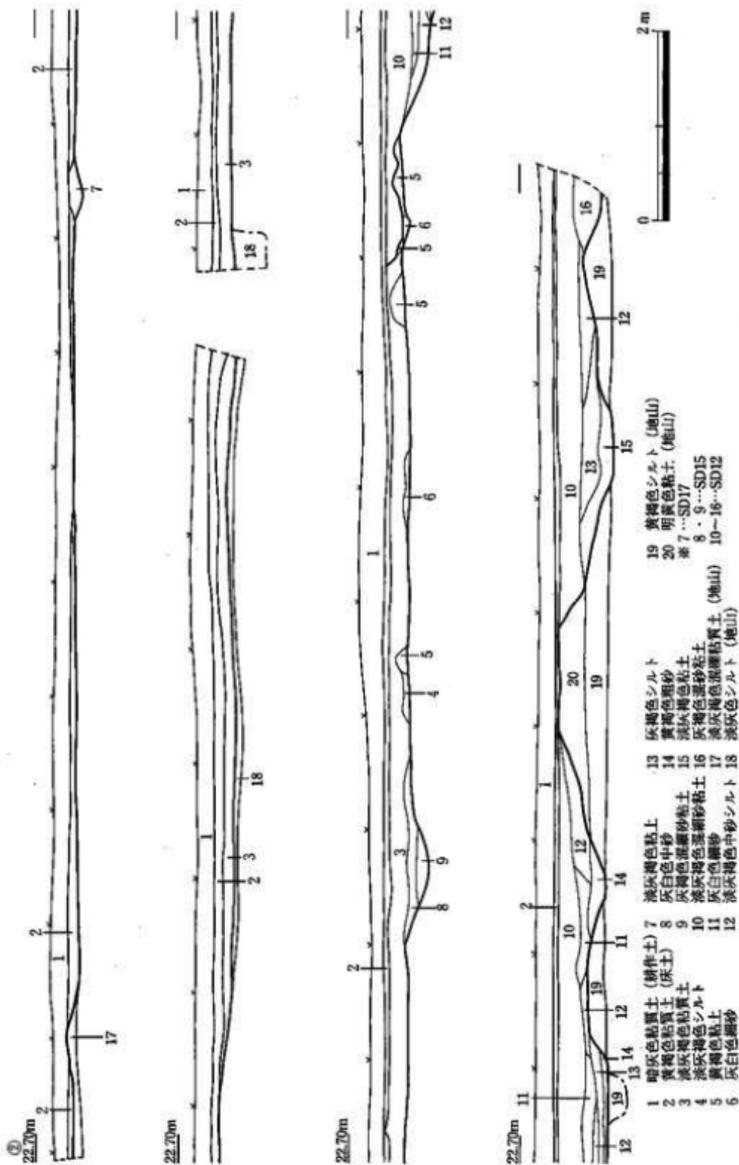
- 註 (1) 西岡達哉・木下晴一編 『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第15冊 龍川四条遺跡』香川県教育委員会・(財)香川県埋蔵文化財調査センター・日本道路公団(1995年)
- (2) 和田素子編 『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第12冊 郡家一里屋遺跡』香川県教育委員会・(財)香川県埋蔵文化財調査センター・日本道路公団(1993年)
- (3) 片桐孝浩 『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第11冊 三条番ノ原遺跡』香川県教育委員会・(財)香川県埋蔵文化財調査センター・日本道路公団(1992年)
- (4) このことは、「地形」で述べた当該地西方に存在する段丘崖の形成と連動する。
- (5) 森下英治 「三条黒島遺跡」「四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概報昭和63年度」香川県教育委員会・(財)香川県埋蔵文化財調査センター・日本道路公団(1990年)



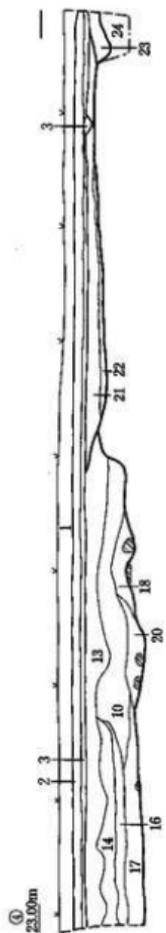
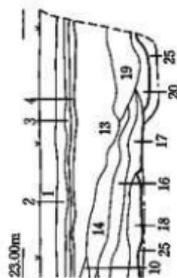
第6図 土層断面位置図



第 7 圖 土層断面図①



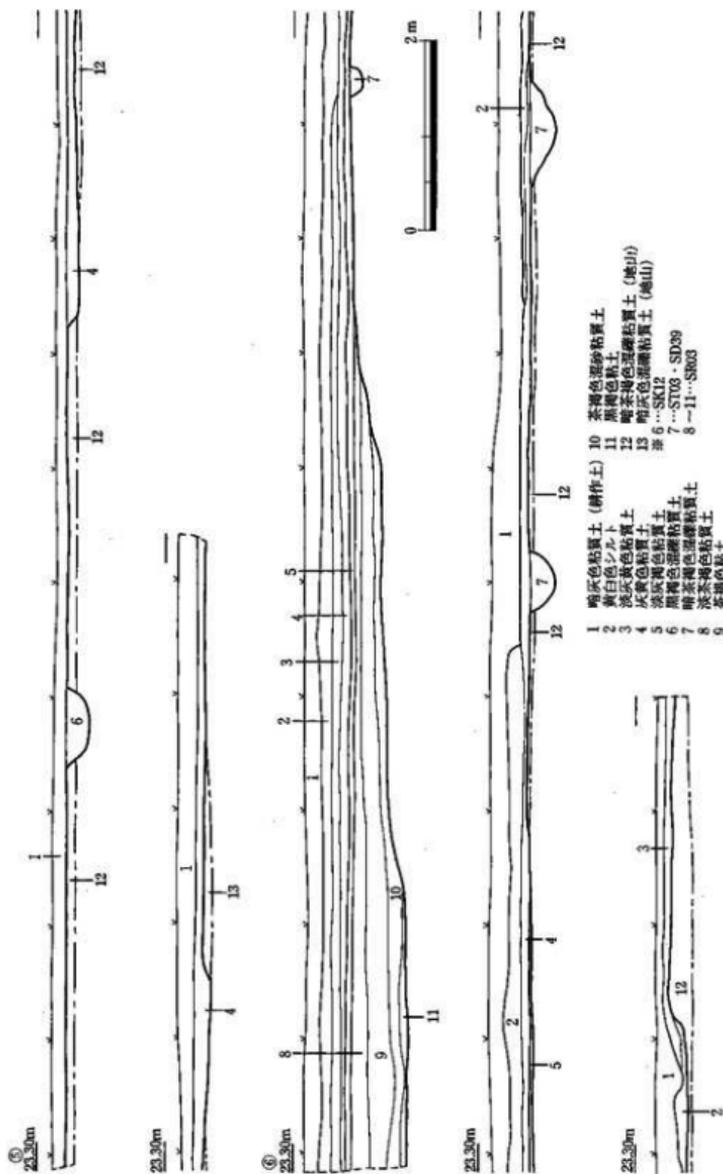
第8図 土層断面図②



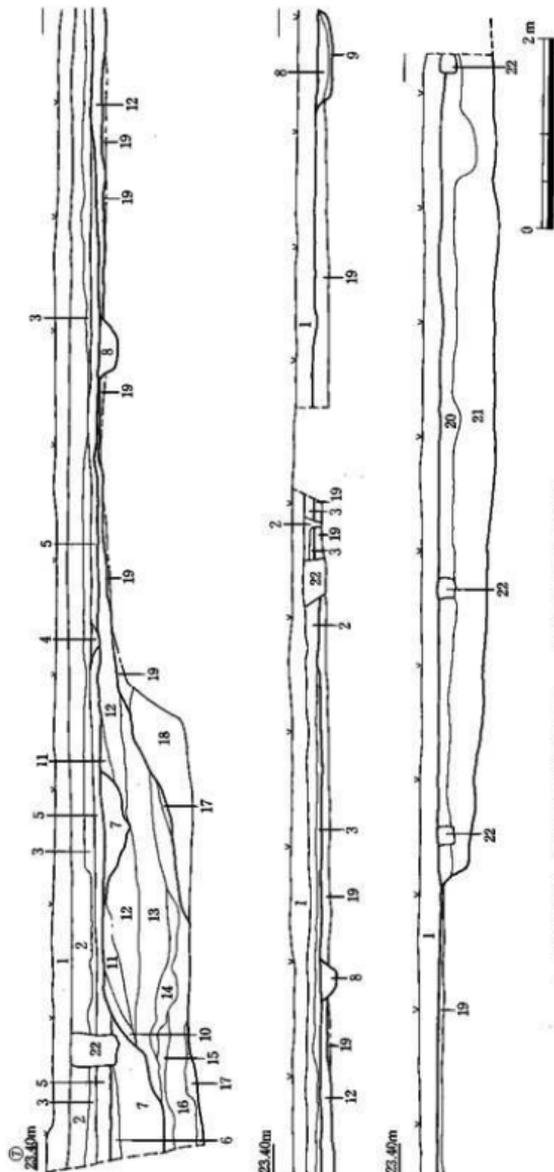
- | | | | | | | | |
|---|--------------|----|--------|----|---------|---------------|--------------|
| 1 | 明灰色粘質土 (耕作土) | 8 | 茶灰色細砂 | 15 | 淡灰色粘質土 | 22 | 灰色湿中砂粘質土 |
| 2 | 黄白色シルト | 9 | 灰色シルト | 16 | 淡灰色細砂粘土 | 23 | 灰色湿シルト (堆山) |
| 3 | 灰黄色粘質土 | 10 | 灰色シルト | 17 | 淡灰色細砂粘土 | 24 | 淡灰色シルト (堆山) |
| 4 | 淡灰色シルト | 11 | 黄灰色細砂 | 18 | 灰色粘土 | 25 | 腐質灰色シルト (堆山) |
| 5 | 灰色シルト | 12 | 淡灰色シルト | 19 | 灰色湿中砂 | ※21-23...SD26 | |
| 6 | 灰色粘質土 | 13 | 淡灰色粘質土 | 20 | 淡灰色湿粘土 | 23...SD27 | |
| 7 | 黄灰色細砂 | 14 | 灰褐色シルト | 21 | 灰色粘土 | 10-20...S802 | |



第9図 土層断面図③



第10図 土層断面図④



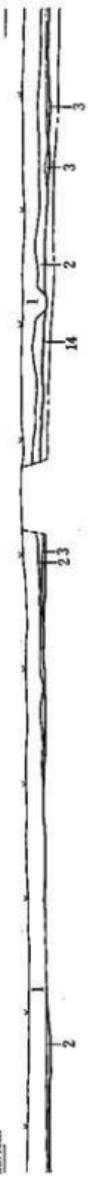
- | | | | | | |
|---|--------------|----|-----------|----|-----------------|
| 1 | 暗灰色粘質土 (耕作土) | 10 | 本褐色シルト | 19 | 紫褐色シルト質粘土 |
| 2 | 暗灰色粘質土 | 11 | 淡灰褐色粘質土 | 20 | 淡褐色粘質土 |
| 3 | 黄白色シルト | 12 | 暗赤褐色粘質土 | 21 | 淡褐色粘質土 |
| 4 | 暗赤褐色粘質土 | 13 | 淡赤褐色シルト | 22 | 腐植層 |
| 5 | 暗赤褐色粘質土 | 14 | 淡赤褐色シルト | 22 | 腐植層 (灰褐色粘土層を含む) |
| 6 | 淡赤褐色粘質土 | 15 | 赤褐色シルト | 22 | 腐植層 |
| 7 | 淡赤褐色粘質土 | 16 | 赤褐色シルト | 22 | 腐植層 |
| 8 | 暗褐色粘質土 | 17 | 暗赤褐色粘質土 | 22 | 腐植層 |
| 9 | 淡褐色粘質土 | 18 | 灰色砂礫 (地山) | 22 | 腐植層 |
| | | | | 22 | 腐植層 |

第11図 土層断面図⑤

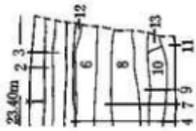
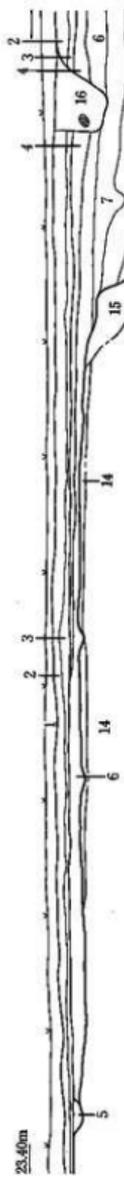
④
23.60m



23.40m



23.60m



- 1 暗灰色粘質土 (耕作土)
 - 2 黄灰色粘土
 - 3 黄褐色粘土
 - 4 淡灰色シルト
 - 5 暗茶褐色粘土
 - 6 暗茶褐色粘土
 - 7 暗茶褐色粘土
 - 8 暗茶褐色粘土
 - 9 暗灰色粘質土 (耕作土)
 - 10 黄灰色シルト
 - 11 黄褐色粘土
 - 12 淡灰色シルト
 - 13 淡灰色中一層砂
 - 14 黄灰色シルト (地山)
 - 15 淡灰色シルト (地山)
 - 16 礫石
- * 7~13--SR04

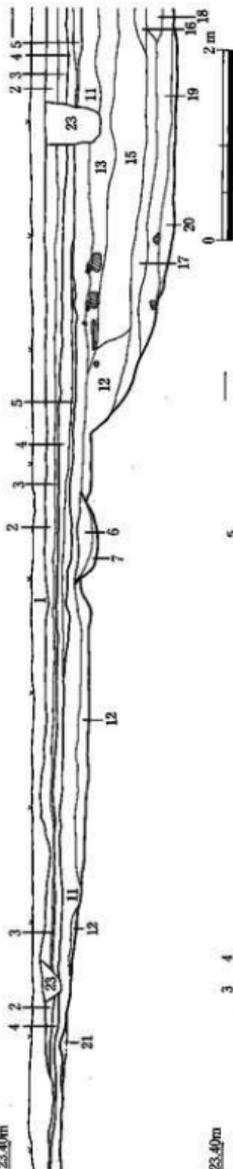


第12図 土層断面図⑥

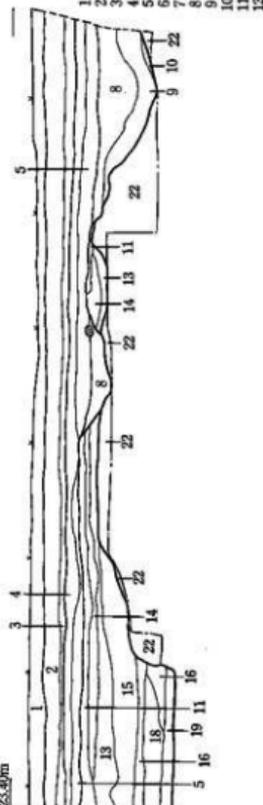
⑤
23.40m



23.40m



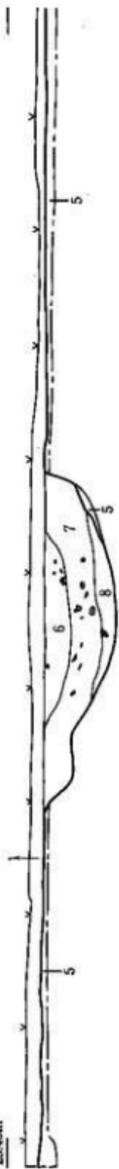
23.40m



- | | | | |
|----|--------------|----|---------------|
| 1 | 明灰色粘質土 (耕作土) | 13 | 灰褐色泥礫質土 |
| 2 | 黄白色シルト | 14 | 淡灰褐色粘質土 |
| 3 | 淡褐色粘質土 | 15 | 茶褐色粘土 |
| 4 | 淡灰褐色粘質土 | 16 | 黒色粘土 |
| 5 | 淡灰褐色シルト | 17 | 暗灰褐色粘土 |
| 6 | 灰褐色シルト | 18 | 灰色中一層砂 |
| 7 | 灰褐色細砂 | 19 | 灰褐色粘質土 |
| 8 | 淡灰褐色粘質土 | 20 | 黒褐色粘質土 |
| 9 | 淡灰褐色細砂 | 21 | 淡灰褐色シルト (地山) |
| 10 | 淡灰褐色粘土 | 22 | 淡灰褐色細砂粘土 (地山) |
| 11 | 明灰色シルト | 23 | 腐乱 |
| 12 | 茶褐色粘質土 | | |
- ※11~20...SR04
8~10...SD44・45

第13図 土層断面図⑦

⑩
23.40m



23.40m



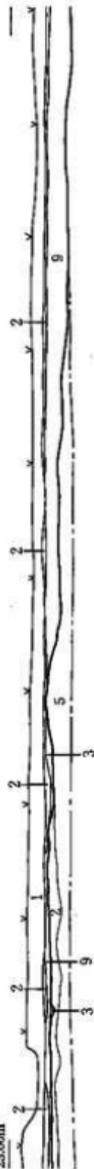
- 1 暗灰色粘質土 (耕作土)
- 2 淡灰色粘質土
- 3 灰黄色粘質土
- 4 茶褐色粘土 (堆山)
- 5 明黄色粘土

- 6 暗褐色粘土
 - 7 暗褐色粘土 (明黄色粘土層を含む)
 - 8 茶褐色シルト質粘土
 - 9 堆石層による擾乱
- ※ 6-8...SD49・50

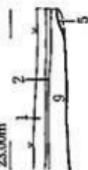
⑪
23.00m



23.00m



23.00m



第14図 土層断面図⑩

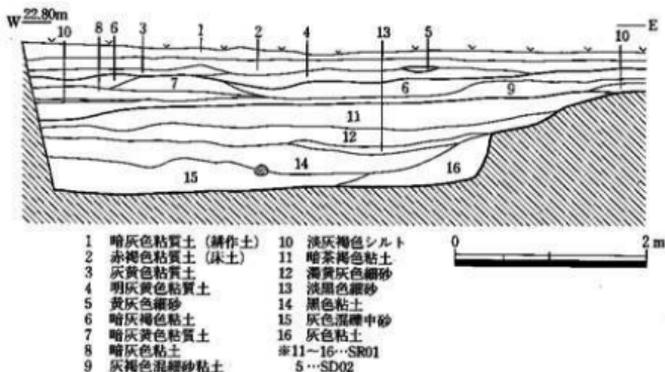
第2節 遺構・遺物

(1) 縄文時代晩期の遺構・遺物

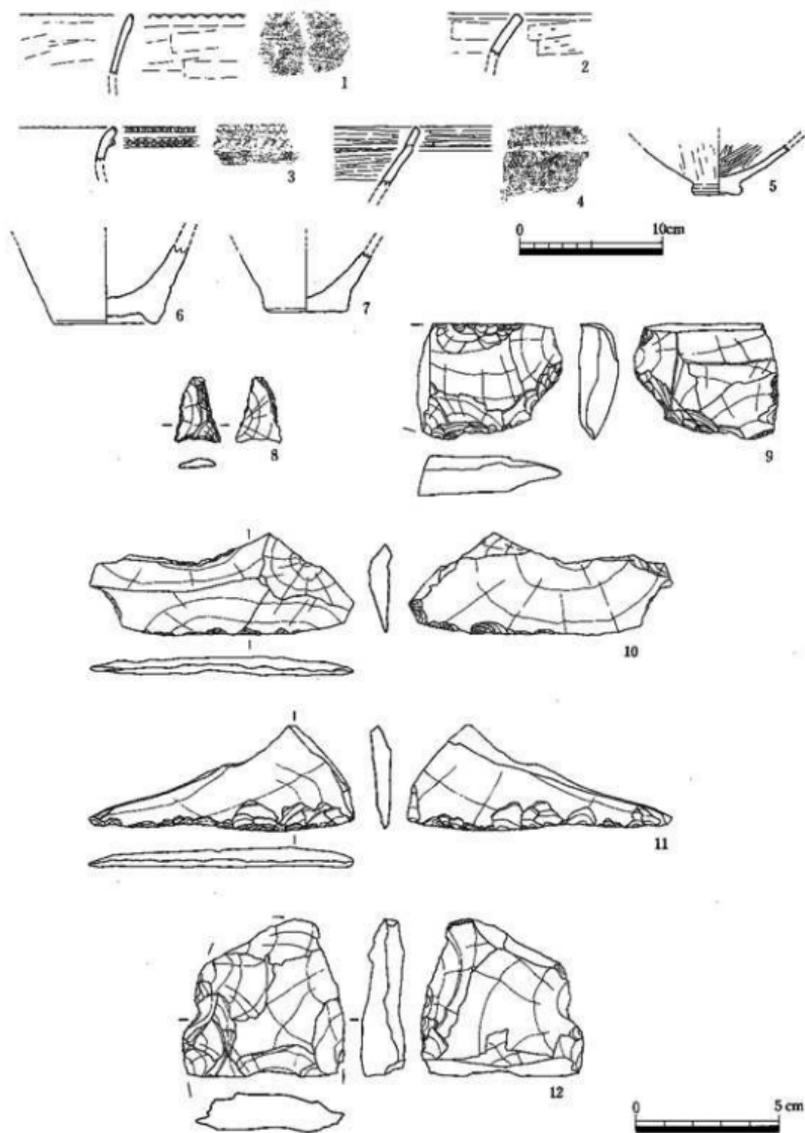
SR01 (第15～17図)

I A区のB4グリッドで検出した自然河川である。調査区の西北隅で一部を検出したにすぎないため、全体の規模・方向等については確認できていない。検出長5.1m、検出幅5.0m、深さ0.9mを測り、概ね南西から北東方向に流れていたものと思われる。堆積状態は礫を含んだ砂・黒色粘土・細砂・茶褐色粘土というように砂と粘土が交互に堆積しており、流水と滞水を繰り返しながら埋没していったことがわかる。

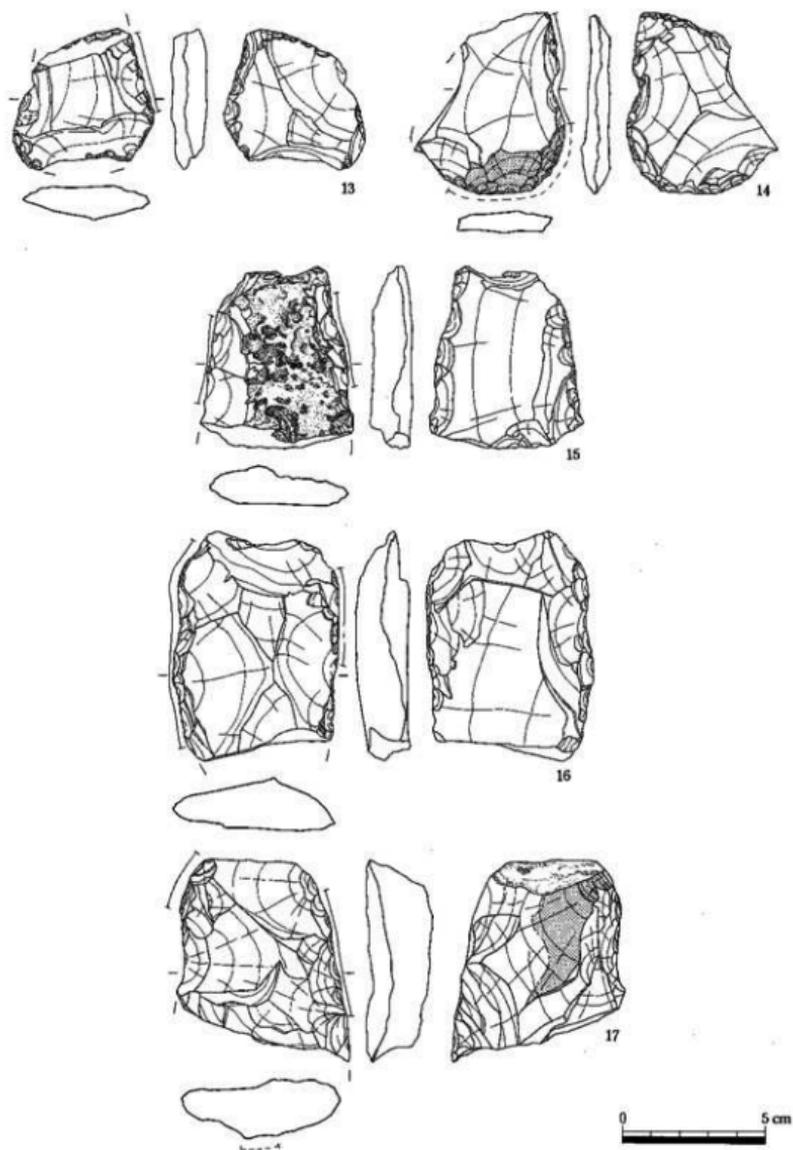
出土した遺物には縄文土器・弥生土器・石器があるが、少量であり図化できたものはわずかである。1～5は縄文土器である。1～3は頸部と胴部の境で屈曲する深鉢形土器で、1は口縁端部に刻目を持つ。3は口縁端部の刻目に加えて、口縁端部からやや下がった位置に刻目凸帯を1条持つ。4は肩部で軽く屈曲する浅鉢形土器である。5は浅鉢形土器の底部である。4・5ともに丁寧なヘラミガキ調整を施している。いずれも縄文時代晩期の土器である。6・7は弥生土器の底部である。混入物の多い粗い胎土をしており、弥生時代前期の土器と考えられる。石器には石鏃・スクレイパー・石斧がみられる。石斧はすべて扁平な打製石斧であり、縄文時代晩期に属するものと思われる。



第15図 SR01断面図



第16圖 SR 01 出土遺物①



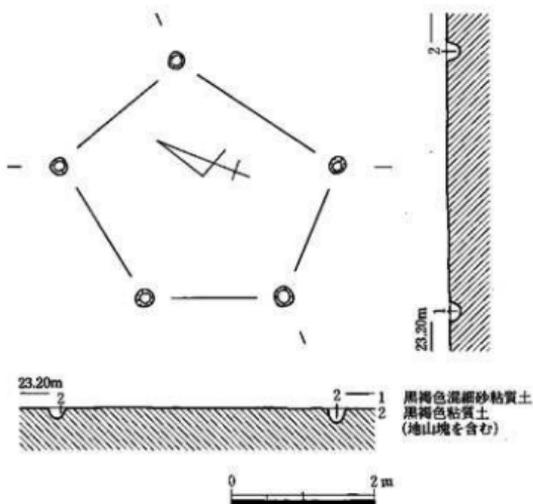
第17圖 SR01出土遺物②

(2) 弥生時代前期から中期の遺構・遺物

SH02 (第18図)

ⅢB区のK8グリッドで検出した竪穴住居である。全体に著しい削平を受けており、柱穴しか残存していないため、規模や壁溝の有無などについては確認できていない。5本の支柱穴をもつ円形の竪穴住居に復元したが、柱穴の残存状況からみて消失した柱穴がある可能性も考えられ、6本の支柱穴の竪穴住居であった可能性もある。

柱穴内から弥生時代前期の土器と辛うじて判断できる程度の小片がわずかに出土しているが、図化することは困難である。

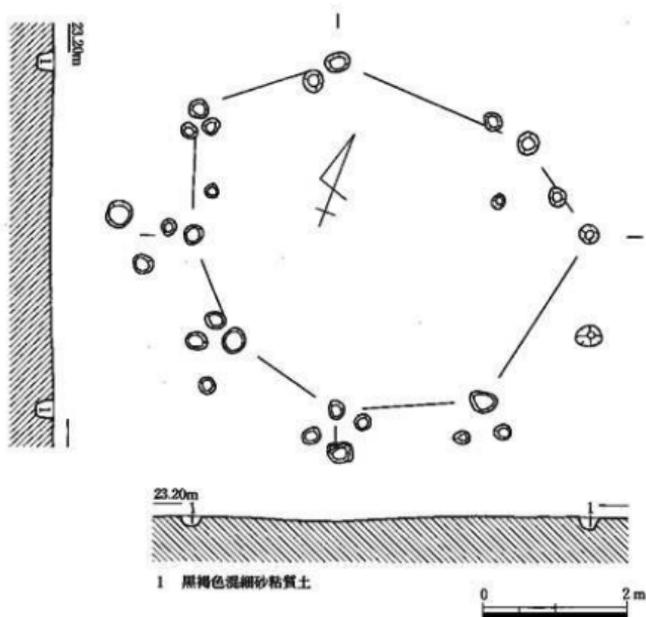


第18図 SH02平・断面図

SH03 (第19図)

ⅢB区のK9グリッドで検出した竪穴住居である。先述したSH02と同様に、著しい削平を受けているため、柱穴しか残存していない。したがって規模等については全く確認

できていない。いびつな8本の支柱穴をもった円形の竪穴住居に復元したが、現存する柱穴以外に消失した柱穴の存在も否定できないことから、支柱穴の数は変動する可能性がある。支柱穴としたもの以外にも、多数の柱穴が周囲に存在しており、このSH02は建物を建て替えているものと思われる。その際に建物自体を拡張した可能性が高い。遺存状況が悪く図化できないが、柱穴内から弥生時代前期土器の小片がわずかに出土している。

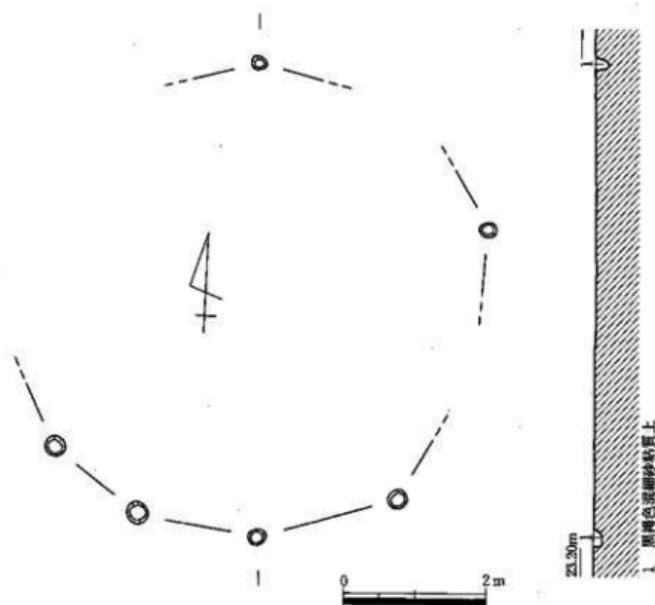


第10図 SH03平・断面図

SH04 (第20図)

ⅢB区のK8グリッドで検出した竪穴住居である。SH02とSH03に隣接して所在している。残存状況はSH02・03よりもさらに悪いため、壁溝の有無はおろか支柱穴の数などについても全く確認できておらず、辛うじて柱穴を6つ確認できたにすぎない。

これらの柱穴のうち、同一円周上に並んで位置している4つの柱穴から復元した円周の延長上に、やや離れて位置する残りの2つの柱穴がほぼ並ぶことから、堅穴住居と判断している。柱穴内からは、少量の弥生時代前期土器の小片を採取している。

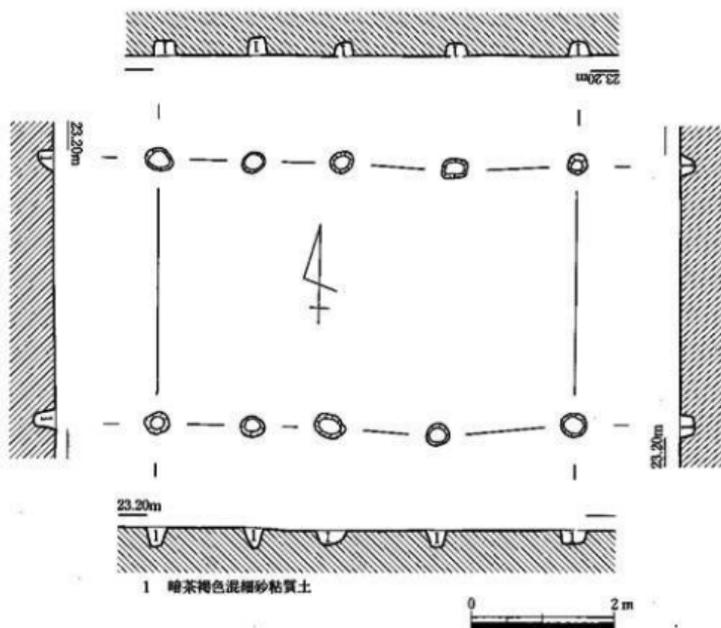


第20図 SH04平・断面図

SB08 (第21図)

ⅢB区のJ8グリッドで検出した掘立柱建物である。桁行4間(5.84m)、梁行1間(3.62m)、床面積21.1㎡の規模を持つ。建物の主軸はN90°Eで、東西に向けている。なお、注目すべき点は、この建物の主軸の方向が後述するSD48(区画溝)の方向とほぼ同じ方向を示していることである。すなわち、計画的にSD48の方向に建物の主軸を合わせたことが考えられるのである。遺物は、柱穴内から図化することが困難な弥生時代前

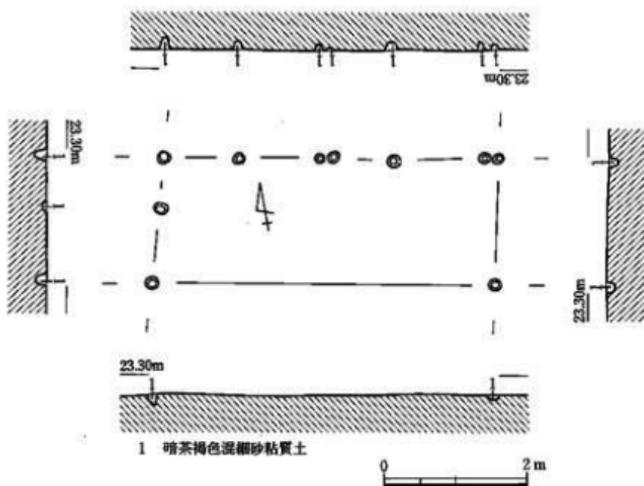
期土器の小片がわずかに出土している。



第21図 SB08平・断面図

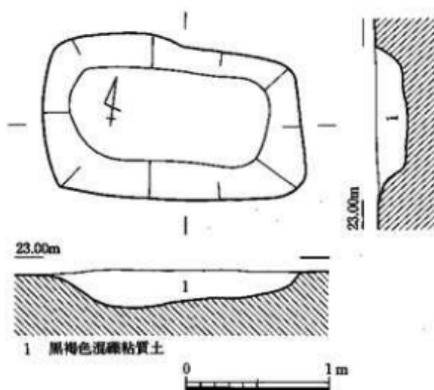
SB09 (第22図)

ⅢB区のJ・K8グリッドで検出した掘立柱建物である。桁行4間(4.28m)、梁行1間(1.88m)、床面積9.1㎡の規模を持ち、建物の主軸をN80°Wに向けている。後世の削平を被っているため、柱穴の残存状況も悪く、とりわけ建物の南辺部分の柱穴は消失している。SB08と比較して床面積が約半分と規模が小さいことから、居住遺構というより倉庫のような性格が想定されよう。なお、このSB09の主軸は後述するSD49・50(外・内環濠)の北辺部分とほぼ同じ方向を持っており、SB08と同様に計画的に建てられた可能性が強い。柱穴内からは弥生時代前期土器の小片を採取している。



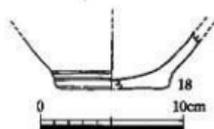
第22図 SB09平・断面図

SK11 (第23・24図)



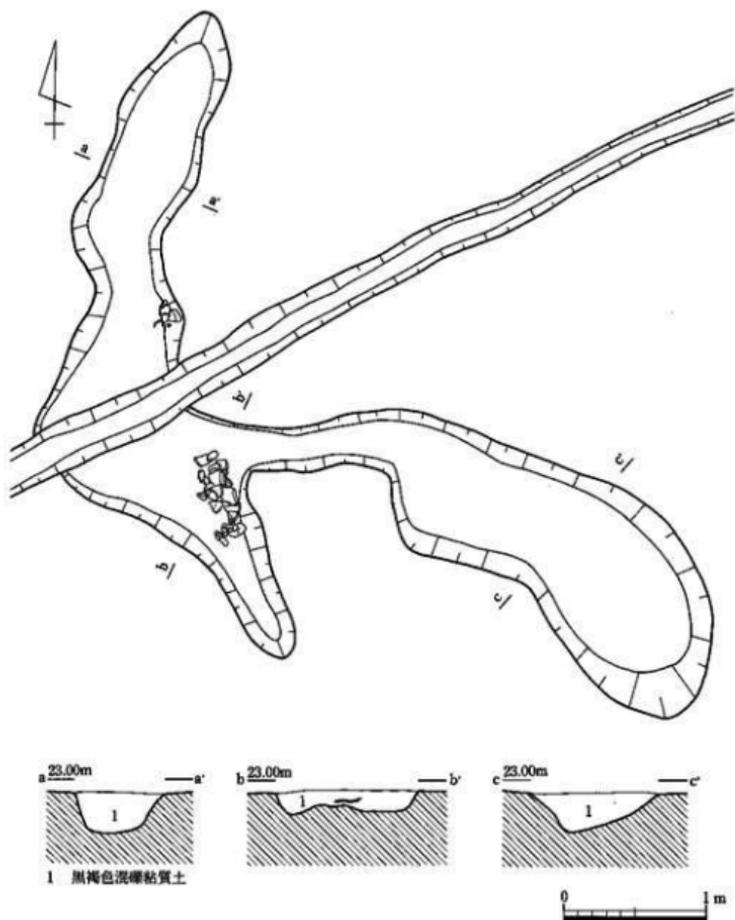
第23図 SK11平・断面図

II A区のF5グリッドで検出した土坑である。平面形態は隅丸長方形を呈し、長さ180cm、幅110cm、深さ26cmの規模を持つ。断面形態は皿状で、底面は西側に緩く傾斜している。主軸はN85° Eの方向である。



第24図 SK11
出土遺物

埋土は単層で、遺物は凶化した底部（18）の他に、サヌカイト剥片が少量ある。18は外面に2条のヘラ描き沈線を施した、弥生前期土器の壺形土器の底部である。

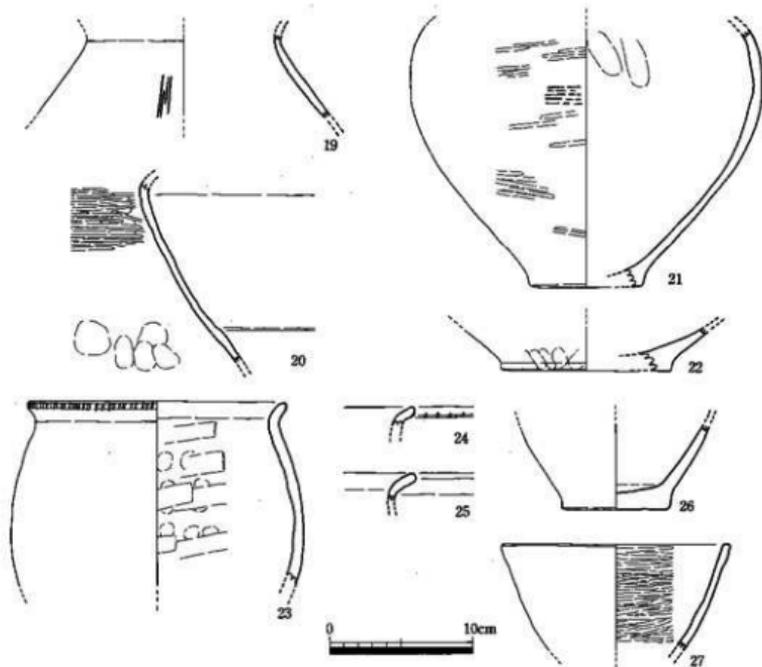


第25図 SK12平・断面図

SK12 (第25・26図)

II A区のF6グリッドで検出した土坑である。平面形態は不定形で、形状からみれば削平された溝状遺構の残欠の可能性もあるが、ここでは土坑として扱う。長さ748cm、最大幅112cm、深さ30cmの規模を持つ。近世の溝状遺構SD31によって中央付近を一部を壊されている。断面形態は逆台形や皿状など一定しておらず、両端に比べて屈曲する部分が浅くなっている。この部分から弥生土器がまとまって出土している。

出土した土器には、壺形土器・甕形土器・鉢形土器がみられる。19～22は壺形土器である。頸胸部の境に不明瞭な段を持つ20や頸部にヘラ描き文様を持つ19がある。23～26は甕形土器である。いずれも如意形口縁で、端部に刻目を持つ。端部全面を刻むものと、下端を刻むもののみられる。27は内彎気味に立ち上がる直口縁の鉢形土器である。壺形土器・

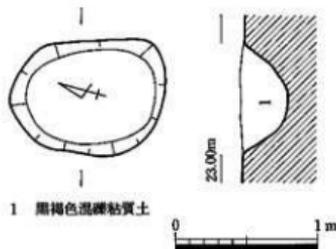


第26図 SK12 出土遺物

甕形土器ともにやや古い様相がみられることから、弥生時代前期前半に位置づけることができる。

SK13 (第27図)

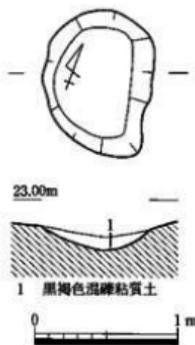
SK12と同じくIIA区のF5グリッドで検出した土坑である。平面形態は楕円形を呈し、長径110cm、短径80cm、深さ34cmの規模を持つ。主軸はN22°Wの方向である。断面形態はやや深めの逆台形で埋土は単層である。土坑の内部には拳大から小児頭大の礫が数個入れられており、弥生時代前期と考えられる土器細片がわずかに出土している。



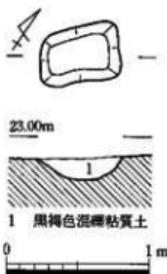
第27図 SK13平・断面図

SK14 (第28図)

IIA区のF6グリッドで検出した土坑である。平面形態は楕円形を呈し、長径103cm、短径75cm、深さ10cmの規模を持つ。著しい削平のため断面形態はレンズ状で浅い。主軸はN8°Wの方向である。図化が困難な土器の細片をわずかに採取している。



第28図 SK14
平・断面図



第29図 SK15
平・断面図

SK15 (第29図)

IIA区のF6グリッドで検出した土坑である。平面形態は隅丸長方形を呈し、長さ56cm、幅40cm、深さ14cmの規模を持つ。埋土は単層である。主軸はN41°Eの方向である。弥生時代前期と考えられる土器細片がわずかに出土している。

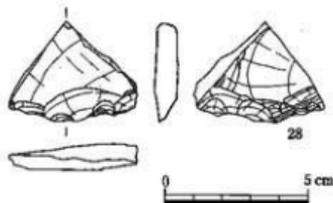
SK16 (第30・31図)

II B区のG6グリッドで検出した土坑である。平面形態は隅丸長方形を呈し、長径143cm、短径54cm、深さ20cmの規模を持つ。断面形態は概ね逆台形を呈する。主軸はN90°Eで東西方向である。

図化したサヌカイト製の打製スクレイパー(28)の他に、土器細片がわずかに出土している。



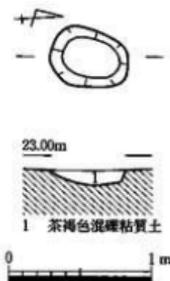
第30図 SK16平・断面図



第31図 SK16出土遺物

SK17 (第32図)

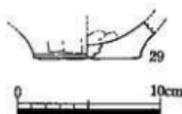
II B区のG6で検出した土坑である。平面形態は楕円形を呈し、長径55cm、短径40cm、深さ10cmの規模を持つ。全体に著しい削平を受けているため、土坑の下部のみが辛うじて残存したものと考えられる。したがって全体の形状については、判断できる材料がない。埋土は単層で、わずかな土器細片を採取している。



第32図 SK17
平・断面図

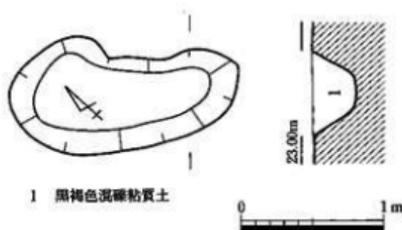
SK18 (第33・34図)

II B区のG6グリッドで検出した土坑で、後述するST01(方形周溝墓)を一部壊している。平面形態はややいびつな長楕円形を呈し、長径163cm、短径83cm、深さ30cmの規模を持つ。断面形態は逆台形で平坦な床面を持つ。埋土は単層で、主軸はN45°Wの方向



第34図 SK 18
出土遺物

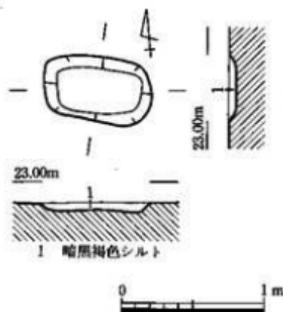
である。弥生時代前期の壺形土器の底部(29)が1点出土している。



第33図 SK 18 平・断面図

SK 2 2 (第35図)

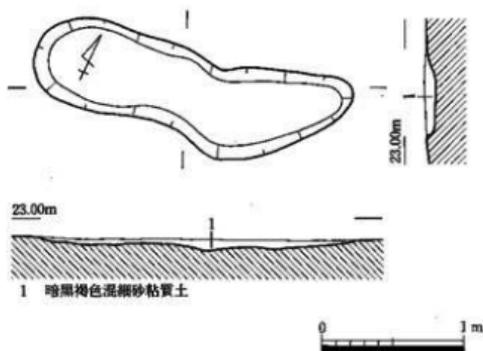
II C区のH 6グリッドで検出した土坑である。平面形態は隅丸長方形を呈し、長さ76cm、幅46cm、深さ8cmの規模を持つ。著しい削平のため土坑の下部のみが辛うじて残存したものと考えられる。断面形態は逆台形を呈しており、底面は平坦に整形されている。主軸はN80° Wの方向である。



第35図 SK 2 2 平・断面図

SK 2 3 (第36図)

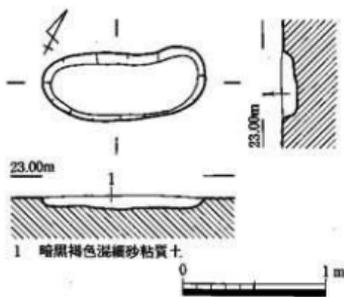
II C区のH 6グリッドで検出した土坑である。平面形態はいびつな長楕円形を呈し、長径223cm、短径63cm、深さ8cmの規模を持つ。断面形態は浅い皿状を呈し、底面はほぼ平坦である。埋土は単層で、主軸はN80° Eの方向を持つ。弥生時代前期と思われる土器細片がわずかに出土している。



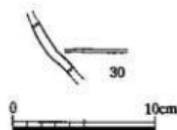
第36図 SK 2 3 平・断面図

SK24 (第37・38図)

II C区のH6グリッドで検出した土坑である。平面形態は長楕円形で、長径114cm、短径50cm、深さ10cmの規模を持つ。断面形態は逆台形で、壁面は垂直に近く立ち上がる。底面は平坦である。埋土は単層で、主軸はN61°Eである。弥生時代前期の壺形土器の肩部破片(30)1点の他に、土器細片・サヌカイト片を採取している。



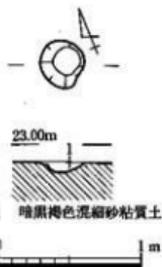
第37図 SK24 平・断面図



第38図 SK24
出土遺物

SK25 (第39図)

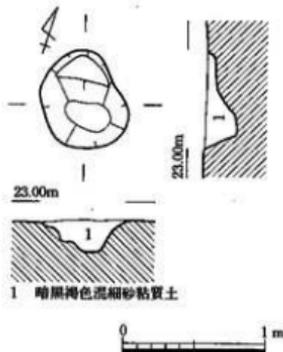
II C区のH6グリッドで検出した土坑である。平面形態は楕円形を呈し、長径70cm、短径60cm、深さ22cmの規模を持つ。埋土は単層で、弥生時代前期と考えられる土器細片が出土している。



第40図 SK26
平・断面図

SK26 (第40図)

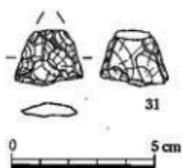
II C区のH6グリッドで検出した土坑である。平面形態は円形を呈し、直径33cm、深さ7cmの規模を持つ。断面形態は浅い皿状で、柱穴の可能性もある。



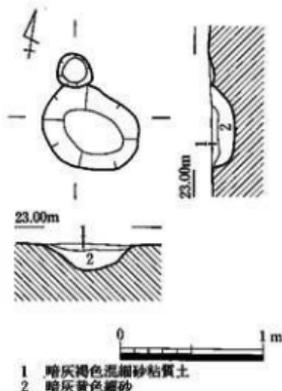
第39図 SK25 平・断面図

SK 27 (第41・42図)

II C区のH6グリッドで検出した土坑である。平面形態は楕円形を呈し、長径70cm、短径55cm、深さ20cmの規模を持つ。断面形態は逆台形で、底面に小さな平坦面を持つ。図化したサヌカイトの打製石鏃(31)の他に、弥生前期土器の細片やサヌカイト片を採取している。



第42図 SK 27
出土遺物



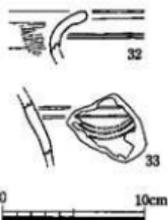
第41図 SK 27平・断面図

SK 28 (第43・44図)

II C区のH6グリッドで検出した土坑である。平面形態は不整形(台形状)を呈し、長さ83cm、幅74cm、深さ13cmの規模を持つ。断面形態は浅いレンズ状で、埋土は単層である。主軸はN75°Wの方向である。弥生時代前期の壺形土器の口頸部破片(32)と胴部破片(33)が出土している。33は胴部に3条1組のヘラ描き重弧文を施している。



第43図 SK 28平・断面図



第44図 SK 28出土遺物

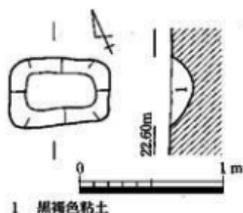
SK 29 (第45図)

II C区のG・H6グリッドで検出した土坑である。平面形態は不整楕円形を呈し、長径140cm以上、短径65cm、深さ8cmの規模を持つ。断面形態は浅いレンズ状で、埋土は単層である。主軸はN30° Eの方向である。土器細片とサヌカイト片を採取したが図化は困難である。



第45図 SK 29 平・断面図

SK 30 (第46・47図)



第46図 SK 30 平・断面図

II C区のH7グリッドで検出した土坑である。平面形態は隅丸長方形を呈し、長さ70cm、幅48cm、深さ15cmの規模を持つ。断面形態はレンズ状で、埋土は単層である。

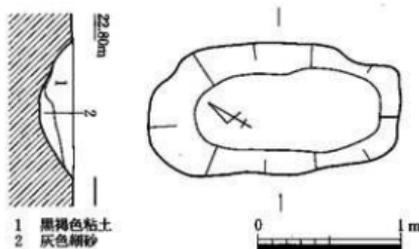


第47図 SK 30
出土遺物

主軸はN67° Wの方向を持つ。弥生時代前期の鉢形土器の口縁部破片(34)を1点採取している。

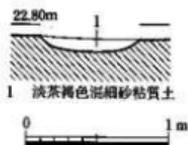
SK 31 (第48図)

II C区のH7グリッドで検出した土坑である。平面形態は隅丸長方形を呈し、長さ175cm、幅95cm、深さ25cmの規模を持つ。断面形態は厚めのレンズ状で、主軸はN33° Wの方向である。土坑内からは弥生時代前期と考えられる土器細片とサヌカイト細片がわずかに出土している。



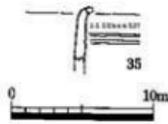
第48図 SK 31 平・断面図

SK 3 2 (第49・50図)



第49図 SK 3 2
平・断面図

II C区のH 6グリッドで検出した土坑である。平面形態は楕円形を呈し、長径73cm、短径70cm、深さ9cmの規模を持つ。断面形態はレンズ状で浅く、埋土は単層である。弥生時代前期の甕形土器の口縁部(35)が1点出土している。如意形口縁で、口縁下にへら描き沈線2条以上を施している。



第50図 SK 3 2
出土遺物

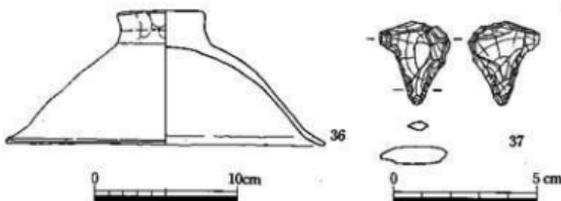
SK 3 3 (第51・52図)

II C区のH 6グリッドで検出した土坑である。SK 3 2の南東に位置する。平面形態は隅丸長方形を呈し、長さ197cm、幅84cm、深さ32cmの規模を持つ。断面形態は逆台形を呈し、底面はほぼ平坦になっている。主軸はN53° Wの方向である。蓋形土器(36)と打製石錐(37)が出土している。



第51図 SK 3 3平・断面図

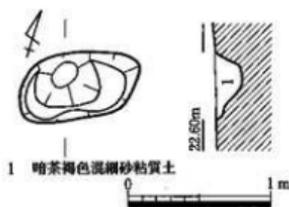
36は弥生時代前期の甕形土器用の蓋形土器で、分厚い円盤状に突出した摘み部を有している。



第52図 SK 3 3出土遺物

SK34 (第53図)

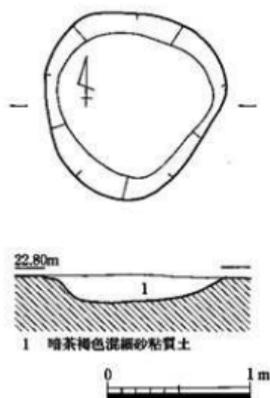
II C区のG7グリッドで検出した土坑である。平面形態は長楕円形を呈し、長径85cm、短径47cm、深さ18cmの規模を持つ。ほぼ中央部に柱穴状の掘り込みを有する。埋土は単層で、主軸はN62° Eの方向である。柱穴状の掘り込み部分から弥生時代前期土器の細片がわずかに出土している。



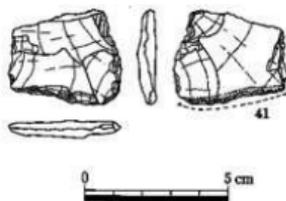
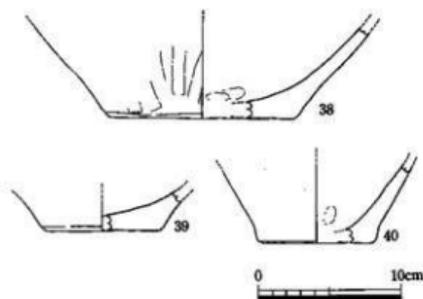
第53図 SK34平・断面図

SK35 (第54・55図)

II C区のH6グリッドで検出した土坑である。平面形態は楕円形を呈し、長径132cm、短径126cm、深さ18cmの規模を持つ。断面形態はレンズ状で、埋土は単層である。土坑内からは弥生時代前期の壺形土器の底部(38・39)と甕形土器の底部(40)、サヌカイトの打製スクレイパー(41)1点が出土している。



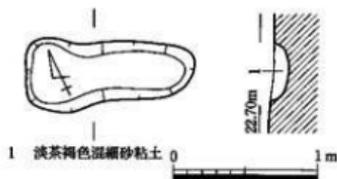
第54図 SK35平・断面図



第55図 SK35出土遺物

SK36 (第56図)

II C区のH6グリッドで検出した土坑である。平面形態は長楕円形を呈し、長径118cm、短径50cm、深さ10cmの規模を持つ。断面形態は概ね逆台形で、埋土は単層である。主軸はN65°Wの方向である。弥生時代前期と考えられる土器細片が少量出土している。



第56図 SK36平・断面図

SK37 (第57図)

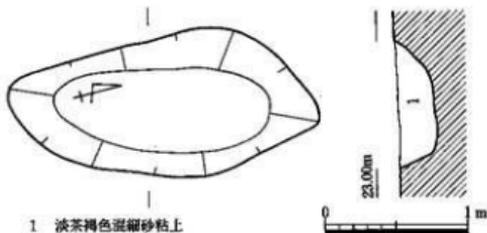
II B区のG5グリッドで検出した土坑である。平面形態は隅丸長方形を呈し、長さ166cm、幅104cm、深さ20cmの規模を持つ。断面形態は逆台形で、底面はほぼ平坦に形成されている。埋土は単層で、弥生時代前期の土器細片がわずかに出土している。



第57図 SK37平・断面図

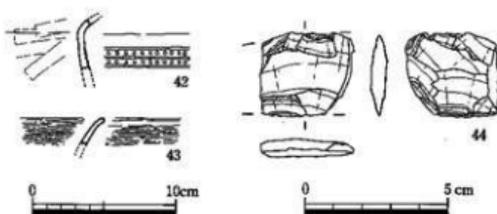
SK38 (第58・59図)

II B区のG6グリッドで検出した土坑である。平面形態は長楕円形を呈し、長径220cm、短径104cm、深さ23cmの規模を持つ。断面形態は逆台形で、底面はおおむね平坦に形成されている。埋土は単層で、甕形土器の破片(42)と鉢形土器の破片(43)及びサヌカイトの打製石器(44)が出土している。42は口縁部下に3条のヘラ描き沈線をめぐらせ、さらに沈線間に刺突文を2段にわたって施した如意形口縁の甕形土器である。43は如意形口縁をなすと考えられる鉢形土器の口縁部である。44は楔形石器になる可能性が高い。



第58図 SK38平・断面図

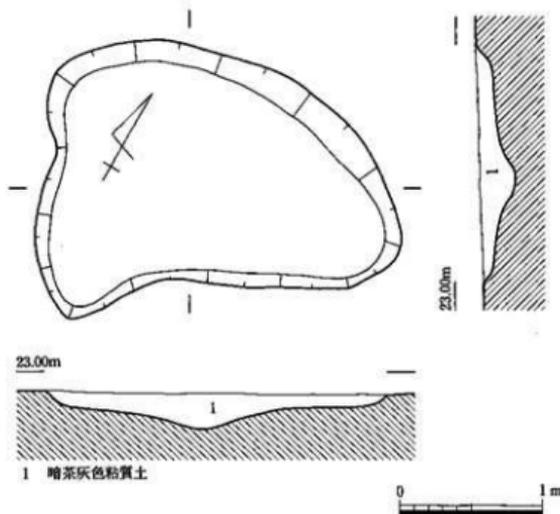
出土した遺物はいずれも弥生時代前期のものである。



第50図 SK 38 出土遺物

SK 39 (第60図)

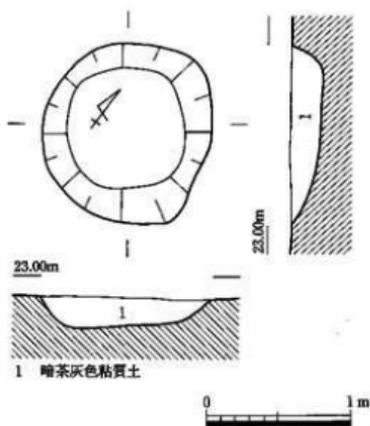
II B区のG 6 グリッドで検出した土坑である。平面形態は不整楕円形を呈し、長径250 cm、短径206 cm、深さ24 cmの規模を持つ。断面形態は中央部分が凹んだ浅い皿状で、埋土は単層である。土坑内からは弥生時代前期の土器・石器が出土したが、調査時の混乱でSK 40の出土遺物と混ざってしまったためSK 40の出土遺物とあわせて後述する。



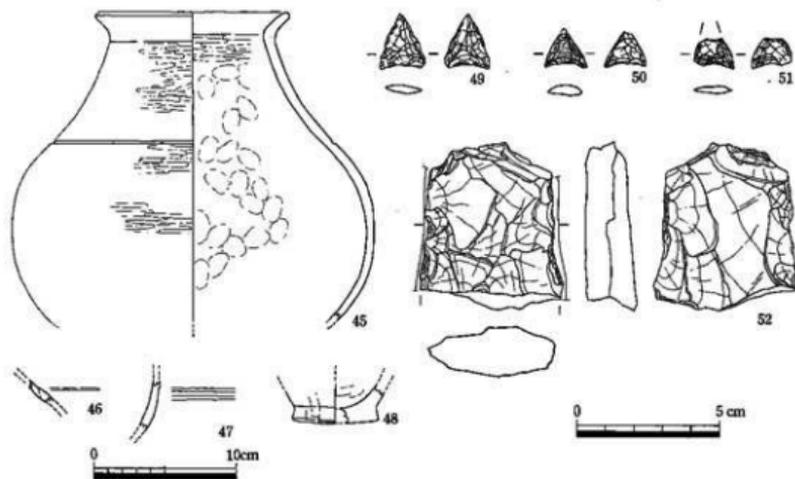
第60図 SK 39 平・断面図

SK40 (第61・62図)

II B区のH6グリッドで検出した土坑である。平面形態は楕円形を呈し、長径126cm、短径118cm、深さ24cmの規模を持つ。断面形態は概ね逆台形で、底面に平坦面を形成している。埋土はSK39と同じ埋土で単層である。遺物は弥生時代前期の土器・石器を採取している。45～48は壺形土器である。45は頸胴部の境に1条のへら描き沈線を持つ。球形の胴部から強く内傾する頸部と短く外反する口縁部を有する。46は頸胴部の境に段を持つ。48は壺形土器の底部としたが、蓋形土器の可能性もある。49～51は凹基式の打製石鏃である。52は打製石斧の基部で、両側縁に敲打痕がみられる。



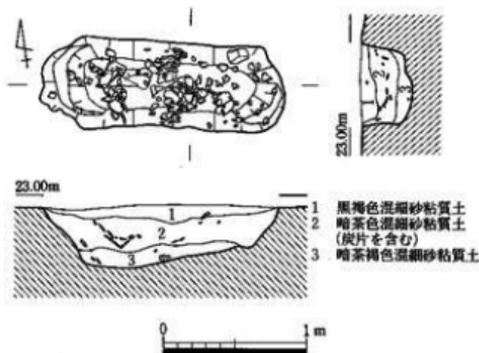
第61図 SK40平・断面図



第62図 SK39・40出土遺物

SK41 (第63~65図)

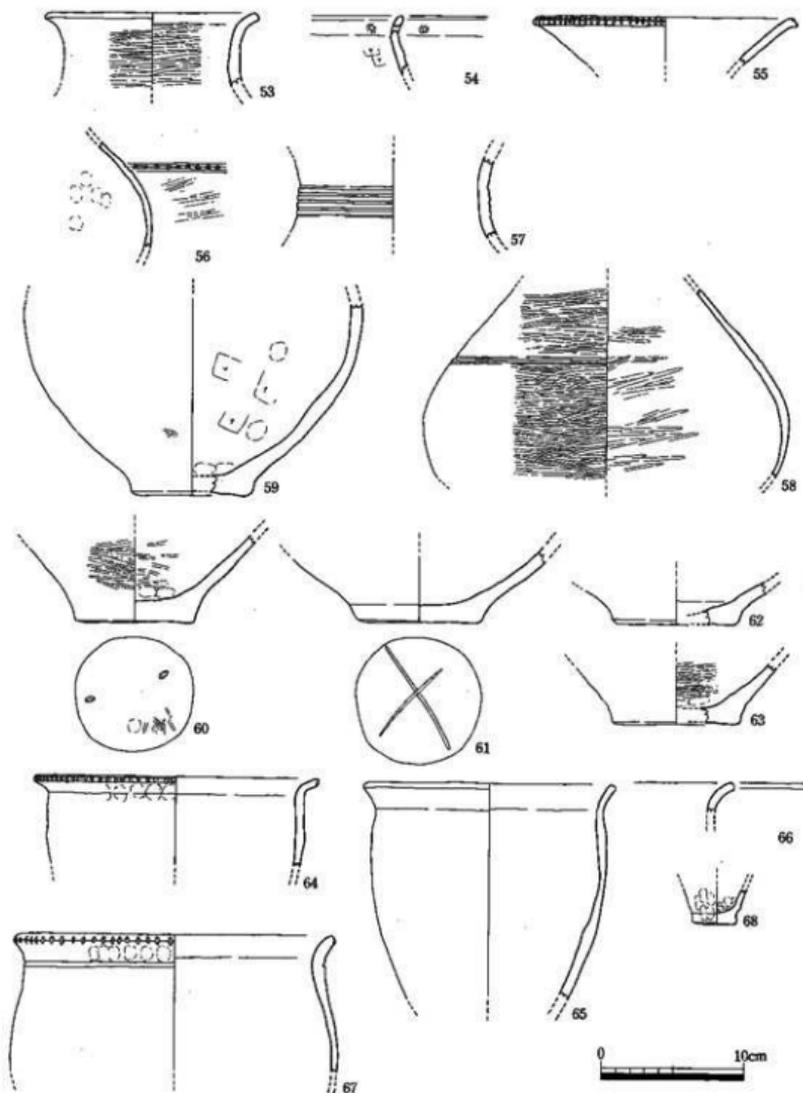
ⅢA区のJ8グリッドで検出した土坑である。平面形態は隅丸長方形を呈しており、長さ166cm、幅66cm、深さ43cmの規模を持つ。周辺の削平の状況からみても、本来はかなりの深さを有していたものと考えられる。断面形態は逆台形で、底面は西側に向かって緩く傾斜する平坦面をなしている。主軸は $N77^{\circ}W$ の方向である。埋土は3層から



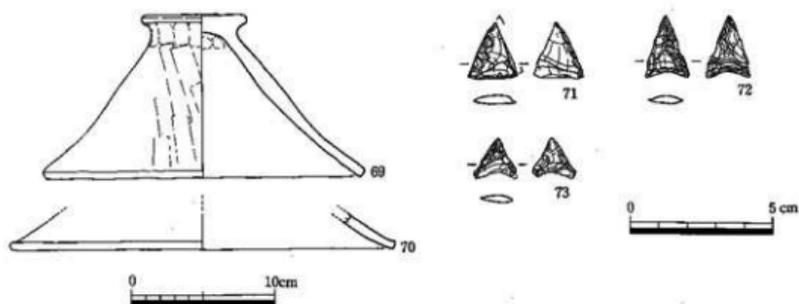
第63図 SK41平・断面図

らなり、特に第2層には弥生時代前期の土器が多量に含まれていた。弥生土器の他には石器が出土している。

53~63は壺形土器である。55は口縁端面に刻目とヘラ描き沈線1条を有している。57は口頸部境にヘラ描き沈線3条を施した削出凸帯をめぐらせている。壺形土器の底部60~63のうち、60には靱圧痕が、61にはヘラ描き文様がみられる。64~68は甕形土器である。いずれも如意形口縁を呈しているが、64・65の口縁部下が無文であるのに対して、67は口縁部下に1条のヘラ描き沈線をめぐらせている。口縁端部の刻目は全面を刻むものと、下端を刻むものの両者がみられる。68は小形品である。69・70は蓋形土器で、いずれも甕形土器用のものである。69は外方へ突出した摘み部を持つ。これらの土器は、壺形土器の一部に削出凸帯を含むなどやや新しい要素がみられるものの、ヘラ描き沈線も少条であることなどから、弥生時代前期中頃の年代が想定できる。71~73は凹基式の打製石鏃である。いずれもサヌカイトを使用したもので、凹基式と平基式がみられる。



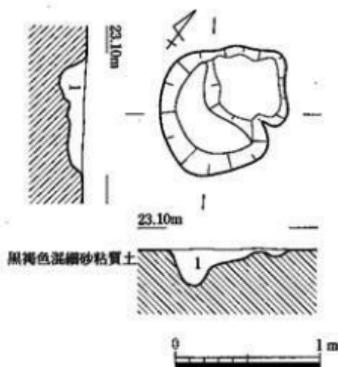
第64图 SK41出土遺物①



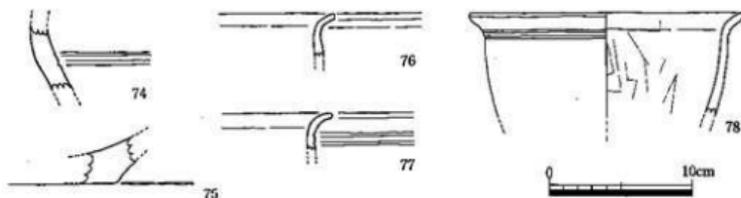
第65図 SK 4 1 出土遺物②

SK 4 2 (第66・67図)

ⅢA区のJ8グリッドで検出した土坑である。平面形態はいびつな不整形円形を呈し、長径106cm、短径88cm、深さ26cmの規模を呈する。土坑の南半部は一段掘り下げられて、深くなっている。埋土は単層である。弥生時代前期の土器が出土している。74は大形の壺形土器の破片である。口頸部の境に2条のヘラ描き沈線を持つ。76~78は如意形口縁の甕形土器である。77・78は口縁部下に2条のヘラ描き沈線を持つ。



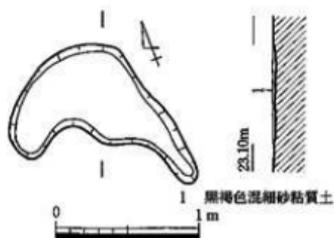
第66図 SK 4 2 平・断面図



第67図 SK 4 2 出土遺物

SK 4 3 (第68・69図)

ⅢA区のJ 8グリッドで検出した上坑である。平面形態は勾玉形をした不整楕円形を呈し、長径134cm、短径93cm、深さ3cmの規模を持つ。著しい削平を受けて遺構の下部が辛うじて残存したものと考えられるため、上部の構造については判断できない。断面形態は浅い皿状を呈し、埋土は単層である。図化したサヌカイト打製石鏃1点(79)の他に、弥生時代前期と思われる土器細片をわずかに採取している。



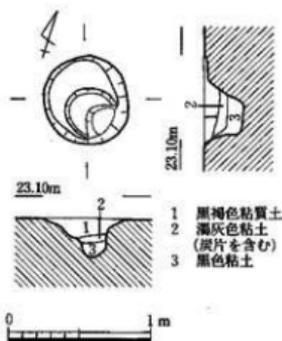
第68図 SK 4 3平・断面図



第69図 SK 4 3
出土遺物

SK 4 4 (第70図)

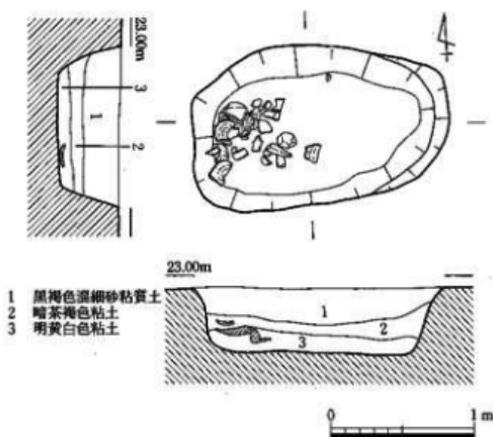
ⅢA区のJ 8グリッドで検出した土坑である。平面形態は円形で、直径約60cm、深さ29cmの規模を持つ。規模の大きな柱穴の可能性もあるが、ここでは土坑として扱う。埋土は3層で、第2層には若干の炭化物を含む。弥生時代前期の土器片がわずかに出土しているが、図化はできなかった。



第70図 SK 4 4平・断面図

SK 4 5 (第71~73図)

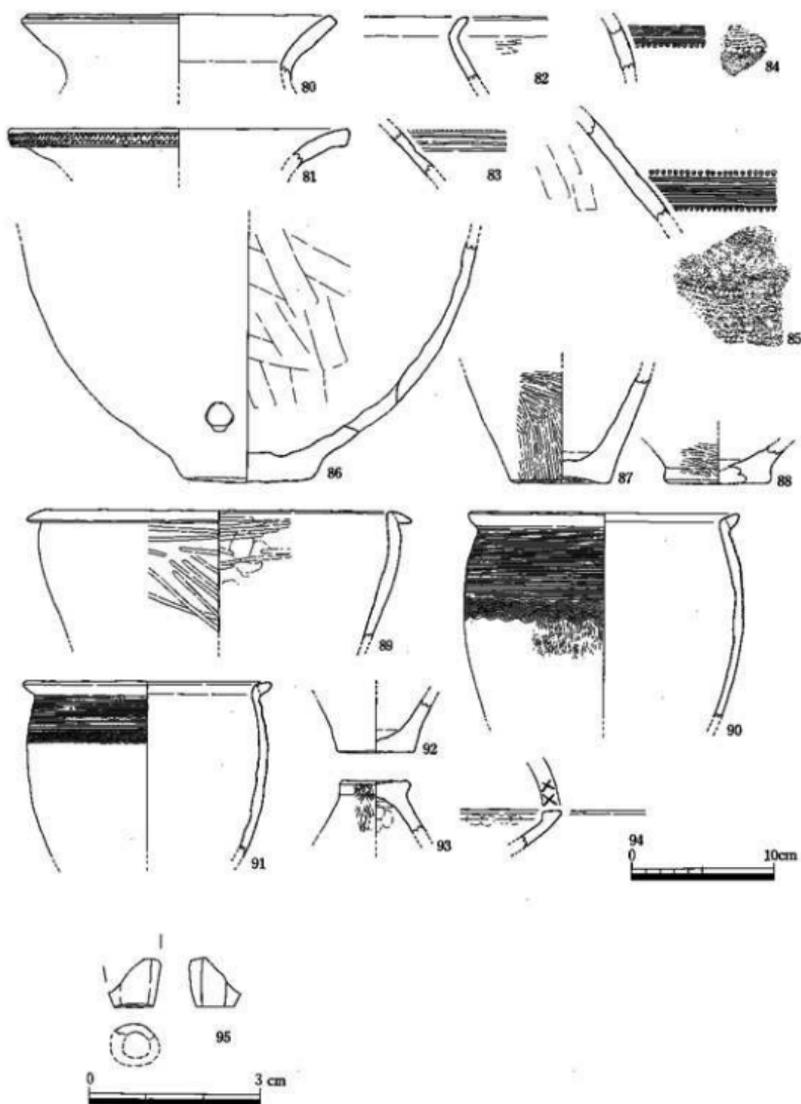
ⅢA区のJ 8グリッドで検出した土坑である。平面形態は長楕円形を呈し、長径170cm、短径112cm、深さ48cmの規模を持つ。周辺の削平状況からみてもかなりの深さを有してい



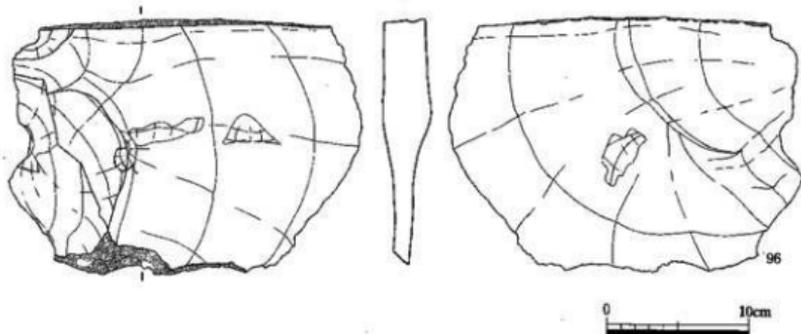
第71図 SK45平・断面図

たものと考えられる。断面形態は逆台形で、底面は平坦面をなしている。埋土は3層からなり、第2層と第3層には多量の弥生時代土器を含んでいる。遺物は、特に土坑の西側に集中する傾向がみられ、大きなサヌカイトの石核が1点底面の西端から出土している。土坑の主軸は $N90^{\circ}W$ と、東西方向である。

80～88は壺形土器である。83は頸胴部の境にヘラ描き沈線3条以上を施した削出凸帯を持つ。84・85は多条化したヘラ描き沈線に刺突文を施した胴部の破片である。86は胴部下半に焼成後の穿孔を施している。89～92は甕形土器である。いずれも断面三角形の粘土紐の貼付けによる、逆L字形口縁を呈している。90・91は口縁部下に櫛描きによる直線文と波状文を施している。94は肥厚した口縁端部にヘラ描き文様を施した高杯形土器の口縁部である。95は碧玉製の管玉の破片である。96はサヌカイトの石核である。荒割りされただけで、調整は全く施されていないことから、石器素材としてのサヌカイトの流通の単位を示す可能性があり、注目される。壺形土器にみられる多条化したヘラ描き沈線や、甕形土器にみられる櫛描き沈線などから、本土坑は弥生時代中期初頭のものと考えられる。



第72圖 SK 4 5出土遺物①

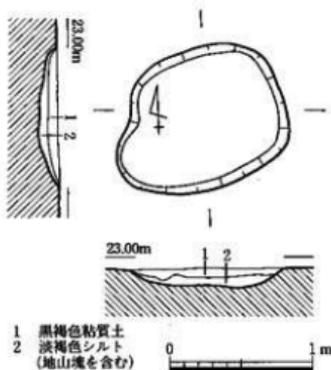


第73図 SK45出土遺物②

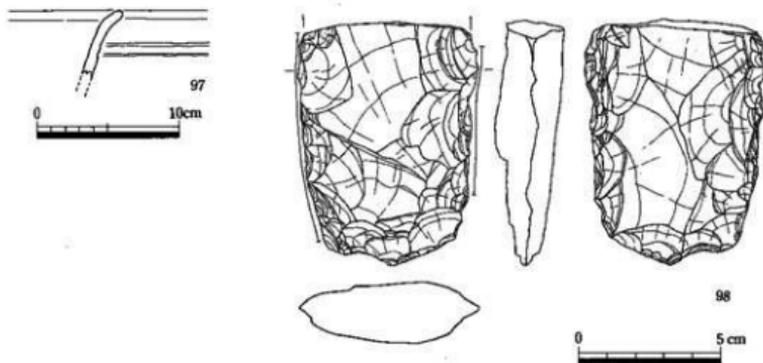
SK46 (第74・75図)

ⅢA区のJ8グリッドで検出した土坑で、SK45の南方に位置する。平面形態は不整楕円形を呈し、長径125cm、短径98cm、深さ14cmの規模を持つ。断面形態は浅いレンズ状で、埋上は2層である。

出土遺物は、弥生時代前期の土器片と石器片をそれぞれ1点ずつ採取している。97は如意形口縁を持つ鉢形土器で、口縁部下にヘラ描き沈線2条をめぐらせている。98はサヌカイトを使用した打製石斧である。両側縁に敲打痕がみられる。



第74図 SK46平・断面図

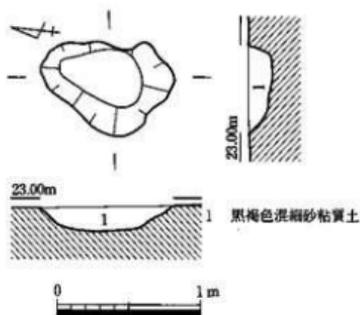


第75図 SK 46 出土遺物

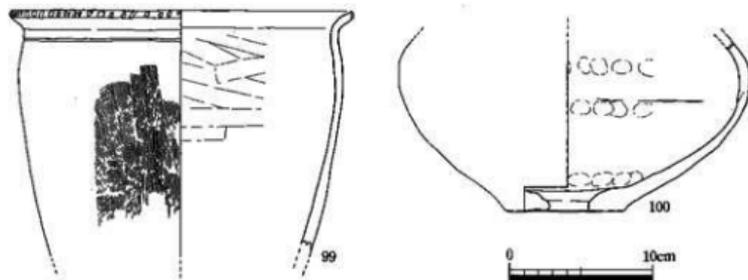
SK 47 (第76・77図)

ⅢA区のJ8グリッドで検出した土坑で、SK 45の南東に位置する。平面形態は不整楕円形を呈し、長径95cm、短径70cm、深さ18cmの規模を持つ。断面形態は概ね逆台形で、埋土は単層である。主軸は $N4^{\circ}E$ の方向である。

土坑内からは弥生時代前期の土器が出土している。99は如意形口縁の甕形土器である。口縁部下に1条のへら描き沈線を施す。100は甕形土器である¹⁾。甕形土器の底部の中央に、焼成後の穿孔を施して甕形土器に転用している。



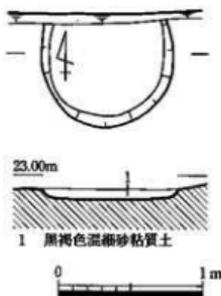
第76図 SK 47 平・断面図



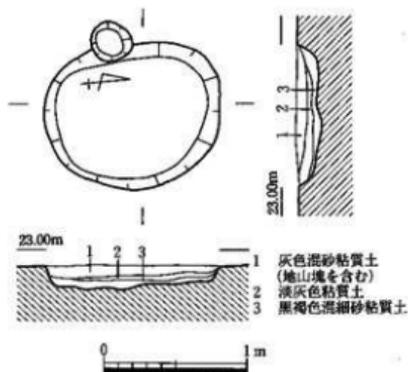
第77図 SK 47 出土遺物

SK 48 (第78図)

ⅢA区のJ7グリッドで検出した土坑である。一部が土層観察用の畦にかかっているため、完掘できてはいない。平面形態は楕円形を呈し、直径94cm、深さ7cmの規模を持つ。断面形態は浅い皿状で、埋土は単層である。弥生時代前期と思われる土器細片がわずかに出土している。



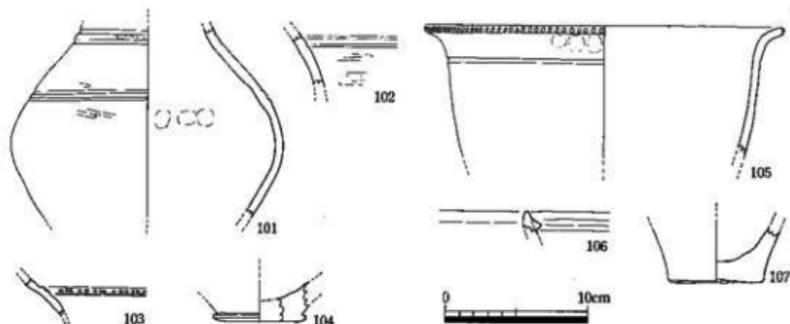
第78図 SK 48
平・断面図



第79図 SK 50 平・断面図

SK 50 (第79・80図)

ⅢA区のJ7グリッドで検出した土坑で、後述するSD 48 (区画溝) によって区画された内部に位置する。一部を後世の柱穴で壊されている。平面形態は楕円形を呈し、長径125cm、短径102cm、深さ18cmの規模を持つ。断面形態は深めの皿状で、壁面が立ち上がるものである。



第80図 SK 50 出土遺物

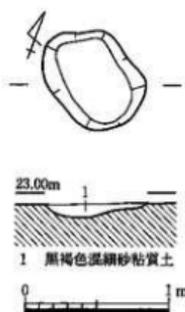
埋土は3層で、最下層に弥生時代前期の土器を含んでいる。第1層は地山の小土塊を含んでおり、この土坑は人為的に埋め戻された可能性がある。

101～104は壺形土器である。頸胴部の境にへら描き沈線を持つものや、竹管による刺突文を施した削出凸帯を持つものがみられる。105～107は甕形土器である。105は1条のへら描き沈線を持つ如意形口縁の甕形土器である。106は口縁外面に1条の凸帯を貼り付けた凸帯文系の甕形土器である。これらの土器は、弥生時代前期の中頃に位置付けることができよう。

SK 51 (第81図)

ⅢA区のJ7グリッドで検出した土坑で、SD48(区画溝)とSR04(自然河川)が接続する付近に位置している。平面形態は隅丸長方形に近い楕円形を呈しており、直径74cm、短径58cm、深さ10cmの規模を持つ。断面形態は浅いレンズ状で、埋土は単層である。主軸はN47°Wの方向である。

わずかに弥生時代前期の土器細片が出土しているが、図化できるものはない。



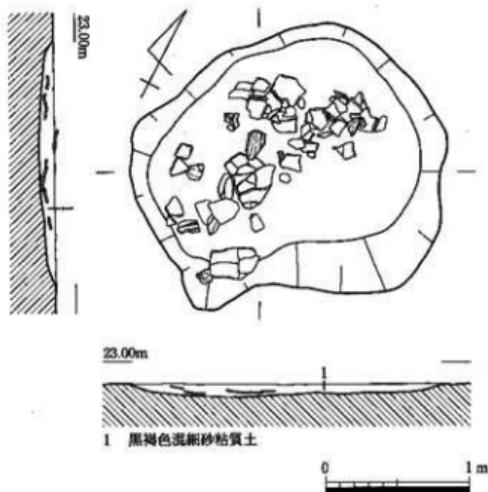
第81図 SK 51
平・断面図

SK52 (第82・83図)

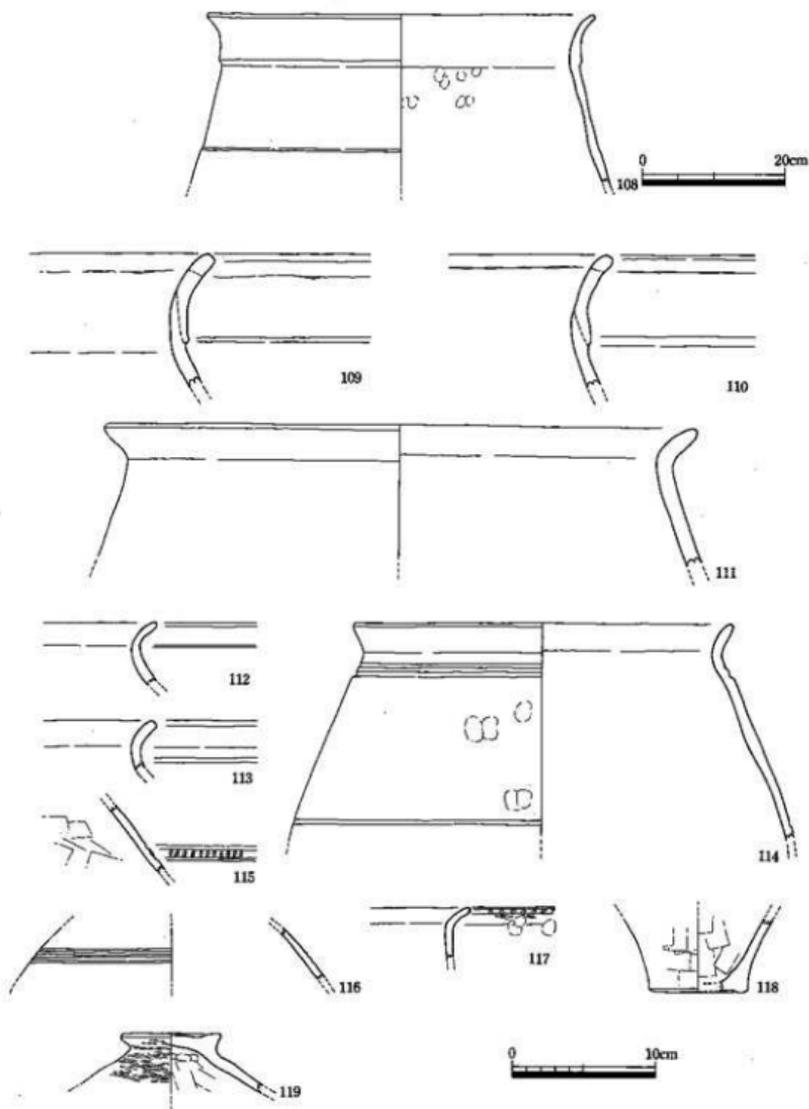
ⅢA区のI7グリッドで検出した土坑で、SR04(自然河川)のすぐ東側に位置する。平面形態は不整な楕円形を呈しており、長径208cm、短径198cm、深さ10cmの規模を持つ。断面形態は浅いレンズ状で、埋土は単層である。土坑内からは、多量の弥生時代前期の土器が出土している。

108~116は壺形土器である。108~111は大形品で、口頸部の境に段を持つもの(108~110)と無文のもの(111)がみられる。確認できた段はすべて粘土紐の接合を利用した段である。112~116は口頸部ないし頸胴部の境に、少条のヘラ描き沈線を施すものである。117は口縁端部下端に刻目を施した、如意形口縁を持つ壺形土器である。

壺形土器にみられる段や少条のヘラ描き沈線から、本土坑は弥生時代前期の前半の年代が想定できる。



第82図 SK52平・断面図

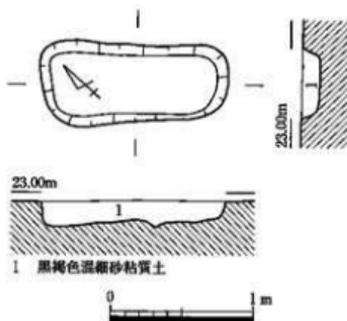


第83圖 SK 5 2 出土遺物

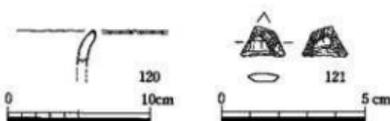
SK53 (第84・85図)

ⅢA区のI8グリッドで検出した土坑である。平面形態は隅丸長方形を呈しており、長さ130cm、幅60cm、深さ18cmの規模を持つ。断面形態は逆台形で、埋土は単層である。主軸はN47°Wの方向である。壁面はほぼ垂直に立ち上がり、底面は平坦面を形成している。

土坑内からはわずかに弥生時代前期の甕形土器の口縁部破片(120)1点とサヌカイトの打製石鏃(121)1点を採取したにすぎない。



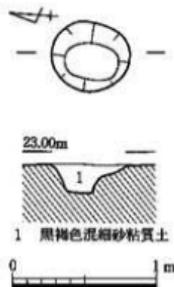
第84図 SK53平・断面図



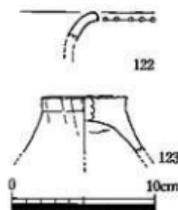
第85図 SK53出土遺物

SK54 (第86・87図)

ⅢA区のI8グリッドで検出した土坑である。平面形態は楕円形を呈し、長径55cm、短径49cm、深さ20cmの規模を持つ。断面形態は逆台形で、埋土は単層である。土坑内からは弥生時代前期の甕形土器(122)と、蓋形土器(123)の破片2点が出土したのみである。



第86図 SK54
平・断面図

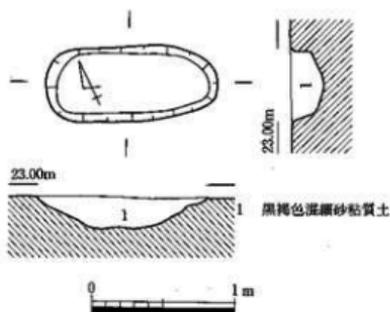


第87図 SK54
出土遺物

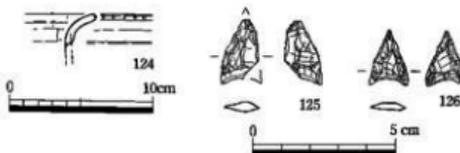
SK 5 5 (第88・89図)

ⅢA区のI 8グリッドで検出した土坑で、SK 5 3のすぐ南西に位置する。平面形態は隅丸長方形を呈し、長さ120cm、幅50cm、深さ23cmの規模を持つ。断面形態はいびつな逆台形で、埋土は単層である。主軸はN62° Wの方向である。

土坑内からは弥生時代前期の土器と石器がわずかに出土している。124は甕形土器の口縁部である。如意形口縁を持ち、口縁部下に粘土紐の接合を利用した段を有している。125・126はサヌカイトの打製石鏃である。



第88図 SK 5 5 平・断面図

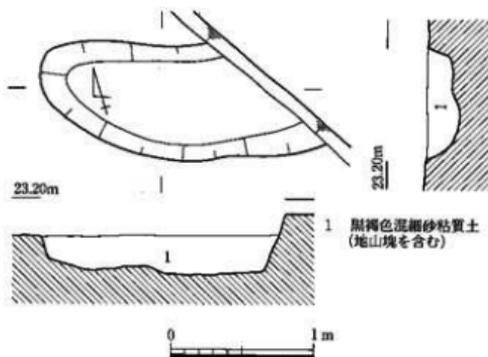


第89図 SK 5 5 出土遺物

SK 5 6 (第90図)

ⅢA区のJ 8グリッドで検出した土坑である。土坑の一部が現在の水路部分と重なっているため、全体を検出できてはいない。平面形態は長楕円形を呈し、長径196cm、短径80cm、深さ28cmの規模を持つ。断面形態は逆台形で、底面はほぼ平坦面をなしている。主軸はN79° Wの方向を持つ。

土坑内からは弥生時代前期と考えられる土器細片をわずかに採取している。



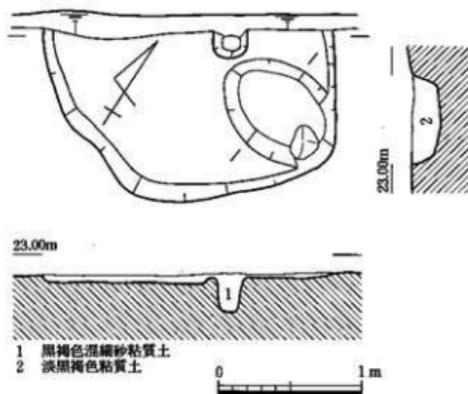
第90図 SK 5 6 平・断面図

SK57 (第91・92図)

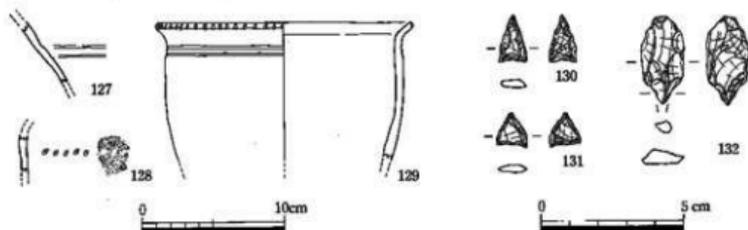
ⅢA区のI8グリッドで検出した土坑である。土坑の一部は調査区外へ連続しているため、全体を検出できてはいない。平面形態は楕円形を呈し、長径202cm、短径118cm、深さ6cmの規模を持つ。断面形態は浅い皿状で、底面は平坦面をなし、埋土は単層である。このSK57は内部に、長径93cm、短径64cm、深さ20cmの規模を持つ平面形態が長楕円形の土坑1基と、直径21

cmの柱穴1基を有している。これらの遺構の存在から、本遺構は内部に貯蔵穴を持った2本柱の竪穴住居の可能性も否定できないが、全体を確認していないためここでは土坑として扱う。柱穴から遺物は出土していないが、内部の土坑からはサヌカイトの小片が比較的多めに出土している。

SK57からは弥生時代前期の土器片と石器を採取している。127は頸胴の境に1条のへら描き沈線を持った壺形土器である。128・129は如意形口縁の甕形土器である。128は口縁部下に刺突文を、129はへら描き沈線2条をめぐらせている。130・131は凹基式の打製石鏃である。132は打製石錐である。



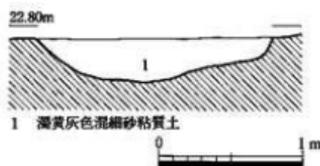
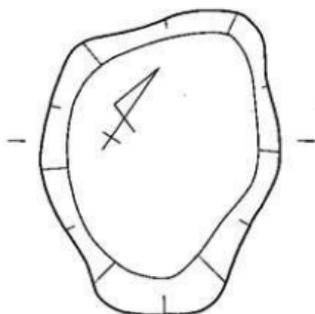
第91図 SK57平・断面図



第92図 SK57出土遺物

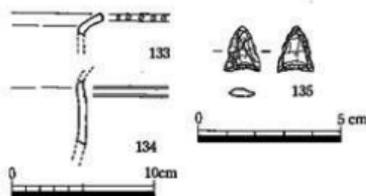
SK 5 8 (第93・94図)

ⅢA区のI 7グリッドで検出した土坑であり、SK 5 2のすぐ南東に位置する。平面形態は楕円形を呈し、長径210cm、短径168cm、深さ32cmの規模を持つ。主軸はN35° Wの方向である。断面形態は厚めのレンズ状で、埋土は単層である。



第93図 SK 5 8 平・断面図

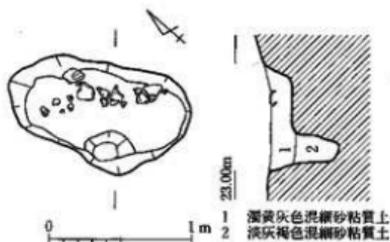
遺物は弥生時代前期の土器細片と石器片がわずかに出土している。このうち3点を図化した。133は甕形土器の口縁部破片である。如意形口縁をなし、口縁端部全面に刻目を施している。134は甕形土器の頸部から胴部の破片である。口縁部下にヘラ描き沈線を2条めぐらせている。135は凹基式の打製石鏃である。石材はサヌカイトを使用している。



第94図 SK 5 8 出土遺物

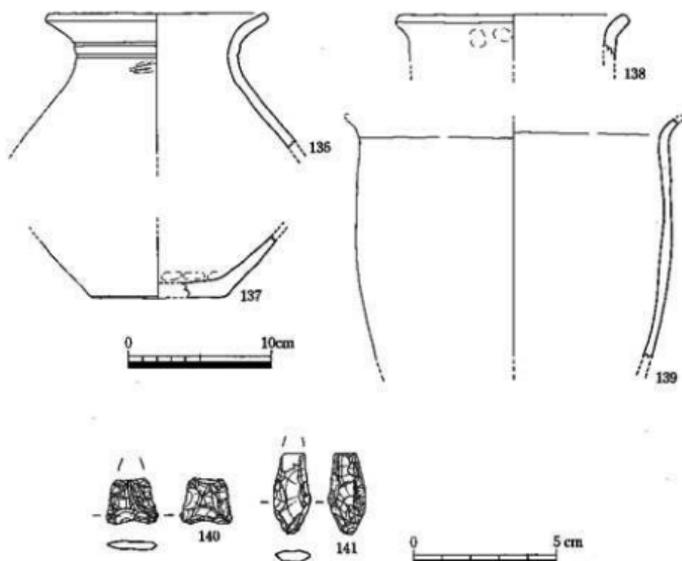
SK 5 9 (第95・96図)

ⅢA区のI 7グリッドで検出した土坑である。SK 5 8の南東にやや離れて位置する。平面形態は長楕円形を呈し、長径130cm、短径74cm、深さ48cmの規模を持つ。断面形態は逆台形で、主軸はN32° Wの方向である。土坑の中央部の西側に柱穴状の掘り込みを持つ



第95図 SK 5 9 平・断面図

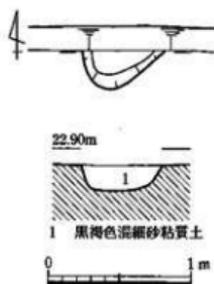
つ。弥生時代前期の土器と石器が出土している。136は口頸部の境に2条のヘラ描き沈線を持つ壺形土器である。138・139は如意形口縁をなす甕形土器で、いずれも口縁部下は無文である。140は凹基式、141は凸基式の打製石鏃である。



第96図 SK 59 出土遺物

SK 60 (第97図)

ⅢA区のI7グリッドで検出した土坑で、SK 52の北西に位置する。土坑の一部が土層観察用の畦にかかっているため、全体を確認できてはいない。平面形態は楕円形を呈し、長径58cm、短径28cm以上、深さ17cmの規模を持つ。土坑内からは弥生時代前期と辛うじて判断できる程度の土器細片がわずかに出土している。

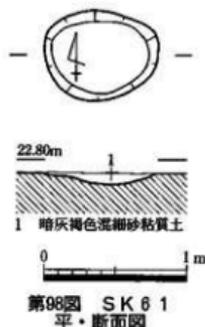


第97図 SK 60
平・断面図

SK 6 1 (第98図)

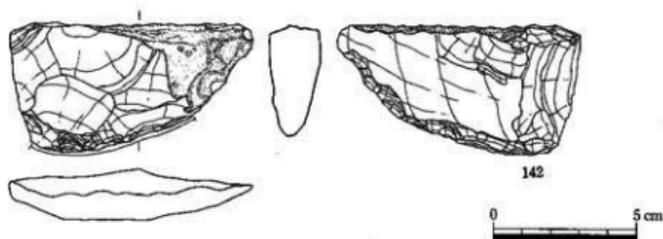
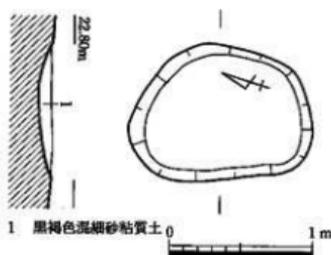
ⅢA区のJ7グリッドで検出した土坑である。SR04(自然河川)がほぼ埋没した段階で作られている。平面形態は楕円形を呈し、長径80cm、短径64cm、深さ9cmの規模を持つ。断面形態は浅いレンズ状で、埋土は単層である。

土坑内からは弥生時代前期と思われる土器細片がわずかに出土している。



SK 6 2 (第99・100図)

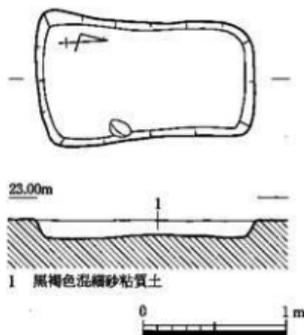
ⅢA区のJ7グリッドで検出した土坑で、SK 6 1の南に位置する。SK 6 1と同様にSR04(自然河川)がほぼ埋没した段階で作られている。平面形態は楕円形を呈し、長径127cm、短径96cm、深さ9cmの規模を持つ。断面形態は浅いレンズ状で、埋土は単層である。土坑内からはサヌカイトの打製石庖丁(142)1点の他に、弥生時代前期と考えられる土器細片がわずかに出土している。



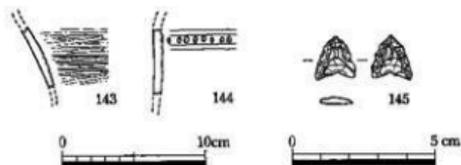
SK 6 3 (第101・102図)

ⅢA区のK7グリッドで検出した土坑である。平面形態は隅丸長方形を呈しており、長さ152cm、幅96cm、深さ14cmの規模を持つ。主軸はN4°Eの方向である。断面形態は浅い皿状で、埋土は単層である。SR04(自然河川)がほぼ埋没した後に作られている。土坑内からは弥生時代前期の土器と石器が出土している。

143は壺形土器の胴部破片である。頸胴の境に3条のヘラ描き沈線をめぐらせている。144は甕形土器の胴部破片である。口縁部下に2条のヘラ描き沈線をめぐらせ、さらに沈線間に刺突文を施している。145は打裂石鏃である。サヌカイトを使用した凹基式の石鏃である。



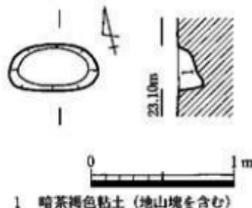
第101図 SK 6 3 平・断面図



第102図 SK 6 3 出土遺物

SK 6 4 (第103図)

ⅢB区のK9グリッドで検出した土坑である。平面形態は楕円形を呈し、長径63cm、短径34cm、深さ17cmの規模を持つ。断面形態はいびつな三角形で、埋土は単層である。主軸はN75°Wの方向を持つ。弥生時代前期と考えられる土器細片がわずかに出土している。



第103図 SK 6 4
平・断面図

SK 6 5 (第104・105図)

ⅢB区のK9グリッドで検出した土坑である。平面形態は長楕円形を呈し、長径256cm、

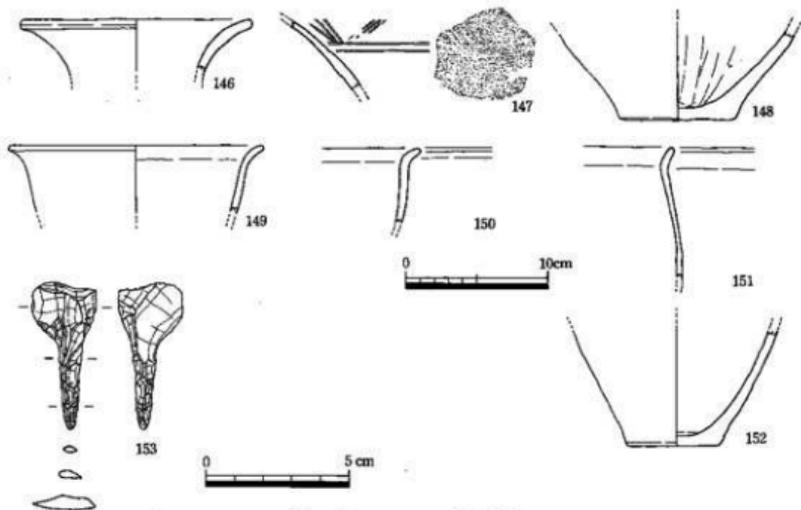


1 暗茶褐色粘土（地山塊を含む）

第104図 SK 65平・断面図

に複線の連弧文を施している。149～152は甕形土器である。いずれも如意形口縁で、口縁部下は無文である。153はサヌカイトの打製石錐である。

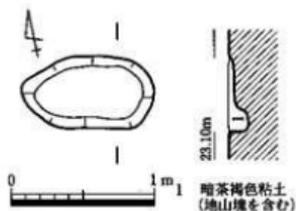
短径84cm、深さ16cmの規模を持つ。断面形態はレンズ状で、埋土は単層である。主軸はN79° Wの方向である。弥生時代前期の土器と石器が出土している。146～148は壺形土器である。147は頸部



第105図 SK 65出土遺物

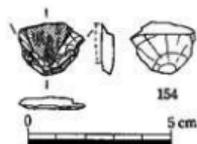
SK 66 (第106・107図)

ⅢB区のK9グリッドで検出した土坑で、SK 65の東方に隣接している。平面形態は楕円形を呈しており、長径94cm、短径52cm、深さ14cmの規模を持つ。埋土は単層で、主軸はN78° Wの方向である。弥生時代前期と考えられるわずかな土器片とともに、石器片が出土している。154はサヌカイトを使用した打製石斧の刃部付近の破片である。片面には



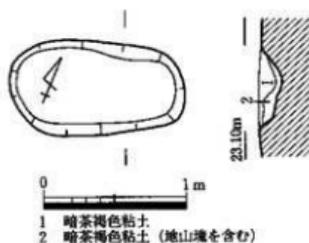
第106図 SK 66平・断面図

使用による明瞭な摩滅痕が残っており、他面は剝離痕をとどめている。



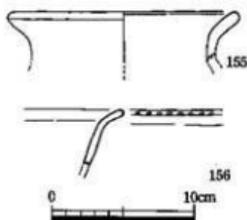
第107図 SK 66
出土遺物

SK 67 (第108・109図)

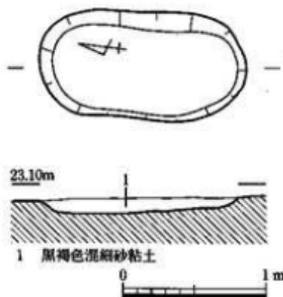


第108図 SK 67平・断面図

ⅢB区のK9グリッドで検出した土坑で、SK 66の東方に位置する。平面形態は長楕円形を呈し、長径122cm、短径67cm、深さ16cmの規模を持つ。断面形態はいびつなレンズ状で、埋土は単層である。主軸はN68°Eの方向である。弥生時代前期の土器片を採取している。155は口頸部境が無文の壺形土器で、156は如意形口縁の鉢形土器である。



第109図 SK 67
出土遺物



第110図 SK 68平・断面図

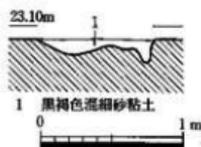
SK 68 (第110図)

ⅢB区のJ9グリッドで検出した土坑である。

平面形態は長楕円形を呈し、長径145cm、短径78cm、深さ10cmの規模を持つ。断面形態は浅い皿状で、埋土は単層である。主軸はN2°Wの方向である。土坑内からは弥生時代前期と辛うじて判断できる程度の土器細片がわずかに出土している。

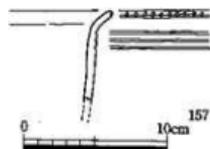
SK 69 (第111・112図)

ⅢB区のJ8グリッドで検出した土坑で、SK 68の南西に位置する。平面形態は不定形で、長さ98cm、幅68cm、深さ16cmの規模を持つ。断面形態も不定形で、埋土は単層である。土坑内から弥生時代前期の甕が1点出土している。



第111図 SK 69
平・断面図

157は甕形土器である。如意形口縁をなし、口縁端部には刻目を施している。口縁部下にはヘラ描き沈線を3条めぐらせている。

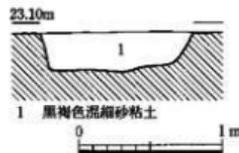


第112図 SK 69
出土遺物

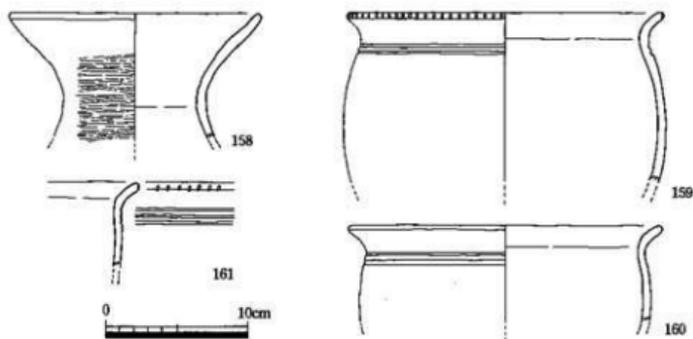
SK 70 (第113・114図)

ⅢB区のJ8グリッドで検出した土坑である。土坑の一部が現在の水路と重なっているために、全体を確認できてはいない。平面形態は楕円形を呈するものと思われ、長径110cm、短径48cm以上、深さ28cmの規模を持つ。断面形態は逆台形で、埋土は単層である。土坑内からは弥生時代前期の土器が出土している。

158は壺形土器の口頸部である。大きく開いた口縁部を有し、口頸部の境は無文である。159~161は如意形口縁を持つ甕形土器である。いずれも口縁部下に少条のヘラ描き沈線をめぐらせている。胴部が張るものもみられる。



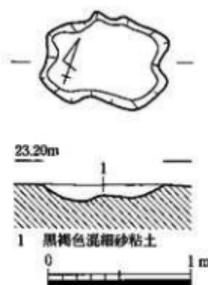
第113図 SK 70
平・断面図



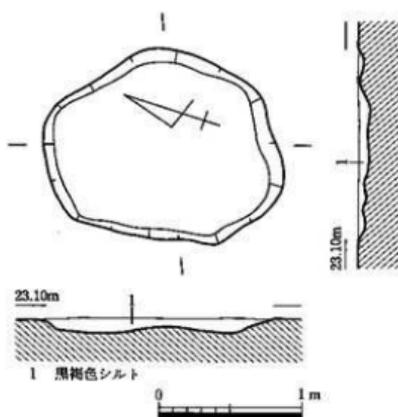
第114図 SK 70 出土遺物

SK 71 (第115図)

ⅢB区のJ8グリッドで検出した土坑である。平面形態は不整楕円形を呈し、長径60cm、短径57cm、深さ11cmの規模を持つ。主軸はN84° Eの方向である。断面形態は浅いレンズ状で、埋土は単層である。弥生時代前期と考えられる土器細片がわずかに出土している。



第115図 SK 71
平・断面図



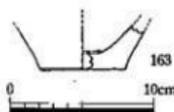
第116図 SK 72 平・断面図

SK 72 (第116・117図)

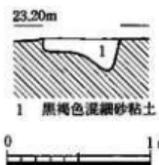
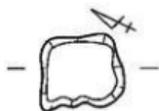
ⅢB区のJ8グリッドで検出した土坑である。SB08(掘立柱建物)とSH04(竪穴住居)との間に位置する。平面形態は楕円形を呈し、長径172cm、短径134cm、深さ10cmの規模を持つ。断面形態は浅いレンズ状で、底面は若干の凹凸を有する。

埋土は単層で、主軸はN29° Wの方向である。

土坑内からは弥生時代中期初頭の土器片が出土している。162は壺形土器の胴部破片である。7条1単位の横描き沈線21条の下に、櫛描き波状文の痕跡がみられる。



第117図 SK 7 2
出土遺物



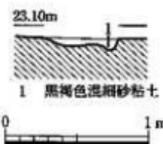
第118図 SK 7 3
平・断面図

SK 7 3 (第118図)

ⅢB区のK 8グリッドで検出した土坑である。平面形態は不整隅丸方形を呈し、長さ57cm、幅54cm、深さ23cmの規模を持つ。断面形態は概ね逆台形であるが、底面には深淺の差がみられる。埋土は単層である。土坑内から弥生時代前期と辛うじて判断できる程度の土器細片が出土している。

SK 7 4 (第119図)

ⅢB区のJ 8グリッドで検出した土坑である。土坑の一部が現在の水路と重なっているために、全体の形状については確認できていない。平面形態は楕円形を呈するものと思われ、長径54cm、短径24cm以上、深さ26cmの規模を持つ。断面形は三角形



第120図 SK 7 5
平・断面図

で、埋土は単層である。弥生時代前期と思われる土器細片がわずかに出土している。



第119図 SK 7 4
平・断面図

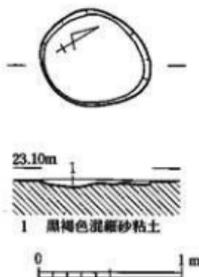
SK 7 5 (第120図)

ⅢB区のK 8グリッドで検出した土坑である。平面形態は隅丸方形を呈し、長さ56cm、幅50cm、深さ9cmの規模を持つ。埋土は単層で、主軸はN38° Wの方向である。土坑内からは弥生

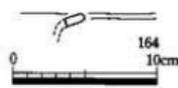
時代前期と考えられる土器細片がわずかに出土している。

SK76 (第121・122図)

ⅢB区のK7グリッドで検出した土坑で、後述するSD48(区画溝)によって区画された内部に位置する。平面形態は楕円形を呈し、長径79cm、短径67cm、深さ6cmの規模を持つ。断面形態は浅い皿状で、埋土は単層である。土坑内からは弥生時代前期の土器片がわずかに出土している。1点を図化した。164は甕の口縁部破片である。如意形口縁をなすものと思われ、口縁端部に刻目は施していない。



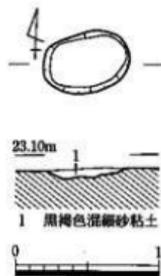
第121図 SK76
平・断面図



第122図 SK76
出土遺物

SK77 (第123図)

ⅢB区のK7グリッドで検出した土坑である。SK76と同様に、SD48(区画溝)によって区画された内部に位置する。平面形態は楕円形を呈し、長径62cm、短径43cm、深さ8cmの規模を持つ。断面形態はレンズ状で、埋土は単層である。主軸はN72°Eの方向である。土坑内からは弥生時代前期と考えられる土器細片がわずかに出土している。

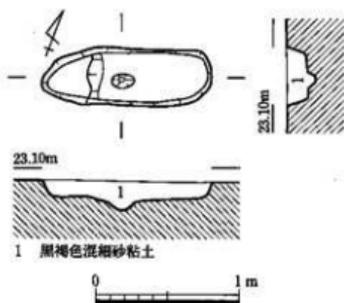


第123図 SK77
平・断面図

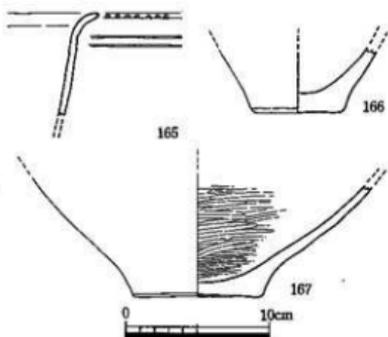
SK78 (第124・125図)

ⅢB区のK7グリッドで検出した土坑である。SK77と同様にSD48(区画溝)の区画の内部に位置する。平面形態は長楕円形を呈し、長径119cm、短径40cm、深さ21cmの規模を持つ。断面形態は概ね逆台形をなすが、中央部に浅い柱穴状の掘り込みを有する。埋土は単層で、主軸はN66°Eの方向である。SR04(自然河川)がほぼ埋没した段階で作られている。土坑内ほぼ全体の底面付近から弥生時代前期の土器片が出土しているが、図化できたのは3点にすぎない。165は甕形土器の口縁部破片である。如意形口縁で口縁

部下に2条のヘラ描き沈線をめぐらす。166は甕形土器の底部、167は壺形土器の底部である。



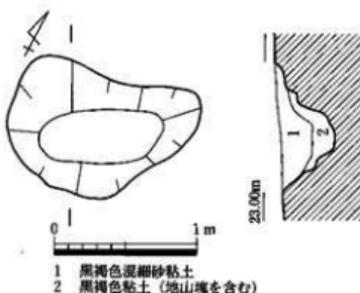
第124図 SK 78 平・断面図



第125図 SK 78 出土遺物

SK 79 (第126・127図)

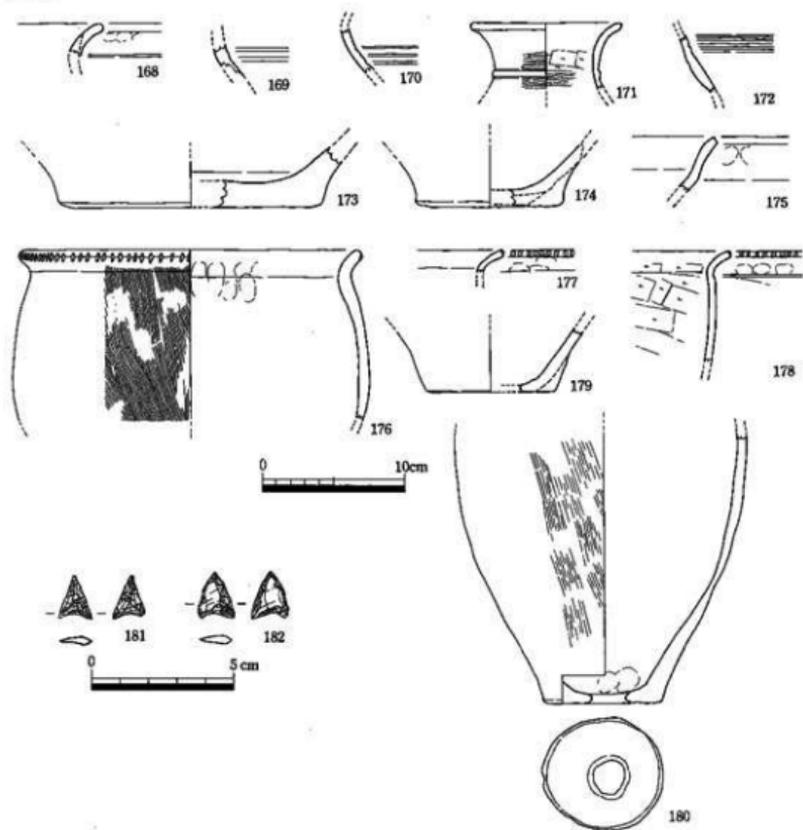
ⅢB区のK7グリッドで検出した土坑である。SD48(区画溝)による区画の内部に位置し、SK80の一部を壊している。SR04(自然河川)がほぼ埋没した段階で作られたものと考えられる。平面形態は不整楕円形を呈し、長径134cm、短径104cm、深さ38cmの規模を持つ。埋土は2層に分かれるが、下層には地山の小土塊が含まれており、土坑を掘った後にある程度まで人為的に埋め戻した可能性がある。



第126図 SK 79 平・断面図

下層からの遺物の出土はないが、上層からは弥生時代前期の土器と石器が出土している。168~174は壺形土器である。口頸部の境に段を持つもの(168)、ヘラ描き沈線を持つもの(169・170)、削出凸帯を持つもの(171・172)がみられる。175は波状口縁ないし片口を持つ鉢形土器である。176~179は甕形土器である。いずれも如意形口縁で、178は口縁部下に1条のヘラ描き沈線をめぐらせている。口縁端部の刻目は全面を刻むものと、下端を

刻むものの両者がみられる。180は瓶形土器である。181・182はサヌカイトの打製石鏃である。



第127図 SK 79 出土遺物

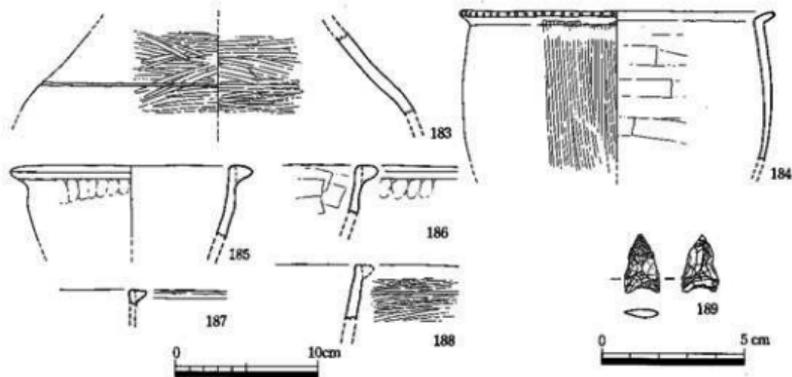
SK 80 (第128・129図)

ⅢB区のK7グリッドで検出した土坑である。SD48(区画溝)による区画の内部に位置し、SK79によって一部を壊されている。平面形態は不整形を呈し、長さ120cm、幅106cm、深さ12cmの規模を持つ。断面形態は浅いレンズ状で、埋土は単層である。主軸

はN30° Eの方向である。弥生時代前期の土器と石器がわずかに出土している。183は頸胴部の境にヘラ描き沈線を1条めぐらせた壺形土器である。184～187は甕形土器である。184は如意形口縁をなすが、他は粘土紐を貼り付けた逆L字形口縁をなしている。いずれも口縁部下は無文である。188は逆L字形口縁の甕形土器の可能性もあるが、ヘラ磨き調整が施されていることから鉢形土器と判断した。189は五角形をなす凹基式の打製石鏃である。



第128図 SK 80平・断面図

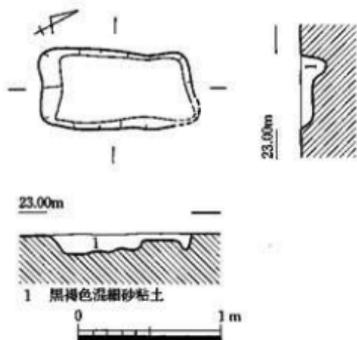


第129図 SK 80出土遺物

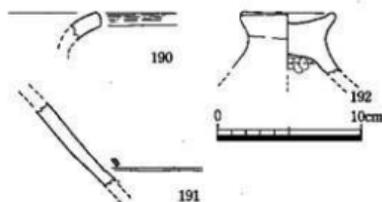
SK 81 (第130・131図)

ⅢB区のK7グリッドで検出した土坑である。SD48(区画溝)による区画の内部に位置し、SK80のすぐ南に隣接するが、SK80との先後関係については確認できていない。平面形態は隅丸長方形を呈しており、長さ105cm、幅54cm、深さ17cmの規模を持つ。埋土は単層で、主軸はN28° Eの方向である。

土坑内からは弥生時代前期の土器片がわずかに出土している。そのうち実測可能な3点を図化している。190・191は壺形土器、192は甕形土器用の蓋形土器である。



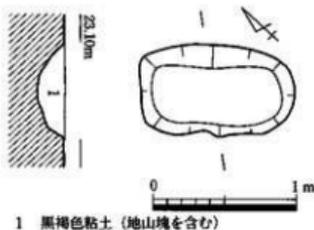
第130図 SK 8 1 平・断面図



第131図 SK 8 1 出土遺物

SK 8 2 (第132図)

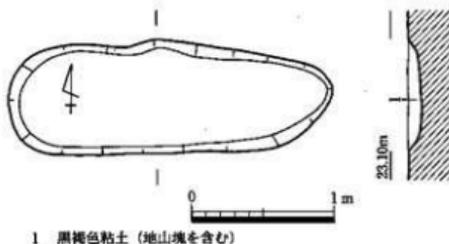
ⅢB区のK9グリッドで検出した土坑である。平面形態は隅丸長方形を呈し、長さ107cm、幅66cm、深さ20cmの規模を持つ。断面形態は厚いレンズ状で、埋土は単層である。埋土には地山の小土塊が含まれており、人為的に埋め戻された可能性がある。主軸はN48°Wの方向である。東方に隣接して柱穴が1基存在するが、本土坑との関係については確認できていない。土坑内からは弥生時代前期と辛うじて判断できる程度の土器細片がわずかに出土している。



第132図 SK 8 2 平・断面図

SK 8 3 (第133図)

ⅢB区のK9グリッドで検出した土坑である。平面形態は長楕円形を呈し、長径226cm、短径82cm、深さ10cmの規模を持つ。断面形は浅いレンズ状で、埋土は単層である。本土坑も埋土に地山の小土塊が含まれており、



第133図 SK 8 3 平・断面図

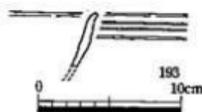
人為的に埋め戻された可能性がある。主軸は $N88^{\circ} E$ の方向である。中央部の両側に一対の柱穴が存在しているが、本土坑との関係については確認できていない。土坑内からはわずかに弥生時代前期の土器細片が出土している。

SK 8 4 (第134・135図)



第134図 SK 8 4 平・断面図

ⅢB区のK9グリッドで検出した土坑である。平面形態は長楕円形を呈し、長径234cm、短径118cm、深さ12cmの規模を持つ。断面形態は浅いレンズ状を呈する。埋土は単層で地山の小土塊が含まれており、人為的に埋め戻された可能性がある。主軸は $N73^{\circ} W$ の方向である。土坑内からは弥生時代前期の土器片がわずかに出土している。193は外反の弱い如意形口縁を持つ鉢形土器である。口縁下部にヘラ描き沈線3条をめぐらせている。

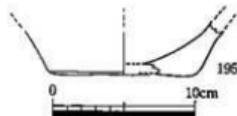


第135図 SK 8 4
出土遺物



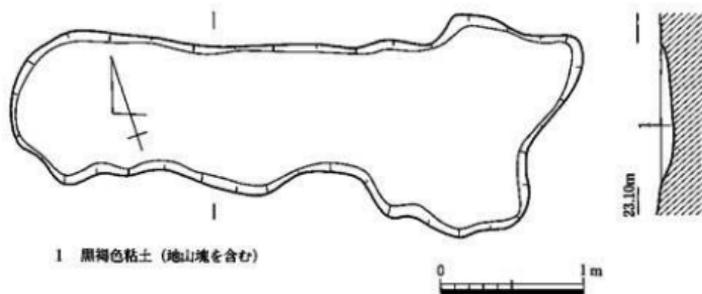
SK 8 5 (第136・137図)

ⅢB区のK9グリッドで検出した土坑である。平面形態は長楕円形を呈し、長径366cm、短径156cm、深さ8cmの規模を持つ。断面形態は浅いレンズ状で、埋土は単層である。埋土には地山の小土塊が含まれており、人為的



第136図 SK 8 5
出土遺物

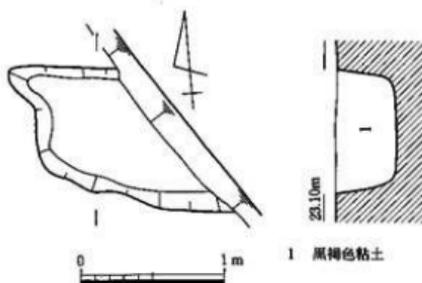
に埋め戻された可能性がある。主軸は $N70^{\circ}W$ の方向である。土坑内からは弥生時代前期の土器細片がわずかに出土している。194は如意形口縁をなす無文の甕形土器である。195は壺形土器の底部である。



第137図 SK 85 平・断面図

SK 86 (第138図)

ⅢB区のL9グリッドで検出した土坑である。土坑の一部は現在の水路と重なっているため、全体の形状については確認できていない。平面形態は長楕円形を呈するものと思われ長径134cm以上、短径96cm、深さ43cmの規模を持つ。断面は逆台形で、底面はほぼ平坦である。土坑内

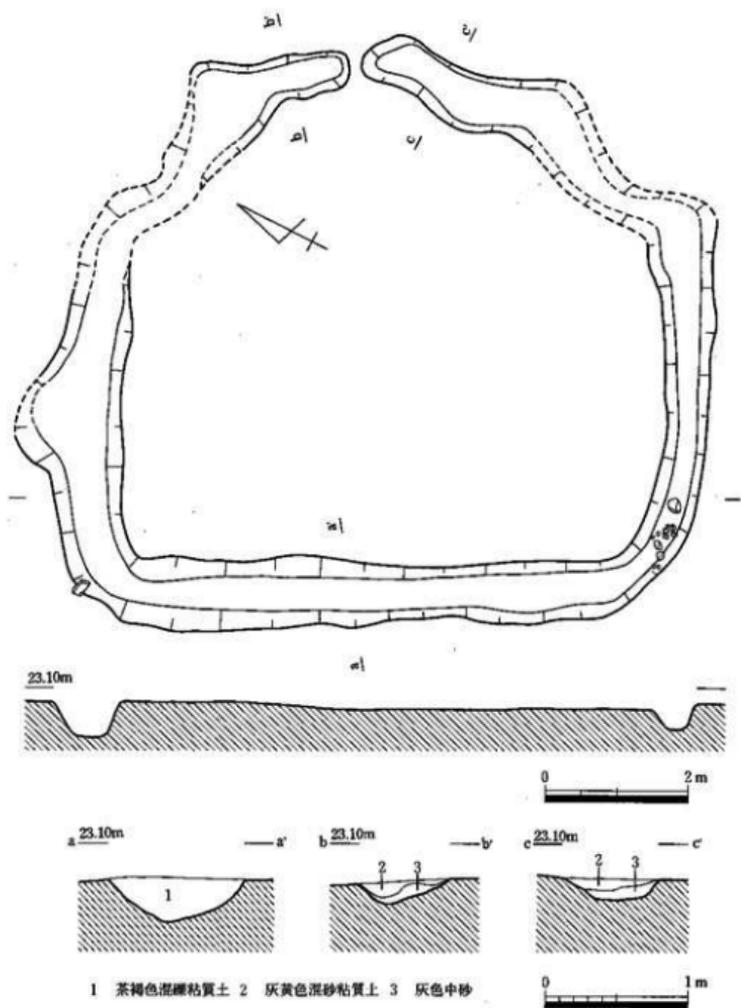


第138図 SK 86 平・断面図

からは辛うじて弥生時代前期と判断できる程度の土器細片をわずかに採取している。

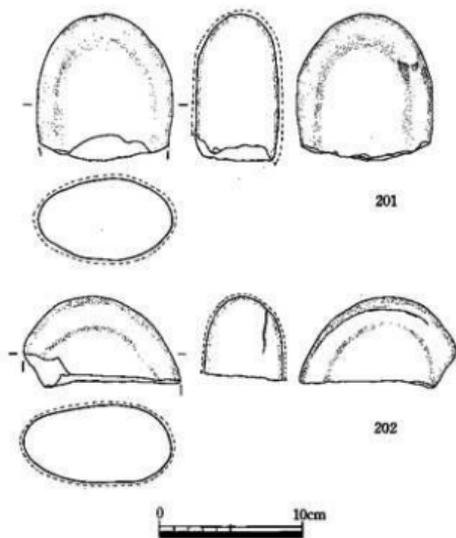
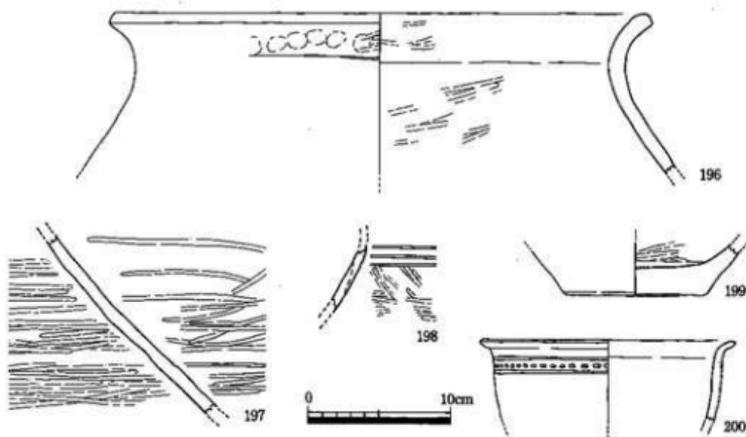
ST 01 (第139・140図)

ⅡB区のG6グリッドで検出した方形周溝状遺構である。全体に後世の著しい削平を被っており、さらに中央部やや東寄りの部分をSX01によって大きく壊されている。平面形態は東辺部分がいびつな不整長方形を呈し、長辺916cm、短辺622cmの規模を持つ。方形に



第139図 ST 01平・断面図

取り巻く溝は幅96cm、深さ32cmの規模を持つ。主軸はN56° Eの方向である。方形周溝部分は南辺・西辺・北辺部分が深く、東辺部分が浅くなっている。東辺は中央部で途切れて



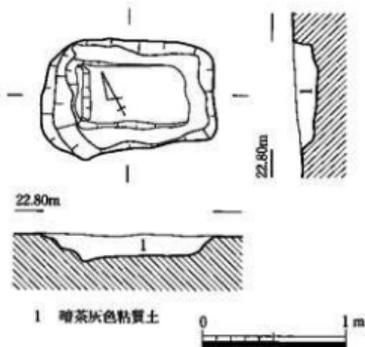
第140 ST 01 出土遺物

いるが、陸橋とするにはあまりにも幅が狭いことから、本来は連続していたものと考えられる。主体部は後世の削平の際に削られてしまったようで、確認することはできなかった。したがって確実とは言えないが、周辺にほぼ隣接してST02（円形周溝墓）やST04（木棺墓）等が存在することから考えても、本遺構は方形周溝墓である可能性が極めて高い。

南西隅の部分を中心として、弥生時代前期の土器や石器が出土している。196～199は壺形土器である。196・197は大形品で、口頸部及び頸胴部の境に1条のへら描き沈線をめぐらせている。200は如意形口縁を持つ壺形土器である。口縁部下には2条のへら描き沈線をめぐらせており、さらに沈線間に刺突文を施している。201・202はほぼ全面を使用した磨石である。

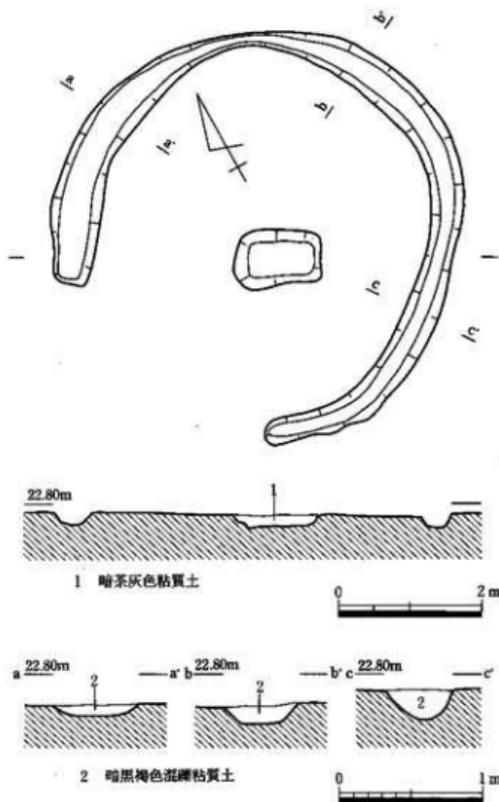
ST02（第141～144図）

II B区のG7グリッドで検出した円形周溝墓である。先行するSD41を壊して作られている。後世の著しい削平によって西方部分が途切れた状態で検出しているが、本来は周溝が完全な円形にめぐっていたものと思われる。平面形態は円形を呈し、直径564cmの規模を持つ。円形に取り巻く周溝は幅54cm、深さ22cmの規模である。周溝の断面形態は基本的にはU字形であるが、逆台形を呈する部分もある。周溝の底からは弥生時代前期の土器が数点出土している。



第141図 ST02主体部平・断面図

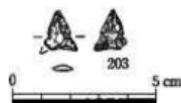
本遺構は全体に削平を受けているが、辛うじて主体部を確認することができた。主体部は平面形態が隅丸長方形を呈し、長さ120cm、幅84cm、深さ19cmの規模を持つ土坑である。断面形態は逆台形を呈し、壁面が垂直気味に立ち上がっている。埋土は単層で、主軸はN60°Wの方向である。ほぼ平坦面をなす底面の北西側で、木棺の小口板を埋め込んで固定するための溝状掘り込み（小口穴）を1つ確認している。この小口穴と対になるもう1つの小口穴及び長側板の痕跡については確認できなかったため、木棺の組み合わせ方法につ



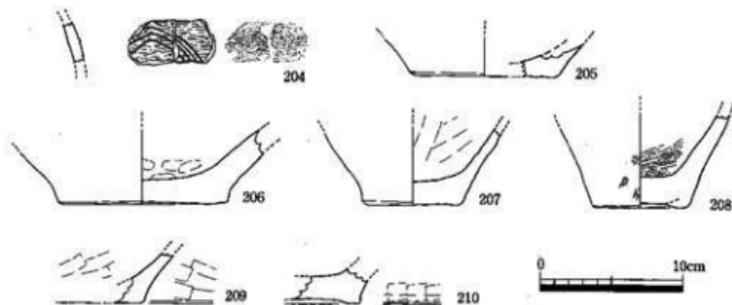
第142図 ST 02 平・断面図

いては判断できていない。主体部からは弥生時代前期と辛うじて判別できる程度の土器細片と打製石鏃が出土している。

204～210は周溝から出土した弥生時代前期の土器で、確認できたものは全て壺形土器である。204は胴部上半の破片で、4条1組のヘラ描きの重弧文を施している。205～210は底部の破片である。203は主体部から出土したサヌカイトの打製石鏃である。



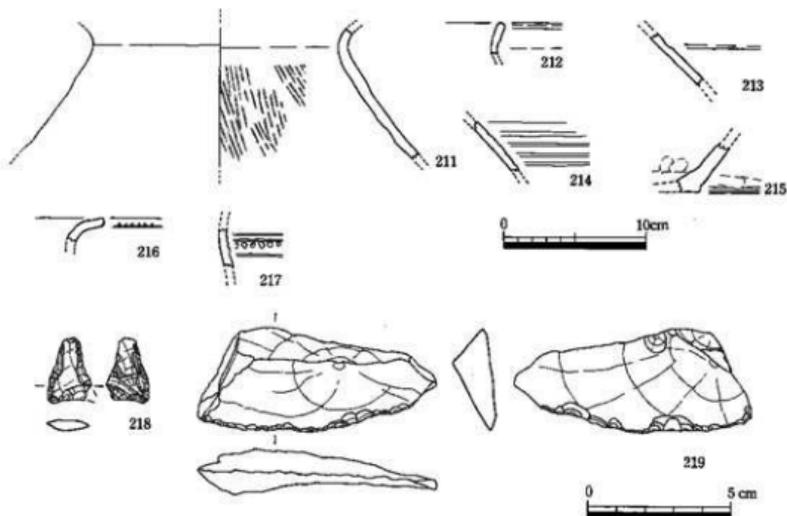
第143図 ST 02
主体部出土遺物



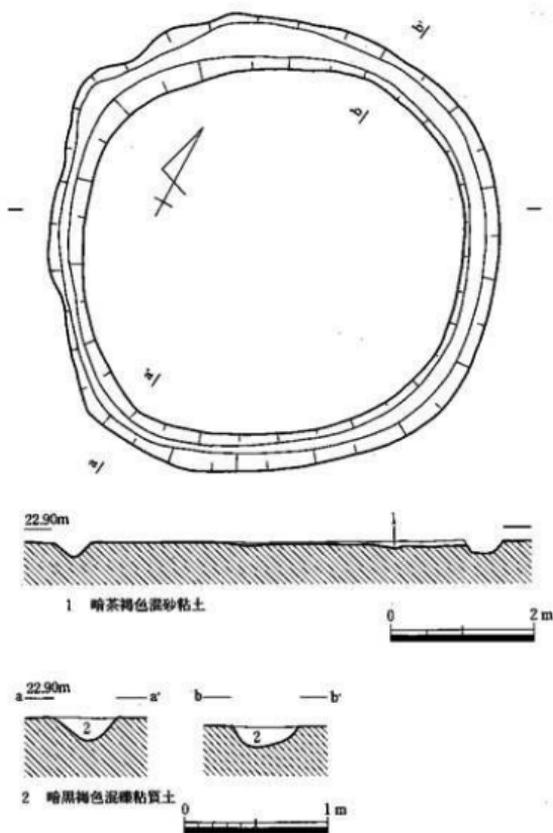
第144図 ST 0 2 出土遺物

ST 0 3 (第145・146図)

ⅡC区のG 6・7, H 6・7グリッドで検出した円形周溝状遺構である。先述したST 0 2の南東に隣接している。後世の削平によって全体を削られているため主体部については確認できなかったが、周溝は完周している。平面形態はやや歪んだ円形を呈し、直径632cmの規模を持つ。円形に取り巻く周溝は幅46cm、深さ17cmの規模である。周溝の断面形態



第145図 ST 0 3 出土遺物



第146図 ST 03 平・断面図

している。217は口縁部下にヘラ描き沈線3条と刺突文を持つ。218は打製石鏃、219はスクレイパーで、両者ともサヌカイトを使用している。

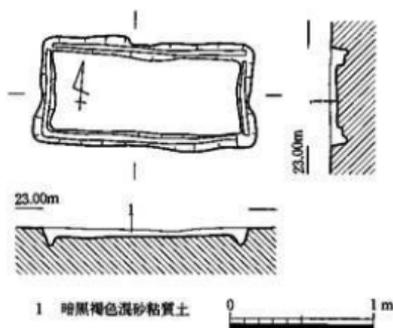
ST 04 (第147・148図)

II C区のH6グリッドで検出した木棺墓である。後世の著しい削平を受けて、遺構の下部のみが辛うじて残存したものと判断できる。平面形態は隅丸長方形を呈しており、長さ

は基本的にはU字形であるが、逆台形をなす部分もある。埋土は単層で、下位から弥生時代前期の土器と石器が出土している。主体部を確認できていないため、確実ではないがST 01と同様の理由から、本遺構は円形周溝墓の可能性が極めて高い。

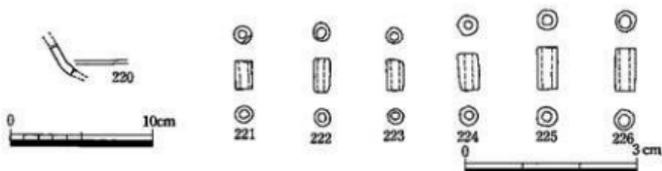
211～215は壺形土器である。口頸部の境が無文の211、頸胴部の境に段を持つ213、ヘラ描き沈線を5条以上持つ214等がみられる。216・217は甕形土器である。いずれも如意形口縁で、216は口縁端部下端に刻目を施

145cm, 幅70cm, 深さ7cmの規模を持つ。主軸はN89° Eとほぼ東西方向である。断面形は壁面がほぼ垂直に立ち上がる浅い皿状で、埋土は単層である。底面は平坦に形成されており、四周で木棺の4枚の側板の痕跡を確認している。この痕跡は4つの壁面の際に沿って溝状に掘り込まれているもので、北東と南西の隅では連続的になっているが、北西と南東の隅では途切れたり一部が接しているだけである。これらの状況



第147図 ST 0 4 平・断面図

から、木棺の組み合わせ方法を復元するのはやや困難ではあるが、両長側板を両小口板で挟み込んだ構造が想定される⁹。土壌内からは弥生時代前期の土器片と、管玉6点が出土している。220は頸胴部境に1条のへら描き沈線をめぐらせた小形の壺形土器である。221～226は碧玉製の管玉である。管玉はいずれも完形品である。



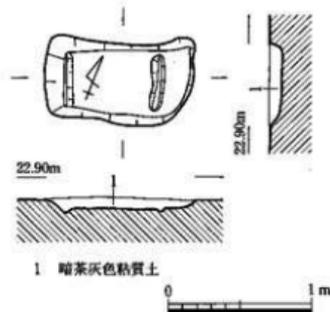
第148図 ST 0 4 出土遺物

ST 0 5 (第149図)

II C区のH 6 グリッドで検出した木棺墓である。著しい削平を受けており遺構の下部のみが残存している。平面形態はややびつな隅丸長方形を呈し、長さ105cm, 幅56cm, 深さ8cmの規模を持つ。主軸はN69° Eの方向である。断面形態は逆台形で、埋土は単層である。平坦面をなす底面には、一対の溝状掘り込み(小口穴)が施されている。西側の小口穴が土壌掘り方の西辺に接しているのに対して、東側の小口穴は土壌東辺からやや距離を持っている。この2つの小口穴から推定される木棺の規模は長さ約70cm, 幅38cmをはかるが、高さについては判断する材料がない。また、長側板の痕跡については確認できてい

ないため、木棺の組み合わせ方法については判断できない。

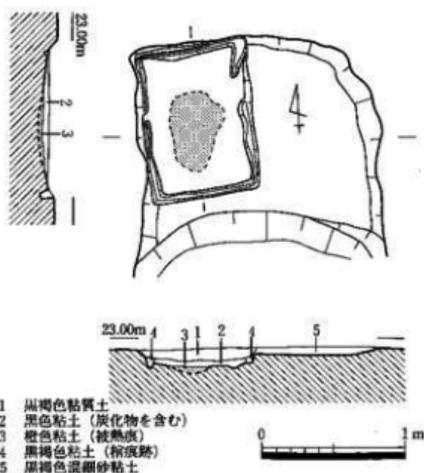
土壌内から弥生時代前期の壺形土器の破片やサヌカイトの小片がわずかに出土しているが、凶化できるものはない。



第149図 ST 0 5 平・断面図

ST 0 6 (第150図)

ⅢA区のJ 8グリッドで検出した木棺墓^⑩と考えられる土壌であり、SK 4 5のすぐ北側に隣接している^⑩。後世の削平を受けているため、遺構の下部のみが辛うじて残存している。平面形態は長方形を呈し、長さ110cm、幅82cm、深さ8cmの規模を持つ。主軸はN 2° Wの方向で、断面形態は概ね逆台形を呈している。上墳の底面はほぼ平坦面をなしており、壁面の四周に棺材を固定するための溝状掘り込みがめぐらされているが、両長側板の中央付近で途切れている。



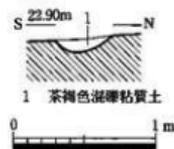
第150図 ST 0 6 平・断面図

る。溝状掘り込みの四隅は連続的になっており、木棺の組み合わせ方法については確認できていない。この溝状掘り込みから推定される木棺の規模は、長さ97cm、幅68cmを測るが、高さについては判断できない。本遺構の中央部分には地山が熱を受けて赤変したような橙色シルト質粘土が堆積しており、その上位に堆積する黒色粘土層中には炭化物が含まれている。このことから、本遺構内において火を使用した行為を行なったことがうかがえる。

土域内から弥生時代前期と辛うじて判断できる程度の上器片が、わずかに出土している。

SD 3 2 (第151図)

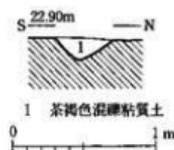
II B区のG 7グリッドで検出した溝状遺構である。調査区外に続いているため詳細は確認できていないが、若干の弧を描きながら概ね南東から北西の方向を有する。断面形態は浅いレンズ状を呈し、検出長1.82m、幅38cm、深さ10cmの規模を持つ。埋土は単層で、サヌカイトの小片がわずかに出土したのみである。弥生時代前期に属するものと考えられる。



第151図 SD 3 2
断面図

SD 3 3 (第152図)

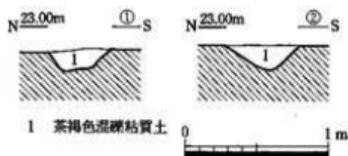
II B区のG 7グリッドで検出した溝状遺構である。調査区外へ続いているが、若干の弧を描きながら概ね南東から北西の方向を有する。断面形態は三角形を呈し、埋土は単層である。検出長2.33m、幅40cm、深さ15cmの規模を持ち、SD 3 2と同様の規模でほぼ平行している。遺物は出土していないが、SD 3 2と同時期のものと考えられる。



第152図 SD 3 3
断面図

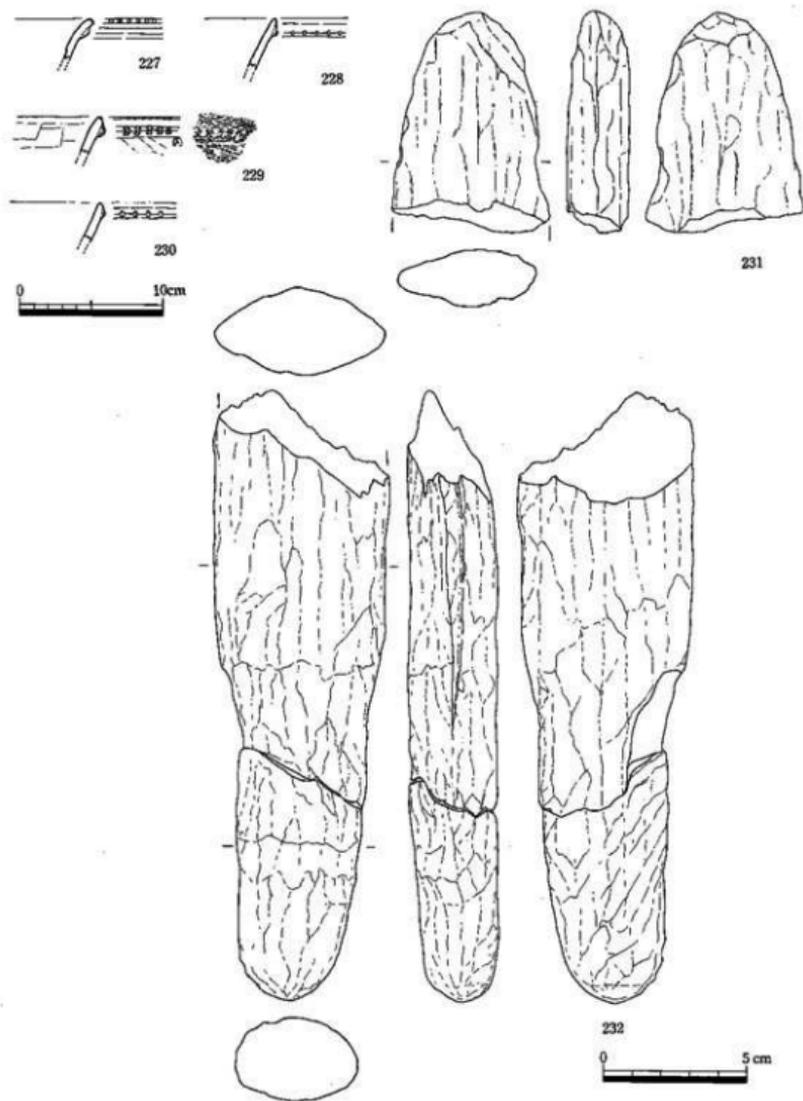
SD 3 4 (第153・154図)

II B区のG 6グリッドで検出した溝状遺構である。概ね南東から北西の方向を持ち、検出長14.60m、幅51cm、深さ18cmの規模を持つ。断面形態は基本的には三角形であるが、部分的にはU字形や逆台形を呈している。途中で一部途切れているが、本来は連続していたものと考えられる。弥生時代前期の上器や



第153図 SD 3 4 断面図

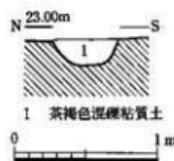
石器が出土している。227~230は凸帯文系の変形土器である。口縁部がわずかに外反するものと、内彎気味のものが見られる。231・232は結晶片岩製の石剣である。直接接合できないが、本来は同一個体であったと考えられる。232は基部と刃部を明瞭に作り分けている。



第154圖 SD 3 4 出土遺物

SD 3 5 (第155図)

II B区のG 6グリッドで検出した溝状遺構である。概ね東から西の方向を持つが、途中で屈曲して南東から北西の方向へ向きを変える。検出長2.80m、幅46cm、深さ18cmの規模を持つ。断面形態は概ね逆台形で、埋土は単層である。弥生時代前期の上器細片が出土している。

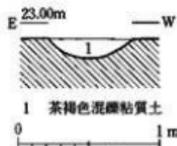


第155図 SD 3 5
断面図

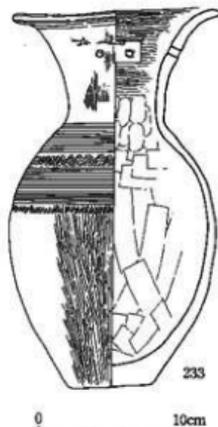
SD 3 6 (第156・157図)

II B区のG 6グリッドで検出した溝状遺構で、SD 3 4の南に位置する。全体に後世の削平を受けているが、東半部は一段深い削平によって消滅している。このため、円弧をなす西半部の続きが如何なる形状をしていたのかについては確認できていない。また、SD 3 4との先後関係についても明らかではない。検出長2.73m、幅57cm、深さ14cmの規模を持つ。弥生時代中期初頭の壺が出土している。

233は椎の実状の胴部に大きく開いた口頸部を持つ壺形土器である。胴部上半には櫛描きによる直線文・波状文と刺突文で構成される文様帯を持つ。



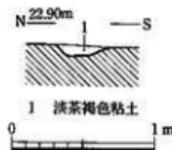
第156図 SD 3 6
断面図



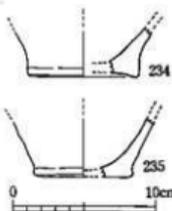
第157図 SD 3 6
出土遺物

SD 4 0 (第158・159図)

II C区のH 6グリッドで検出した溝状遺構である。概ね南東から北西の方向を持つが、南東部分はさらに調査区外に連続しているようである。検出長2.60m、幅38cm、深さ7cmの規模を持つ。断面形態は浅い逆台形で、埋土は単層である。位置関係と方向性からSD 3 4と本来



第158図 SD 4 0
断面図

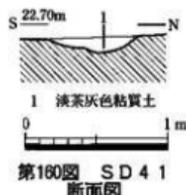


第159図 SD 4 0
出土遺物

は連続した溝状遺構であった可能性がある。弥生時代前期の土器片がわずかに出土している。234・235は甕形土器の底部である。

SD41 (第160図)

ⅡB区のG7グリッドで検出した溝状遺構である。概ね南東から北西の方向を有するが、北西部分はさらに調査区外に連続しているようである。一部をST02によって壊されている。検出長3.20m、幅60cm、深さ11cmの規模を持つ。断面形態は浅いレンズ状を呈し、埋土は単層である。弥生時代前期と考えられる土器細片がわずかに出土している。



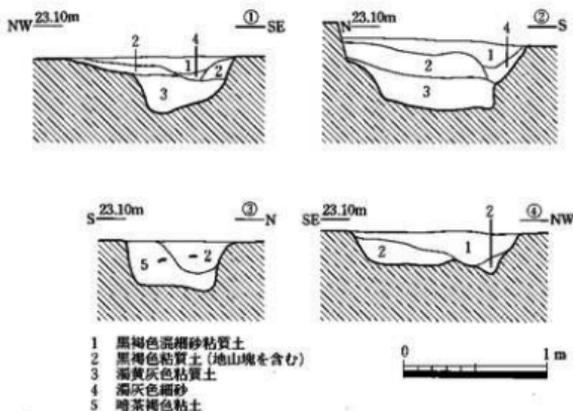
SD42

ⅢA区のI8グリッドで検出した溝状遺構である。SR04(自然河川)から分岐して概ね南から北の方向を有するが、調査区の隅で一部を確認したのみであり、さらに調査区外へ連続している。検出長4.46m、幅236cm、深さ68cmの規模を持ち、断面形態は逆台形を呈する。後述するSD49(内環濠)の南半部分とほぼ同じ方向を持っており、SD49と連続する環濠の一部と考えられる。図化できるものはなかったが、弥生時代前期の土器細片が出土している。

SD48 (第161~167図)

ⅢA・B区のJ~L7・8グリッドで検出した溝状遺構である。後世の著しい削平を受けているにも関わらず、検出長49.60m、幅121cm、深さ51cmと比較的大きな規模を有しており、本来はさらに大きな溝状遺構であったと判断できる。断面形態は概ね逆台形を呈している。平面形態は2つの長方形の上半分が1辺を共有して連結したような形態をしている。西辺部はSR04(自然河川)に接続しているが、東辺部については調査区外へ連続している。中央部はSR04に接続せず、途中で途切れている。

次に、この溝状遺構の性格について考えてみたい。土層断面の観察からは、西寄りの一部で流水の痕跡を確認しているが、基本的には粘質土が堆積していることから、滞水状態が長く続いていたものと判断できる。さらに溝状遺構は複雑に入りくんだ形態をしていることからしても、排水を目的としたものとは考えにくい。目を転じてSD48とSR04

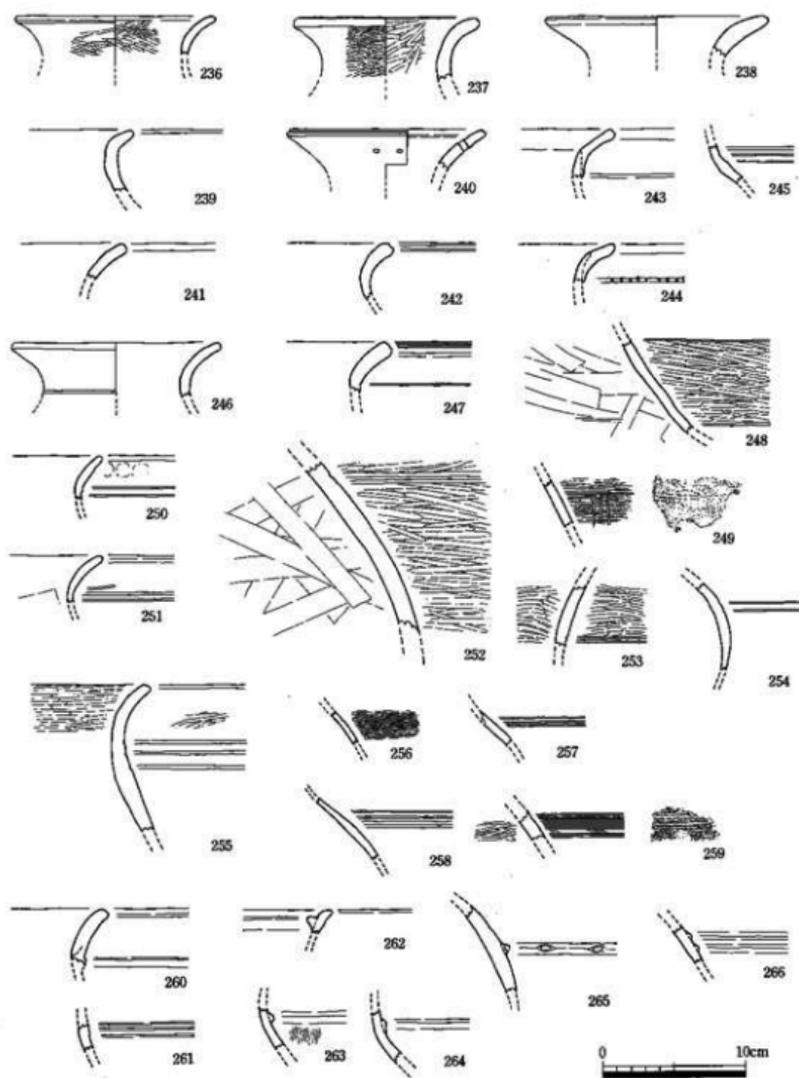


第161図 SD48断面図

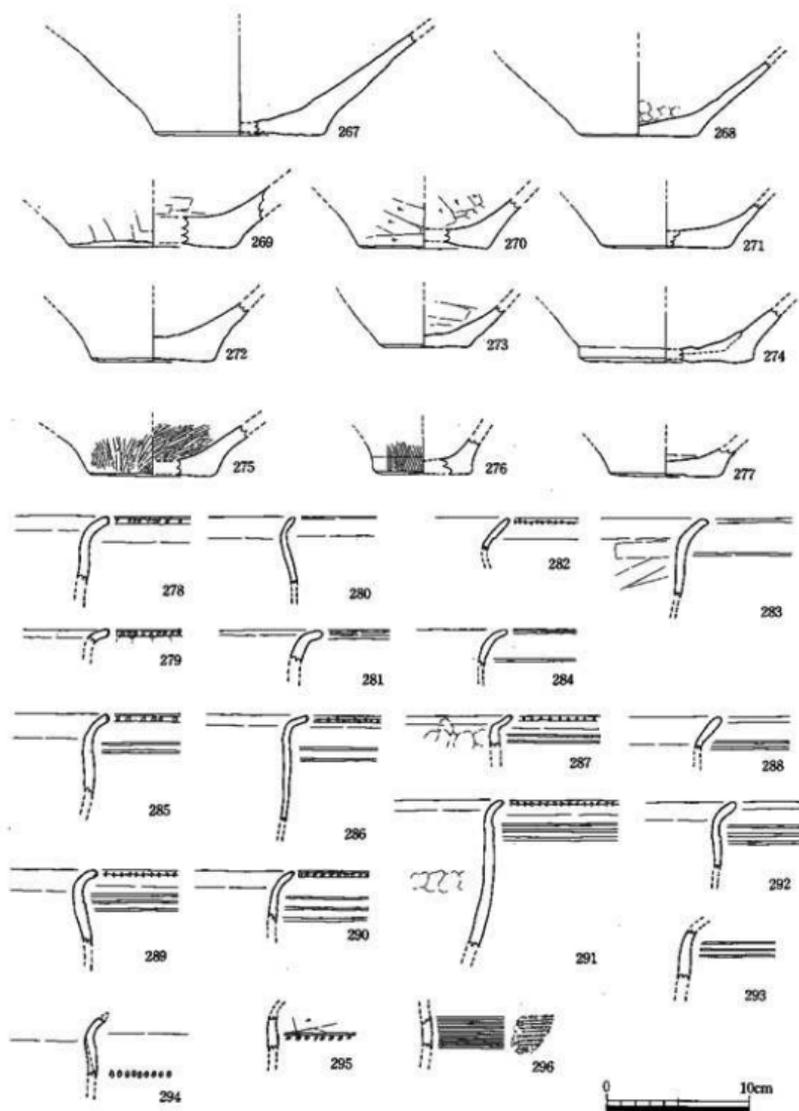
(自然河川)に囲まれた部分を見ると、西半部に平安時代末頃の掘立柱建物や柱穴も見られるが、弥生時代前期の遺物を持つ土坑と柱穴が存在している。現在のところこれらの土坑・柱穴によって構成される建物は確認できていないが、削平のために消滅した柱穴

を考慮すれば、建物の存在は十分に想定できよう。このことから、環濠集落内部をさらに区画する意図を持って築かれた溝状遺構という性格を与えることができよう。この溝状遺構の規模の大きさは、その意図の強固さを反映したものと考えられる。では、何を区画したのであろうか。区画された部分を見ると、上坑8基に対して多数の柱穴が存在しており、福岡県板付遺跡等のように貯蔵穴のみを区画したものとは明らかに異なっている。先述したように区画内には建物の存在が想定できることから、これらの土坑は建物に付随するものとして、一部の建物を区画したものと捉えておきたい¹⁹⁾。

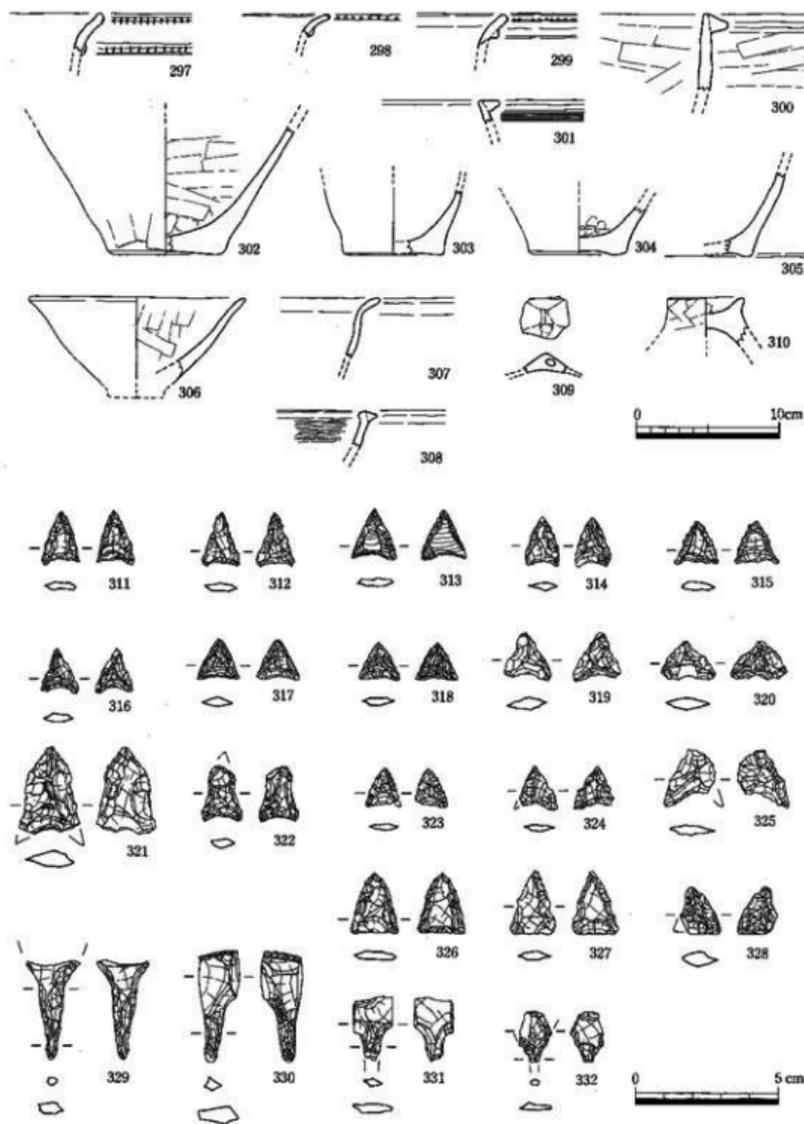
SD48からは、弥生時代前期から中期初頭の土器・石器が出土している。土器には壺形土器・甕形土器・鉢形土器・蓋形土器がみられる。236~277は壺形土器である。口頸部及び頸胴部の境が無文のもの(236~242)、段を持つもの(243~245)、へら描き沈線を持つもの(246~258)、削出凸帯を持つもの(260・261)、貼付凸帯を持つもの(262~266)、櫛描き沈線を持つもの(259)がある。267~277は壺形土器の底部を一括した。278~305は甕形土器である。如意形口縁のものが主体を占めるが、わずかに凸帯文系と逆L字形口縁のものがみられる。如意形口縁には口縁部下が無文のもの(278~281)、段を持つもの(282)、へら描き沈線を持つもの(283~293)、刺突文を持つもの(294・295)、櫛描き沈線を持つもの(296)がある。凸帯文系(297~299)は、口縁端部下に凸帯を貼り付けるものである。逆L字形口縁には無文のもの(300)と櫛描き沈線を持つもの(301)がある。



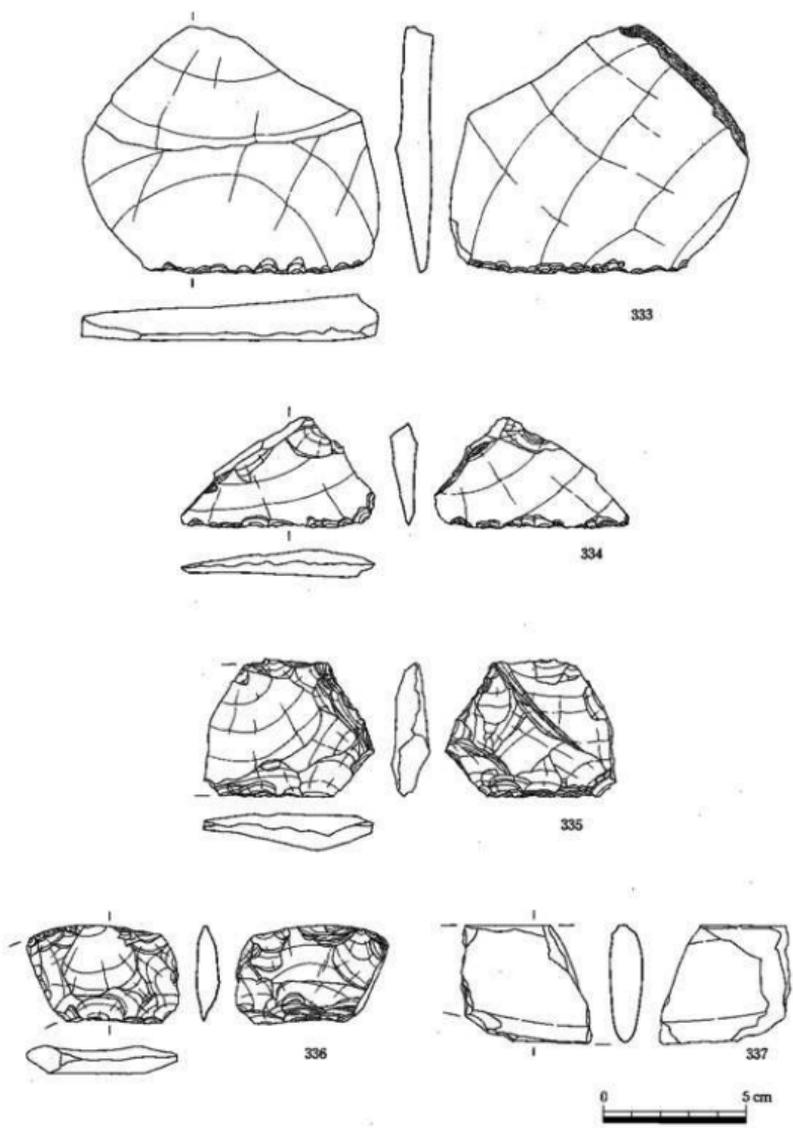
第162圖 SD48出土遺物①



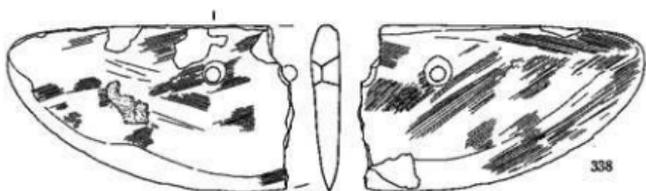
第163图 SD48 出土物②



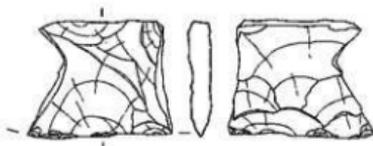
第164図 SD48 出土遺物③



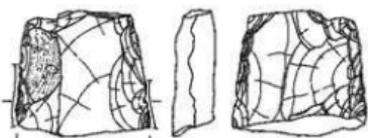
第165図 SD48出土遺物④



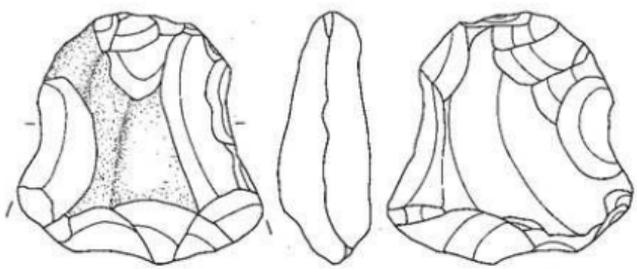
338



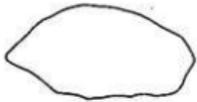
339



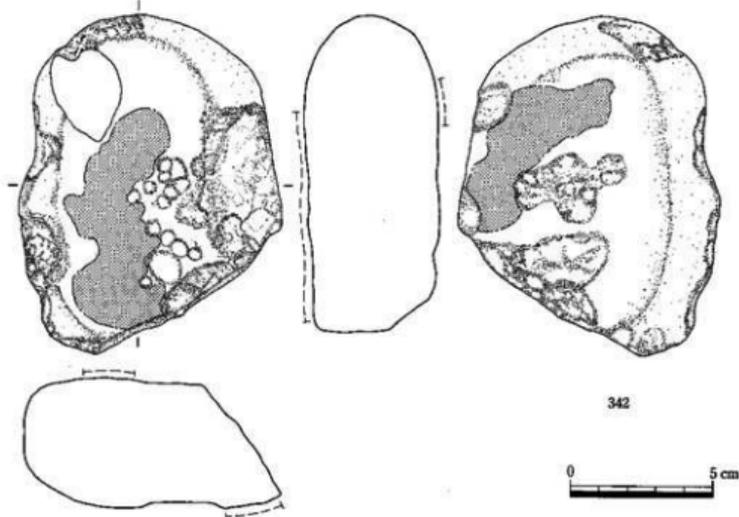
340



341



第166図 SD48出土遺物⑤



第167図 SD48出土遺物⑥

302～305は甕形土器の底部である。鉢形土器には、如意形口縁のもの（306・307）と逆L字形口縁のもの（308）がある。蓋形土器には壺形土器用（309）と甕形土器用（310）がみられる。

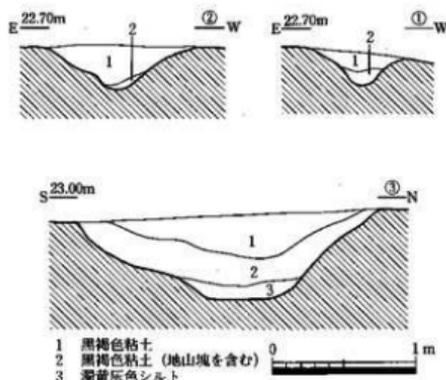
石器には石鏃・石錐・スクレイパー・石鎌・石庖丁・石斧・石鍬・砥石がみられる。311～328は打製石鏃である。凹基式と平基式がみられるが、321・322の様に五角形をなすものもある。329～332は打製石錐、333～335はスクレイパーである。336は打製石鎌の基部である。337～339は石庖丁であるが、磨製のもの（337・338）と打製のもの（339）の両者がみられる。341は川原石を使用した打製石鍬である。342は両面を使用した砥石である。

これらの土器・石器は一部に弥生時代中期初頭のものを含むが、大半は弥生時代前期後半のものである。このことから、本遺構の形成時期は弥生時代前期後半といえる。

SD49（第168～173図）

ⅢB区のK10グリッド、ⅣA区のL9・M8・9グリッドで検出した、環濠としての性

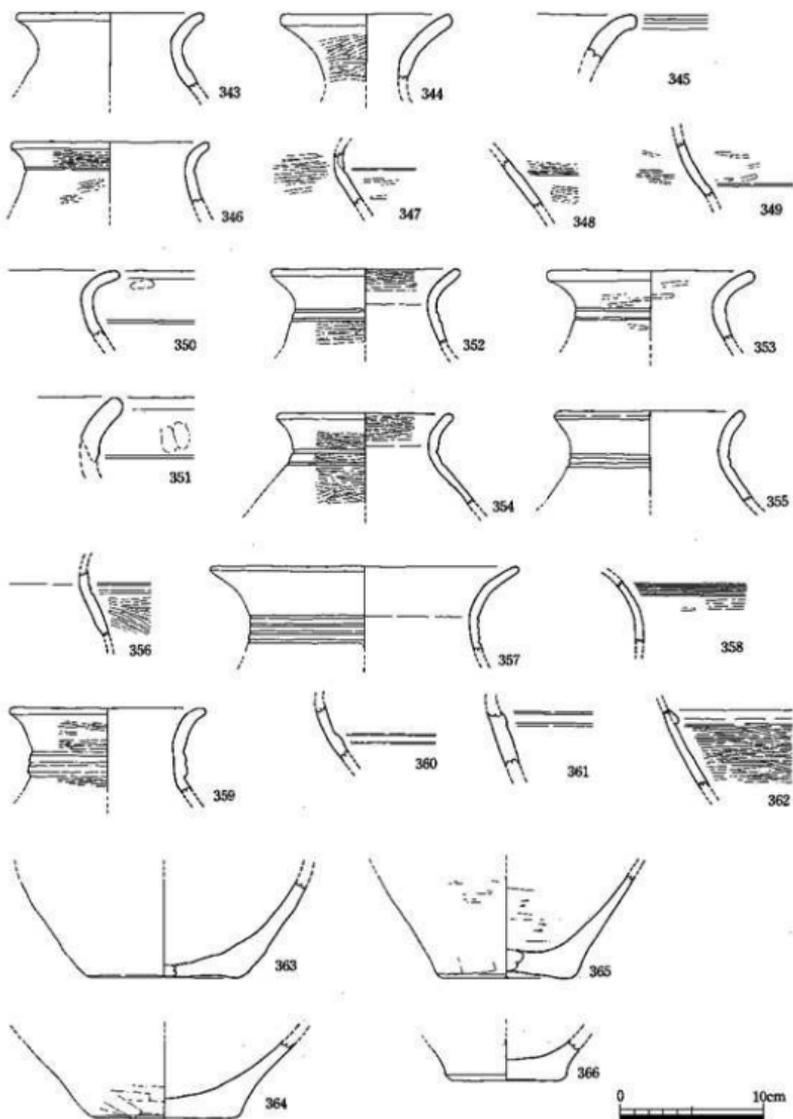
格を持つ溝状遺構（外環濠）である。ⅢB区では調査区の隅で一部を検出したのみで全体の形状については確認できなかったため、調査後にトレンチを設定して幅及び深さの確認を行っている。ⅣA区では地下げによって大きく破壊されており、溝状遺構の下部が辛うじて残存した状態で検出している。ⅢB区とⅣA区の間は、現在の水路と重なっているために全体を確認できてはいない。ⅢB区におい



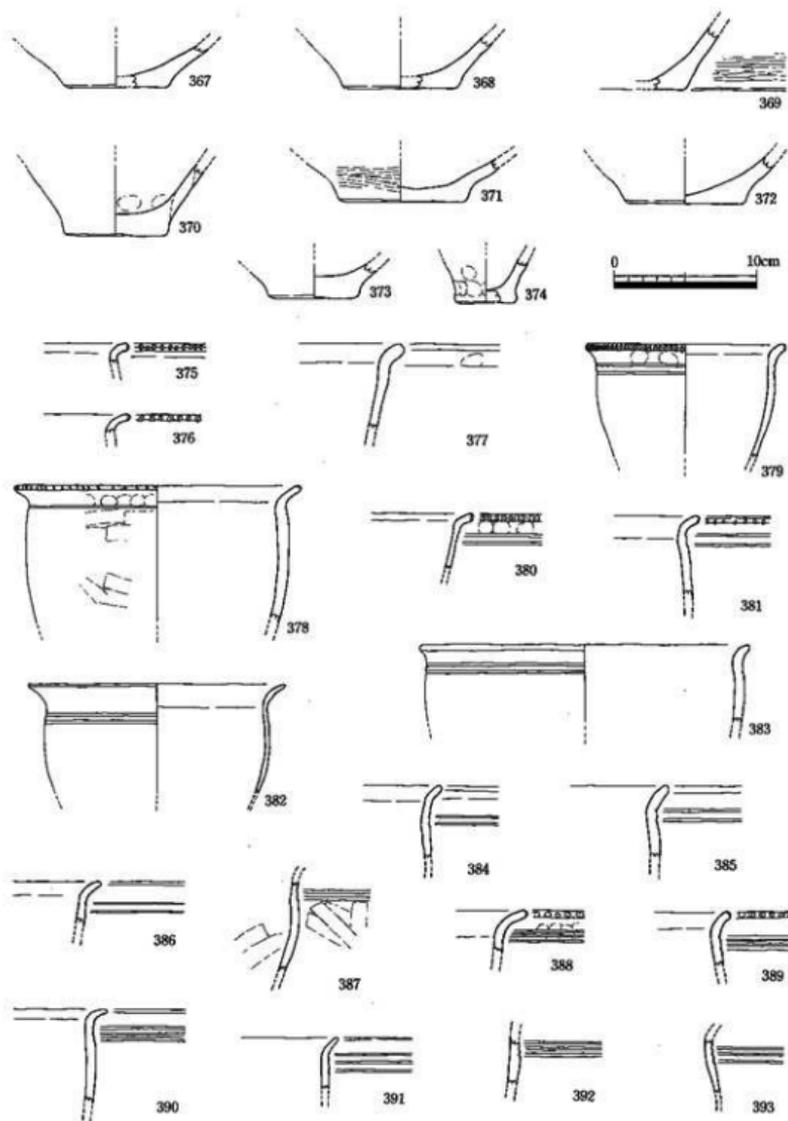
第168図 SD 49 断面図

ては幅210cm、深さ59cmの規模を持つ。南端と西端はともに調査区外に連続しており、上部の削平を考慮すれば、本来はさらに大きな規模を持つ溝状遺構（環濠）であったと思われる。断面形態は基本的に逆台形を呈しているが、部分的にはV字形を呈する部分もある。埋土は大きく3層に分かれるが、いずれも粘質土の堆積であり、恒常的な流水を示す土層はみられない。また、近辺に土塁の存在を示すような上層の流入も確認できない。平面形態は、ほぼ南北方向から大きく屈曲して東西の方向を持ち、後述するSD 50とⅢB区で4.5m、ⅣA区で6.0～7.0mの間隔ではほぼ平行している。この方向性は、先述したSD 48（区画溝）とほぼ同じである点は注目されよう。全体の形態は調査区内で確認した範囲においては、楕円形というよりも隅丸長方形に近い形態を持つものといえる。

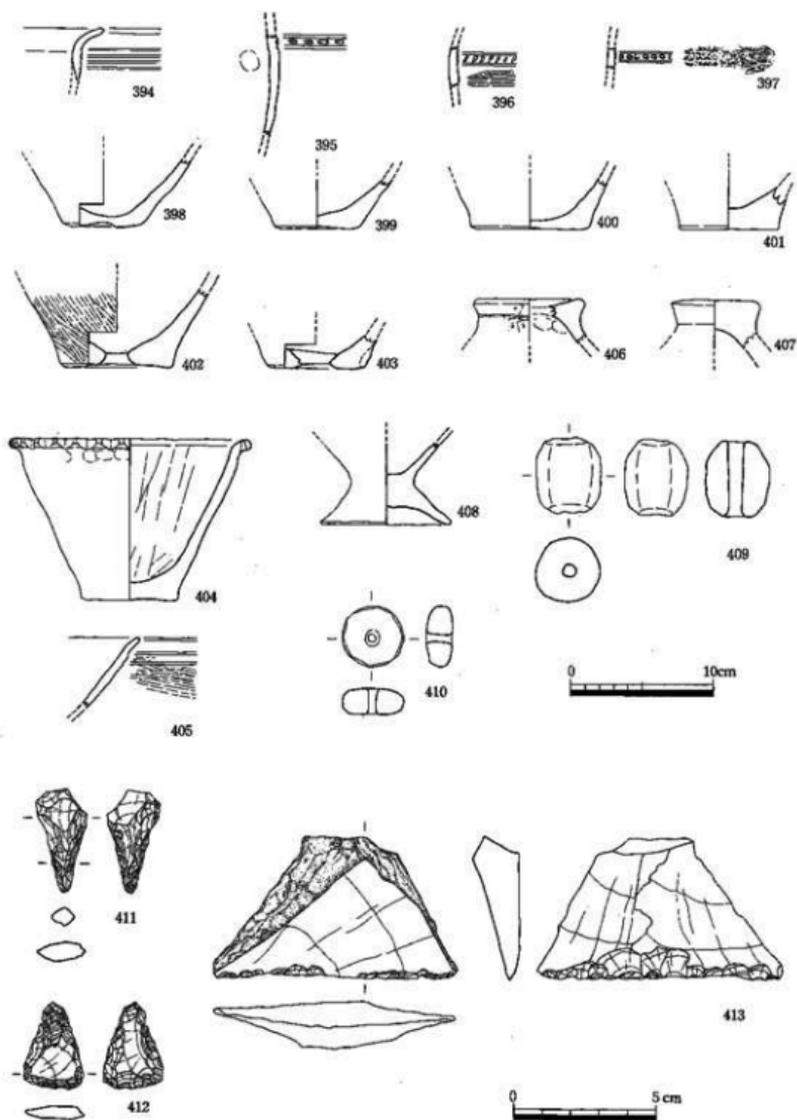
SD 49からは、弥生時代前期から中期初頭の土器と石器が出土している。土器には壺形土器・甕形土器・甔形土器・鉢形土器・蓋形土器・高杯形土器・紡錘車・土鏝がみられる。343～374は壺形土器である。口頸部及び頸胴部の境が無文もの（343～345）、段を持つもの（346～349）、へら描き沈線を持つもの（350～358）、削出凸帯を持つもの（359～361）、貼付凸帯を持つもの（362）がある。363～374は壺形土器の底部である。375～401は甕形土器である。確認できたものは全て如意形口縁であった。口縁部下が無文のもの（375～377）、へら描き沈線を持つもの（378～394）、へら描き沈線と刺突文を持つもの（395～397）がある。398～401は甕形土器の底部である。402・403は甔形土器である。鉢形土器は如意形口縁のものがあり、404は口縁端部に大きな刻目を施している。蓋形土器



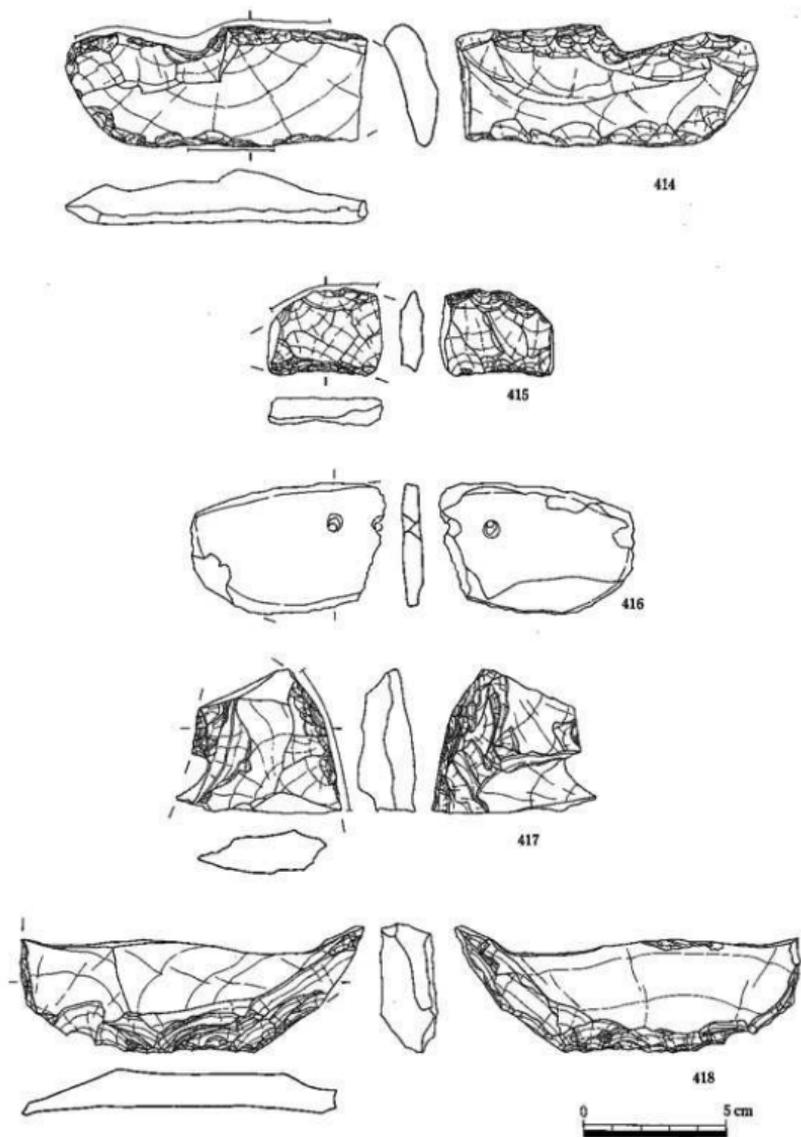
第169圖 SD49出土遺物①



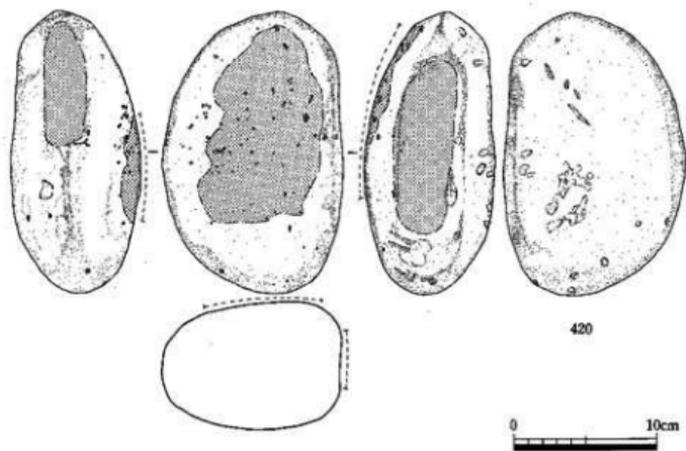
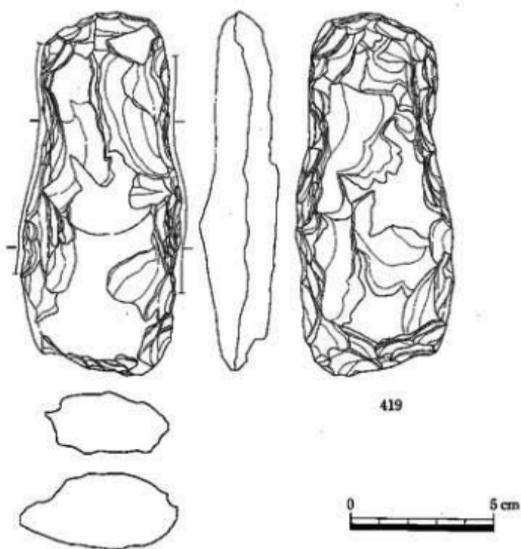
第170圖 SD49出土遺物②



第171圖 SD 49 出土遺物③



第172図 SD 4 9 出土遺物④



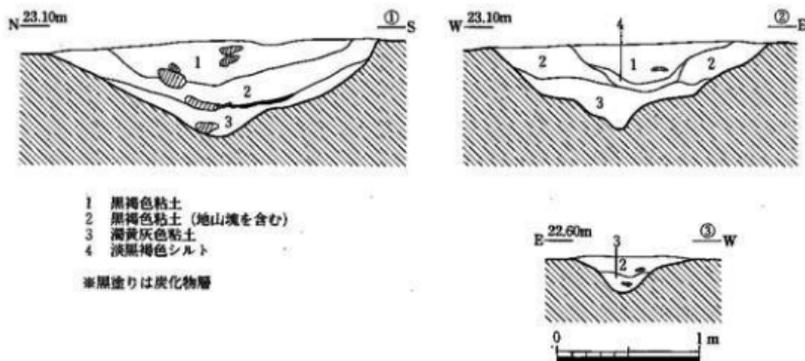
第173圖 SD 4 9 出土遺物⑤

は甕形土器用の406・407がある。408は高杯形土器と判断した。410は土製紡錘車，409は土製の管状土鍾である。石器には石鎌・石錐・スクレイパー・石鎌・石砲丁・石斧・砥石がみられる。411は打製石錐，412は平基式の打製石鎌である。413・414はスクレイパー，415は打製石鎌と考えられる。416は磨製石砲丁で，2つの穿孔が残る。419は打製石斧と考えたが，磨製石剣の未製品の可能性もある。420は砥石である。

これらの土器・石器は一部に弥生時代中期初頭のものを含むが，大半は弥生時代前期後半のものである。このことから，本外環濠の形成時期は弥生時代前期後半といえる。

SD50 (第174~196図)

ⅢB区のK9・L8・9グリッド，ⅣA区のL9グリッドで検出した，環濠としての性格を持つ溝状遺構（内環濠）である。SD49と同様にⅣA区では地下げによって大きく破壊されており，溝状遺構の下部が辛うじて残存しているにすぎない。ⅢB区とⅣA区の間は，現在の水路と重なっているために全体を確認できてはいない。ⅢB区においては幅230cm，深さ67cmの規模を持つ。南端と西端は調査区外に続いており⁸⁾，上部の削平を考慮すれば，本来はさらに大きな規模を持つ溝状遺構（環濠）であったと思われる。断面形態は基本的には逆三角形（角度の大きなV字形）を呈するが，部分的にはU字形を呈している。埋土は大きく3層に分かれるが，いずれも粘質土である。ⅢB区では一部に炭化物を多く含んだ層が形成されている。SD49と同様に，近辺に上層の存在を示唆するような



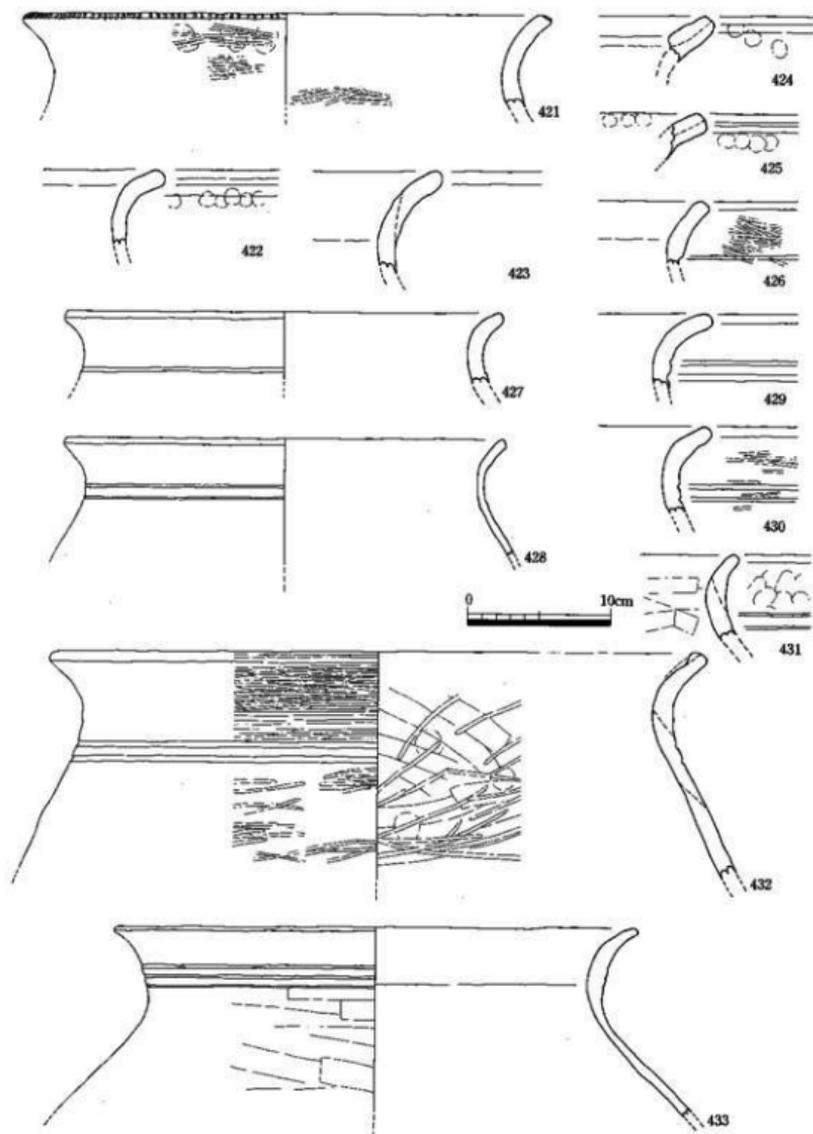
第174図 SD50断面図

土層の流入については確認できない。平面形態と方向性については、先述したSD49と同じである。全体の形態は、調査区内で確認した範囲においては隅丸長方形に近い形態を持っており、SD49の内側に位置するためか、より屈曲が強い傾向がみられる。

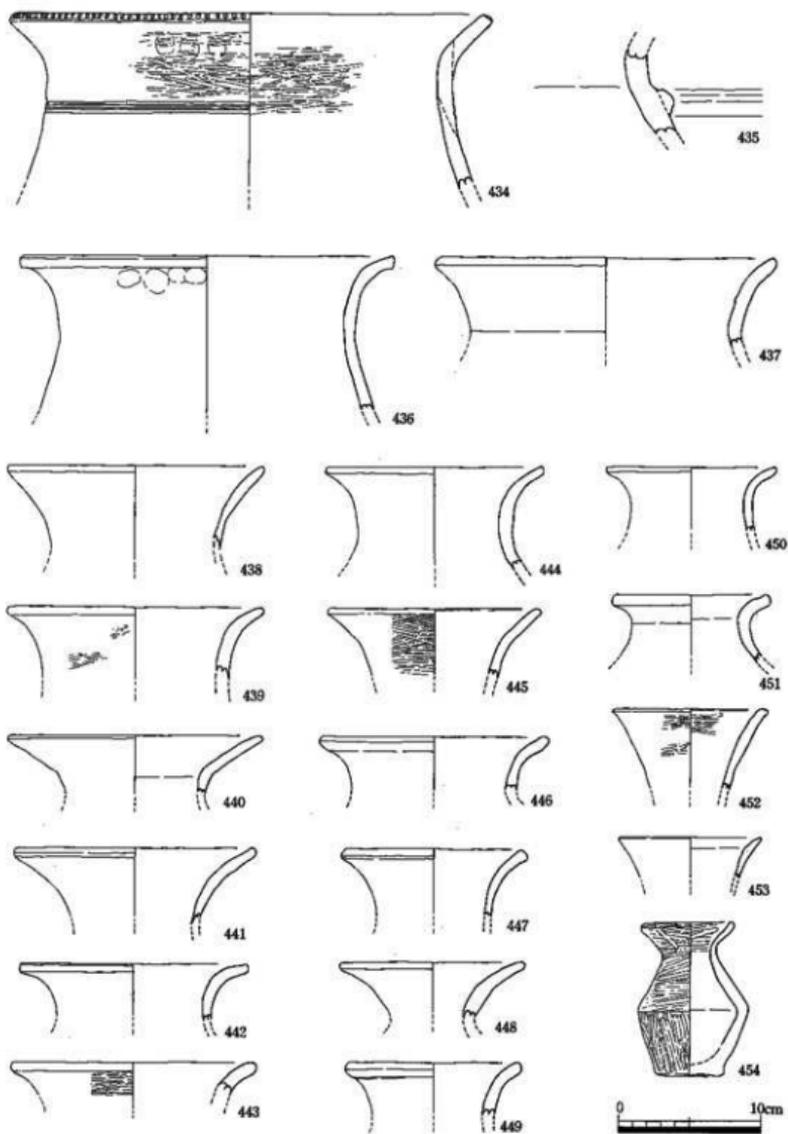
SD50からは、弥生時代前期から中期初頭の土器と石器が出土している。土器は壺形土器・甕形土器・甌形土器・鉢形土器・蓋形土器・高杯形土器・顔形土器製品がみられる。421～632は壺形土器である。421～435は大形品である。口頸部及び頸胴部の境は無文のもの(421～425)、段を持つもの(426)、ヘラ描き沈線を持つもの(427～434)、貼付凸帯を持つもの(435)がある。436～623は中・小形品である。口頸部及び頸胴部の境は無文のもの(436～467)、段を持つもの(468～472)、ヘラ描き沈線を持つもの(473～513)、削出凸帯を持つもの(514～527)、貼付凸帯を持つもの(528～552)がある。553～627は壺形土器の底部である。円盤状に突出するもの(553～603)と、突出しないもの(604～627)の両者がみられる。628～632は無頸壺形土器である。強く屈曲する口縁部を持つもの(628)、内彎する直口の口縁部を持つもの(630)、口縁部付近に貼付凸帯を持つもの(629・631・632)がみられる。633～754は甕形土器である。口縁部の形態は主体を占める如意形口縁の他に、凸帯文系と逆L字形口縁がみられる。如意形口縁では、口縁部下が無文のもの(633～652)、段を持つもの(653～655)、ヘラ描き沈線を持つもの(656～700)、櫛描き沈線を持つもの(701・702)がある。凸帯文系は口縁部下に貼付凸帯を施すものであるが、外反する口縁(703)と内彎気味の直口の口縁(704～708)の他に、強く内傾する口縁を持つもの(709・710)がみられる。逆L字形口縁では、口縁部下が無文のもの(711・712)、ヘラ描き沈線を持つもの(713～729)、櫛描き沈線を持つもの(730・731)がある。口縁端部の刻目は、如意形口縁・逆L字形口縁ともに、端部全面を刻むものと端部下端を刻むもの両者がみられる。732～754は甕形土器の底部である。755～761は甌形土器である。762～774は鉢形土器である。如意形口縁で口縁部下が無文のもの(762～769)が多いが、ヘラ描き沈線を持つもの(770)や逆L字形口縁のもの(771・772)、直口口縁でヘラ描き沈線を持つもの(773)もわずかにみられる。なお、775は縄文時代晩期の浅鉢の系譜を引く凸帯文系の鉢形土器である。波状口縁をなし、外面に刻目凸帯を貼り付けている。形態は晩期の浅鉢に類似するが、胎土や色調は他の弥生土器と変わらないものである。776～791は蓋形土器である。壺形土器用は扁平な笠形を呈するもの(776～778)と、突出した摘みを持つもの(779)の両者がある。甕形土器用は摘みが円盤状に突出するもの(780)、摘みの端部が外方へ突出するもの(782・783・790)、突出せず中央部が凹むもの

(781・784~788)がある。792~794は高杯形土器である。795は「顔形土製品」である。指を使って長方形に整形した粘土板の表面に、細かな刺突文とへら描き沈線で眉毛状の表現を施し、さらに両目と両耳を孔を貫通させることで人面を表現しているものと思われる。この人面状の表現は、弥生時代中期に瀬戸内から近畿地方にかけてみられる分銅形土製品と共通するものがあるが、全体の形態は大きく異なるものである。この「顔形土製品」は共伴している土器から、弥生時代前期後半から中期初頭にかけての年代が与えられる。ほぼ同時代のもので人面を表現した土製品として、志度町鴨部・川田遺跡出土の土偶がある。鴨部・川田遺跡の土偶はより立体的・写實的に人面を表現したもので、系譜的には縄文時代の土偶に連なる可能性が考えられる。一方、本遺跡の「顔形土製品」は極端なまでにシンプルで端的に人面を表現したものであり、縄文時代後・晩期の土面・土板に連なる可能性が考えられよう。ここでは弥生時代前期後半から中期初頭の段階で、人面を表現した土製品に、写實的・立体的なものと同様の・平面的なもの2つの流れがあることを指摘するにとどめておく。石器には石鏃・石錐・スクレイパー・石剣・石鎌・石庖丁・石斧・紡錘車・石棒がみられる。石鏃はすべてサヌカイトを使用した打製のもので、凹基式・平基式・凸基式がある。811は基部が有茎に近い凸基式の石鏃である。815から817は打製石錐、818から822はスクレイパーである。823は磨製石剣の基部である。片面は破損が著しいが、もう一方の面には製作の際の研磨痕が明瞭に残る。鉄剣を模した磨製の石剣である。824は先端と基部を欠くが、磨製の石鎌と思われる。背部には敲打を施している。825から834は石庖丁である。825は破片資料ではあるが、大形の磨製石庖丁になるものと思われる。826から831は磨製の石庖丁である。紐孔の穿孔を持つものが多いが、827は端部に打ち欠いた袂を持つ。832から834は打製の石庖丁である。石斧には大陸系磨製石斧と打製石斧の両者がみられる。835は大型蛤刃石斧の破片で、SD50(内環濠)とSR04中層出土の2つの破片が接合した資料である。このことは、内環濠と自然河川の中層の同時性を示すとともに、破損した大型蛤刃石斧の破片を一括廃棄せずに、意図的に違う場所へ廃棄したことを示すものである。836は柱状片刃石斧の刃部付近の破片で、837はほぼ完形の小形扁平片刃石斧である。おそらく木器加工の最終段階の仕上げで使った加工斧であろう。838から844は打製石斧である。845は磨製の紡錘車である。約半分を欠損するが、中央には穿孔の痕跡が認められないことから、未製品であると考えられる。846は用途不明の石製品であるが、形態の類似から小形の石棒と推定している。

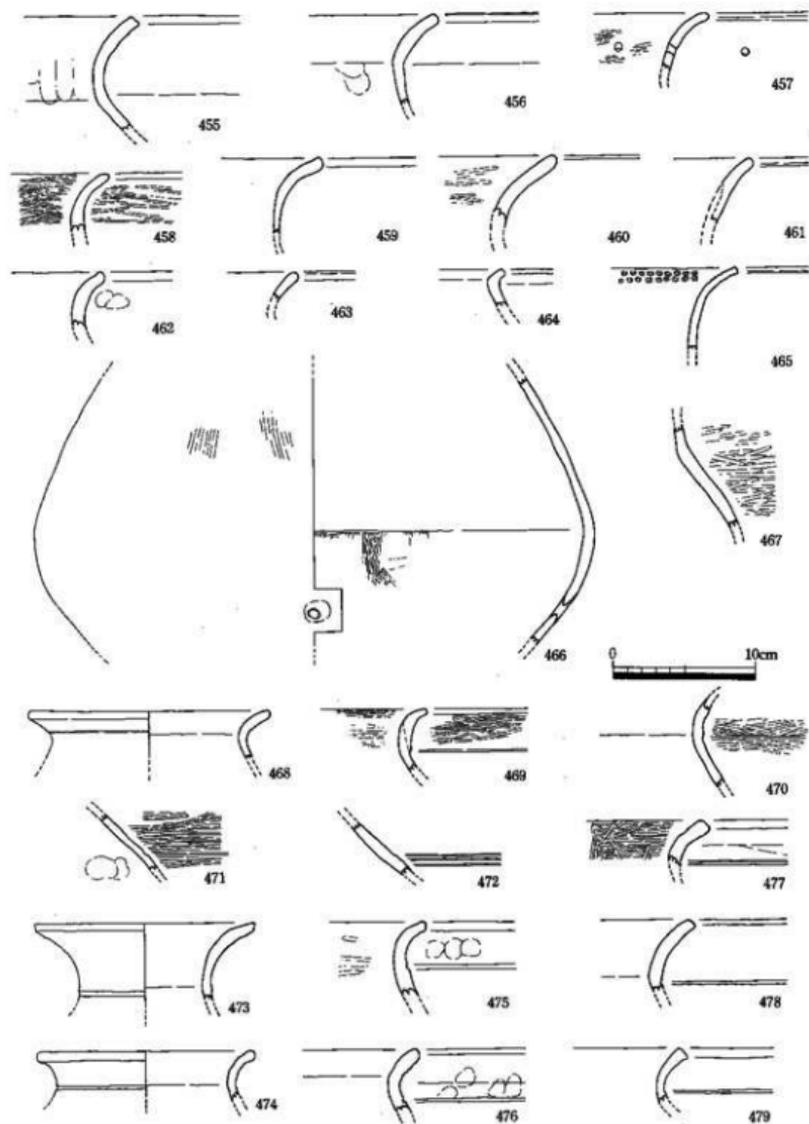
これらの土器・石器は一部に弥生時代中期初頭のものを含むが、大半は弥生時代前期後



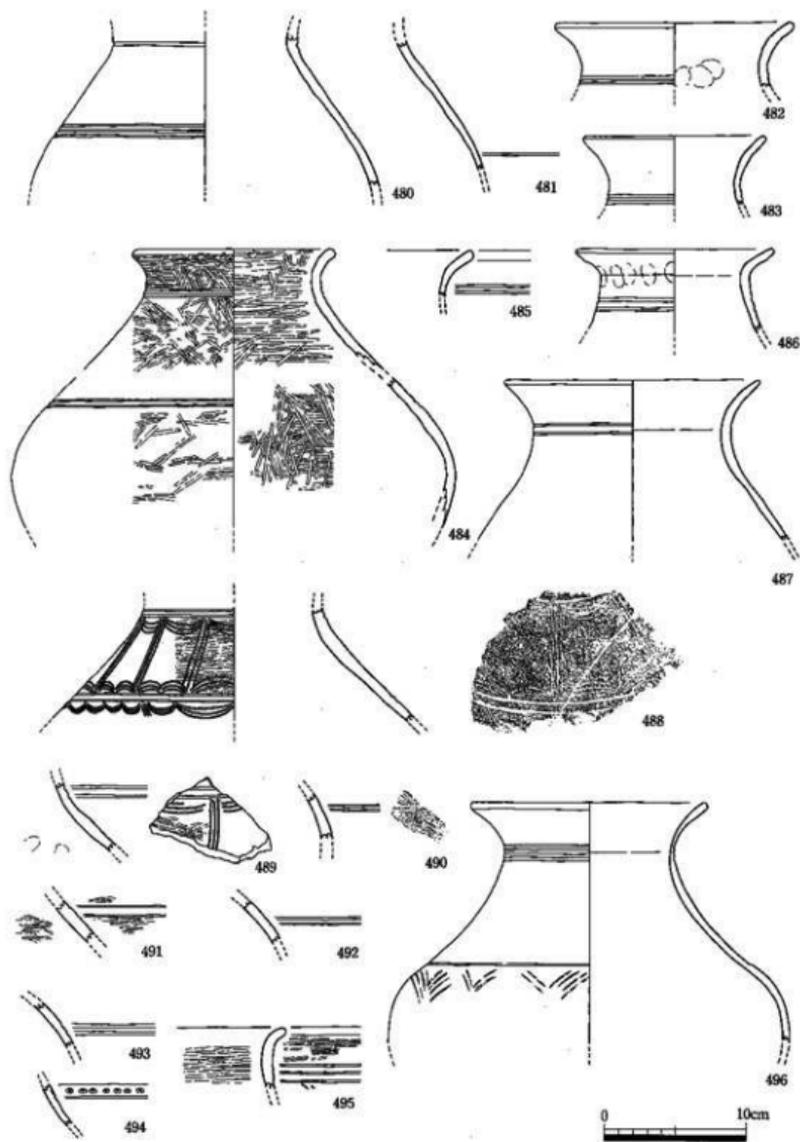
第176圖 SD50出土遺物①



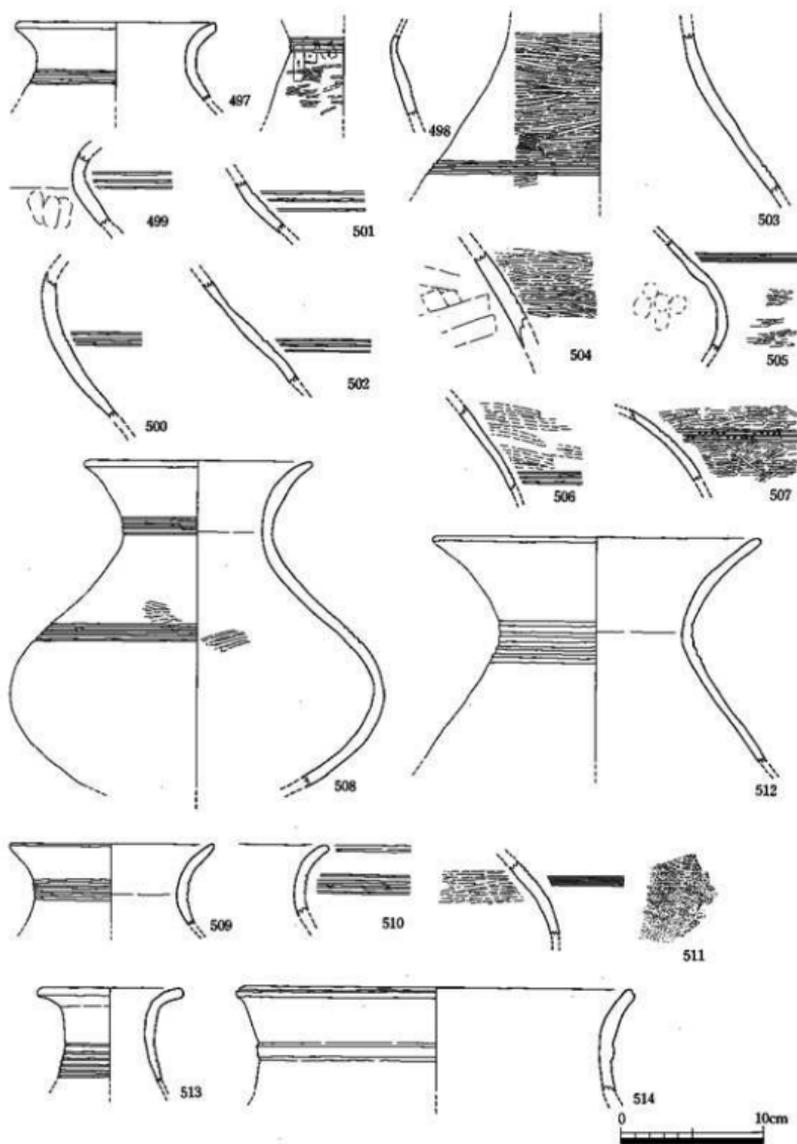
第176圖 SD 5 0 出土遺物②



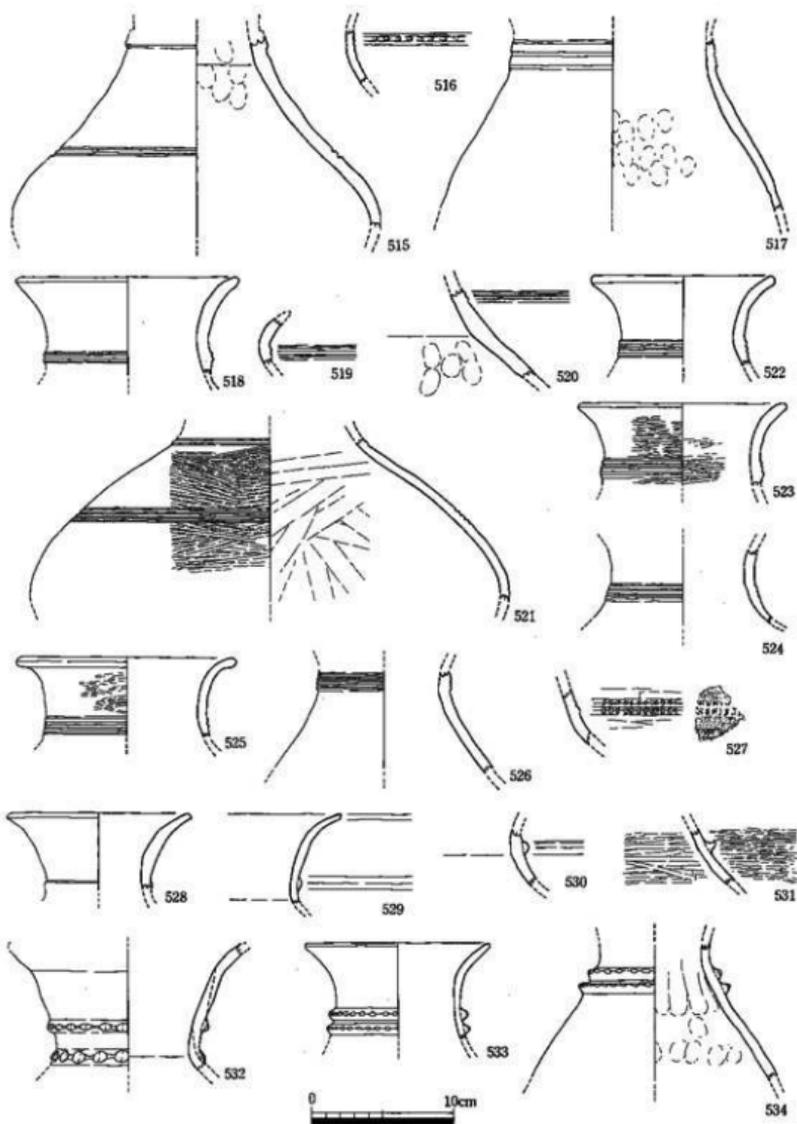
第177图 SD 5 0 出土遗物③



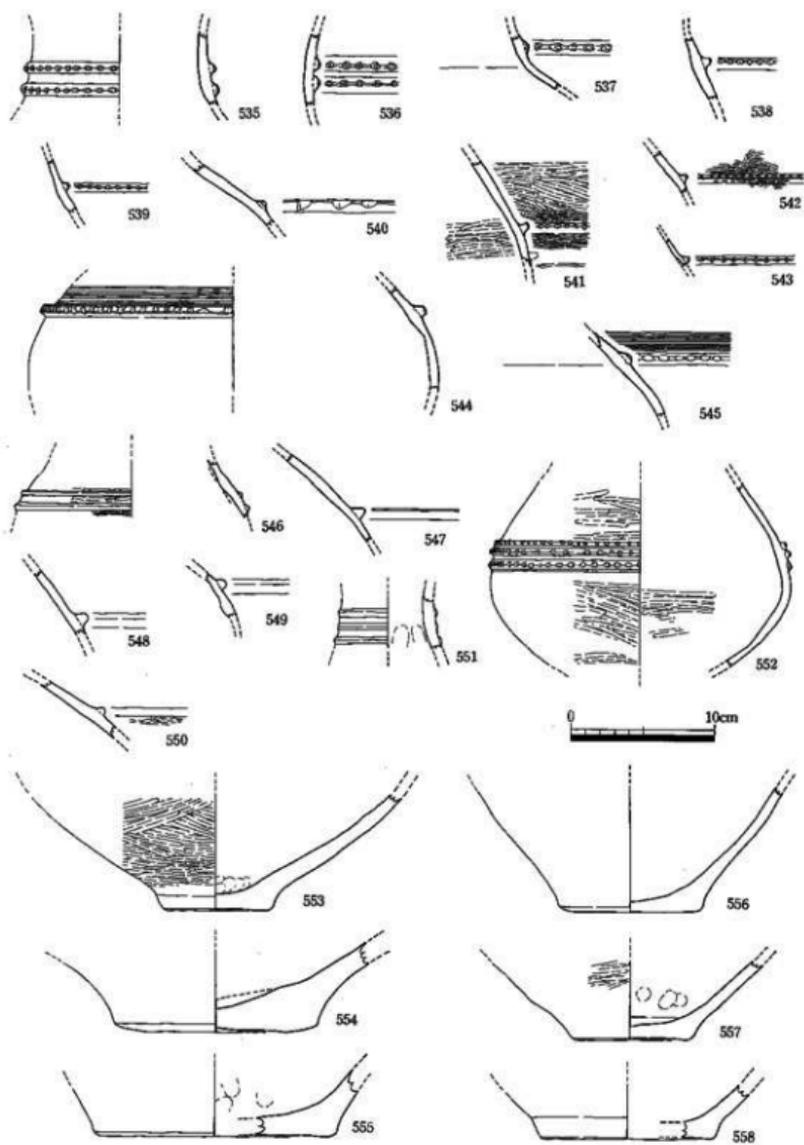
第178図 SD50出土遺物④



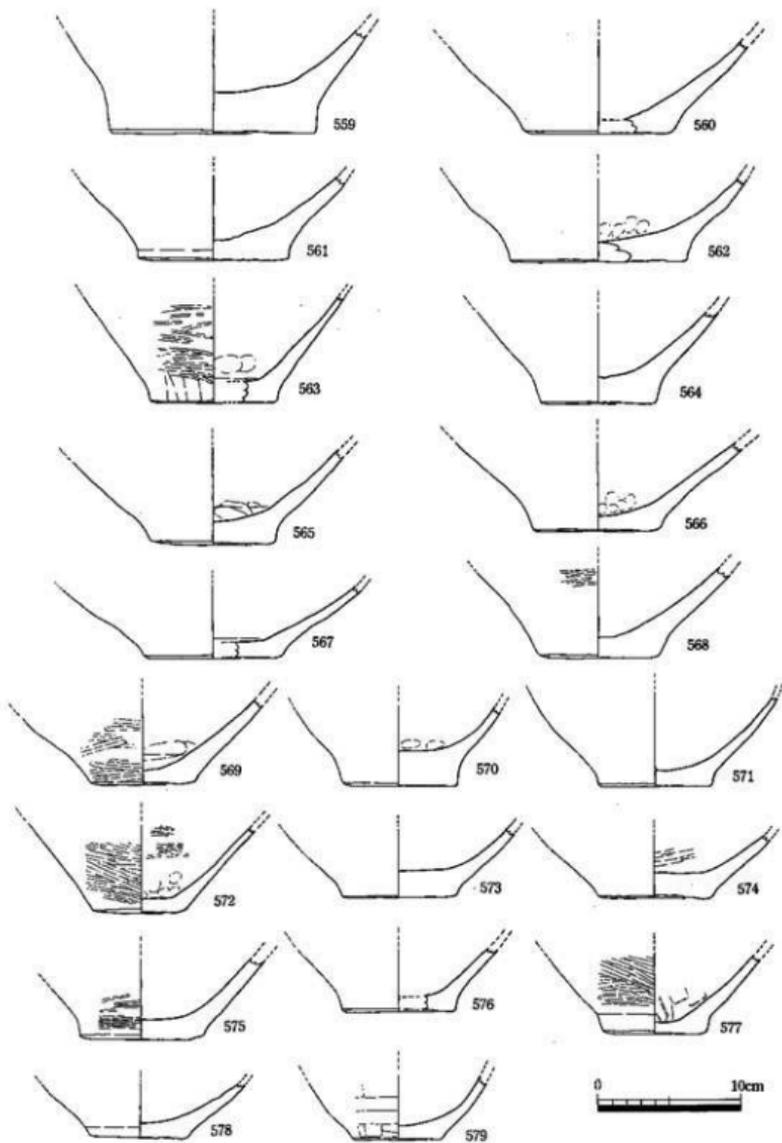
第179図 SD 50 出土遺物⑤



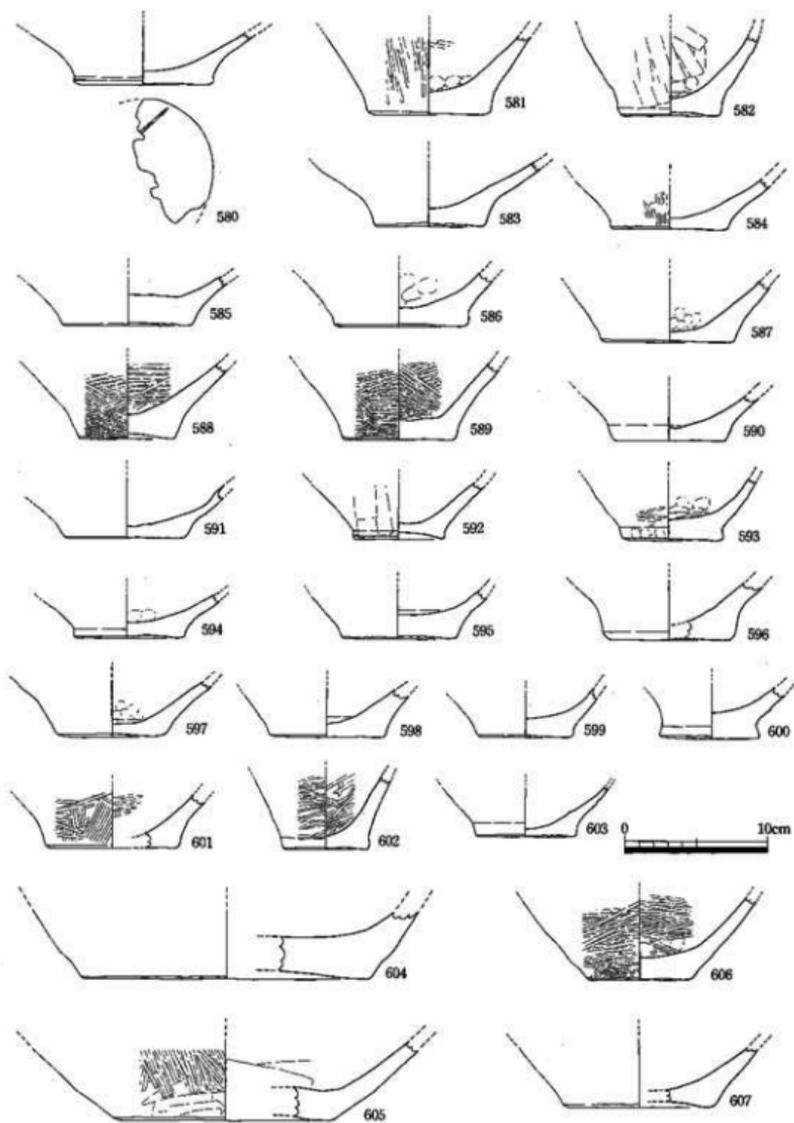
第180圖 SD50出土遺物⑥



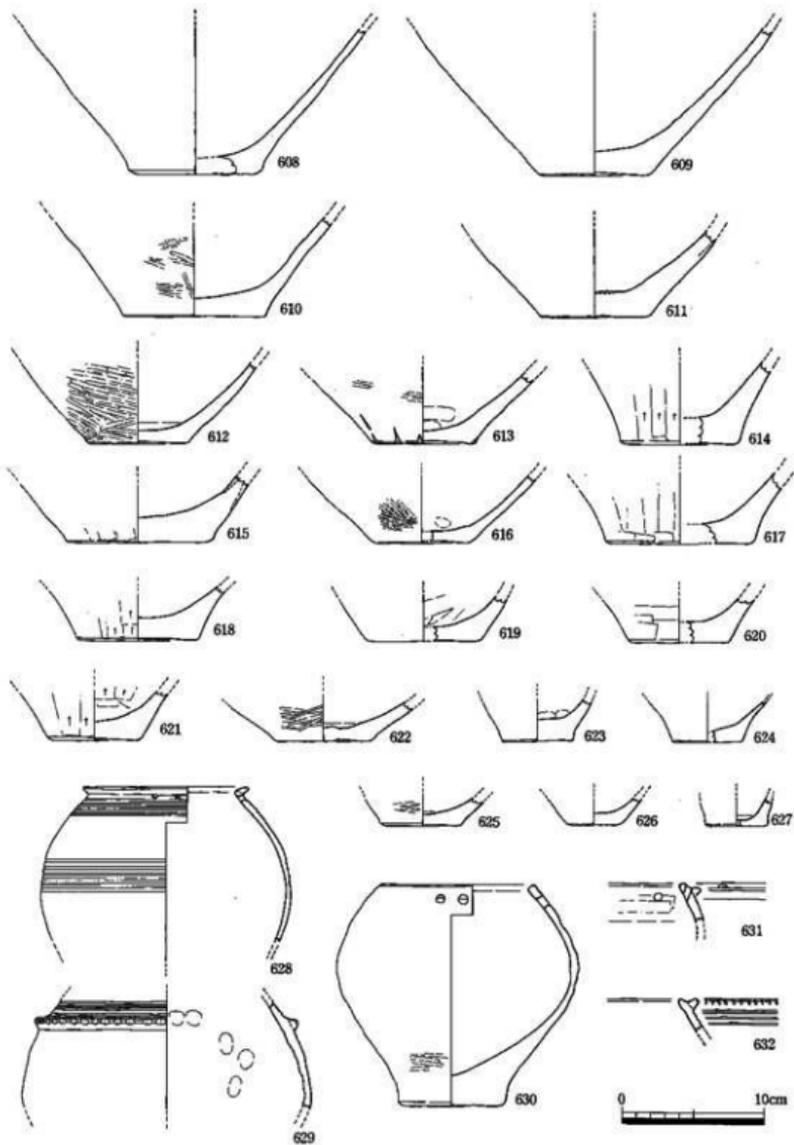
第181圖 SD50出土遺物の



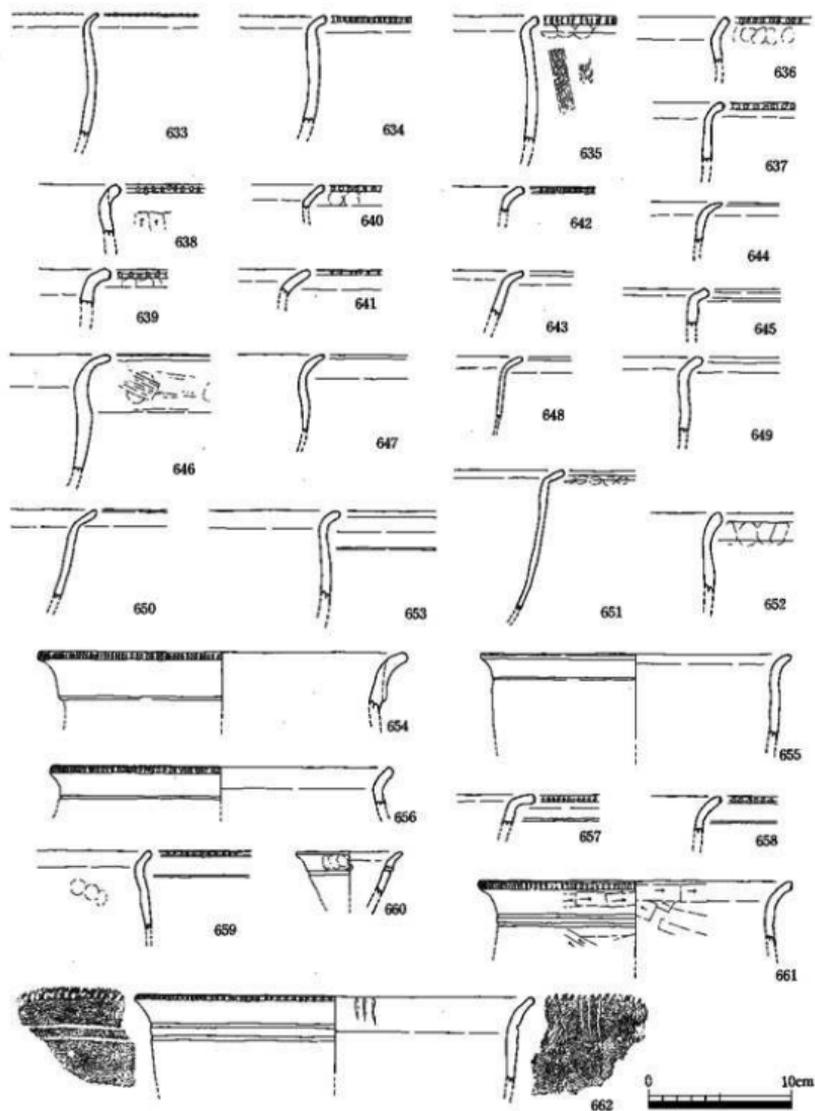
第182圖 SD 5 0 出土遺物⑧



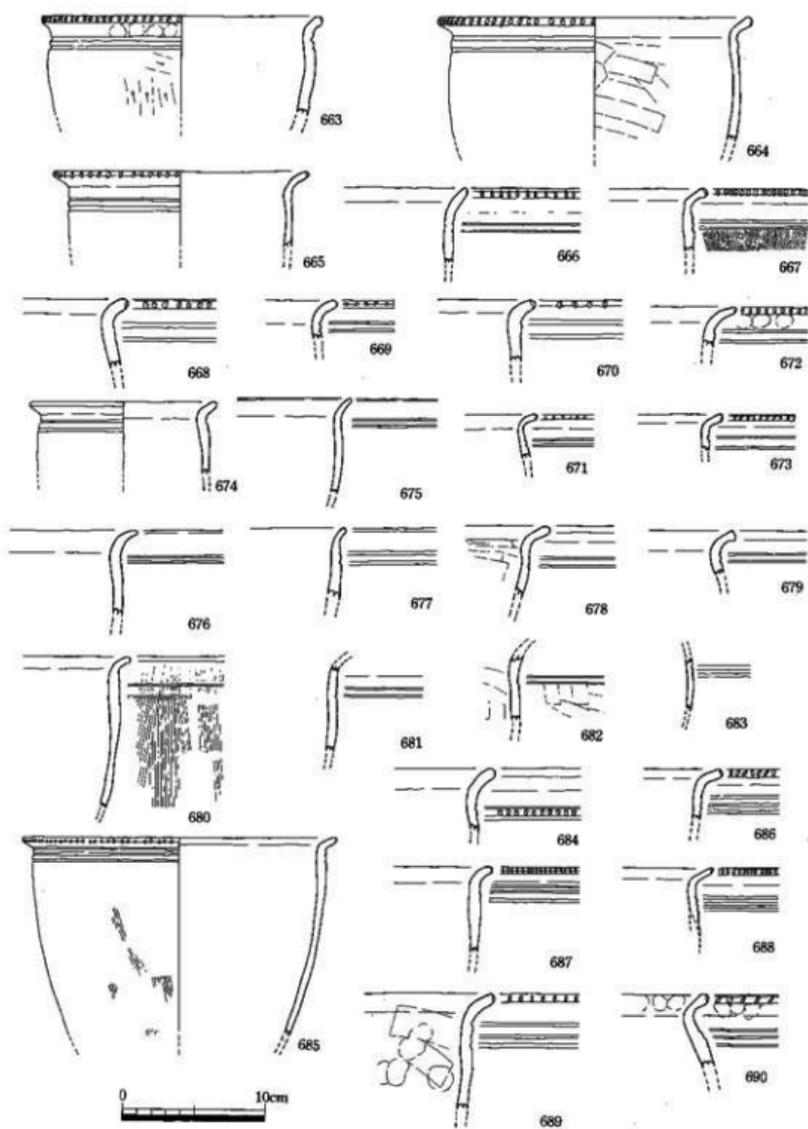
第183圖 SD50出土遺物⑨



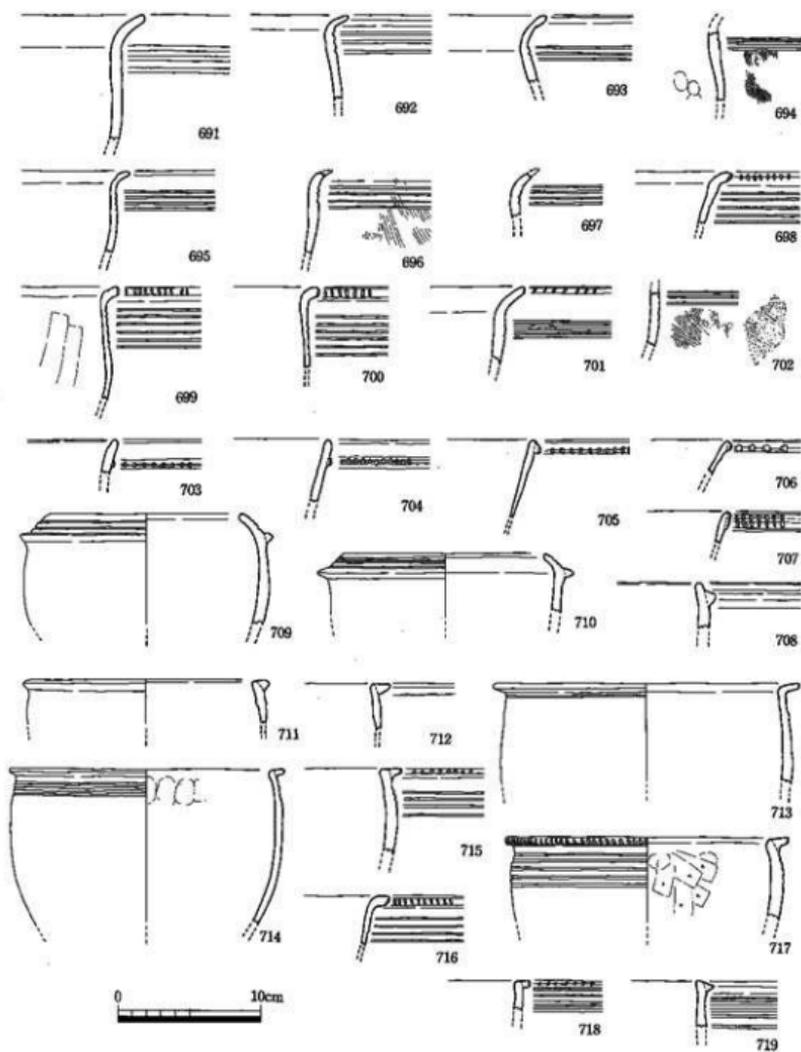
第184圖 SD50出土遺物①



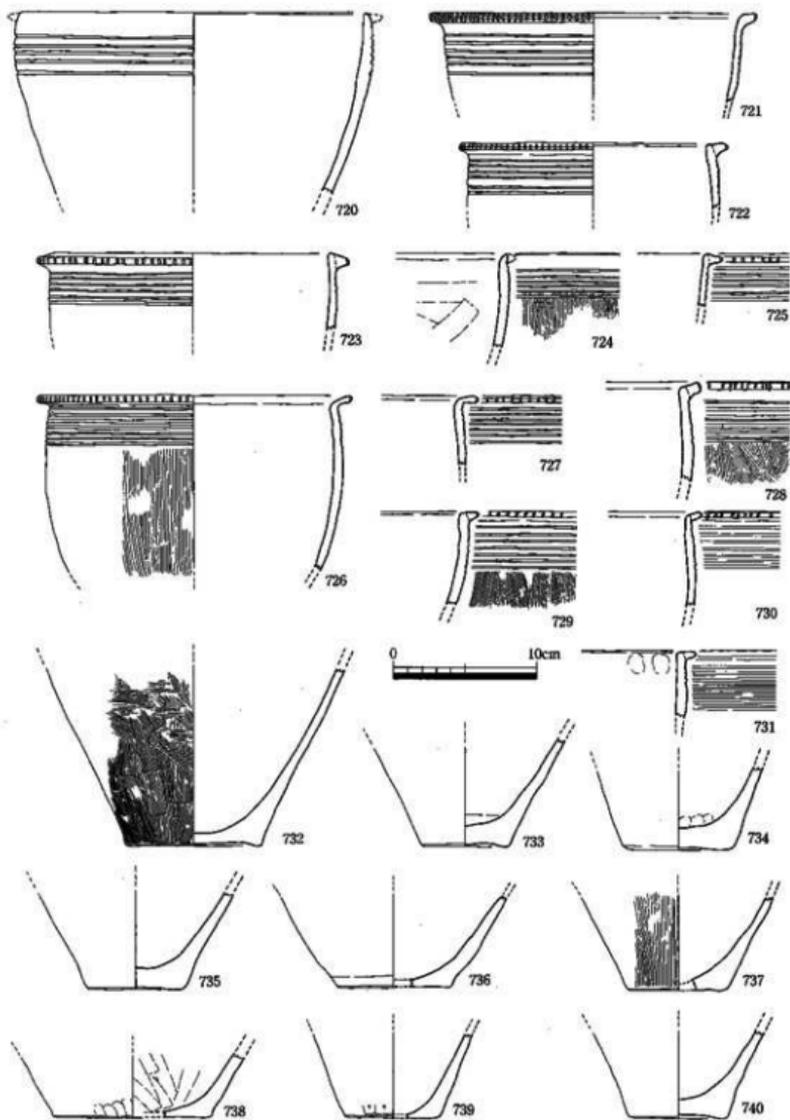
第185图 SD50出土遺物①



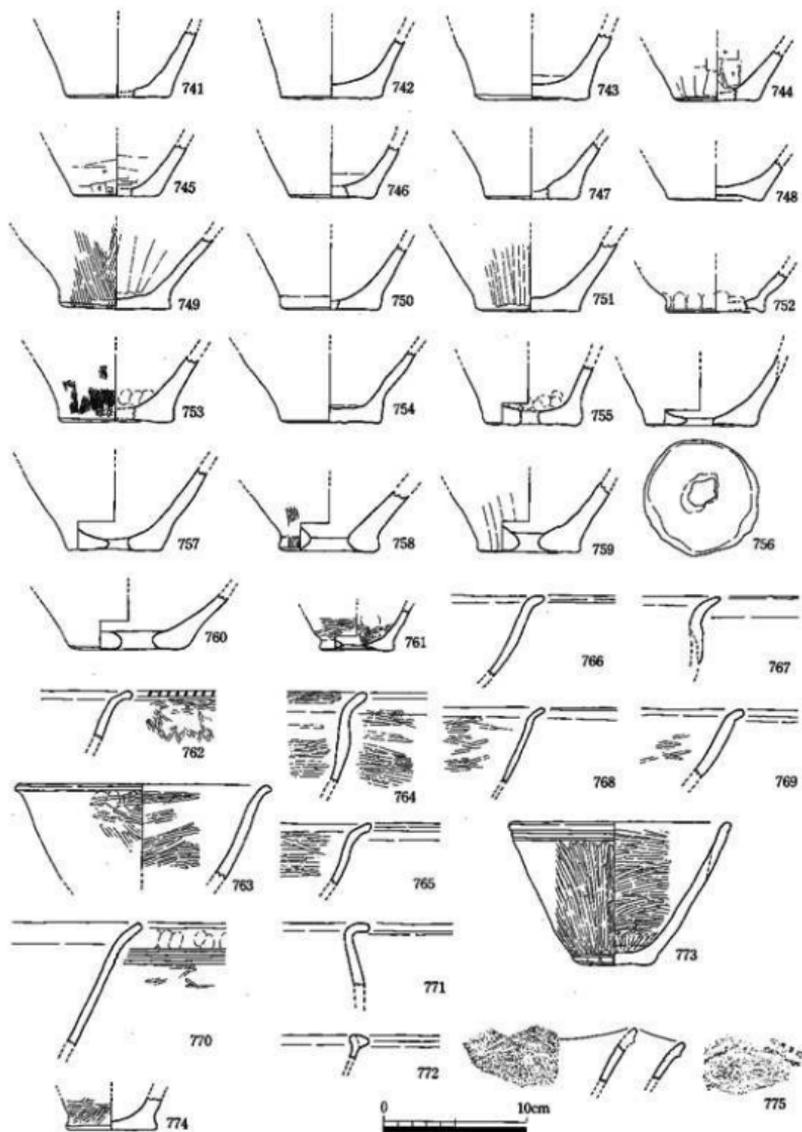
第186圖 SD50出土遺物⑫



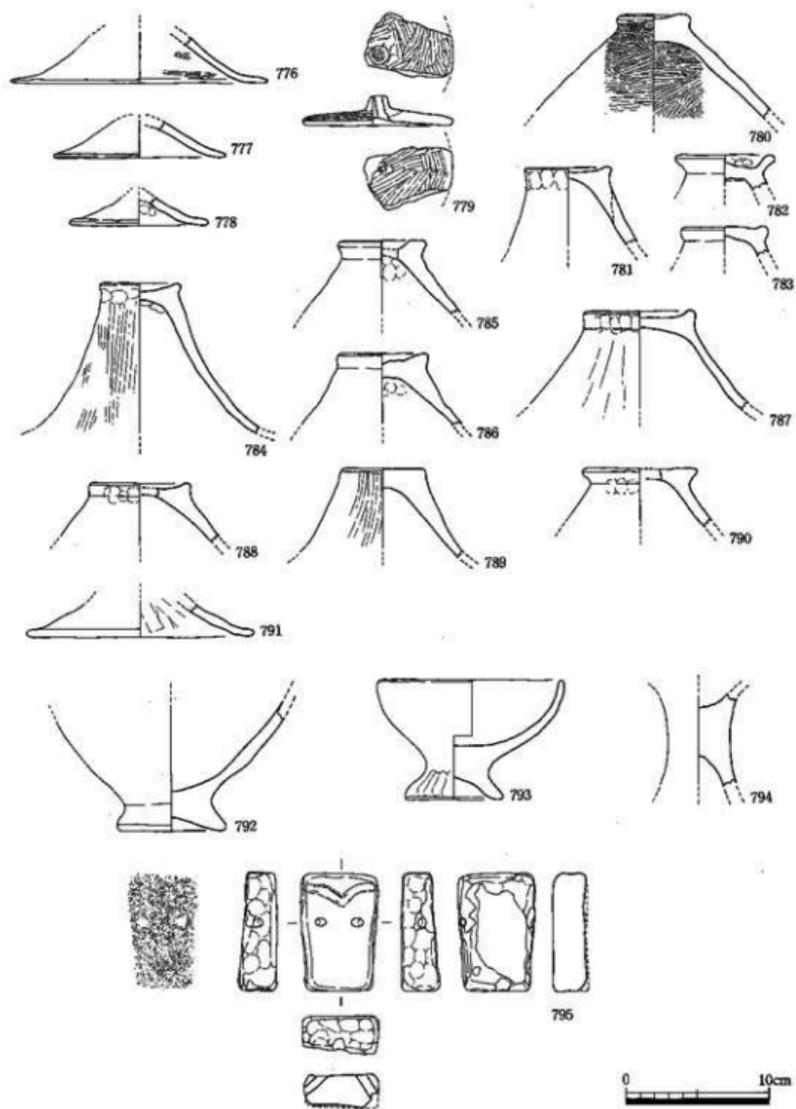
第187图 SD 5 0 出土遺物⑬



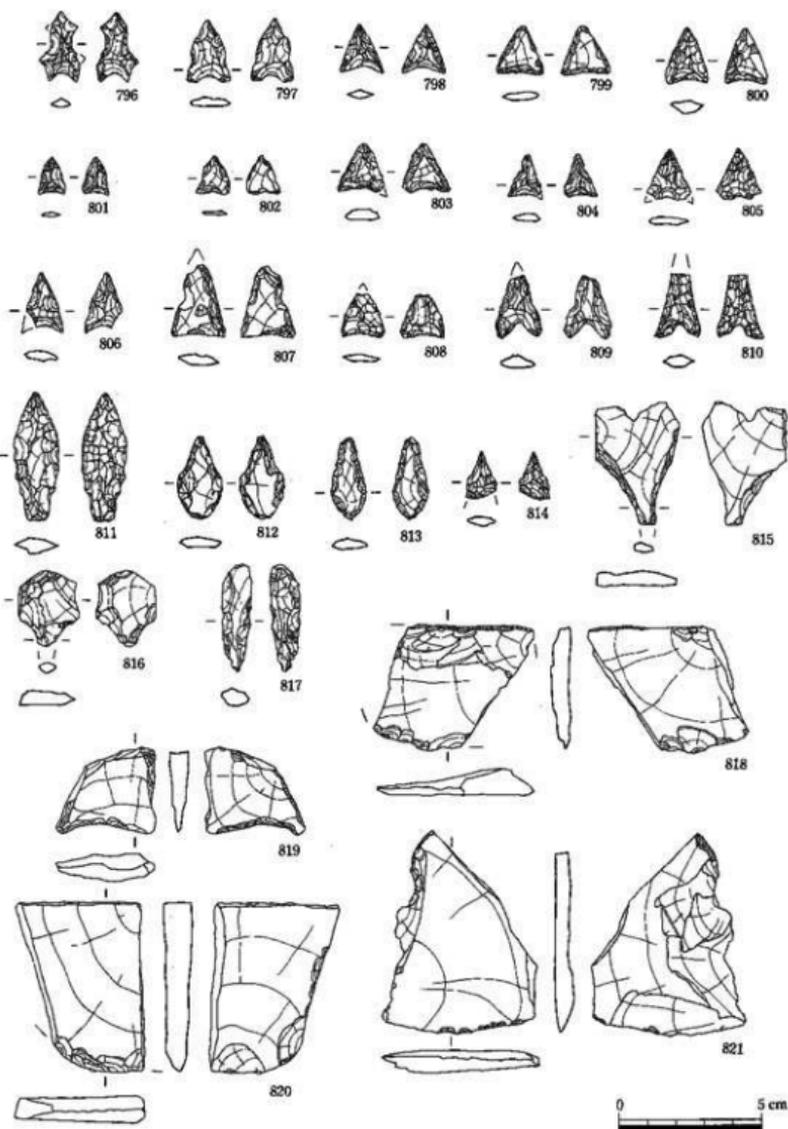
第188図 SD50出土遺物④



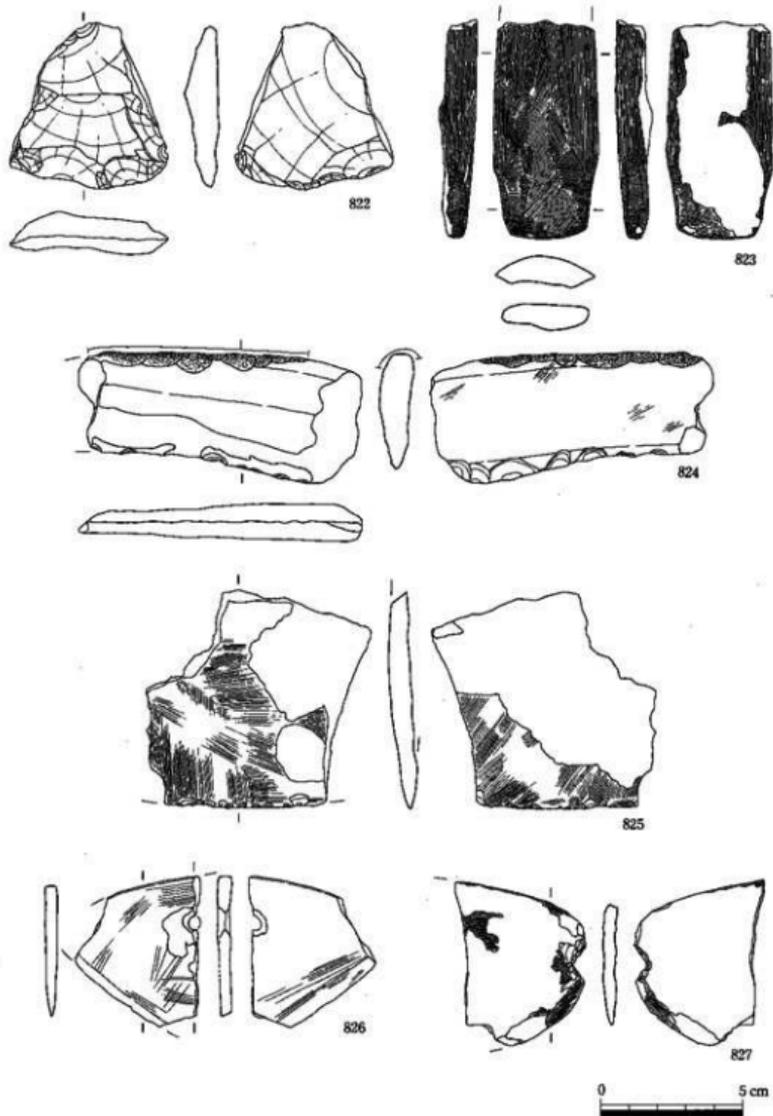
第189圖 SD 5 0 出土遺物⑮



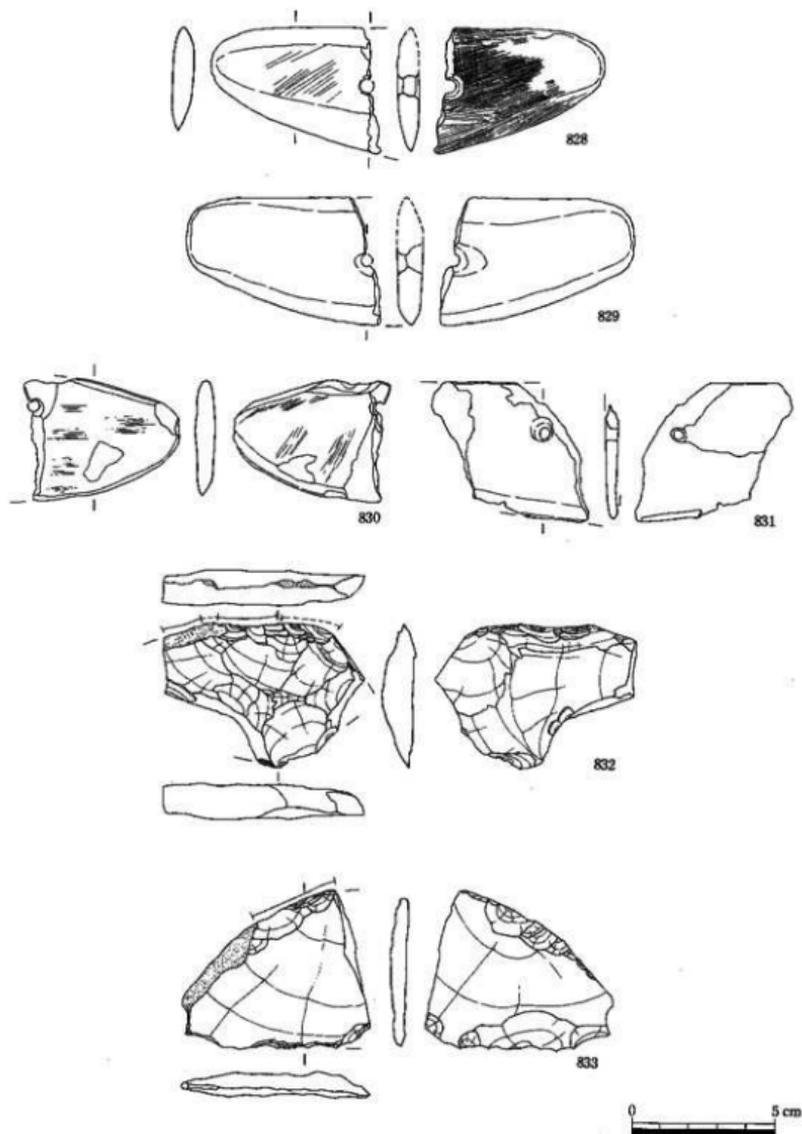
第190圖 SD 5 0 出土遺物⑤



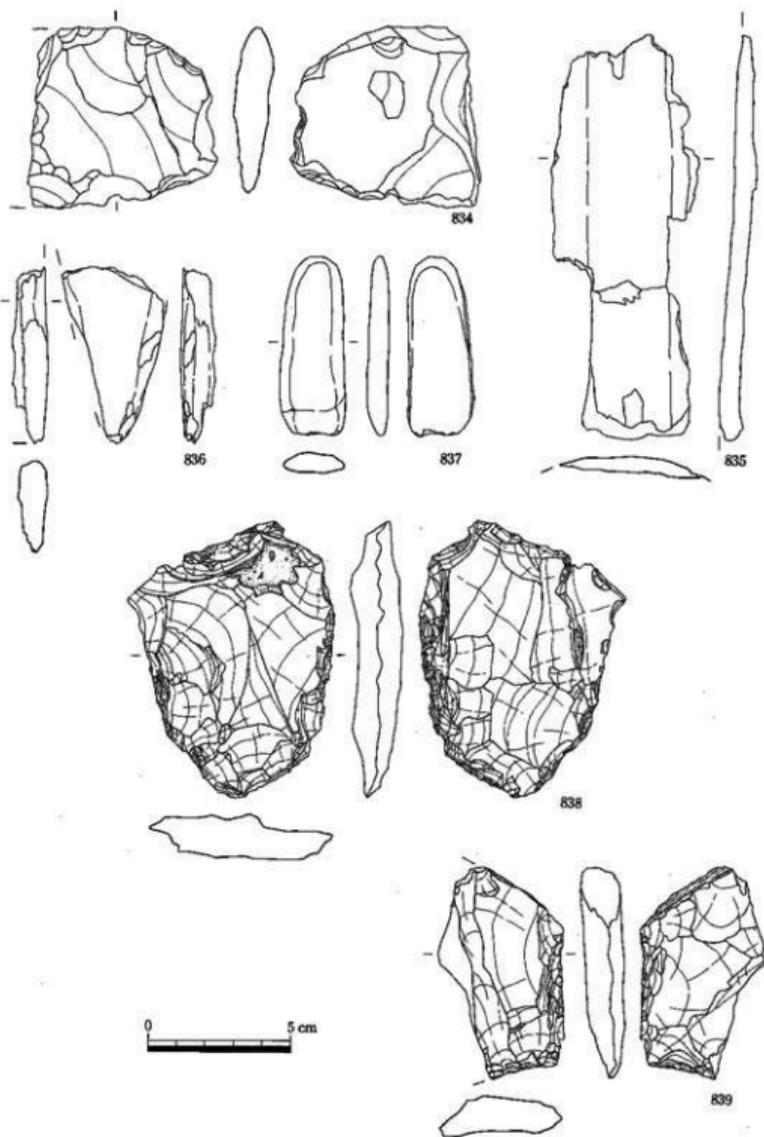
第191圖 SD50出土遺物⑦



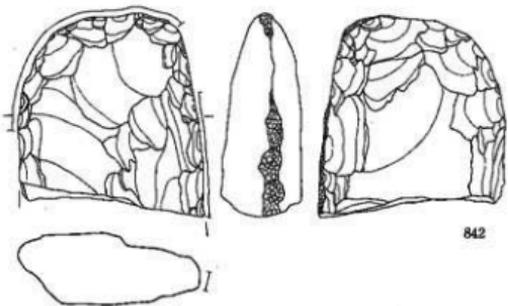
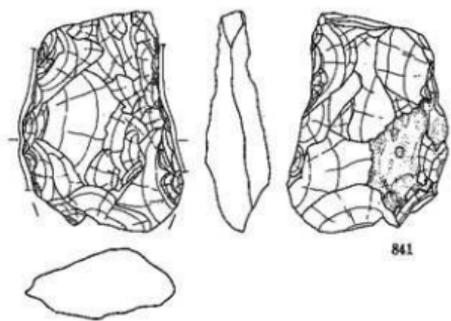
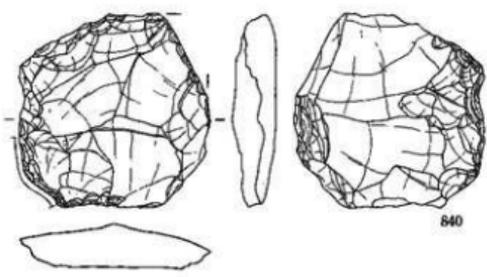
第192圖 SD 5 0 出土遺物⑧



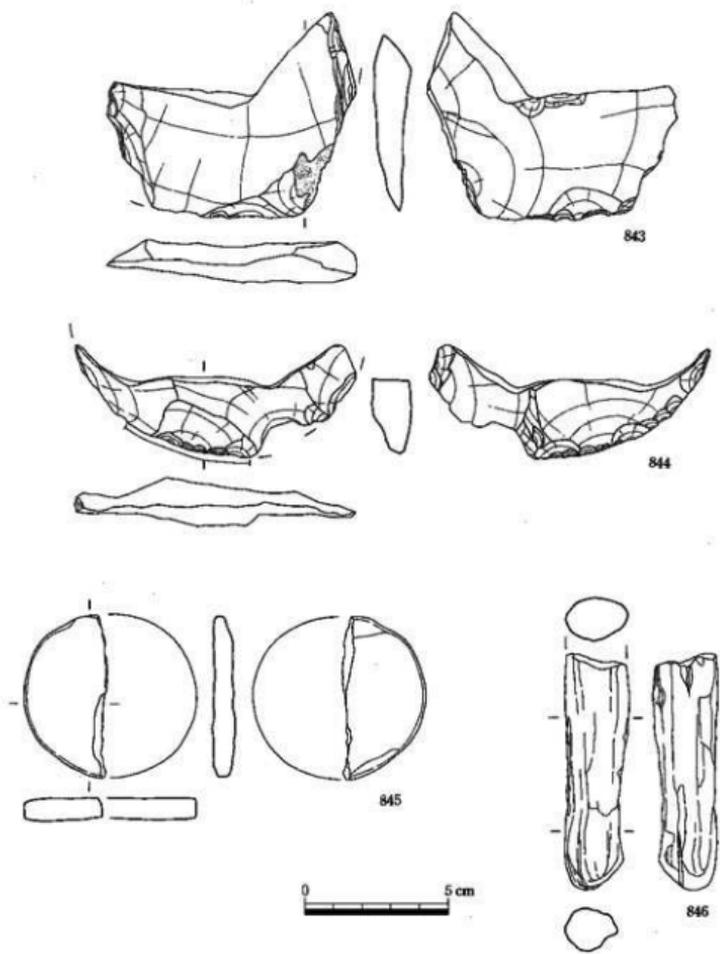
第193圖 SD 5 0 出土遺物⑩



第194圖 SD 5 0 出土遺物②



第195図 SD 5 0 出土遺物の①

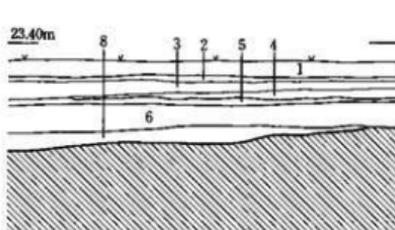
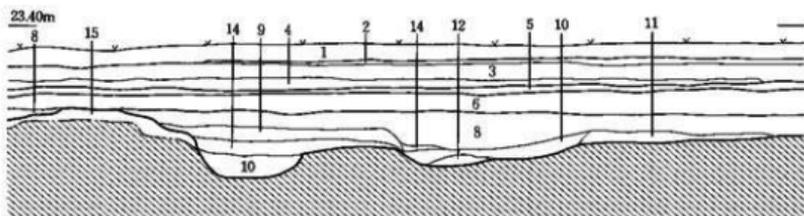
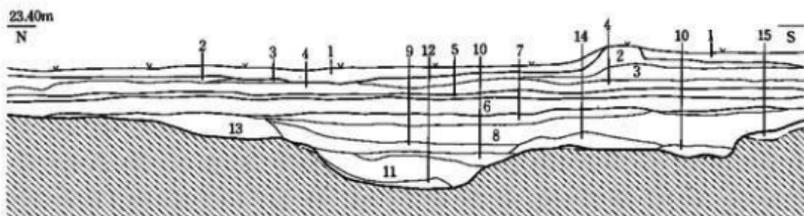


第196図 SD 5 0 出土遺物の②

半のものであり、内環濠の開削時期も前期後半と考えられる。すなわち、龍川五条遺跡の二重環濠は同時期に機能していたことがわかる。

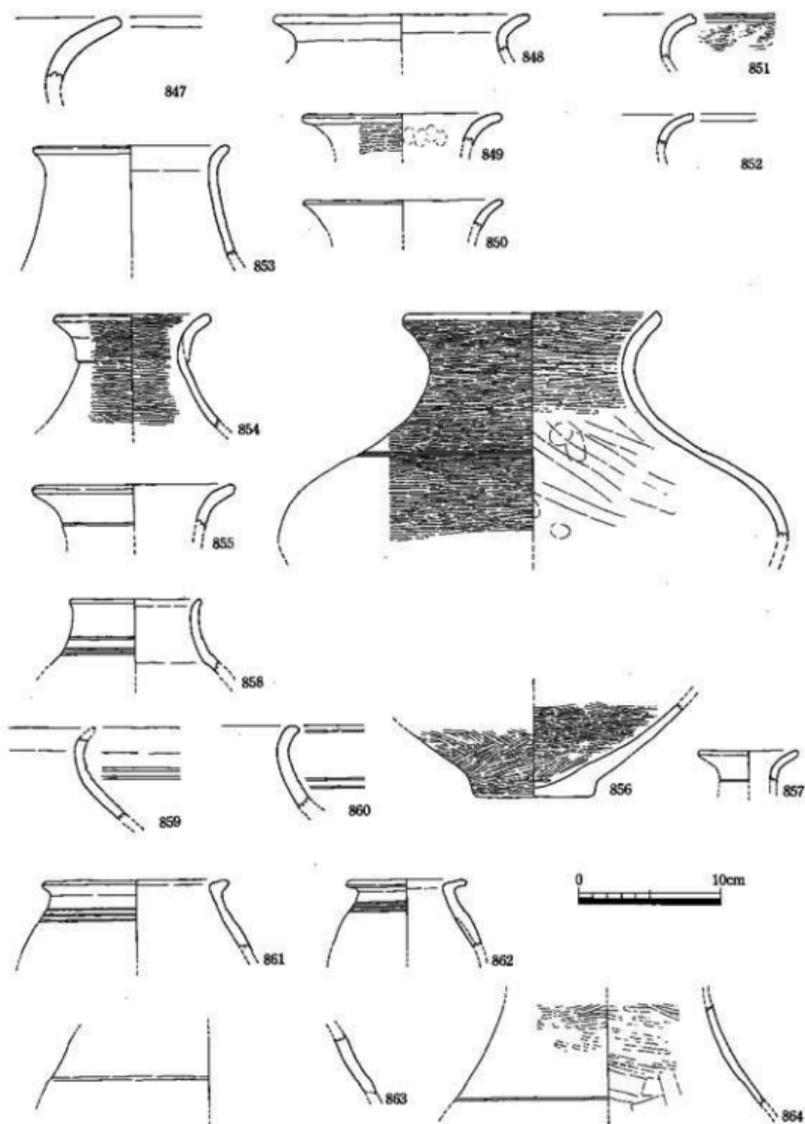
SR03 (第197~203図)

II C区のG・H6・7グリッドで検出した自然河川である。検出長20.90m、幅880cm以上、深さ78cmの規模を持つ。概ね下層は砂質土が、上層は粘質土が堆積しているが、下層では部分的に砂質土と粘質土が互層になっており、現在でも底面からは湧水がみられる。調査区内では一部を検出したにすぎず、大部分は調査区東側の市道前池五条線の下に重なっているため、流下する方向については確認できていない。巨視的にみれば、西微高地(II

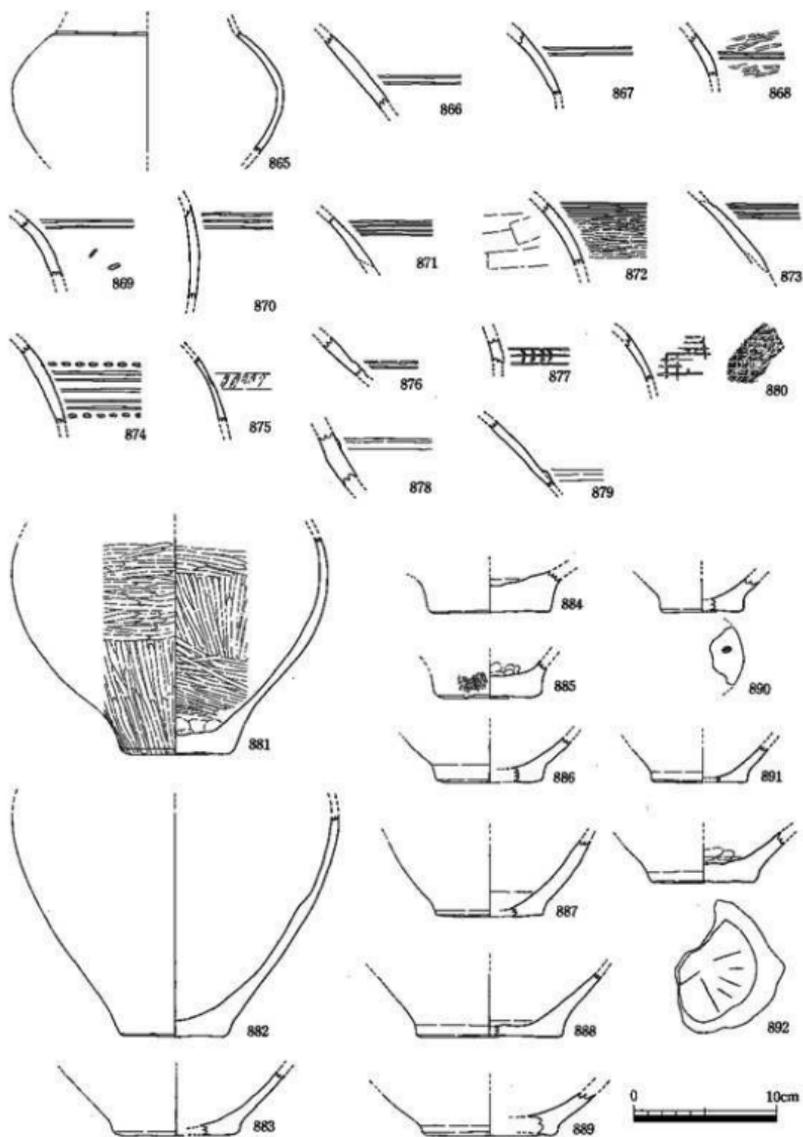


- | | |
|----------------|----------------|
| 1 暗灰色粘質土 (耕作上) | 9 茶褐色混中砂粘土 |
| 2 淡灰色粘質土 (床土) | 10 黒褐色粘土 |
| 3 黄白色粘質土 | 11 濁青灰色細砂 |
| 4 黄褐色粘質土 | 12 灰色中砂 |
| 5 淡灰褐色混細砂粘質土 | 13 茶褐色粘土 |
| 6 淡茶褐色粘土 | 14 茶褐色混中砂粘土 |
| 7 淡茶褐色混砂粘土 | 15 黄褐色粘土 (地II) |
| 8 茶褐色粘土 | * 7-14...SR03 |

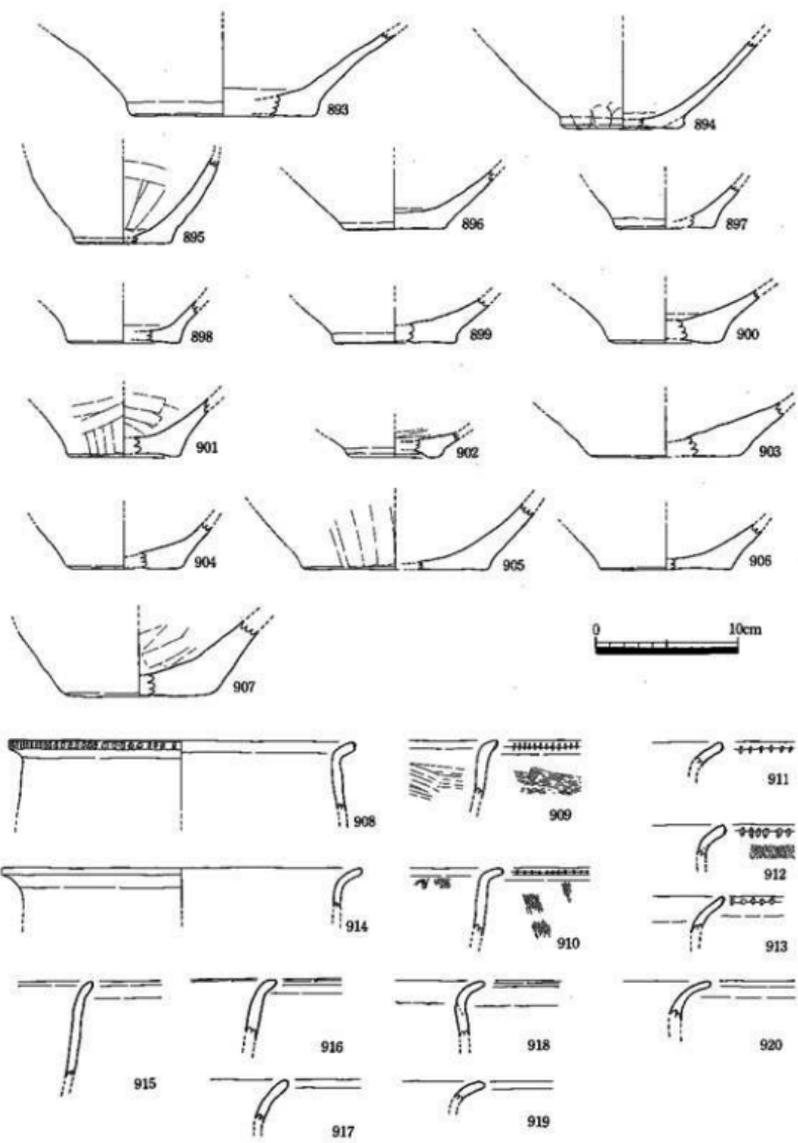
第197図 SR03断面図



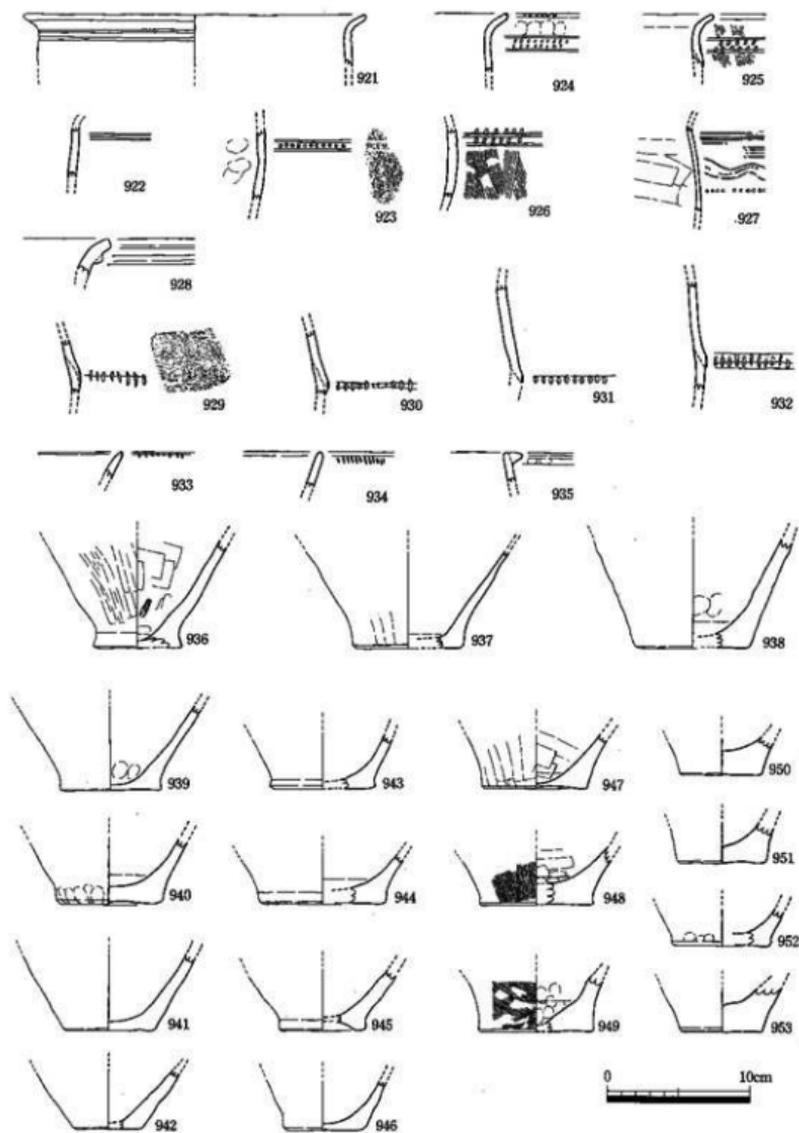
第198圖 SR 0 3 出土遺物①



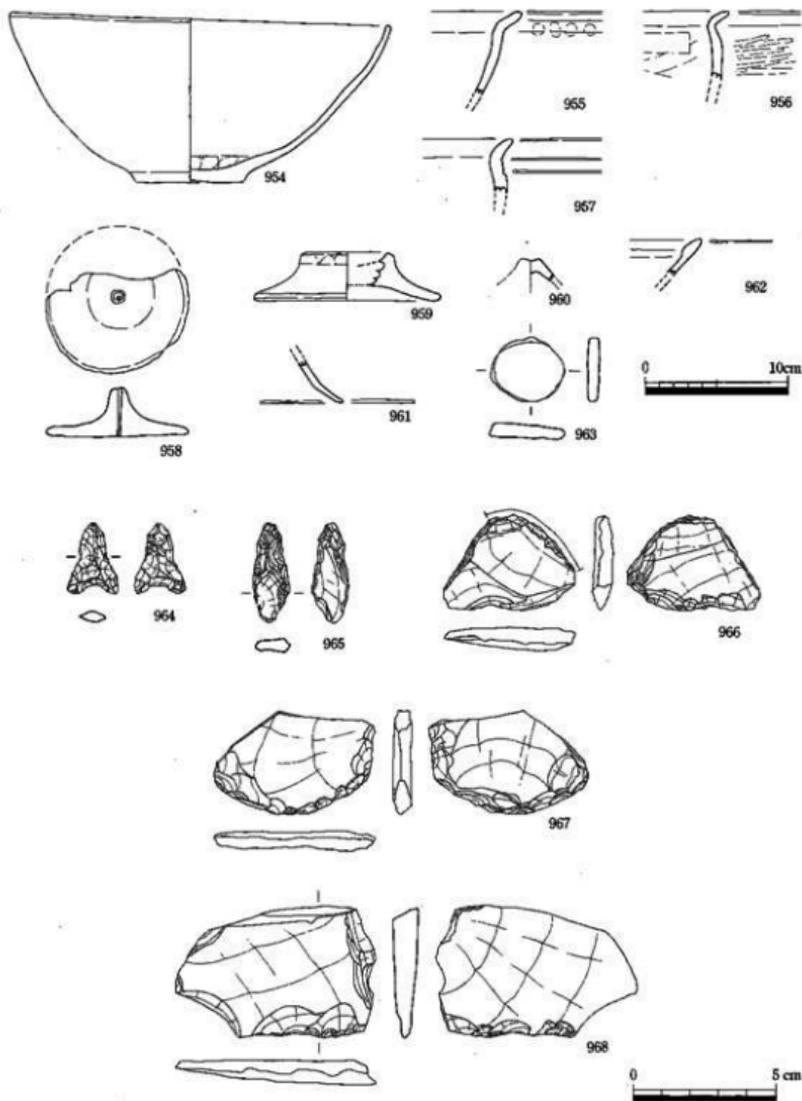
第199圖 SR03出土遺物②



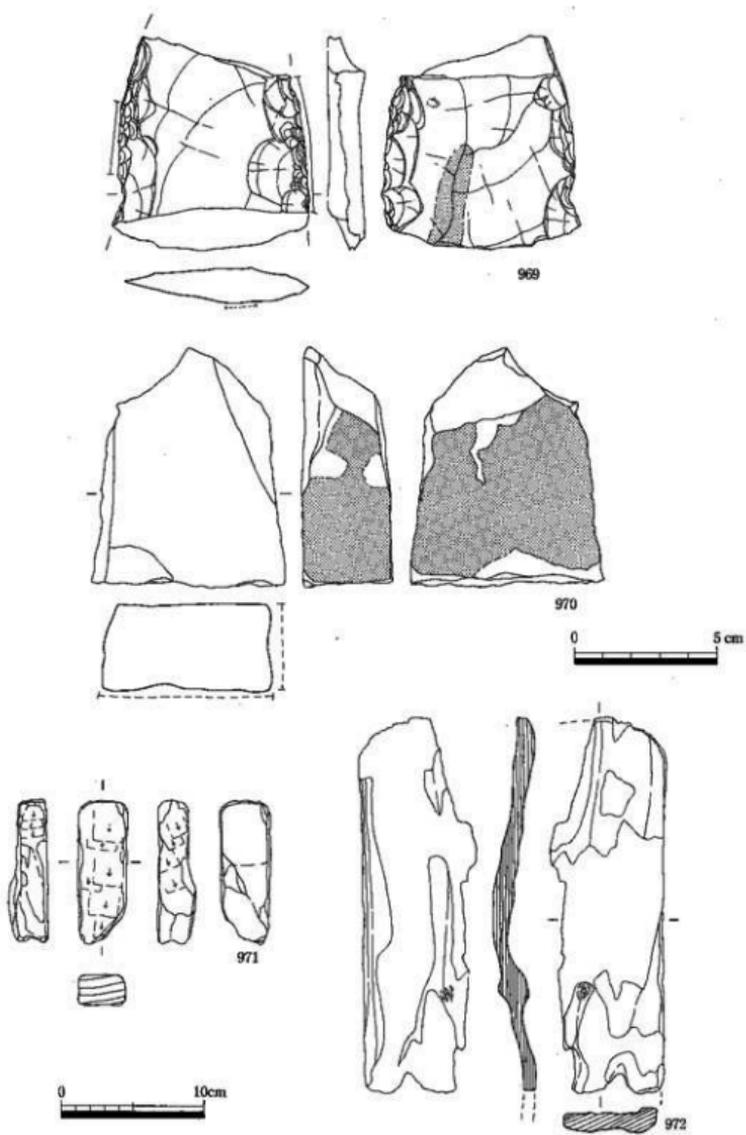
第200圖 SR 0 3 出土遺物③



第201图 SR03出土遺物④



第202圖 SR 0 3 出土遺物⑤



第203図 SR 0 3 出土遺物⑥

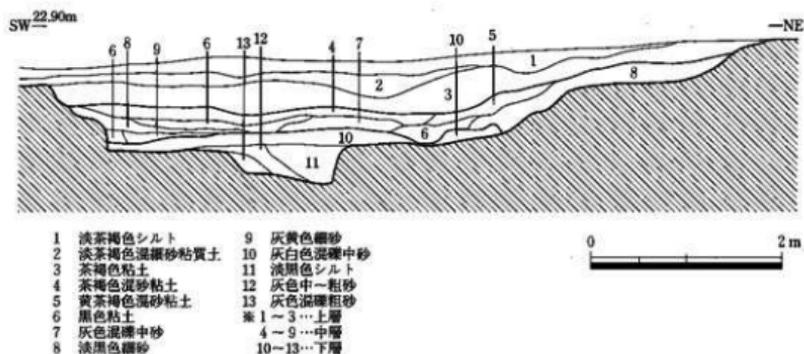
区)と東嶺高地(Ⅲ区)の間に存在する自然河川(河川域)の中を流下する、1つの流路と捉えることも可能であるが、全体を検出していないため判断できない。また、後述するSR04との関係についても確認できていない。そのため、ここでは1つの独立した自然河川として扱っている。遺物は弥生時代前期の土器・石器・木器が出土しているが、上・下層を一括して取り上げたため、まとめて報告する。

土器には壺形土器・甕形土器・鉢形土器・高杯形土器・蓋形土器・土製紡錘車がみられる。847~907は壺形土器である。847は大形品の口縁部である。中・小形品の口頸部及び頸部部の境は、無文のもの(848~853)、段を持つもの(854・863)、ヘラ描き沈線を持つもの(855~862・864~873)、削出凸帯を持つもの(876・877)、貼付凸帯を持つもの(878・879)がある。881~907は壺形土器の底部である。円盤状に突出するものとししないものがみられる。908~953は甕形土器である。口縁部の形態はほとんどが如意形口縁であり、わずかに逆L字形口縁と凸帯文系と直口口縁がみられる。如意形口縁では口縁部下が無文のもの(908~920)、ヘラ描き沈線を持つもの(921・922)、ヘラ描き沈線と刺突文を持つもの(923~926)、櫛描き沈線を持つもの(927)がある。口縁端部の刻目は、端部全面を刻むものと下端を刻むもの両者がみられる。凸帯文系には口縁下に1条の凸帯を貼り付けた828と、胴部の途中に刻目を施した屈曲部を持つ破片(929~932)がある。内彎気味に立ち上がる直口口縁の933・934は、口縁端部外面に刻目を施している。935は逆L字形口縁の破片である。936~953は甕形土器の底部である。954~957は鉢形土器である。954は内彎気味に立ち上がる直口口縁で無文の鉢形土器である。955~957は如意形口縁を持つもので、957は口縁部下に2条のヘラ描き沈線をめぐらす。958から961は蓋形土器である。961以外は壺形土器用の蓋形土器と考えられる。962は口縁部内面に肥厚による段を持った高杯形土器である。963は土器片を転用した土製紡錘車であるが、穿孔はされていない未製品である。石器には石鏃・スクレイパー・石斧・砥石がある。木器には加工痕の明瞭に残る用途不明品(971)と破損の著しい板材(972)がある。

SR04(第204~249区)

ⅢA区のH8・I6~8・J6・7グリッドで検出した自然河川である。検出長32.60m、幅760cm以上、深さ132cmの規模を持つ。調査区内では緩やかに弧を描きながら、南東から北西方向へ流下する。北半部は、SR03で先述した市道前池五条線の下に重なっているため、SR03との関係については確認できていない。ⅢA区の隅付近ではSD42

とつながっている。埋土は細かく細分することが可能であるが、大きく上・中・下層の3層にまとめることができる。下層は小礫を含んだ砂が、中層は粘性の強い黒色粘土が、上層は茶褐色系の粘質土が堆積しており、次第に滞水して埋没していったものと思われる。遺物は、各層から弥生時代前期から中期初頭の土器・石器・木器が出土している。これらの遺物は上・中・下層の区分ごとにまとめて取り上げている。それによれば中層の出土量が最も多く、下層、上層の順に続く。以下、下層から順に出土遺物について報告する。



第204図 SR04断面図

・SR04下層出土遺物(第205～218図)

出土した遺物には縄文土器・弥生土器・石器・木器がある。

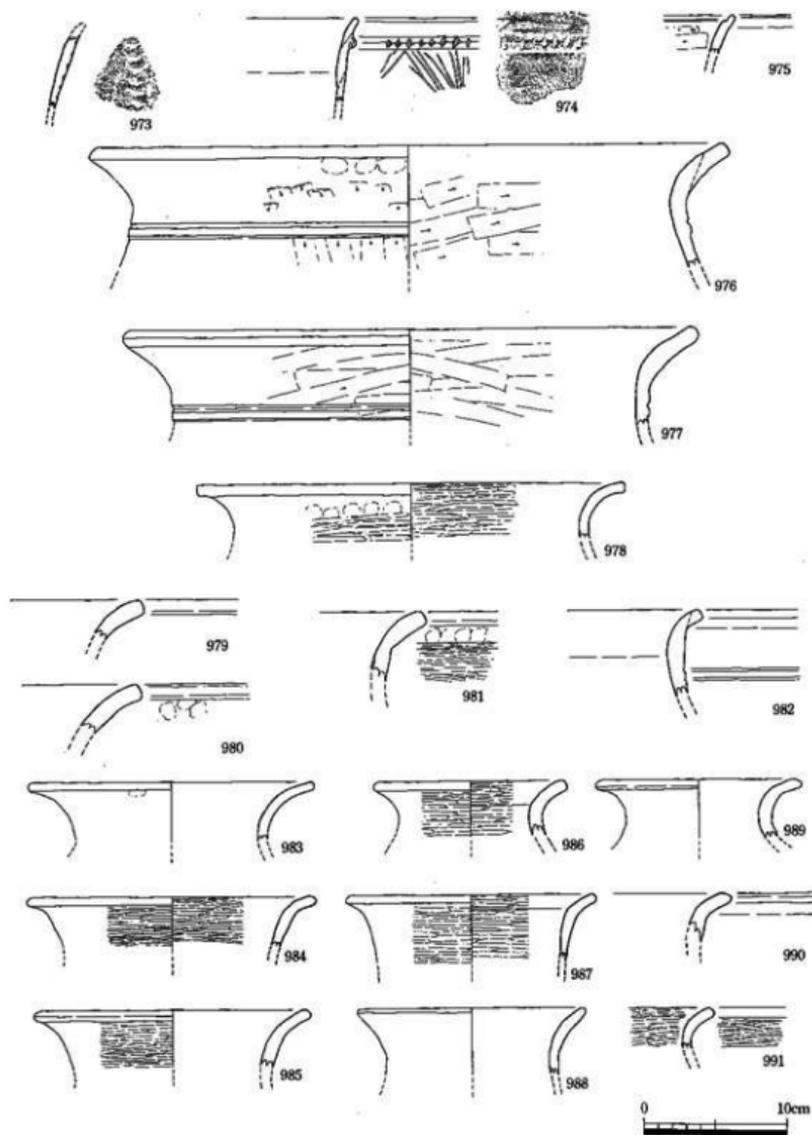
973～975は縄文土器である。973は縦方向に垂下する爪形文を施した深鉢形土器の口頸部の破片である。974は口縁端部や下がった位置に刻目凸帯を貼り付けた深鉢形土器である。凸帯の下に複線のへら描き文様を施している。口縁端部は面取りがなされているが刻目はみられない。975は大きく外反する口縁部を持った浅鉢形土器である。口縁部内面に1条の沈線を施している。973の深鉢形土器はやや古い横相を持つものの、3点とも縄文時代晩期後半の土器である。

弥生土器には壺形土器・甕形土器・甔形土器・鉢形土器・高杯形土器・蓋形土器・土製品がみられる。976～1039は壺形土器である。976～982は大形品である。口頸部の境が無文のもの、段を持つもの、へら描き沈線をもつものがみられる。983～1039は中・小形品

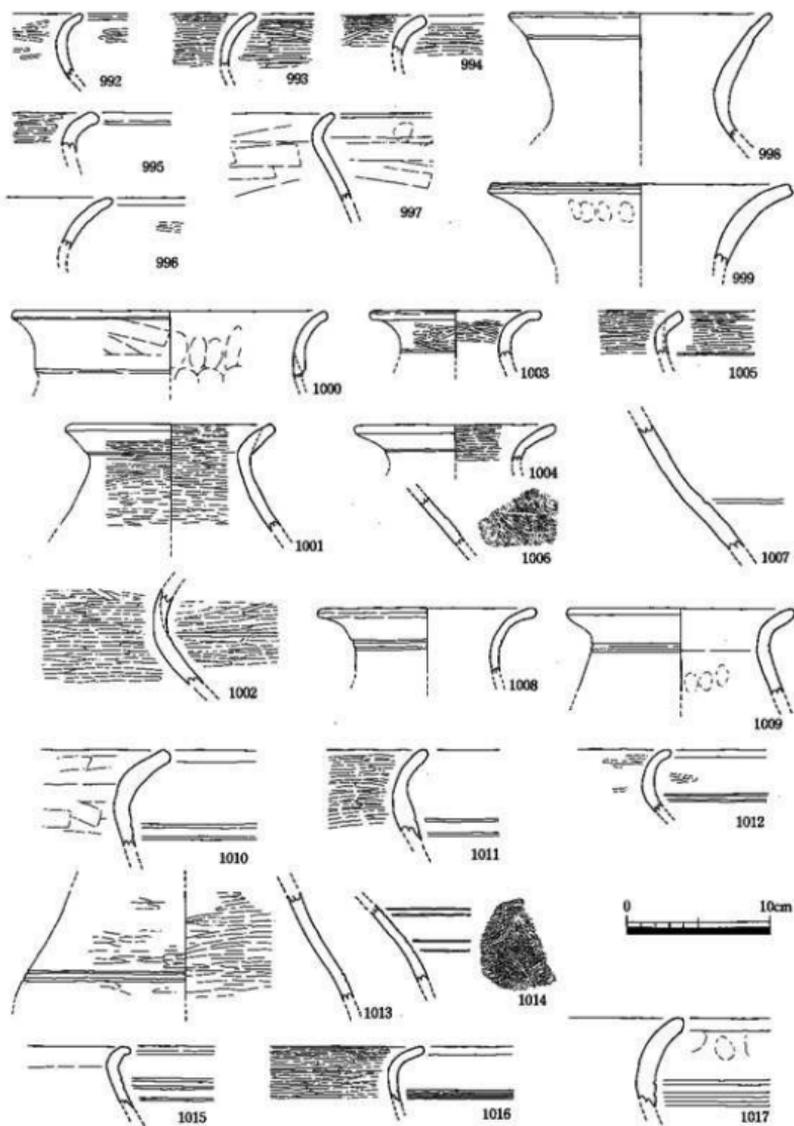
である。口頸部及び頸胴部の境が無文のもの(983~999)、段を持つもの(1000~1002)、へら描き沈線を持つもの(1003~1017)、削出凸帯を持つもの(1018・1019)、貼付凸帯を持つもの(1020)がある。1021~1039は壺形土器の底部である。円盤状に突出した底部と突出しないものがみられる。1025は外面にへら描き沈線を2条めぐらせている。1040~1076は甕形土器である。如意形口縁のものがほとんどで、わずかに凸帯文系と逆L字形口縁がみられる。如意形口縁は口縁部下が無文のもの(1040~1051)、段を持つもの(1052)、へら描き沈線を持つもの(1053~1067)がある。凸帯文系(1068~1072)は口縁部に凸帯を1条貼り付けている。1072は胴部の屈曲部に刻目を施した破片である。逆L字形口縁(1073)は口縁部下に5条以上のへら描き沈線をめぐらせている。1074~1076は甕形土器の底部である。1077・1078は甕形土器である。1079~1083は鉢形土器である。いずれも如意形口縁を持ち、口縁部下は無文である。1079は大形の鉢形土器である。蓋形土器には壺形土器用(1084)と甕形土器用(1085~1087)がみられる。1088は高杯形土器で、杯部と脚部の接合部分に1条の凸帯を貼り付けている。1089は土製品で、ミニチュアの高杯形土器の脚部と考えられる。1090は土器片を利用した土製紡錘車の未製品である。

石器には石鏃・石錐・スクレイパー・石剣・石鎌・石庖丁・石斧・紡錘車・石棒がみられる。石鏃には凹基式と平基式のものがあるが、1094は打製石庖丁の破片を石鏃に再加工した可能性がある。1095は石錐、1096~1098はスクレイパーである。1099は結晶片岩製の磨製石剣である。1100・1101は打製石鎌で、いずれも先端を欠損している。1102~1104は磨製石庖丁、1105~1109は打製石庖丁である。1105は背部を敲打した後に研磨を施している。両端に抉りが残る。1109は大きく打ち割った河原石に刃部と抉りを施した石庖丁である。1110~1113は大陸系磨製石斧で、1114~1118は打製石斧である。1110・1111は太型蛤刃石斧で、いずれも貫入する岩脈に沿って破損している。1112・1113は柱状片刃石斧の破片である。1117は河原石を使用した打製石斧である。1119は磨製の紡錘車で、中央の穿孔は両側穿孔である。1120は用途不明の石製品であるが、形態の類似から小形の石棒と推定している。

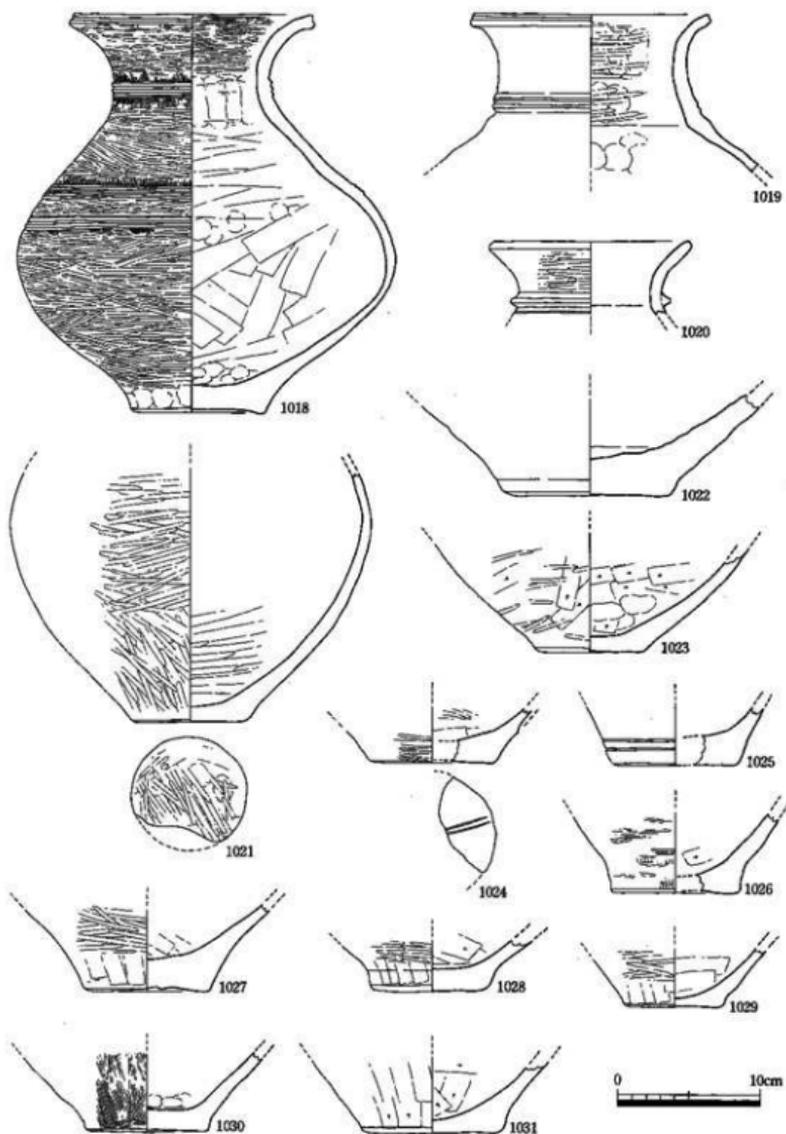
木器には広楎・用途不明品・杭・杓子・板材がみられる。1121は広楎の舟形隆起の破片で、柄孔の一部が残る。1122は用途不明の小形品で、1124・1125は杭である。1126は杓子で、柄を作り出しているが、身の部分はまだ抉り込んでいない未製品である。全体に黒く炭化していることから、表面を意図的に焦がして炭化させては削り込んで加工していくことがわかる。1127は楎の原料と考えられる大形の板材である。



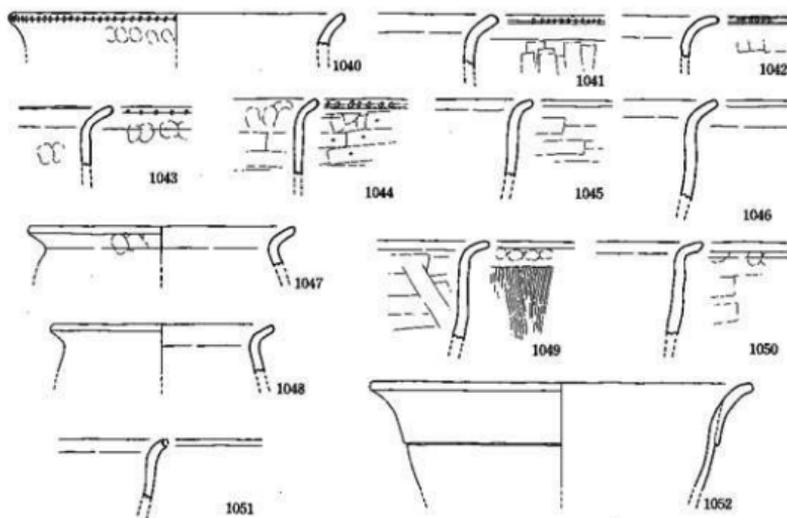
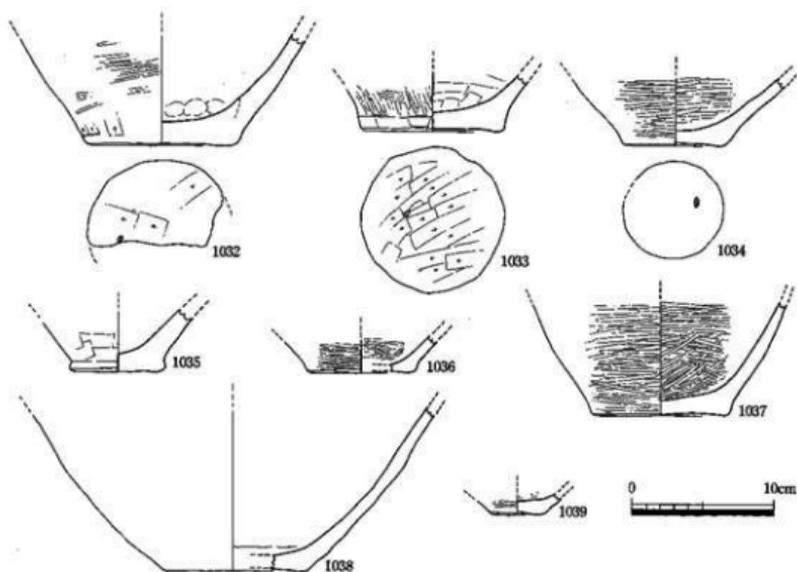
第205圖 SR 0 4下層出土遺物①



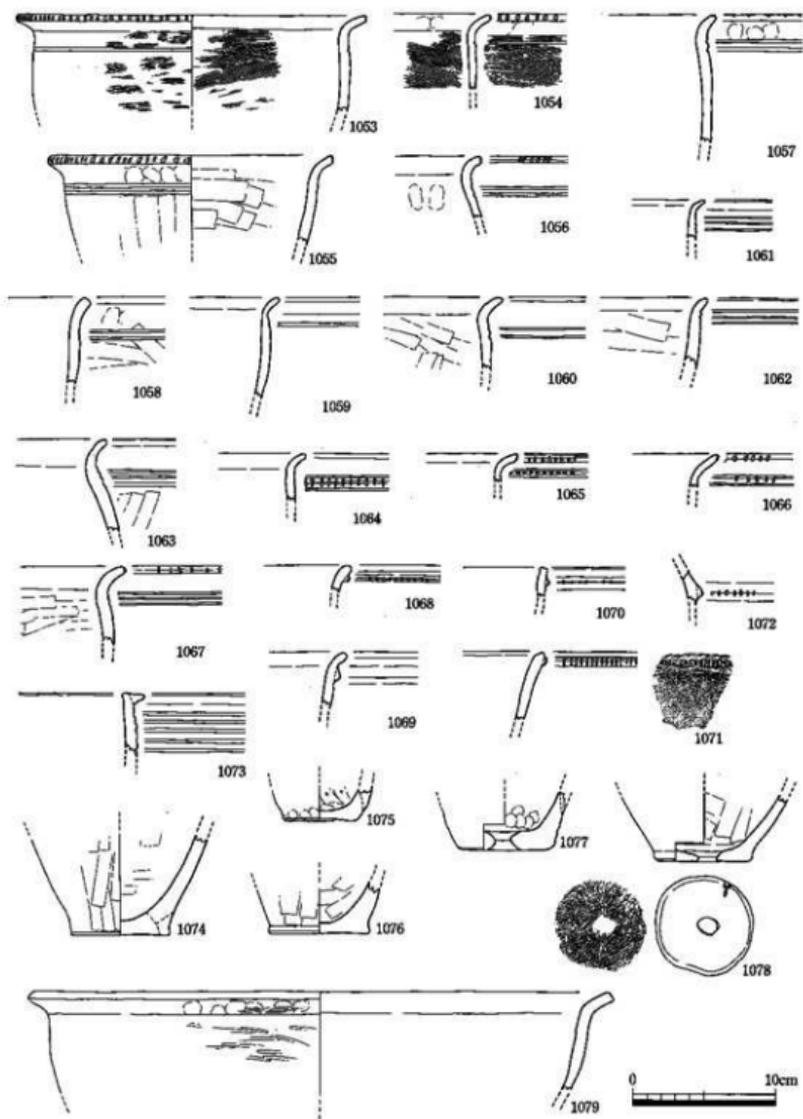
第206圖 SR04下層出土遺物②



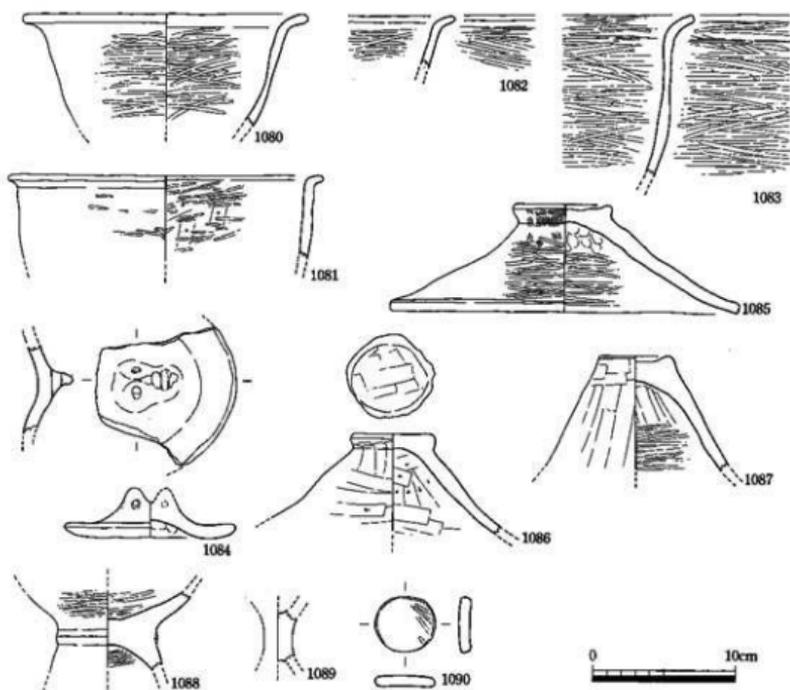
第207圖 SR04下層出土遺物③



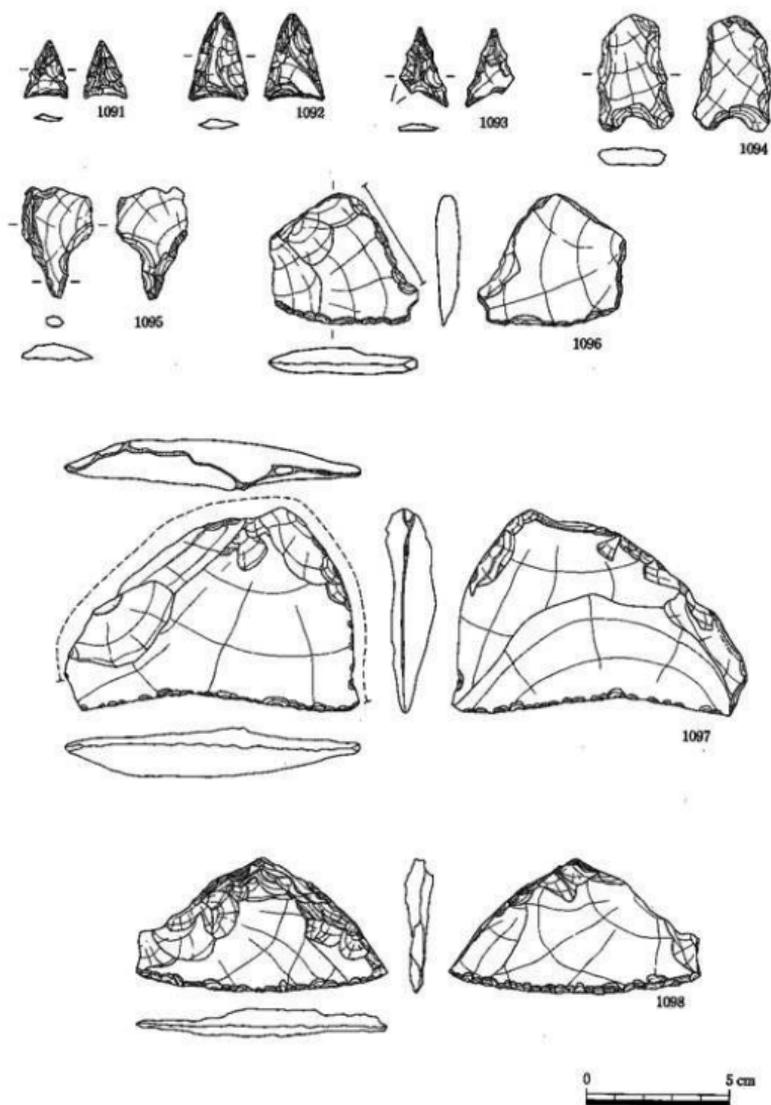
第208圖 SR04下層出土遺物④



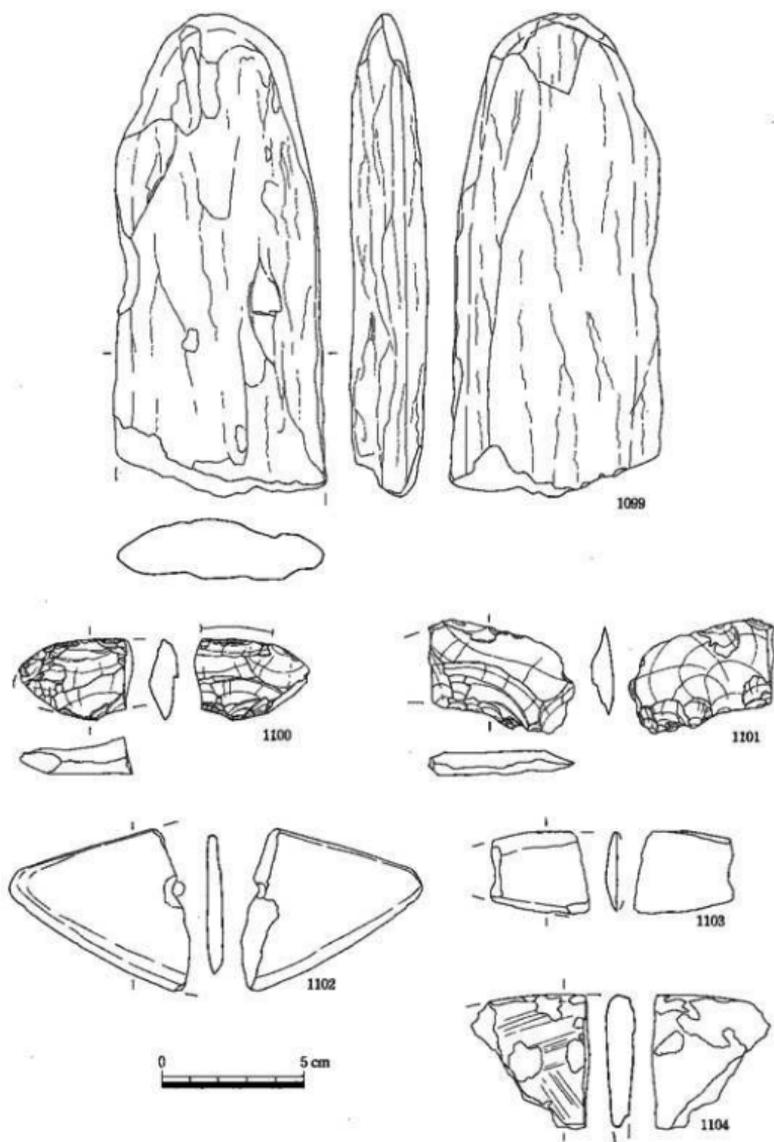
第209圖 SR04下層出土遺物⑤



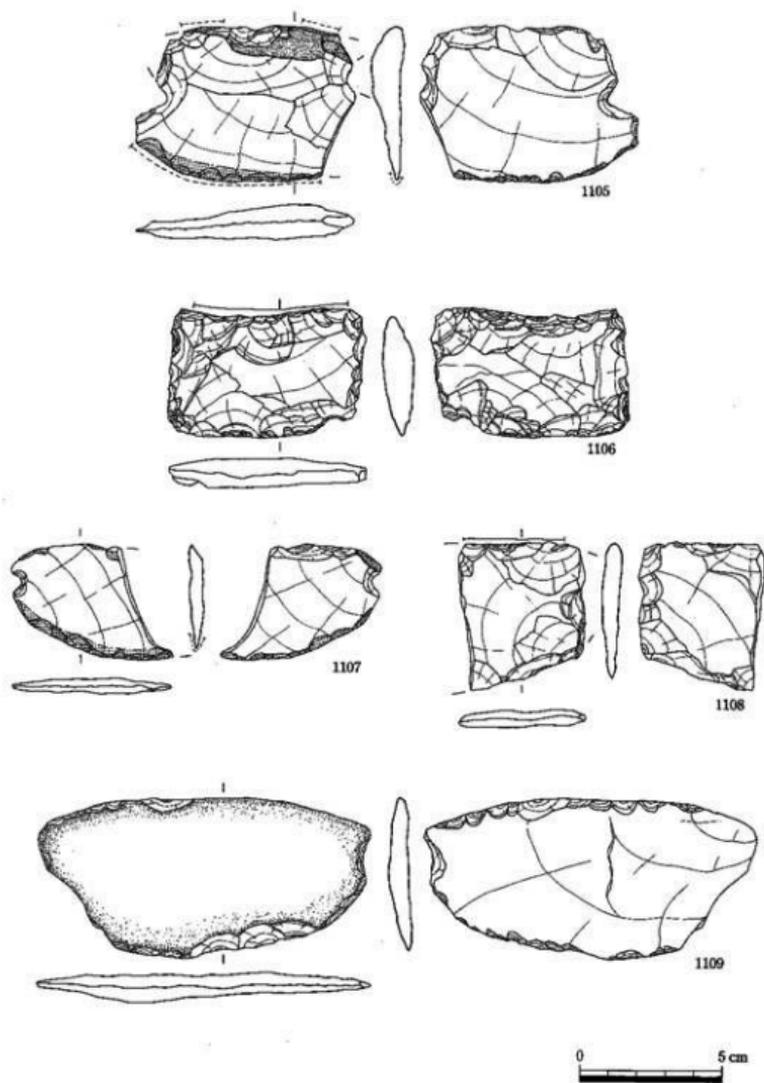
第210図 SR04下層出土遺物⑧



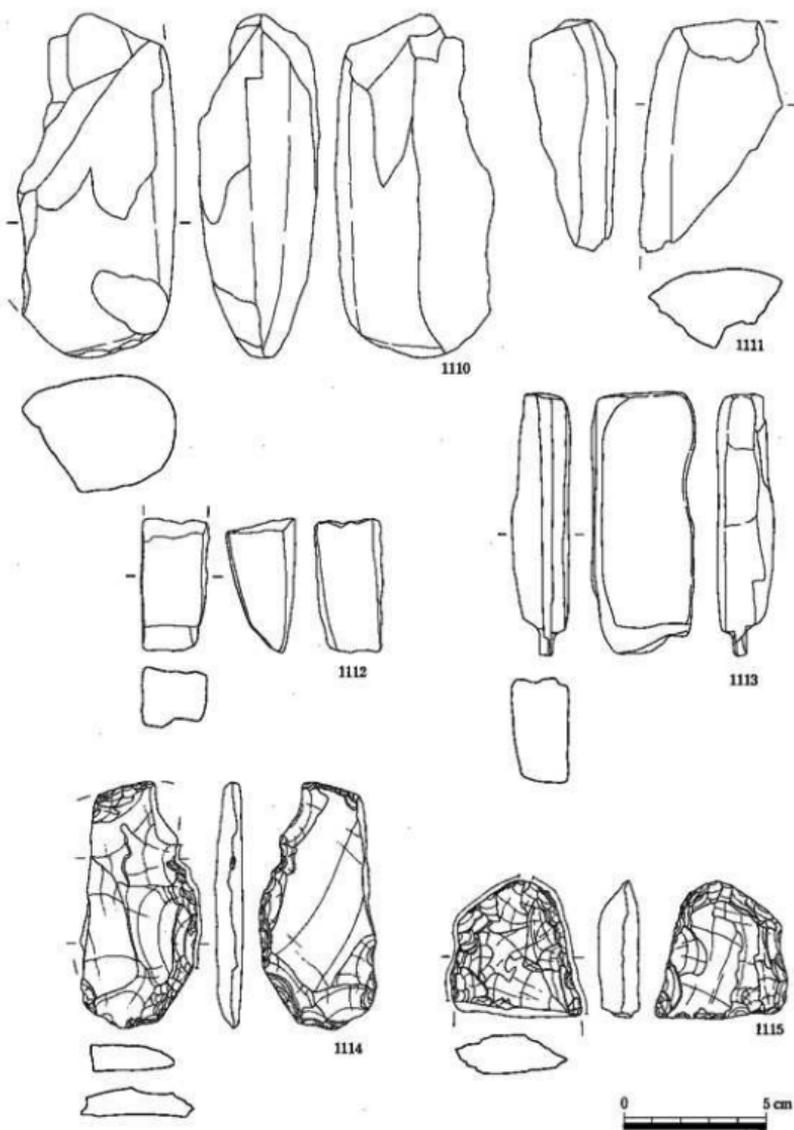
第211圖 SR04下層出土遺物⑦



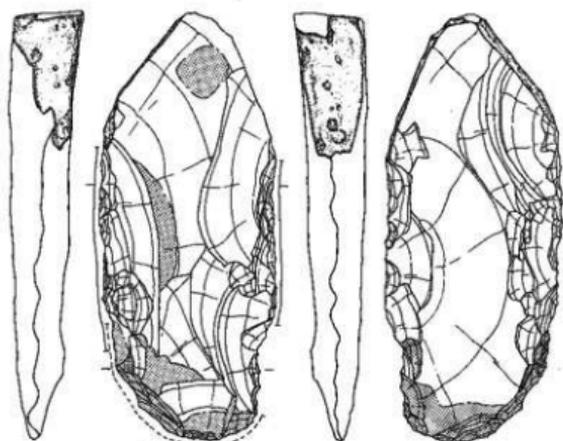
第212図 SR04下層出土遺物⑧



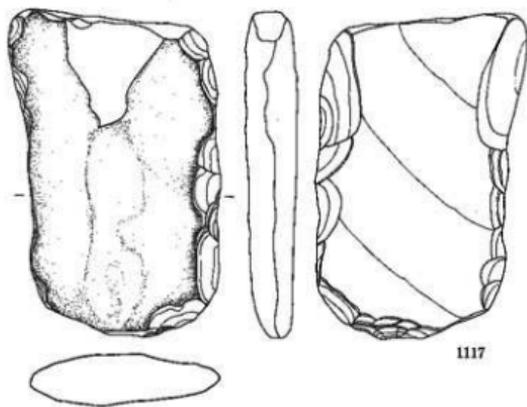
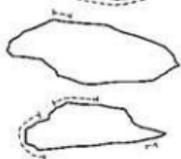
第213図 SR04下層出土遺物⑧



第214圖 SR04下層出土遺物⑩



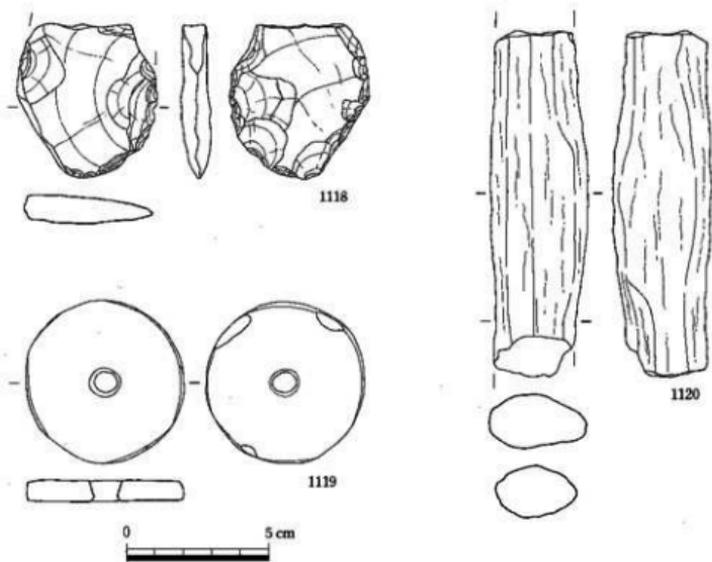
1116



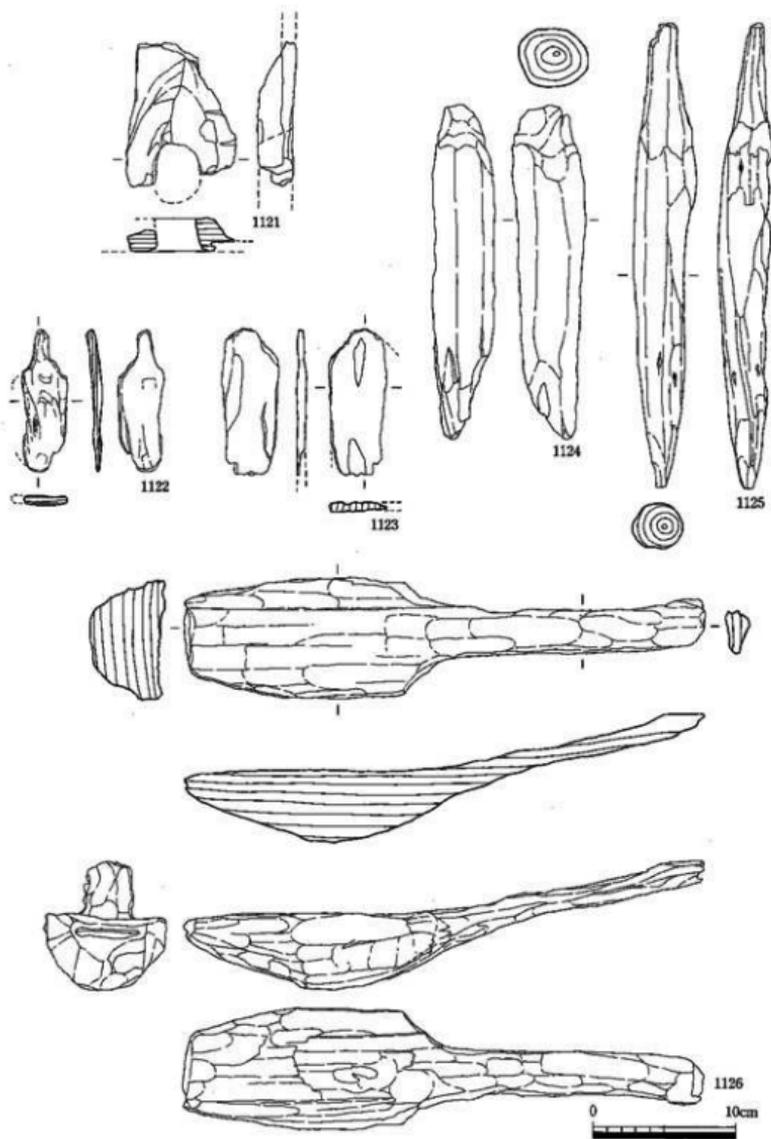
1117



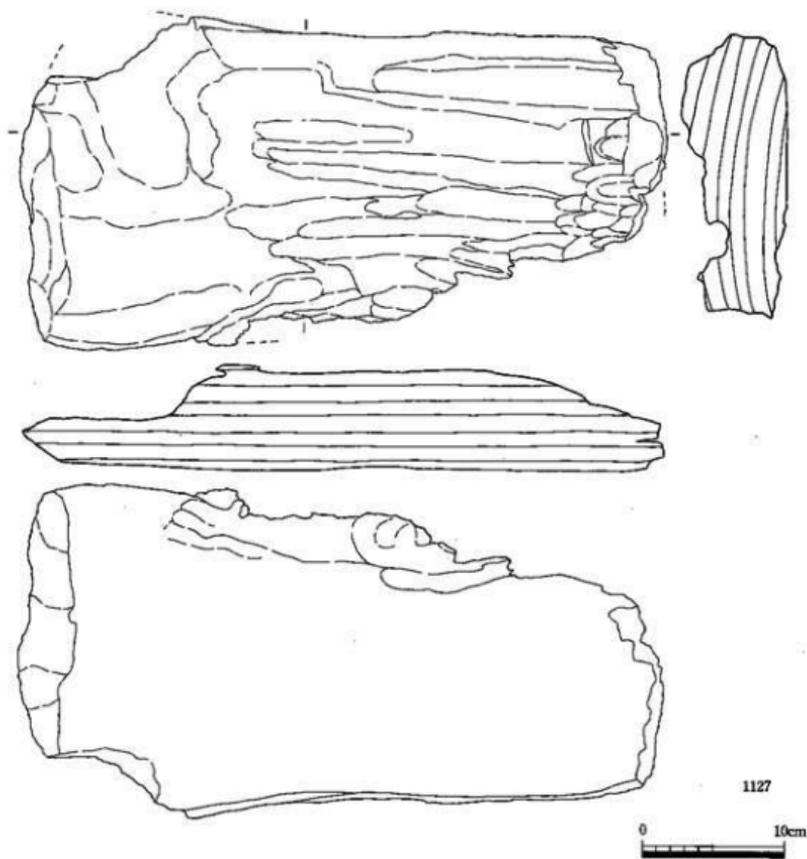
第216圖 SR04下層出土遺物①



第216図 SR04下層出土遺物②



第217圖 SR 0 4下層出土遺物③



第218図 SR 0 4下層出土遺物④

・SR04 中層出土遺物 (第219~242図)

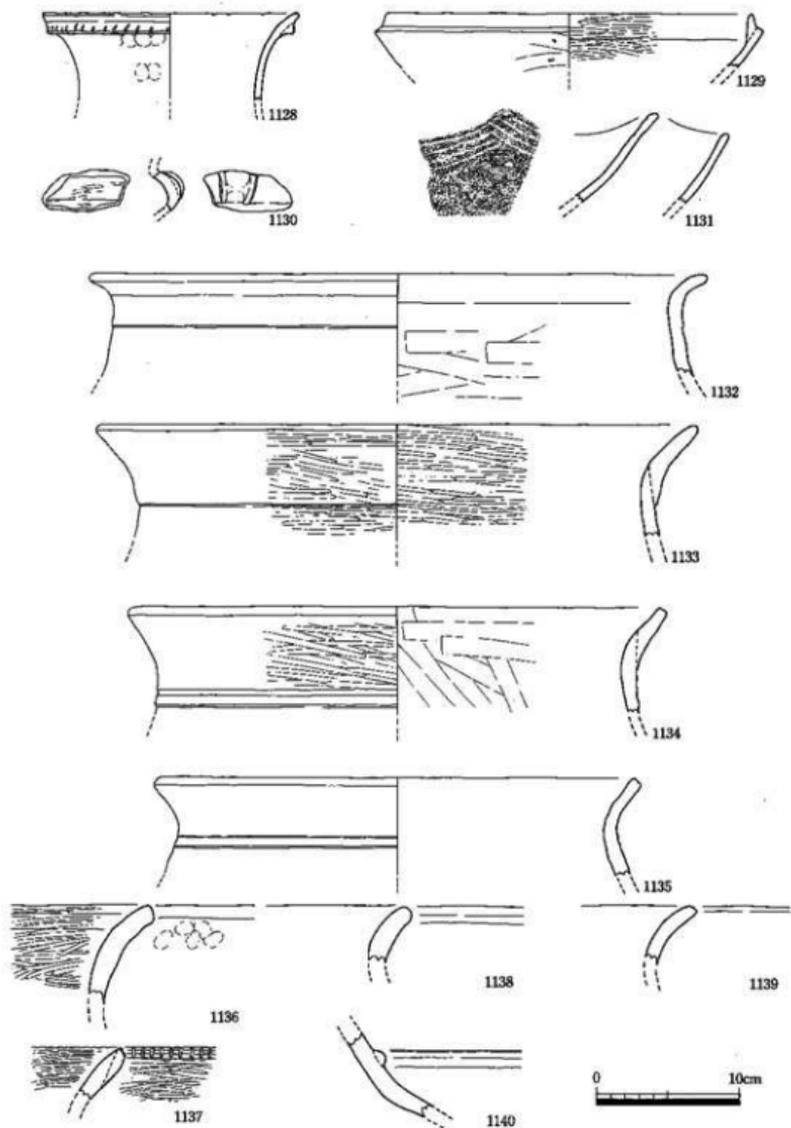
出土した遺物には縄文土器・弥生土器・石器がある。

1128~1131は縄文土器である。1128は口縁端部から少し下がった位置に1条の刻目凸帯を貼り付けた深鉢形土器である。1129は短く立ち上がる口縁部を有する浅鉢形土器である。1130は大きく内彎する口縁部の外面に退化したりボン状凸起様の貼付けを有した精製土器で、浅鉢形土器と考えられる。1131は波状口縁の浅鉢形土器で、内面にヘラ描き沈線4条を施している。これらの縄文土器は1130にやや古い様相が見受けられるものの、縄文晩期後半の土器である。

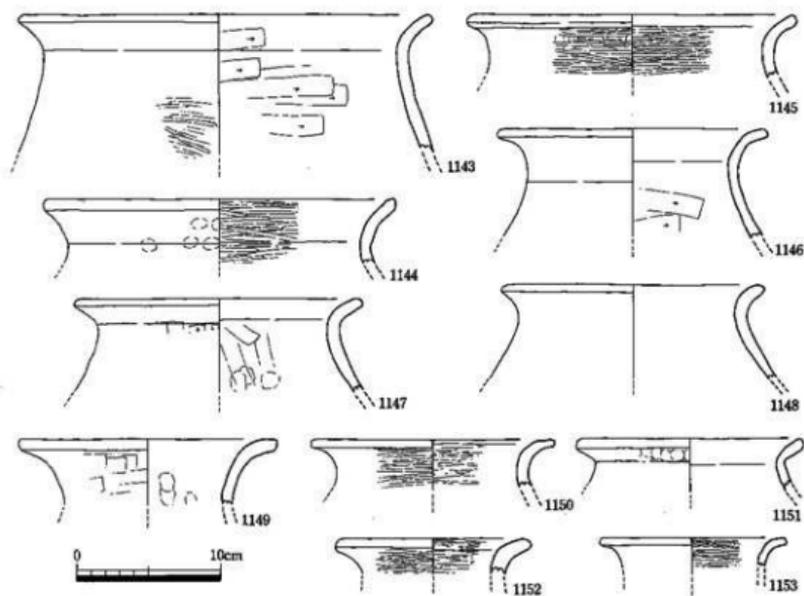
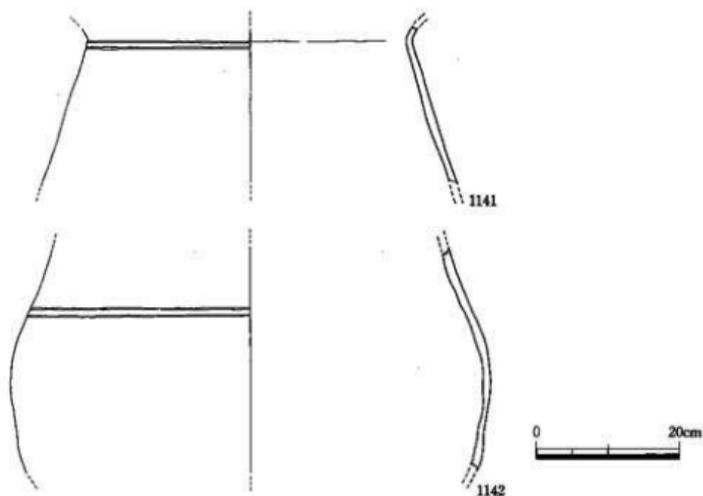
弥生土器には壺形土器・甕形土器・甔形土器・鉢形土器・蓋形土器・高杯形土器・土製品がみられる。1132~1301は壺形土器である。1132~1142は大形品で、口頸部の境は段を持つもの(1132~1134)、ヘラ描き沈線を持つもの(1135・1141・1142)、貼付凸帯を持つもの(1140)がある。1137は口縁端部にヘラ描き沈線1条をめぐらせた後、全面に刻目を施している。中・小形品も、口頸部及び頸胴部の境が無文のもの(1143~1167)、段を持つもの(1168~1184)、ヘラ描き沈線を持つもの(1185~1215)、削出凸帯を持つもの(1216~1240)、貼付凸帯を持つもの(1241~1246)がある。1172の内面には、部分的に布の圧痕が残存している。1247~1299は壺形土器の底部である。1300・1301は無頸壺である。1300は大きく内彎する口縁部と、円盤状に突出した底部を有し、口縁端部やや下に焼成前の穿孔を持つミニチュアである。1301は内彎する口縁部の1条の凸帯を貼り付け、凸帯の下位に4条のヘラ描き沈線とヘラ描き文様を施している。1302~1408は甕形土器である。口縁部の形態は如意形口縁が大半を占めるが、凸帯文系と逆L字形口縁のものもみられる。如意形口縁を持つものの口縁部下の区画文には、無文のもの(1302~1326)、ヘラ描き沈線を持つもの(1327~1366)がある。凸帯文系は、如意形口縁に1条の凸帯を貼り付けたもの(1367~1374)、内彎気味に立ち上がる直口口縁に1条の凸帯を貼り付けたもの(1375~1378)、強く内傾する口縁に1条の凸帯を貼り付けたもの(1379)がみられる。逆L字形口縁のものには、口縁部下が無文のもの(1380~1382)、ヘラ描き沈線を持つもの(1383~1387)、櫛描き沈線を持つもの(1388・1389)がある。口縁部の成形手法は、折り曲げによるものと貼付けによるものの両者がみられる。1390~1408は甕形土器の底部である。1409~1412は甔形土器である。鉢形土器には口縁部の形態が如意形口縁のもの(1413~1427)、直口口縁のもの(1428~1431)、逆L字形口縁のもの(1432)がある。如意形口縁のものでは、口縁部下が無文のものとはヘラ描き沈線をめぐらすものがある。1433・1434は

低い脚台状をした鉢形土器の底部である。蓋形土器には、壺形土器用（1435～1437）と、甕形土器用（1438～1457）の両者がみられるが、量的には後者の方が圧倒的に多い。甕形土器用の蓋形土器は、摘みの外端部が外方へ突出するものが多い。1458～1462は高杯形土器である。杯部と脚部の接続部分が無文のものが多いが、1462は1条の凸帯を貼り付けている。1463は土器の破片を再利用した上製紡錘車の未製品である。

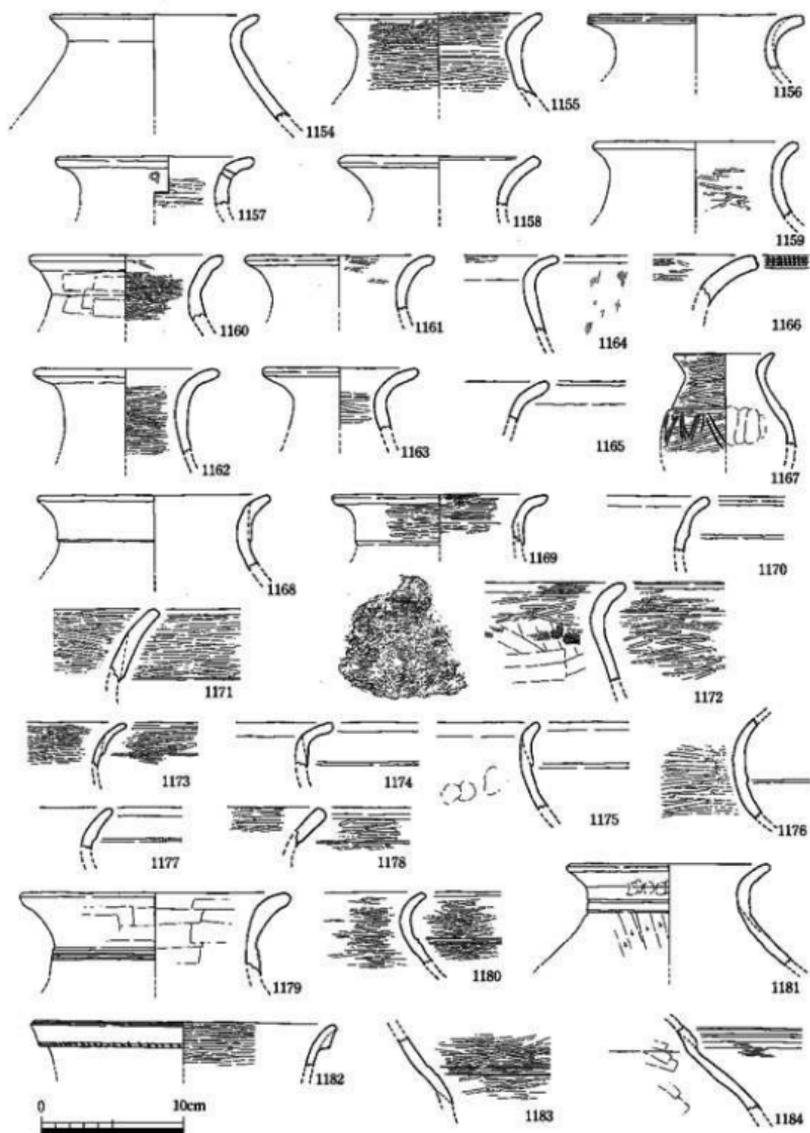
石器には石鏃・石錐・スクレイパー・石剣・石鎌・石庖丁・石鍬・石斧・紡錘車・砥石・不明石器がみられる。石鏃には凹基式のものと同基式のものがある。スクレイパーの中で1480は河原石を使用したもので、片側縁のみ刃部調整を施している。1483は打製石剣の先端部の破片と考えられる。石庖丁には磨製のもの（1485）と打製のもの（1486～1492）の両者がみられる。打製石庖丁は両端に抉りを持つものと持たないものがある。石斧には大陸系の磨製石斧（1494～1501）と打製石斧（1502～1516）がある。磨製石斧には太型蛤刃石斧（1494）、柱状片刃石斧（1450～1500）、扁平片刃石斧（1501）がみられる。1517は磨製紡錘車で、中央に両側からの穿孔を施している。1518は直方体をした砂岩製の砥石である。両小口面以外の4面を使用しており、小振りであることから手に持って使用したことが推定できる。1519は側縁のほぼ全周に敲打痕がみられる不明石器である。



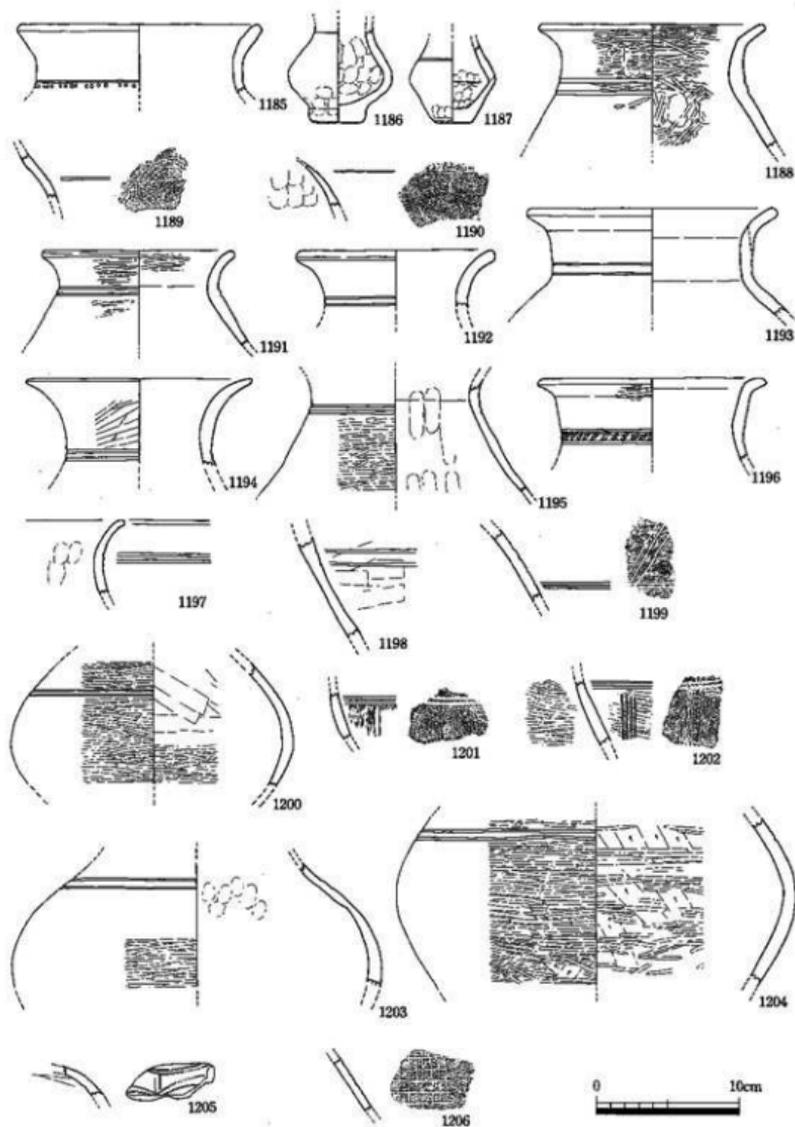
第219圖 SR 0 4 中層出土遺物①



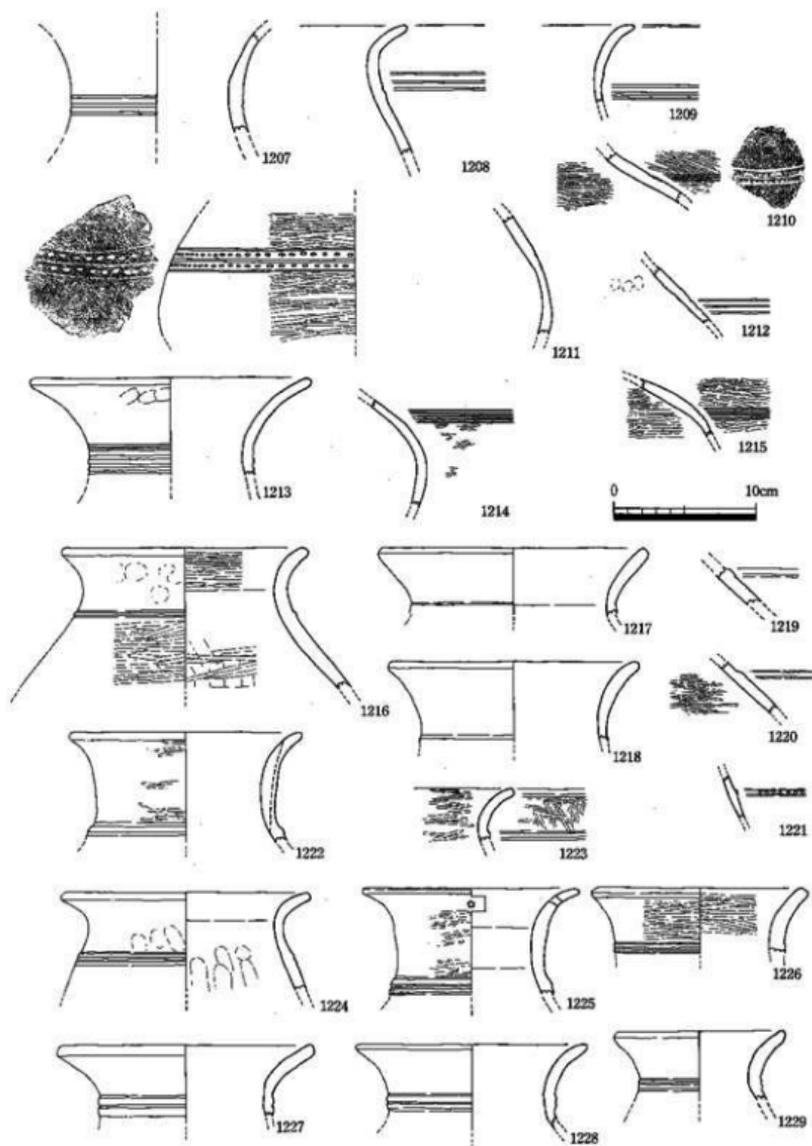
第220図 SR04中層出土遺物②



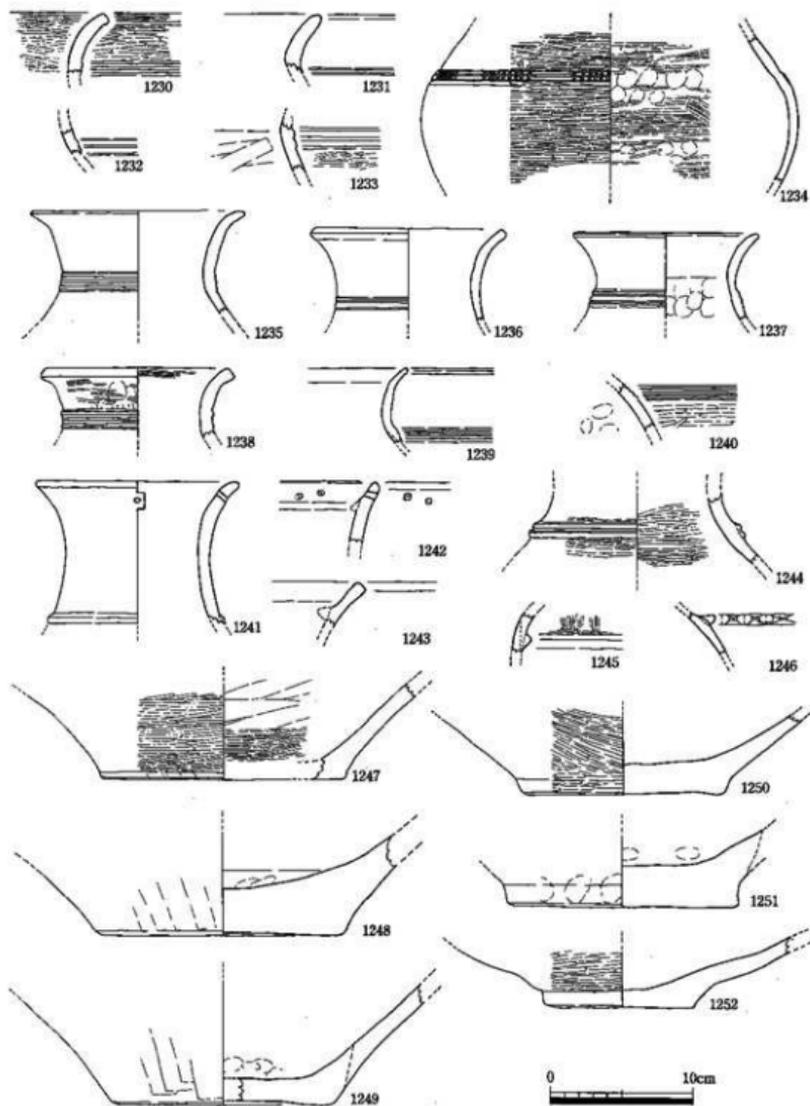
第221圖 SR04中層出土遺物③



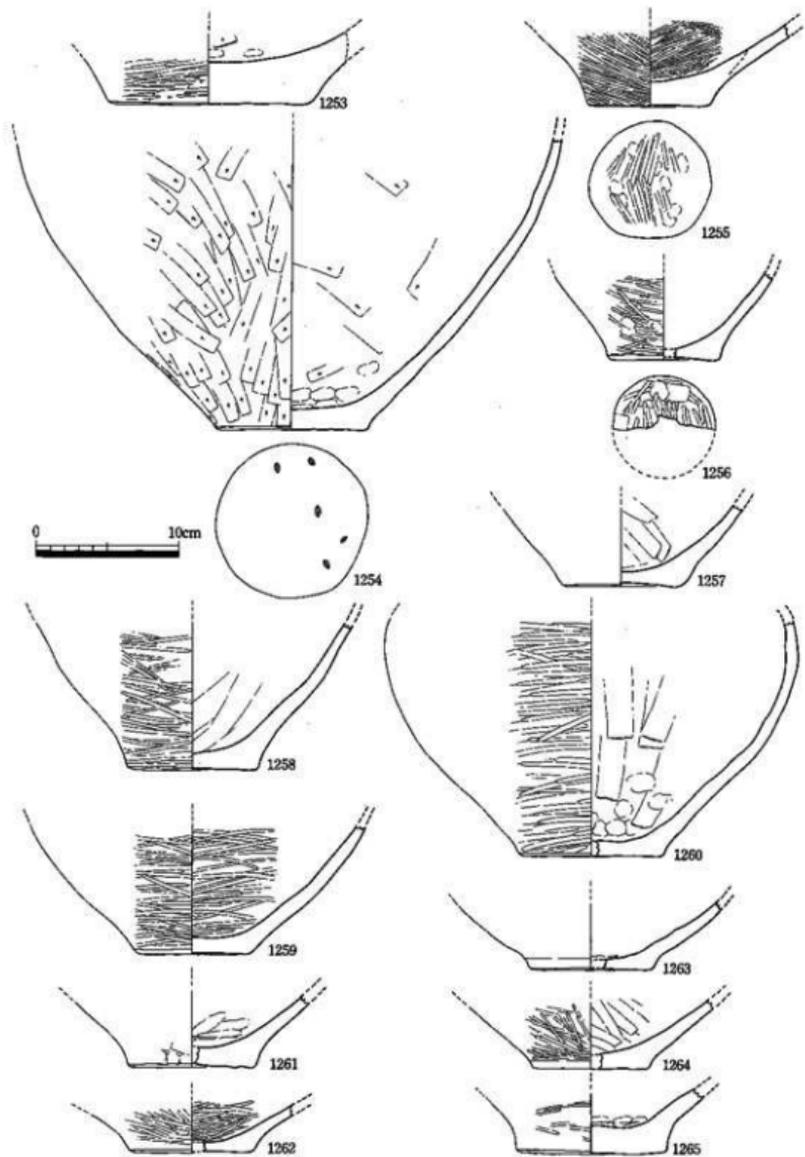
第222图 SR04中層出土遺物④



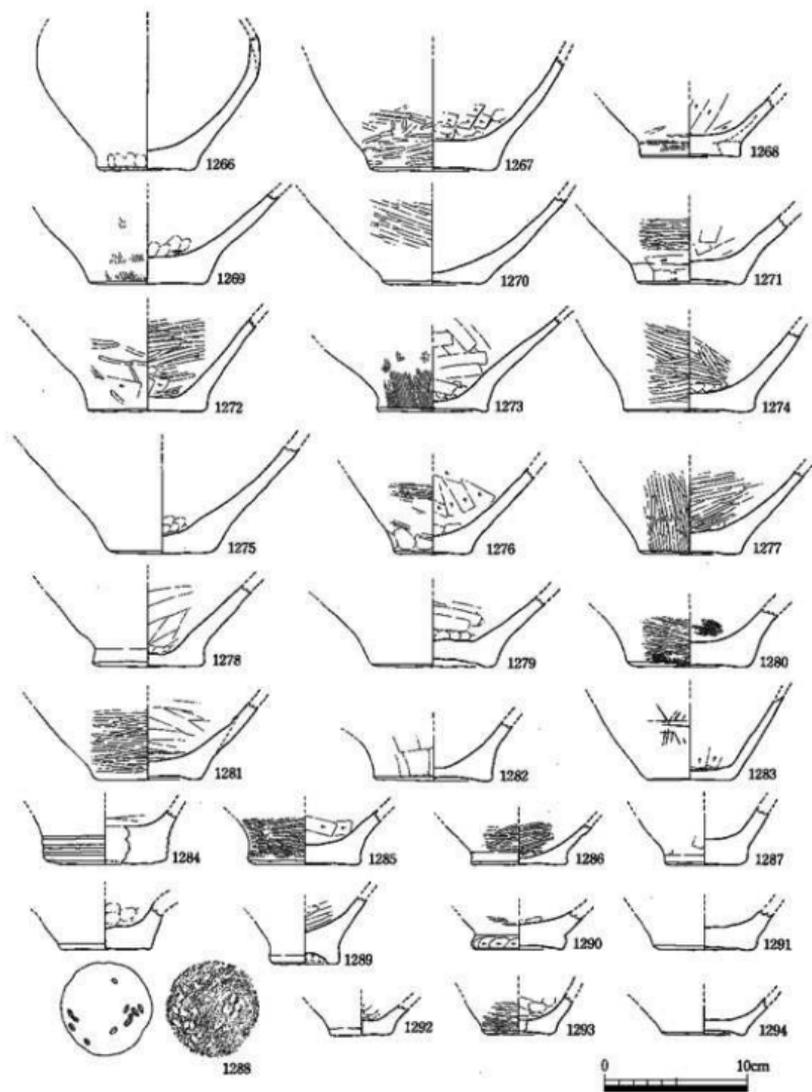
第223圖 SR04中層出土遺物⑤



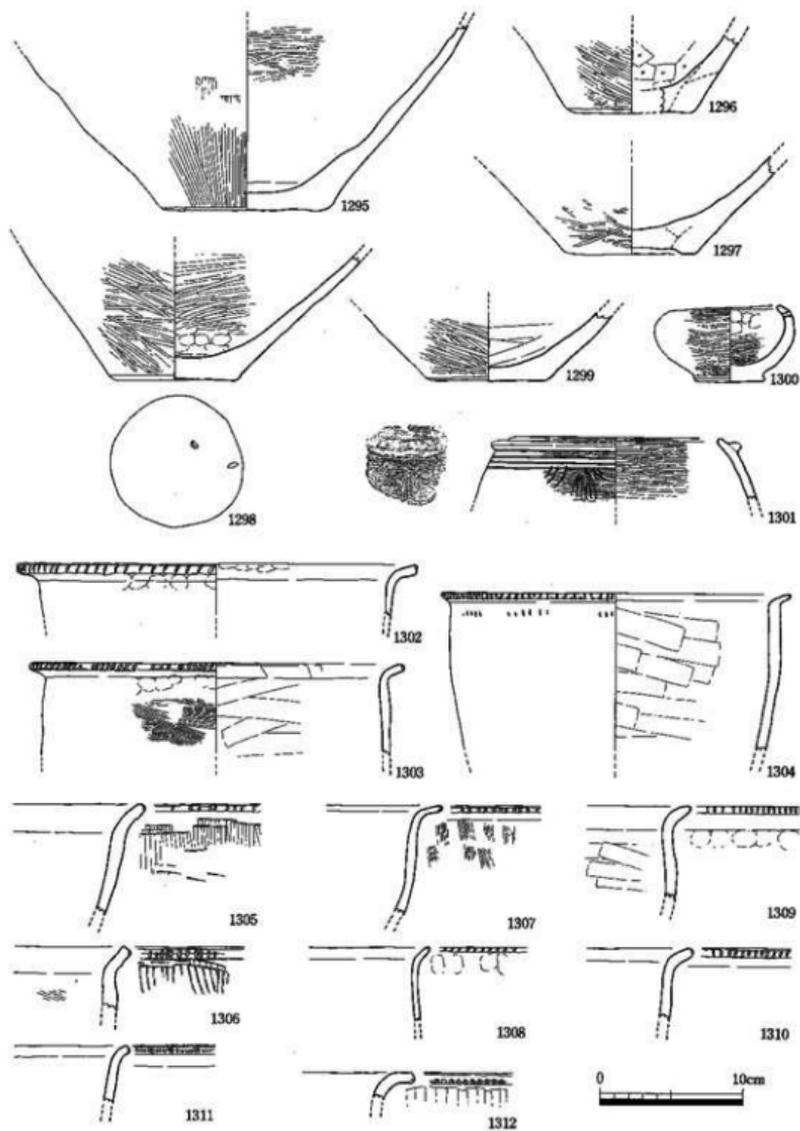
第224图 SR04中層出土遺物⑧



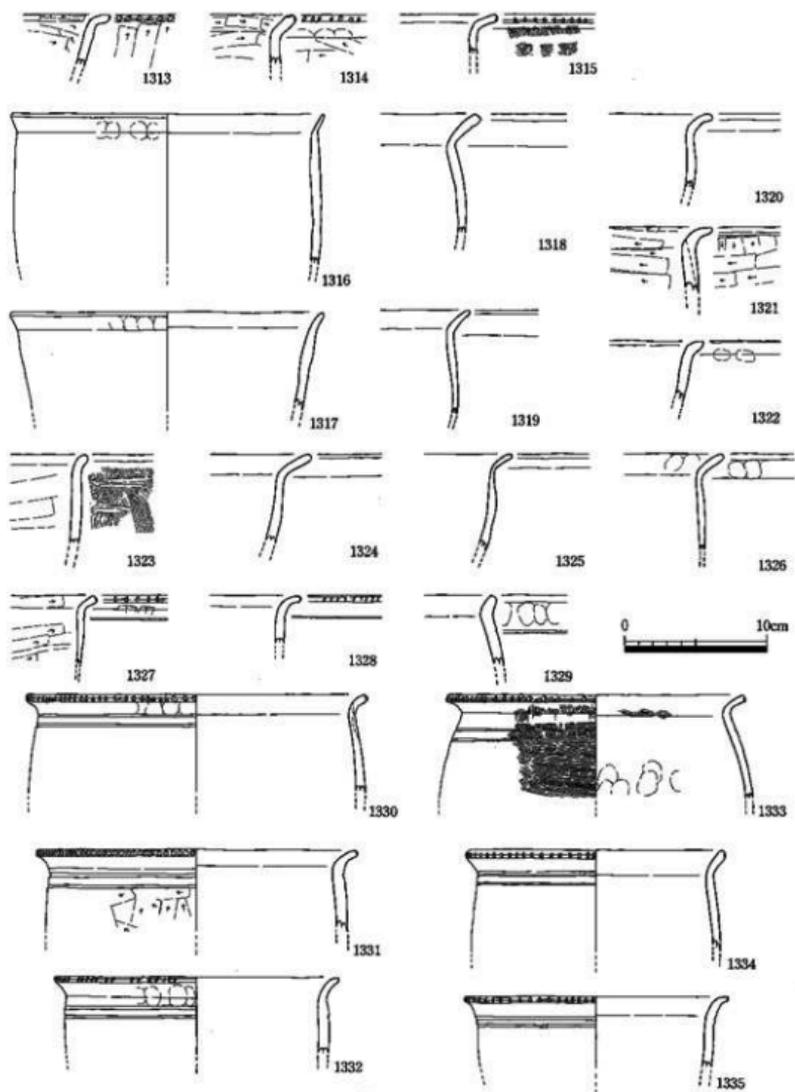
第225図 SR04中層出土遺物の⑦



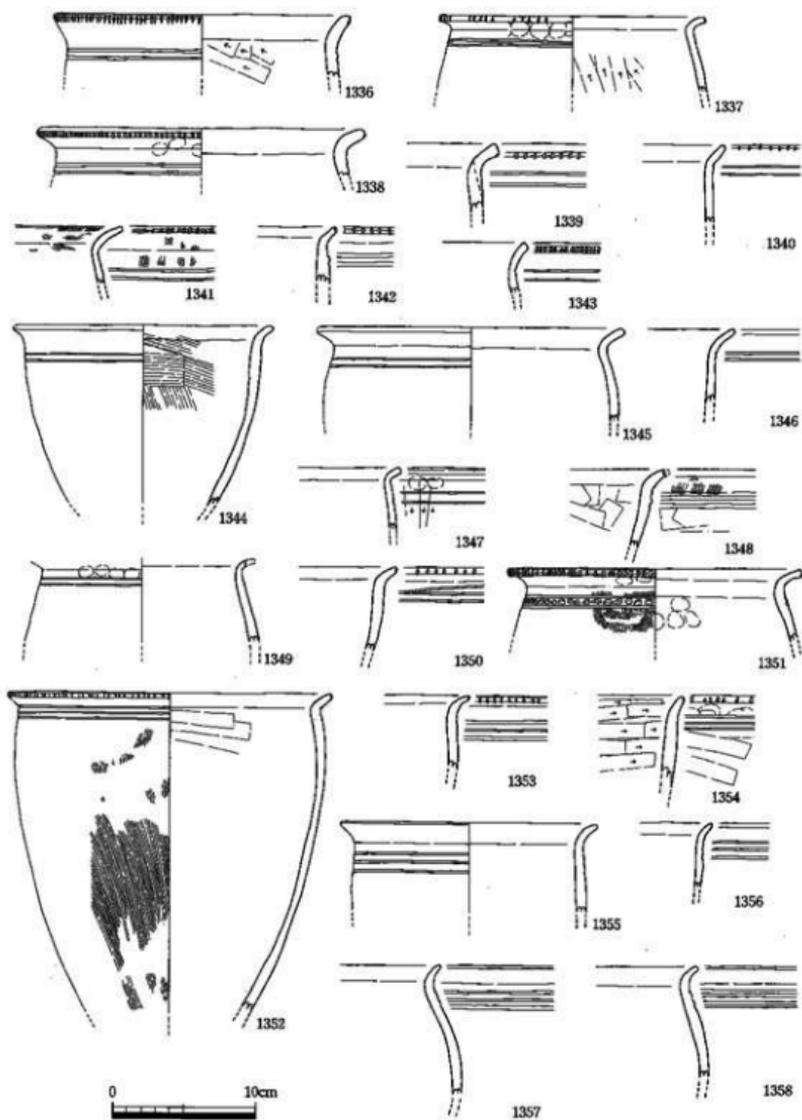
第226圖 SR04中層出土遺物⑧



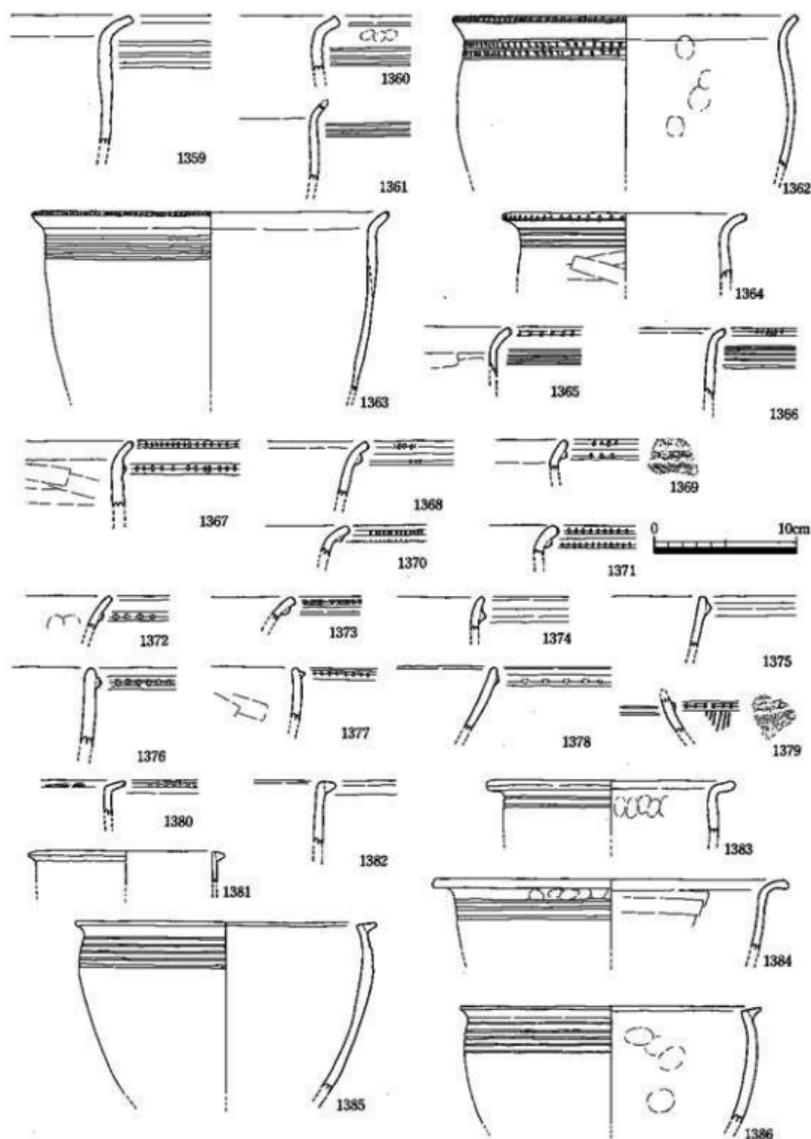
第227圖 SR04中層出土遺物⑨



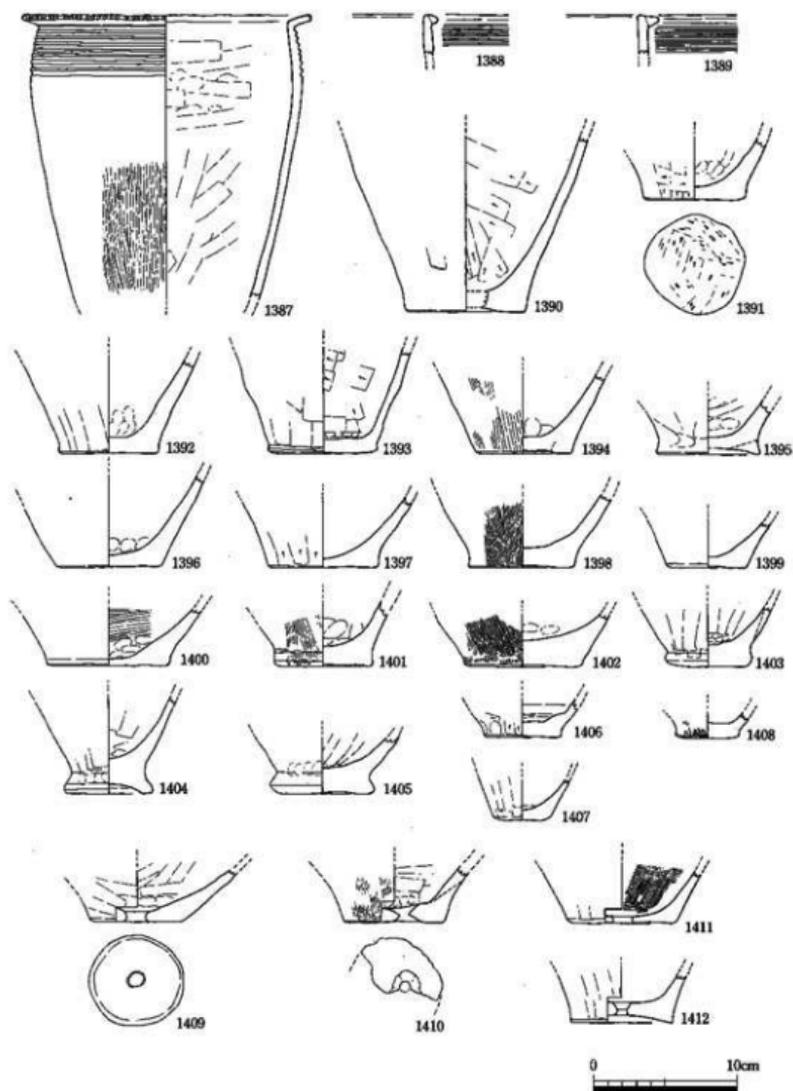
第228圖 SR04中層出土遺物⑩



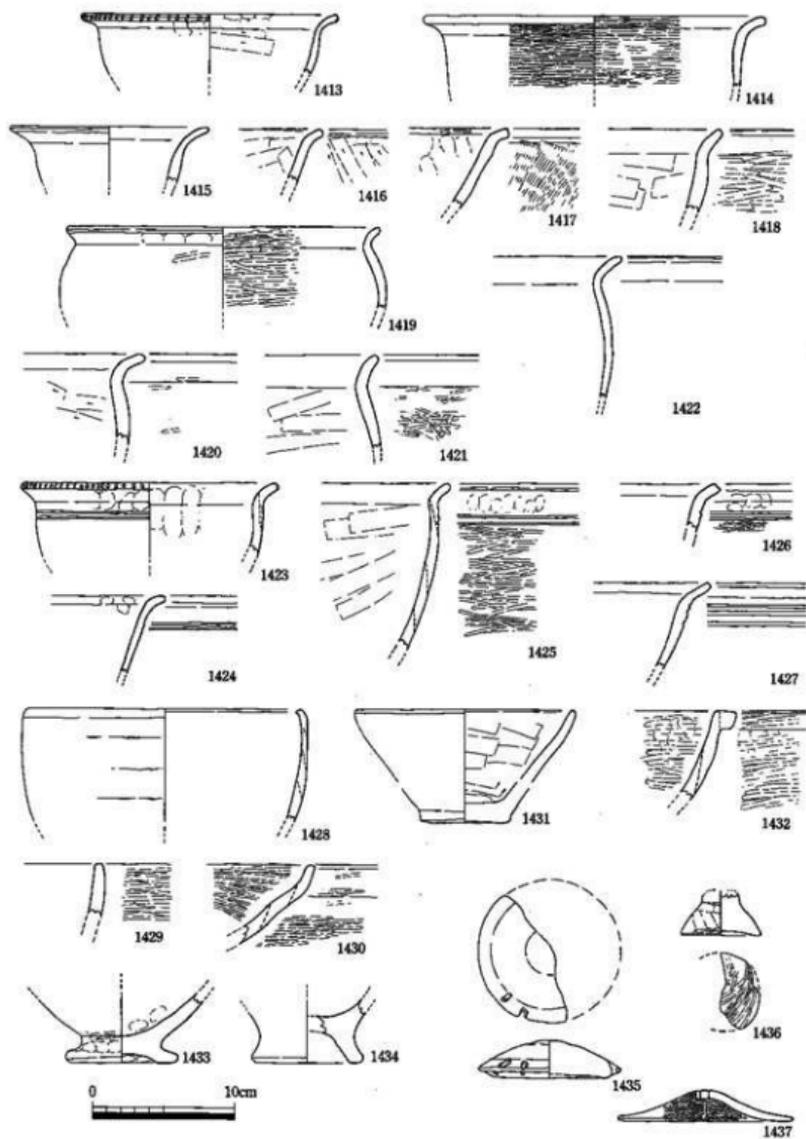
第229圖 SR04中層出土遺物①



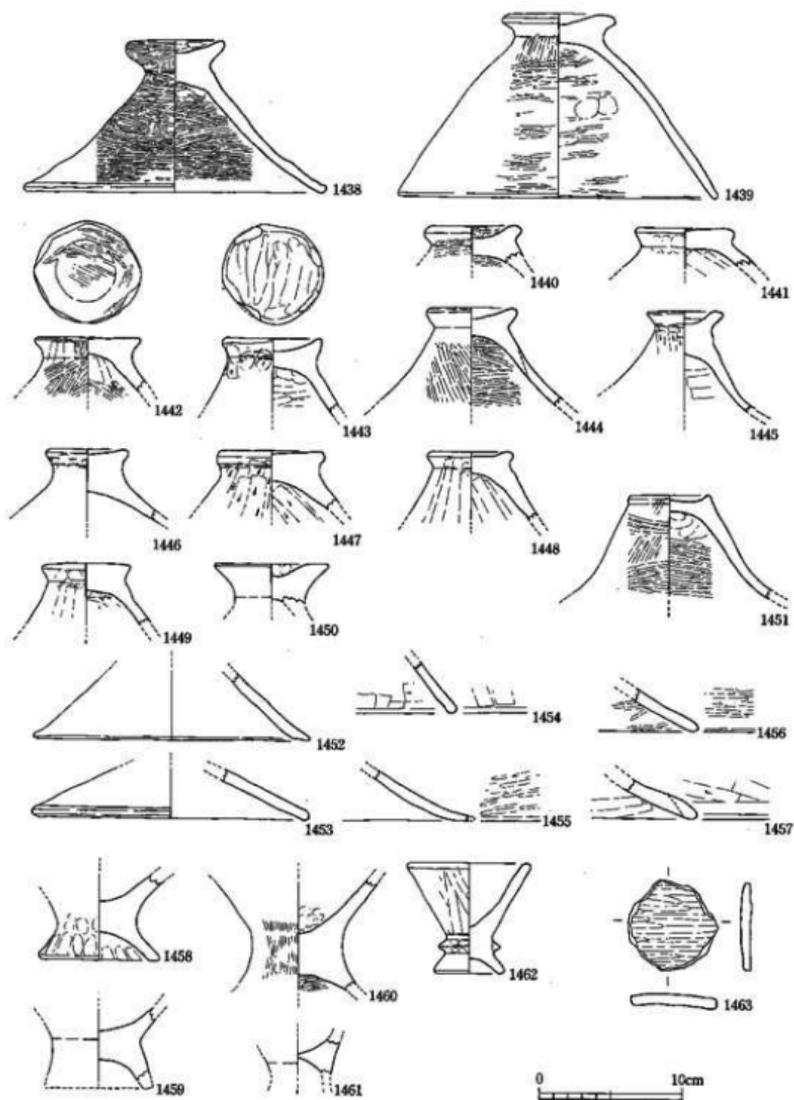
第230図 SR04中層出土遺物②



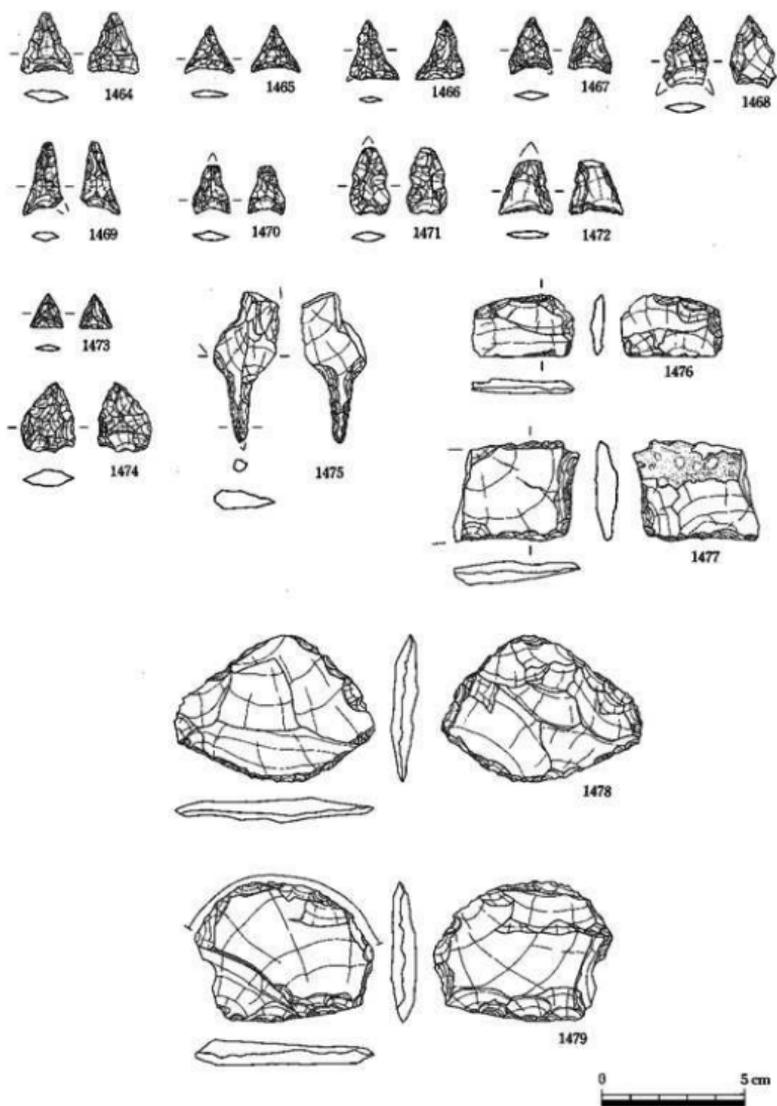
第231圖 SR04中層出土遺物⑬



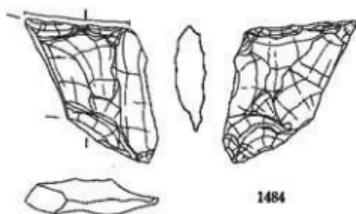
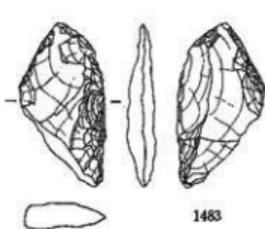
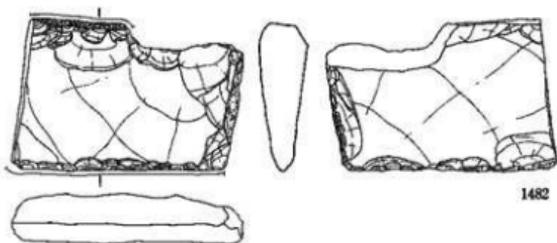
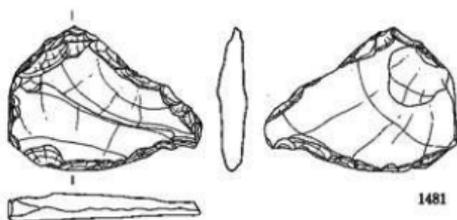
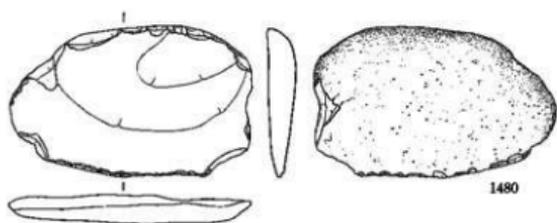
第232圖 SR04中層出土遺物④



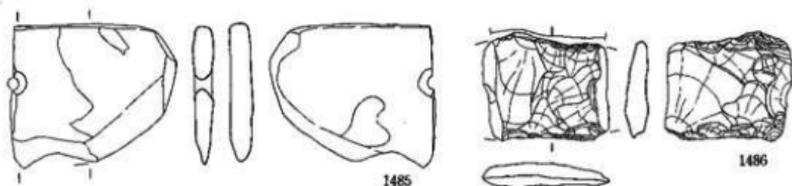
第233圖 SR 0 4 中層出土遺物⑬



第234圖 SR04中層出土遺物⑩

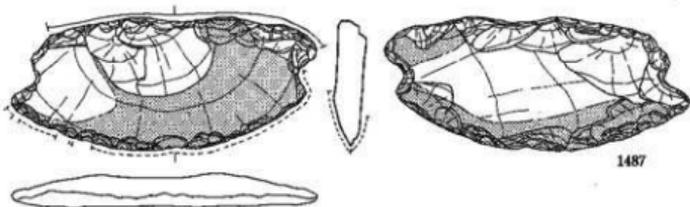


第235圖 SR 0 4 中層出土遺物①

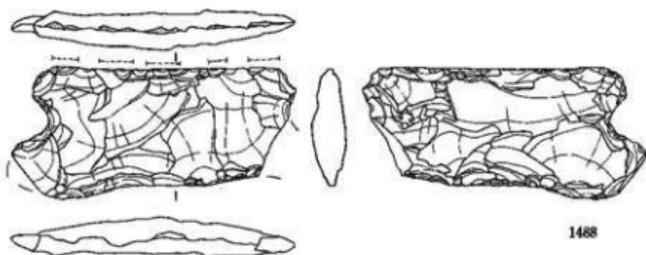


1485

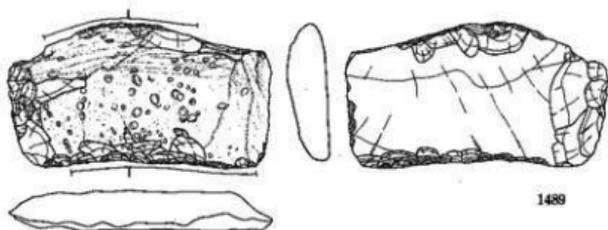
1486



1487



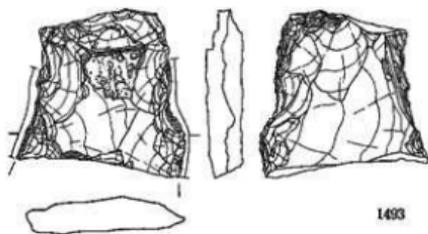
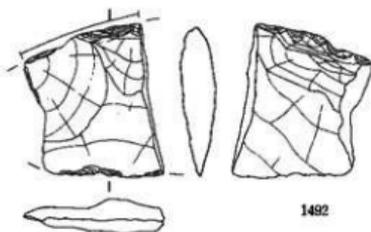
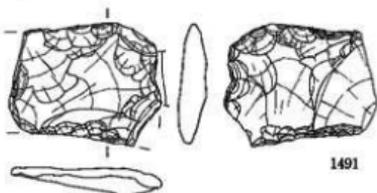
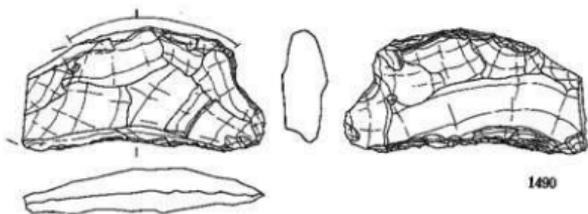
1488



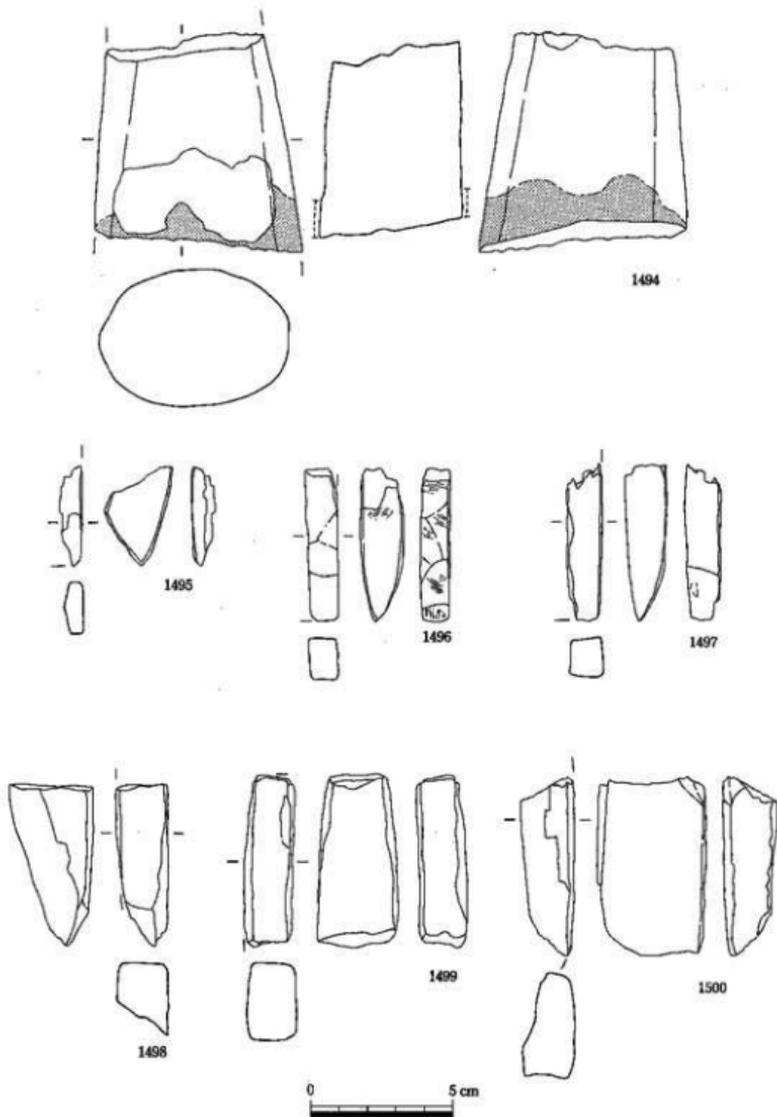
1489



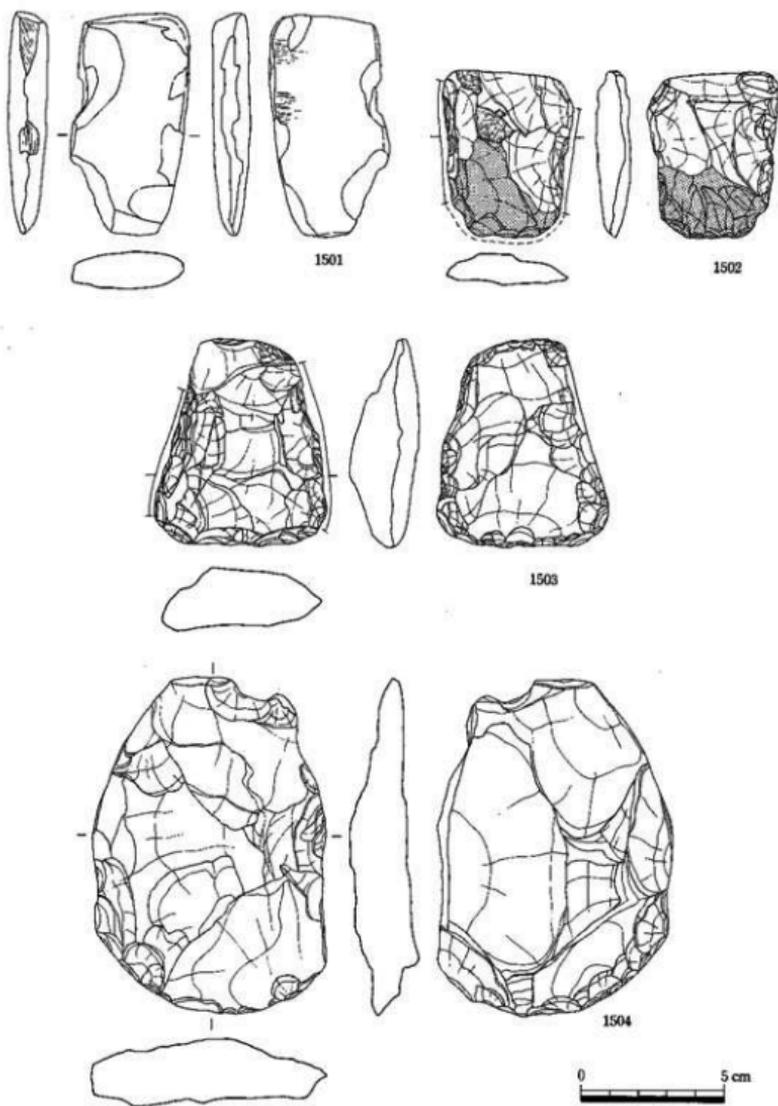
第236圖 SR 0 4 中層出土遺物⑩



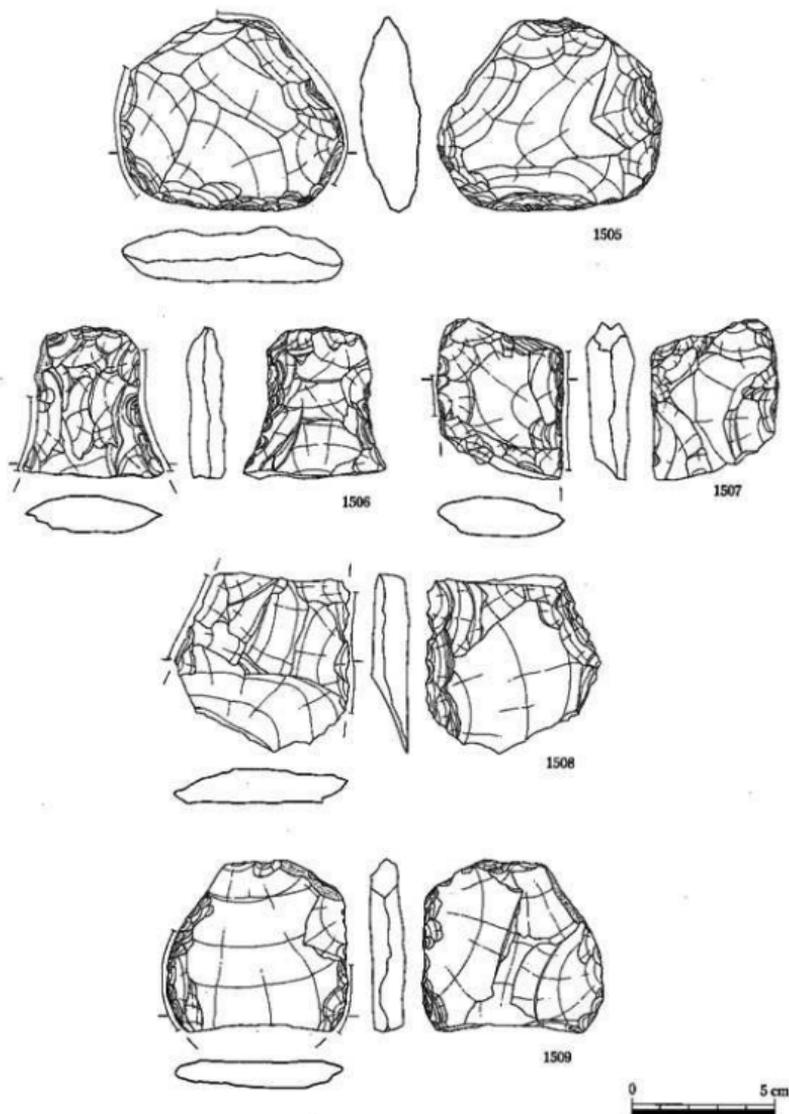
第237圖 SR 0 4 中層出土遺物⑨



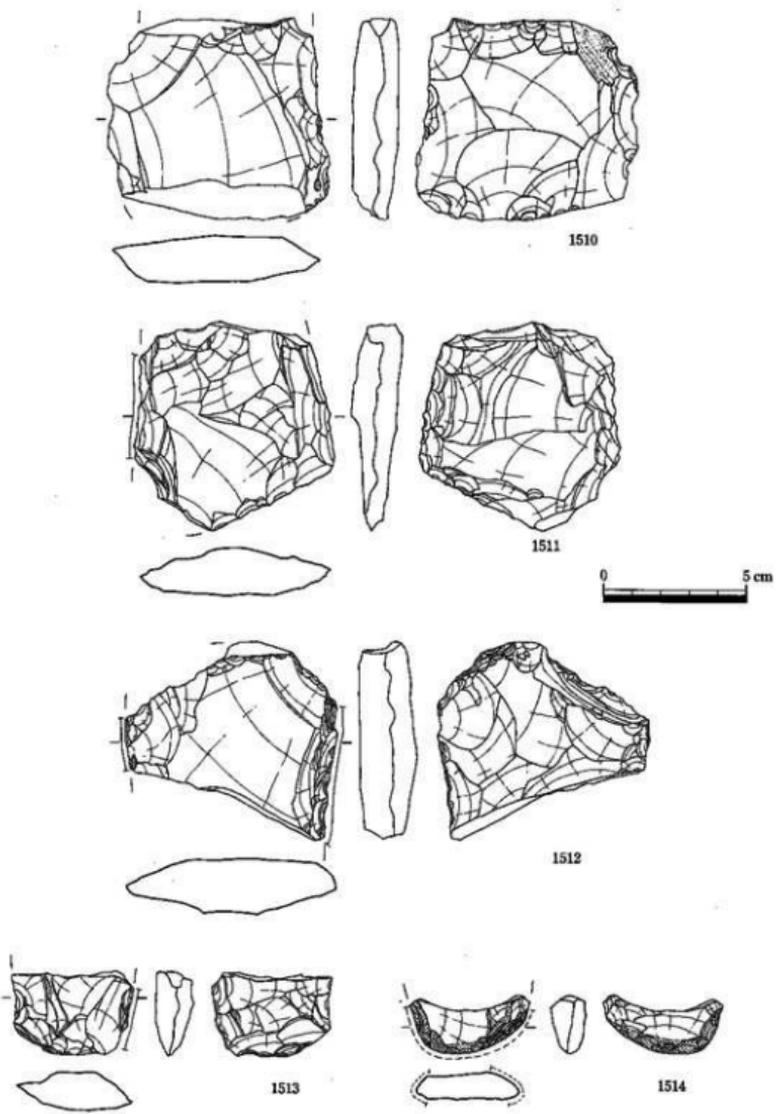
第238圖 SR 0 4 中層出土遺物②



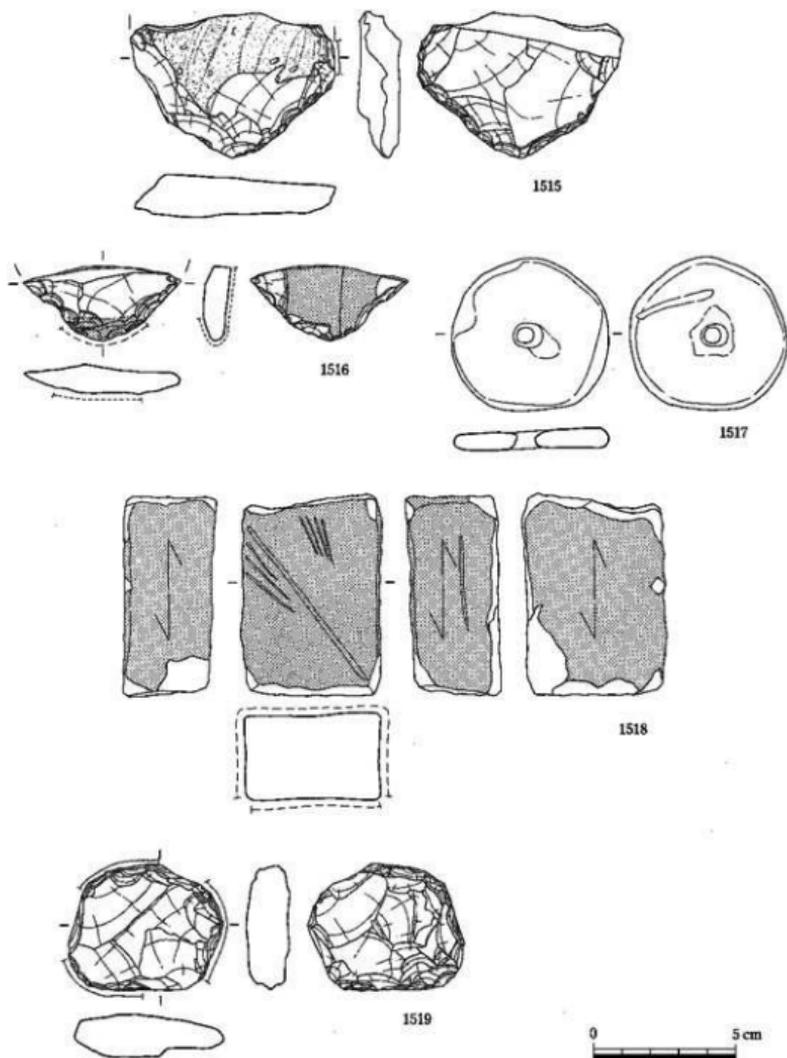
第239圖 SR 0 4 中層出土遺物①



第240図 SR04中層出土遺物②



第241圖 SR 0 4 中層出土遺物②



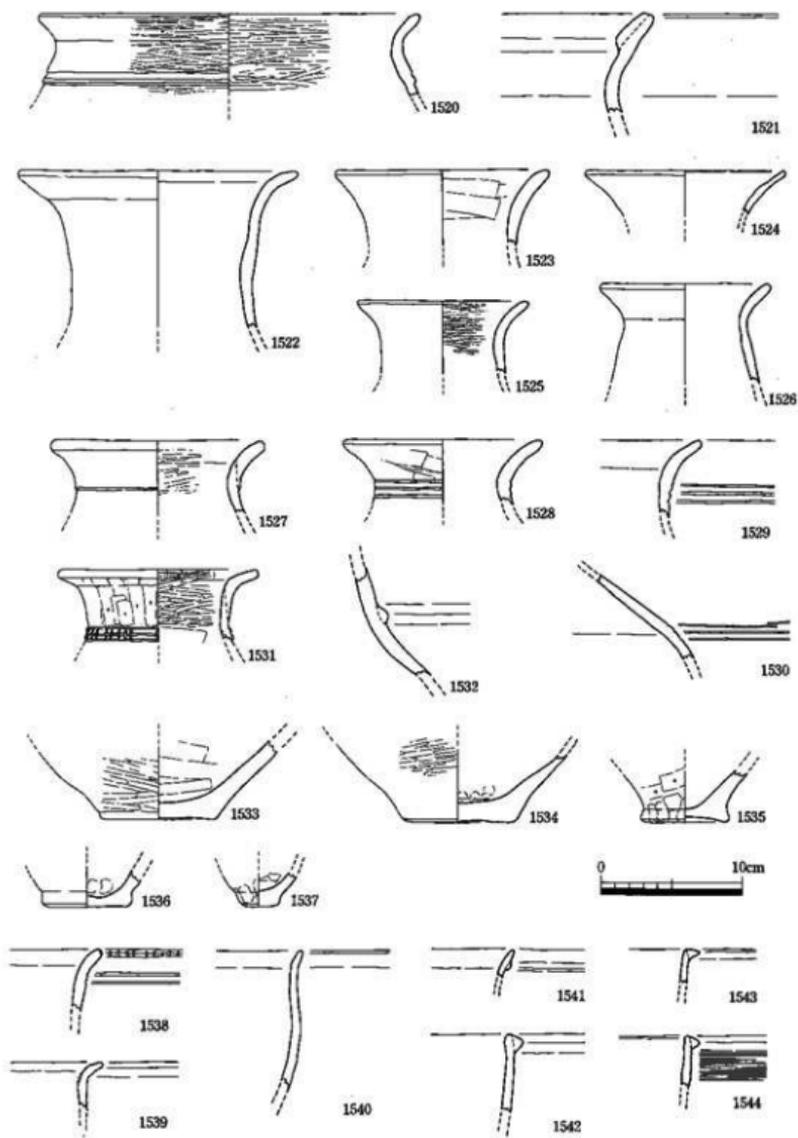
第242圖 SR 0 4 中層出土遺物②

・SR04上層・支流出土遺物（第243～247図）

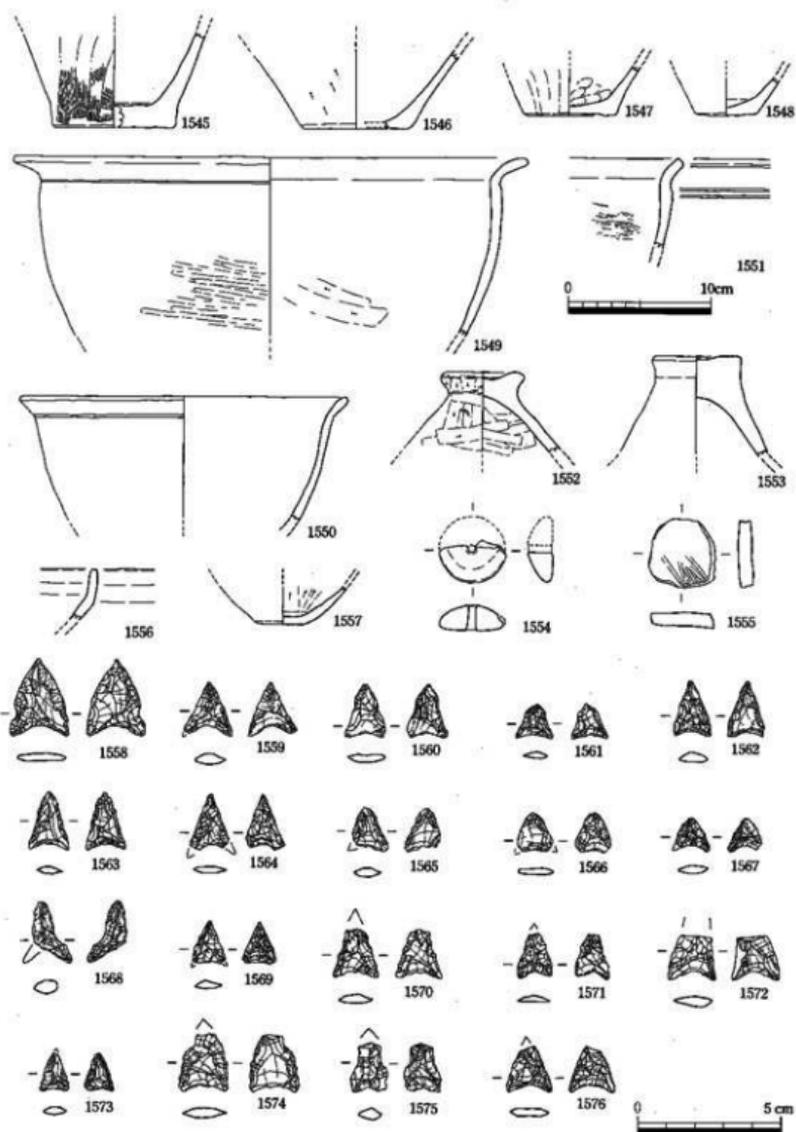
出土した遺物には弥生土器・石器がある。

土器には壺形土器・甕形土器・鉢形土器・蓋形土器・土製品がみられる。壺形土器の大形品には、口頸部の境に段を持つ1520と、口縁部内面に粘土紐を貼り付けた段を持つ1521がある。中・小形品では口頸部及び頸胴部の境が無文のもの（1522～1526）、段を持つもの（1527）、ヘラ描き沈線を持つもの（1528～1530）、削出凸帯を持つもの（1531）、貼付凸帯を持つもの（1532）がある。1533～1537は壺形土器の底部である。甕形土器には、如意形口縁のもの（1538～1540）、凸帯文系のもの（1541）、逆L字形口縁のもの（1542～1544）がある。1545～1548は甕形土器の底部である。鉢形土器は、口縁部下にヘラ描き沈線を持つ如意形口縁のものである。蓋形土器（1552・1553）は甕形土器用のものである。1554・1555は土製の紡錘車である。1554は焼成前の穿孔を施したものであるが、1555は土器片を利用した未製品である。1556・1557は取り上げの際に混入した弥生時代後期の土器である。

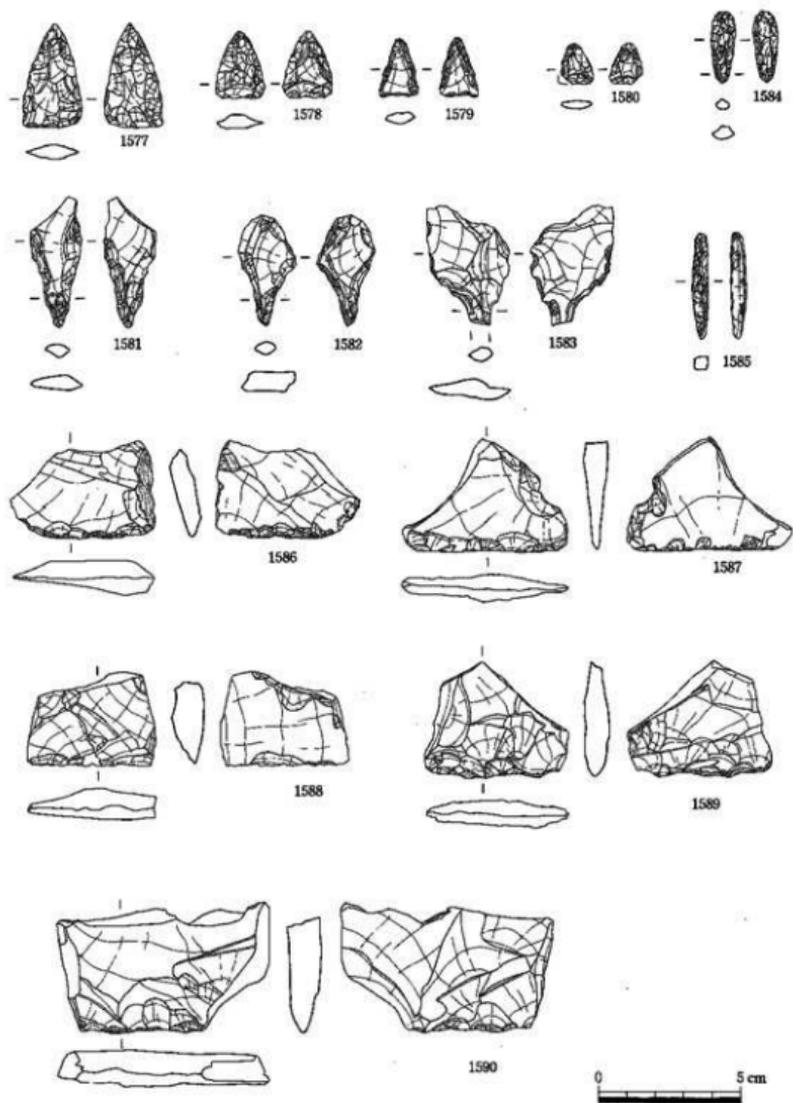
石器には石鏃・石錐・スクレイパー・石庖丁・石斧・紡錘車・不明石器がみられる。石鏃はすべて打製のもので、凹基式と平基式のものがある。石錐は明瞭な頭部を持つものと、持たないものの両者がある。スクレイパーの中で1589・1590は打製石斧の破損品を再利用した可能性がある。1593は打製石剣の先端部の破片と考えられる。1594～1598は磨製石庖丁である。1599は磨製の太型始刃石斧である。1602は磨製紡錘車で、中央に両側からの穿孔がある。1603は結晶片岩製の不明石器である。全体を研磨しており、形態は石棒に類似するものである。



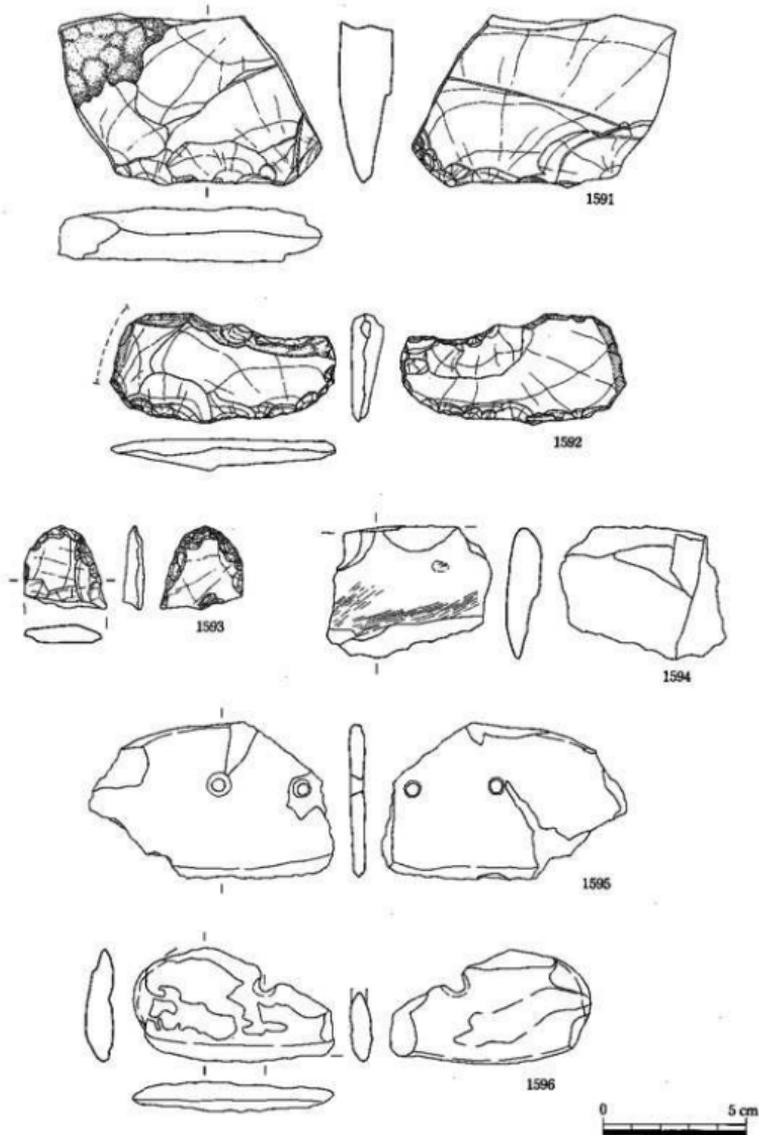
第243圖 SR04上層・支流出土遺物①



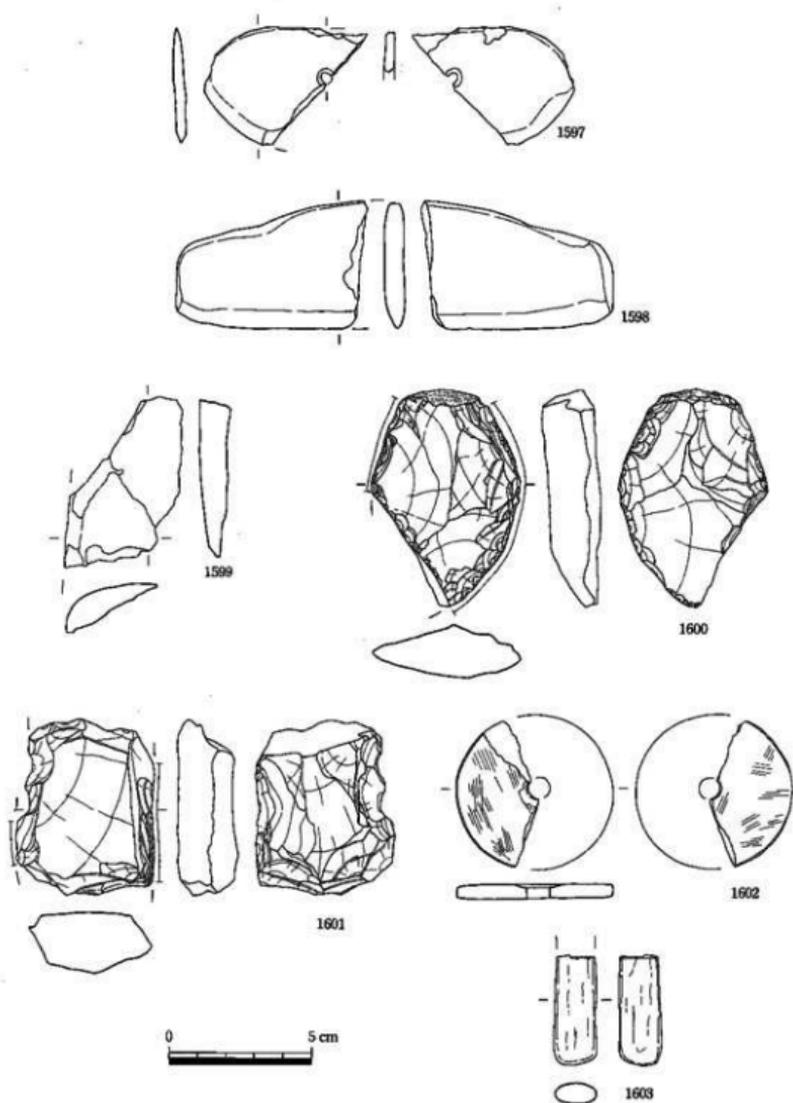
第244圖 SR04上層・交流出土遺物②



第245図 SR04上層・支流出土遺物③



第246圖 SR04上層・支流出土遺物④



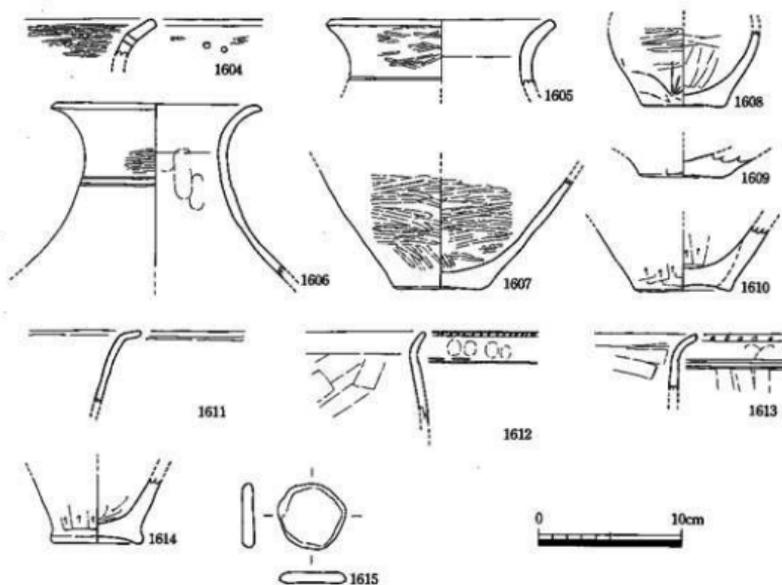
第247図 SR04上層・支流出土遺物⑥

・SR04 其他出土遺物 (第248・249図)

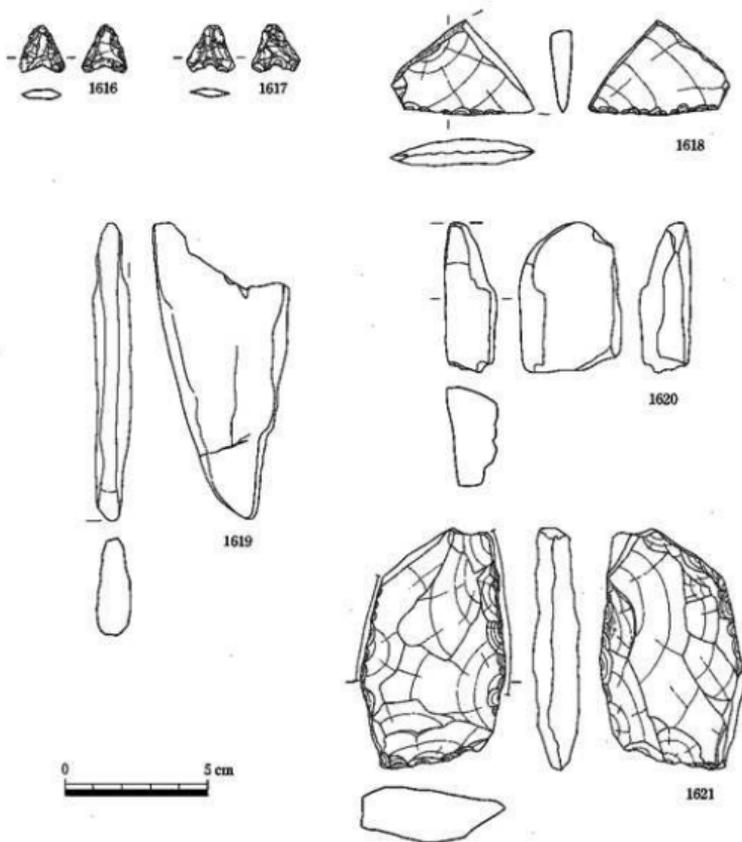
SR04の出土遺物のうち、層位が不明になってしまった遺物を一括して掲載する。層位不明の遺物には土器・石器がある。

土器には壺形土器・甕形土器・土製品がみられる。1604～1610は壺形土器である。口頸部の境にヘラ描き沈線をめぐらせるもの(1605・1606)がある。1607～1610は壺形土器の底部である。1608は胴部下半にヘラ描き文様を施している。1611～1614は甕形土器である。いずれも如意形口縁を持ち、口縁部下が無文のもの(1611)、ヘラ描き沈線を持つもの(1612・1613)がある。1615は土器片を利用した土製紡錘車の未製品である。

石器には石鏃・スクレイパー・石斧がある。1619・1620は柱状片刃石斧の破片である。これらの遺物は、すべて弥生時代前期に属するもので、他時期のものは全くみられない。



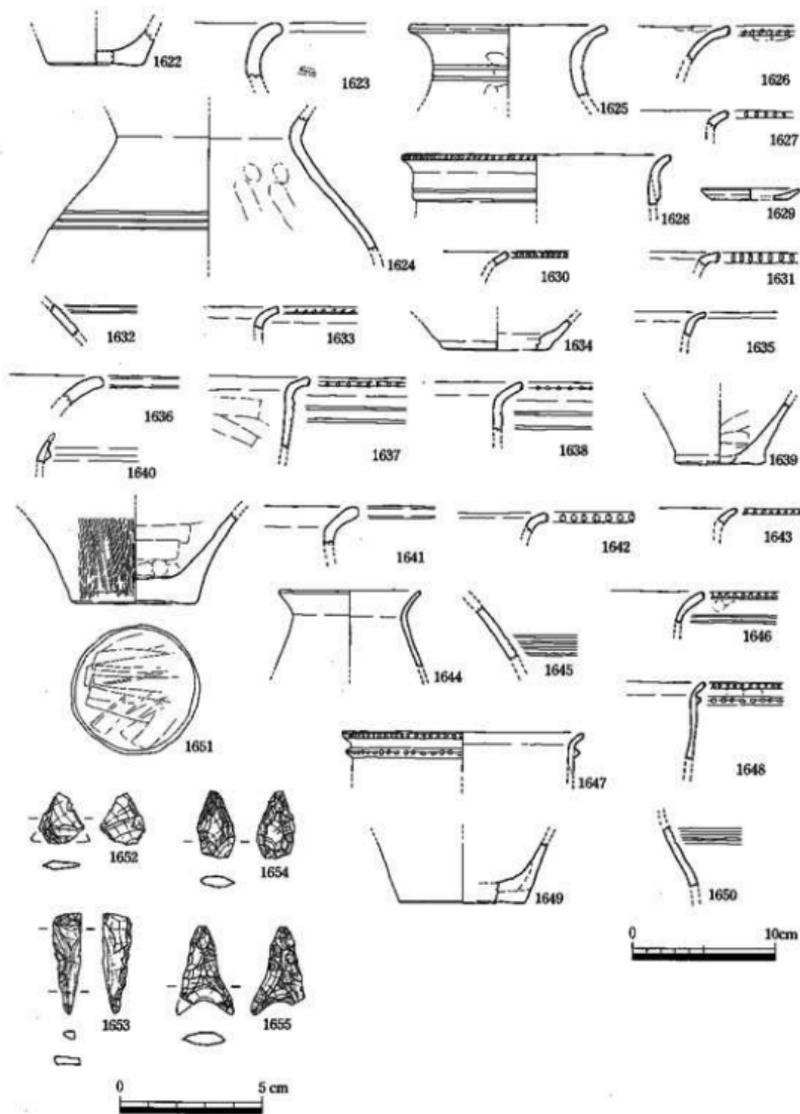
第248図 SR04 層位不明遺物①



第249図 SR04層位不明遺物②

SP (第250図)

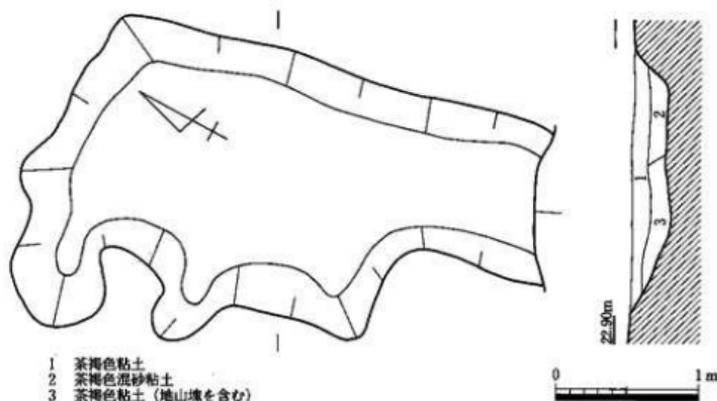
ここでは柱穴から出土した弥生時代の遺物を一括した。柱穴と遺物の対応は観察表を参照されたい。土器には壺形土器・甕形土器がみられる。壺形土器は口頸部及び頸胴部の境が無文のものと、へら描き沈線を持つものがある。甕形土器は、如意形口縁と凸帯文系であり、逆L字形口縁は出土していない。如意形口縁の口縁部下の施文は、無文のもの、段



第250图 SP出土遺物①

を持つもの、ヘラ描き沈線を持つものがある。凸帯文系のもは、如意形口縁に1条の凸帯を貼り付けたものである。1629は平安期の土師器の小皿であるが、混入したものである。石器は石鏃・石錐が出土している。

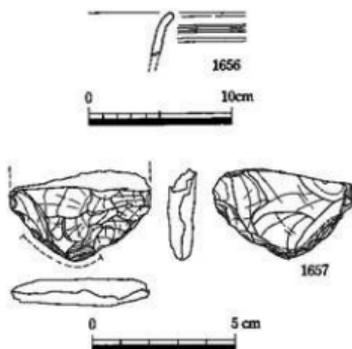
SX03 (第251・252図)



第251図 SX03平・断面図

ⅡC区のH6グリッドで検出した不明遺構である。平面形態は不定形な土坑に溝状遺構が取り付いたような形態を呈している。長さ336cm、幅226cm、深さ26cmの規模を持ち、南端は調査区外へ続いているようである。断面形態は逆台形で、埋土は3層に分かれる。最下層には地山の小土塊が含まれており、人為的に一部を埋め戻した可能性がある。

弥生時代前期の土器と石器が出土している。1656は如意形口縁でヘラ描き沈線をめぐらせた壺形土器である。1657は打



第252図 SX03出土遺物

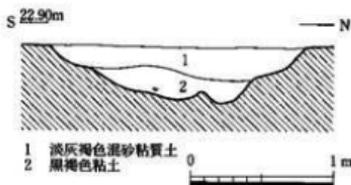
製石斧の刃部破片である。

SX04 (第253・254図)

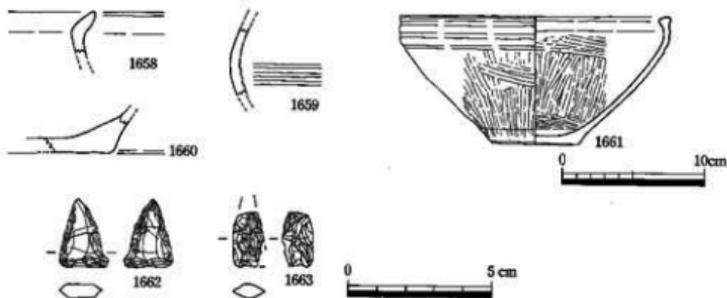
ⅡC区のH6グリッドで検出した不明遺構である。平面形態は長楕円形を呈し、長径766cm、短径176cm、深さ38cmの規模を持つ。断面形態は碗状を呈し、埋土は2層である。遺物は土器・石器が出土している。

1658～1660は弥生時代前期の壺形土器である。1661は口縁端部を肥厚させ、口頭部

に3条の凹線を施した弥生時代中期後半の鉢形土器である。1662・1663はサヌカイトの打製石鏃である。本遺構の年代であるが、鉢形土器1661が底面に接する形で出土していることから、弥生時代中期後半のものと判断できる。1661以外の弥生時代前期の遺物は、埋没段階での周辺からの混入であろう。龍川五条遺跡において確認できた弥生時代中期後半の遺構は、本遺構が唯一の例である。



第253図 SX04断面図

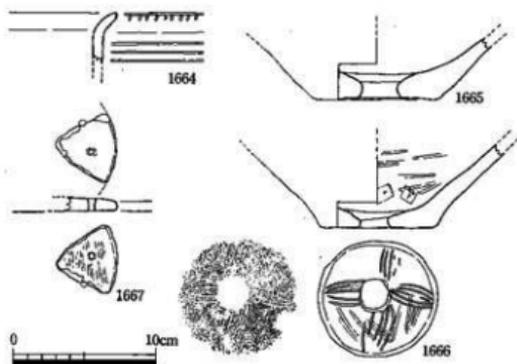


第254図 SX04出土遺物

SX05 (第255図)

ⅢA区のI8グリッドで検出した不明遺構である。SD42の南に位置し、SR04と接続している。平面形態はいびつな楕円形の土坑に溝状遺構が取り付けいたような形態を呈し、長さ326cm、幅260cm、深さ56cmの規模を持つ。内部には拳大から小児頭大の亜円礫が多量に充填されている。礫の中から弥生時代前期の土器が出土している。

1664は如意形口縁で、ヘラ描き沈線をめぐらせた甕形土器である。1665・1666は壺形土器を転用した甕形土器である。1666の底面には、ヘラ描きによる木葉文が施されている。1667は円盤形をした壺形土器用の蓋形土器である。

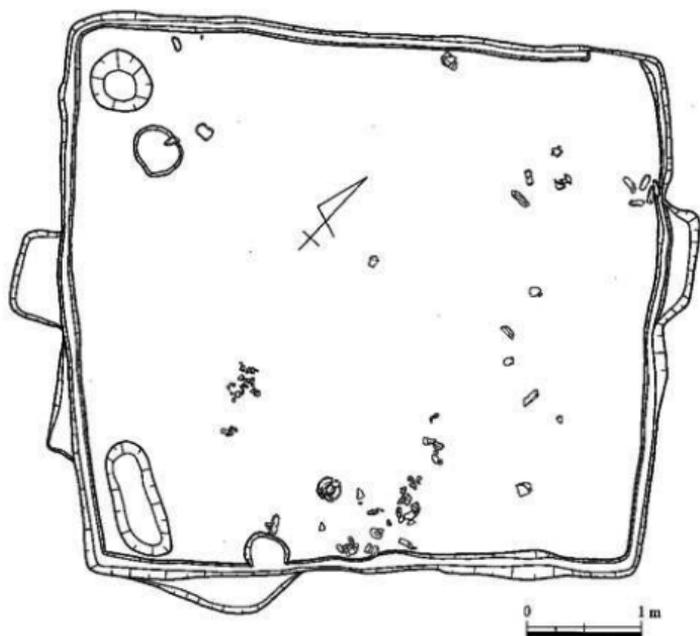


第255図 SX05出土遺物

(3) 弥生時代後期から古墳時代初頭の遺構・遺物

SH01 (第256～258区)

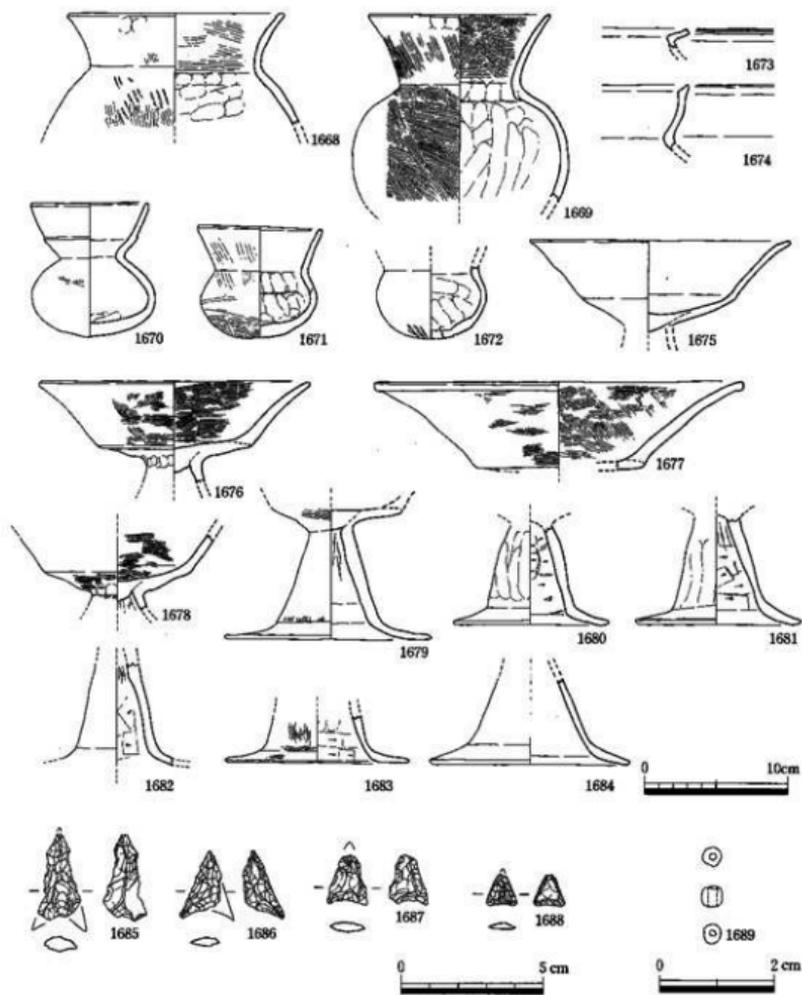
ⅢA区のI8グリッドで検出した竪穴住居である。平面形態は隅丸方形を呈しており、一辺462～493cm×484～533cm、深さ16cmの規模である。建物の主軸はN44°Wの方向を持ち、主柱穴は4本である。主柱穴のうち3本には柱痕が認められ、その太さは直径18～20cmを測る。柱穴間の距離は柱痕間で212～246cmを測る。建物内には、主柱穴の他に3基の柱穴が認められるが、これらは補助的な柱を立てたものと考えられる。内部の壁沿いには、幅10～18cm、深さ8cmの壁溝が、一部途切れているものの、ほぼ全周してめぐらされている。建物の中央付近には、炉の存在を示すような施設は認められなかった。建物内部には柱穴の他に土坑が3基存在するが、何らかの貯蔵を目的としたものと考えられる。また、北西辺を除く3辺に、床面より一段高い張り出し状の施設が付随しているが、その性格及



第256図 SH01遺物出土状況平面図

び機能については判断できていない。

遺物は、竪穴住居の東半部を中心とした床面直上で、古墳時代初頭の土師器と石器が出土している。また、埋土中からはガラス製小玉が1点出土している³⁾。出土した土師器には広口壺形土器・小形丸底壺形土器・甕形土器・高杯形土器がみられる。広口壺形土器には肩のあまり張らない1668と、強く肩の張る1669がある。小形丸底壺形土器のうち1670は二重口縁を有する。甕形土器は口縁部の小破片がわずかに出土しているだけで、全体の形状等については不明である。高杯形土器は、杯部の中位に明瞭な稜を持ち、大きく開く上半部を有したもので、脚部は裾部が鋭く折れて開く形態をとるものである。これらの土器の中で壺形土器1668～1670・甕形土器1673は、胎土に角閃石・金雲母粒を多く含んだいわゆる「下川津B類土器」である。石器はサヌカイトを使用した打製の石鏃（1685～1688）がある。1689は薄い青色を呈するガラス製の小玉である。

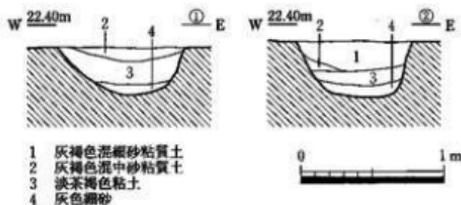


第258图 SH01出土遗物

SD04 (第259図)

IA区のB・C4グリッドで検出した溝状遺構である。概ね南から北の方向を有する。検出長17.40m, 幅88cm, 深さ40cmの規模を持ち, 断面形態はU字形を呈する。

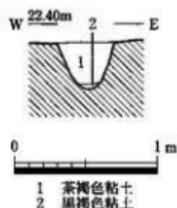
SD05と接続している。弥生時代後期と考えられる土器片がわずかに出土している。



第259図 SD04 断面図

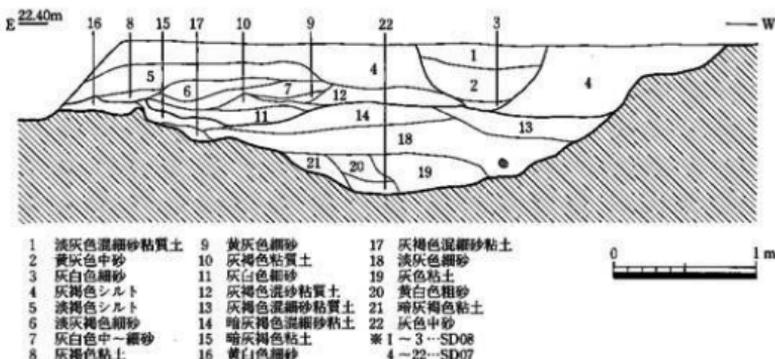
SD05 (第260図)

IA区のB3・4グリッドで検出した溝状遺構である。概ね南東から北西の方向を有している。検出長8.40m, 幅40cm, 深さ34cmの規模で, 断面形態はU字形を呈している。遺物はないが, SD04と接続しており同時期に機能していた溝状遺構と考えられることから, 弥生時代後期のものと考えられる。



第260図 SD05 断面図

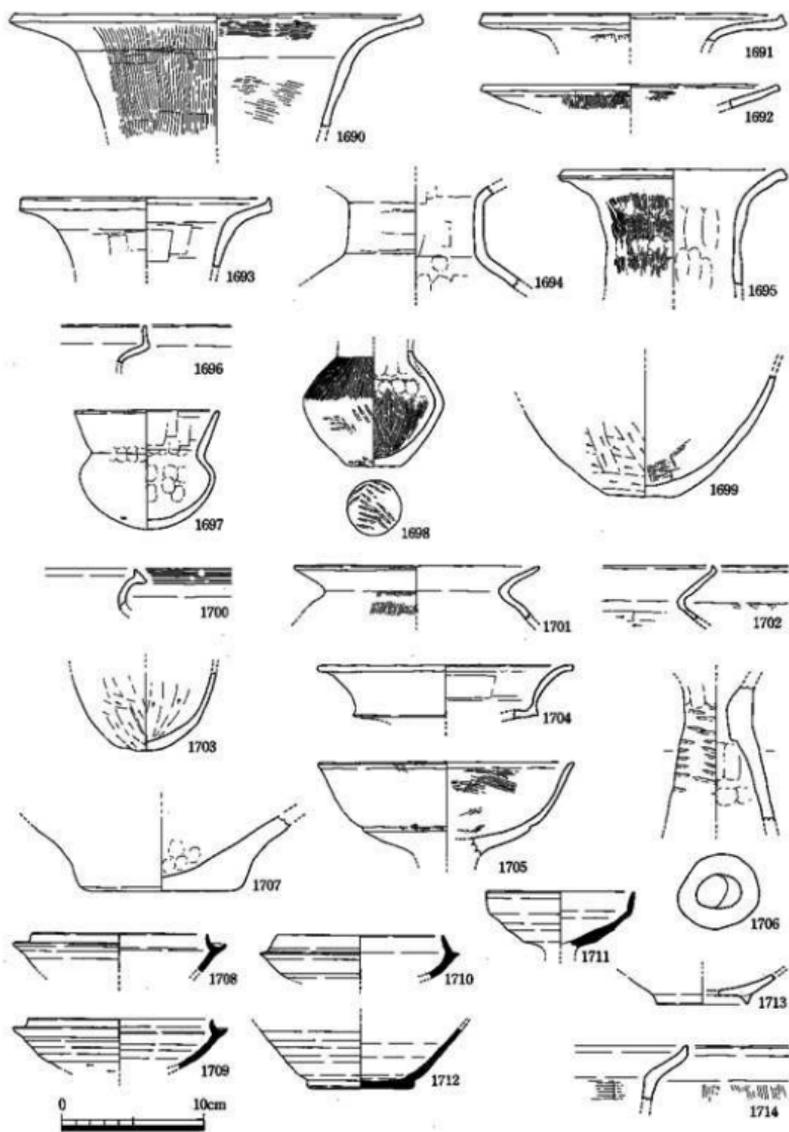
SD07 (第261~264図)



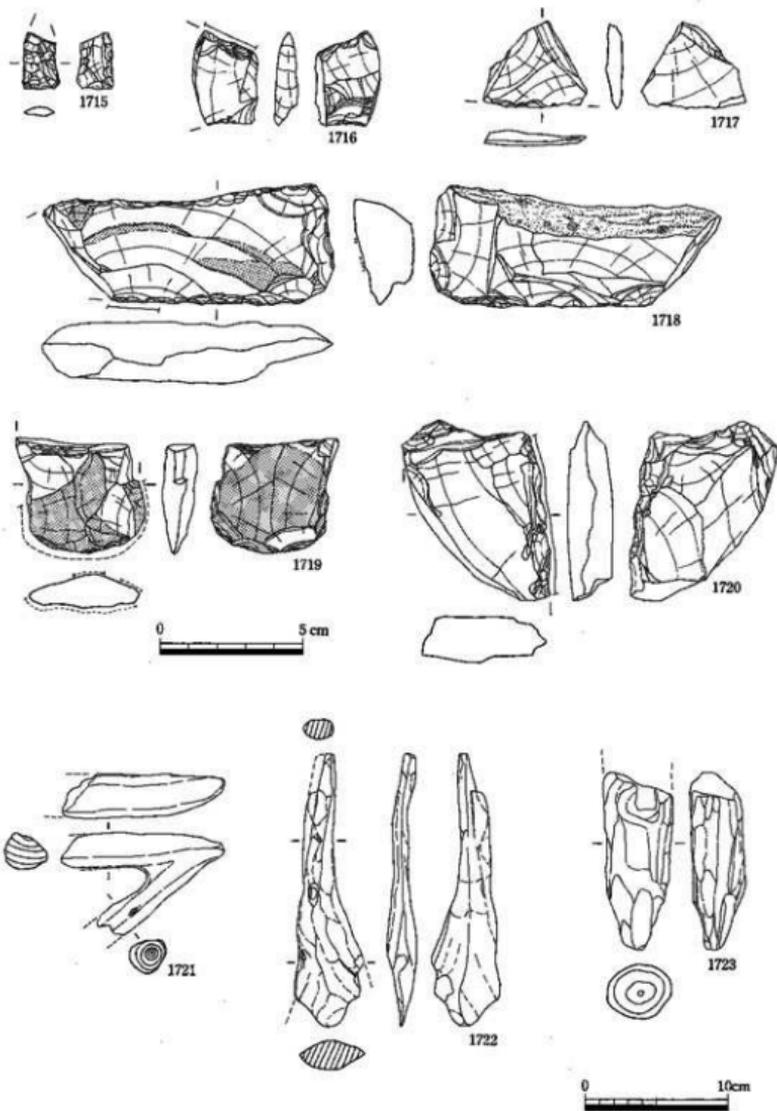
第261図 SD07・08 断面図

I A区のC3～5グリッドで検出した溝状遺構である。概ね南西から北東の方向を有し、途中でSD11・23と合流している。溝状遺構と判断したが、自然河川の可能性もある。検出長32.60m、幅562cm、深さ107cmの規模を持つ。土層の観察から、埋土は大きく上下2層に分けることができるが、基本的に砂屑と粘土層が交互に堆積している状況が認められ、粘土層の中にラミナー状の砂層がみられることなどから、流水と滞水を繰り返しながら埋没していったものと判断できる。

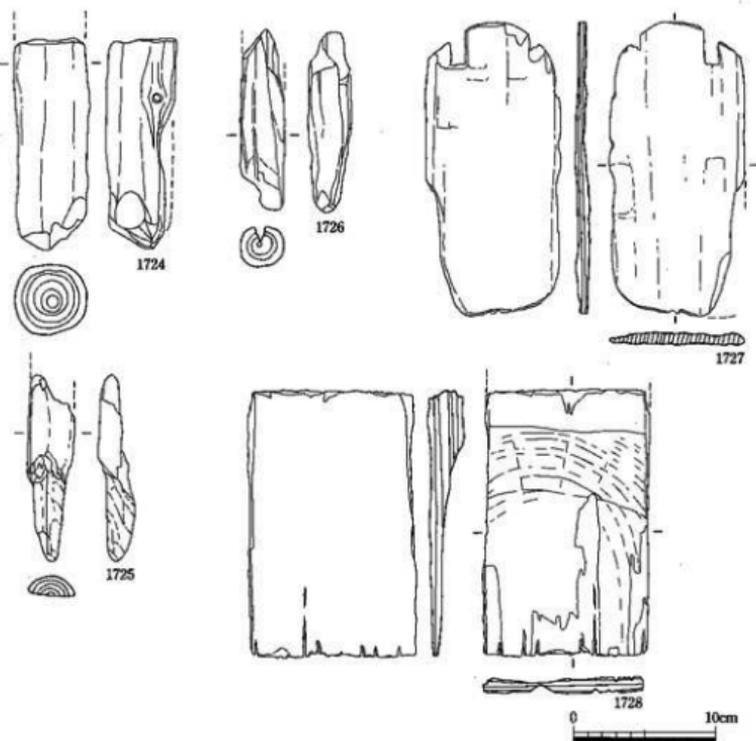
SD07の下層からは弥生時代後期から古墳時代初頭の土器・石器・木器が、上層からは古墳時代後期から奈良時代の土器・木器が出土している。1690～1707は下層出土の土器である。1690～1699は壺形土器である。1690～1693は外傾する頸部から大きく開いた口縁部を持つ広口壺形土器である。1692は不明瞭であるが、それ以外は口縁端部を積み上げる特徴を持つ。1694は短めで直立する頸部を持つ広口壺形土器である。1695は直立する長い頸部を持つ長頸壺形土器である。1696は二重口縁になる口縁部の破片である。1697は完形の小形丸底壺形土器で、底部付近に靱沓痕が認められる。1698は算盤玉形の胴部を持つ小形の長頸壺形土器である。1700～1702は甕形土器である。1700は口縁端部を上下に拡張して凹線を施している。1702は口縁端部を積み上げている。1703は丸底の鉢形土器と思われる。1704・1705は高杯形土器の杯部である。1704は杯部の中位に明瞭な稜を持ち、大きく開く上半部を有した杯部である。1705は内彎して立ち上がり、口縁部を軽く外反させている。杯部の中位に凹線状の段を有している。1706は両端部を欠損するが、土製の支脚である。これらの土器のうち壺形土器1691・1692・1694・1699、甕形土器1701・1702、土製支脚1706は、いわゆる「下川津B類土器」である。壺形土器や高杯形土器の形態などから、これらの土器の年代は下川津IV式を中心とした年代が想定できるが、若干の時期幅を持っている。1707は弥生時代前期の大形の壺形土器の底部である。SD07下層の埋没段階で混入したものであろう。1708～1714は上層から出土した土器である。1708～1710は須恵器の杯身である。1711は須恵器の無蓋の高杯形土器の杯部である。1712は円盤状高台を持った須恵器の杯である。1713は黒色土器A類の碗である。1714は土師質の土鍋の口縁部である。これらの土器の年代は7世紀初頭から平安時代前半頃で、時期幅を持つ。石器には石鏃・楔形石器・スクレイパー・石斧がみられる。いずれも下層から出土しており、すべてサヌカイトを使用した打製の石器である。1721～1728は木器である。1721～1723は下層から出土したもので、斧柄・スプーン状・杭がみられる。1724～1728は上層から出土したもので、杭・板材がみられる。上層からはこの他に少量の桃核が出土している。



第262図 SD07 出土遺物①



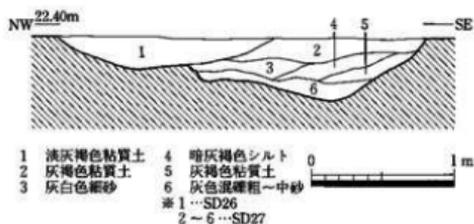
第263図 SD07出土遺物②



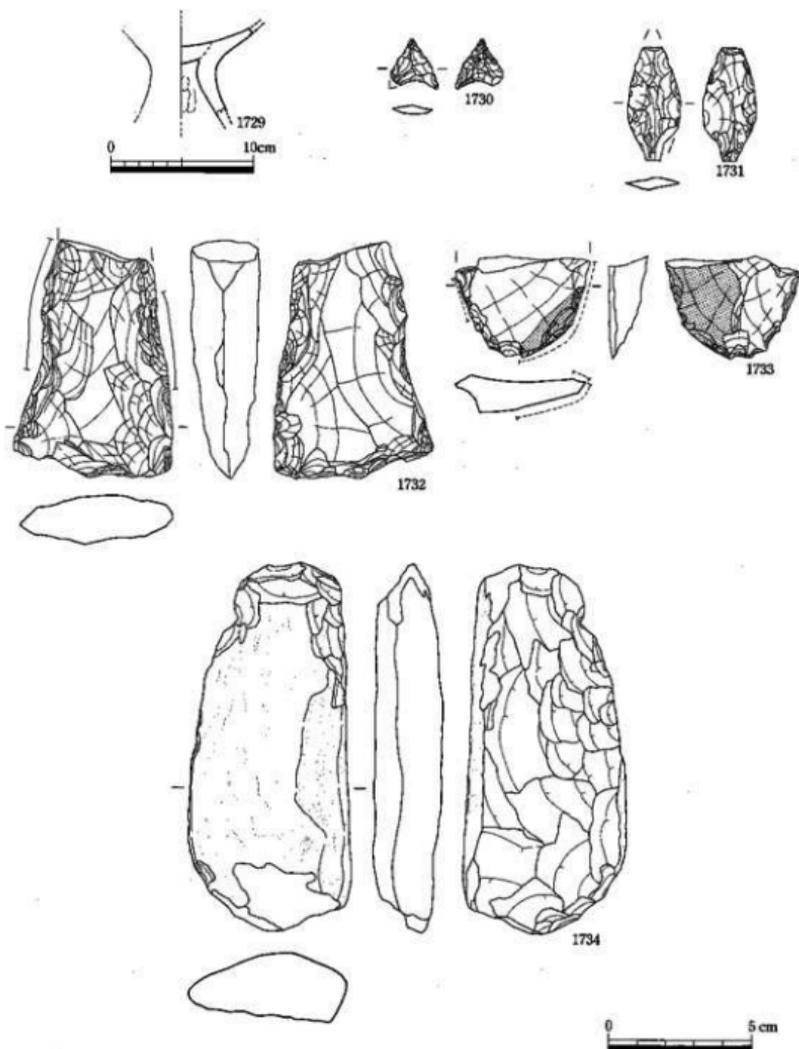
第264図 SD07出土遺物③

SD27 (第265・266図)

I B区のD4・E5, IC区のE5・6グリッドで検出した溝状遺構である。I B区とIC区の間には現代の水路が存在しており、この部分の調査を実施できなかったため確認はできていないが連続する溝状遺構と考えられる。一方



第265図 SD26・27断面図



第266图 SD 27 出土遺物

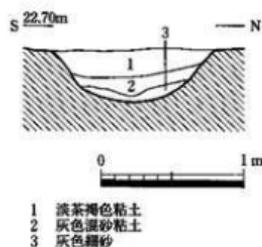
南側は、規模・方向性が近似するIA区のSD20が存在しているが、IA区との間にも現代の水路と農道が存在しているため、連続性については確認できておらず、連続する可能性があることを指摘するだけにとどめておく。検出長37.30m、幅164cm、深さ44cmの規模で、断面形態はレンズ状を呈し、概ね南西から北東の方向を有する。IB区からIC区ではSD26が重なるように存在しており、特にIC区では溝状遺構の下部が辛うじて残存している程度である。

遺物は弥生時代後期の土器・石器がわずかに出土している。1729は高杯形土器の杯と脚部の接合部破片である。杯部の見込み部分は円盤充填手法によっている。弥生時代後期前半の年代が想定できる。1730～1734は石器で、石鏃・石斧がみられる。1734は河原石を使用した打製石斧である。

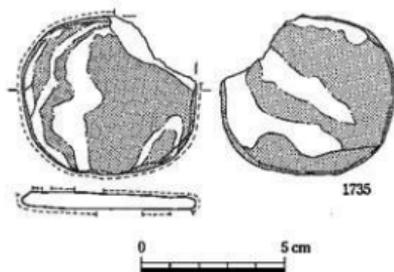
SD38 (第267～269図)

IC区のH7グリッドで検出した溝状遺構である。SR03が埋没した後で作られている。検出長20.35m、幅112cm、深さ36cmの規模を持ち、概ね南東から北西の方向を有する。断面形態は基本的にU字形を呈している。溝状遺構内から、弥生時代前期と弥生時代後期の土器・石器が出土しているが、弥生時代前期の土器・石器は、本溝状遺構の下位に存在するSR03の遺物が混入したものと考えられる。

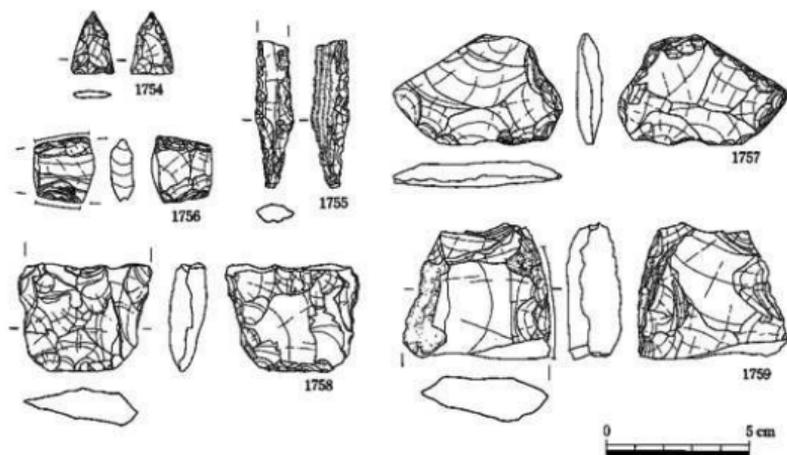
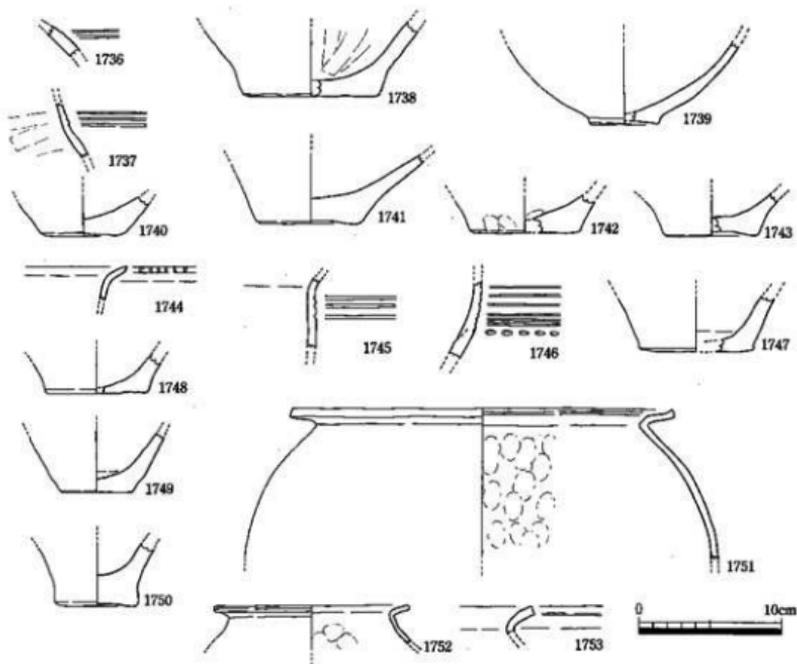
1736～1750は弥生時代前期の土器で、壺形土器と甕形土器がみられる。1751～1753は弥生時代後期末頃の甕形土器である。1751は口縁端部を摘み上げる特徴を持つ。1735・1754～1759は石器である。石鏃・楔形石器・スクレイパー・石斧・紡錘車がみられる。1735は結晶片岩製の磨製紡錘車である。中央に穿孔を施す前段階の未製品である。



第267図 SD38
断面図



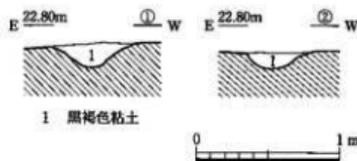
第268図 SD38出土遺物①



第269圖 SD38出土遺物②

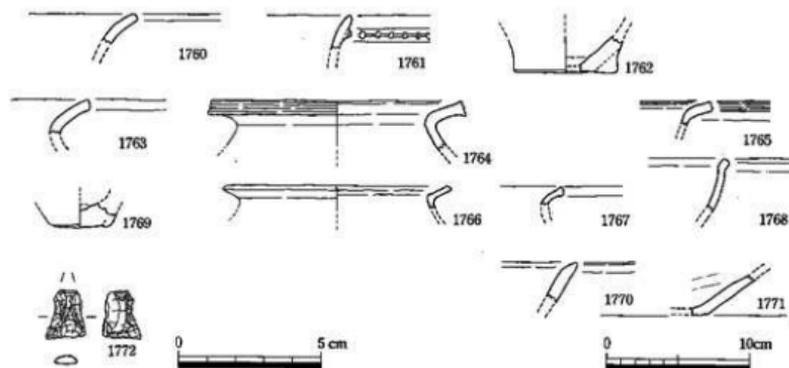
SD39 (第270・271図)

ⅡC区のG・H7, H・I6グリッドで検出した溝状遺構である。SR03がほぼ埋没した後で掘られている。検出長30.80m, 幅56cm, 深さ19cmの規模を持ち, 緩やかに蛇行しながら概ね南東から北西の方向を有する。



第270図 SD39断面図

断面形態は基本的には大きく開いたU字形を呈するが, 逆台形の部分もみられる。調査区の北壁付近では, SK21によって壊されている。遺物は弥生時代前期と弥生時代後期の土器・石器が出土しているが, 弥生時代前期の土器はSR03の遺物が混入したものと考えられる。1760~1762は弥生時代前期の土器である。1761は口縁端部からやや下がった位置に1条の刻目凸帯を貼り付けた, 凸帯文系の甕形土器である。1763~1771は弥生時代後期の土器である。甕形土器には口縁端部を若干拡張して端面に凹線を施すもの(1764・1765), 口縁端部を摘み上げるもの(1766・1767), 内彎する口縁部で端部を軽く外反させるもの(1768)がみられる。1770は鉢形土器の口縁部と判断したが, 高杯形土器になる可能性もある。1771は高杯形土器の杯部の破片である。

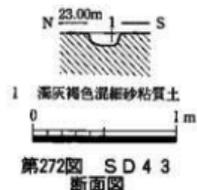


第271図 SD39出土遺物

SD43 (第272図)

ⅢA区のI7・8, J7グリッドで検出した溝状遺構である。検出長17.80m, 幅23cm,

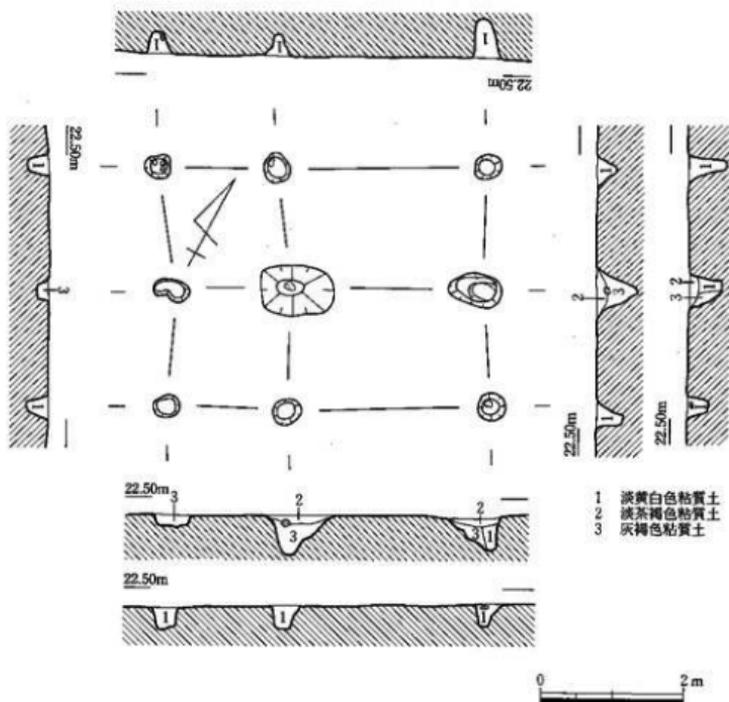
深さ9cmの規模を持ち、断面形態は逆台形を呈している。埋土は単層である。南半はほぼ東西方向であるが、北半は大きく屈曲して南東から北西方向を有している。南端部はSD48が埋没した後に掘られている。遺物は弥生時代後期と辛うじて判断できる程度の細片がわずかに出土している。



(4) 古代から中世の遺構・遺物

SB01 (第273図)

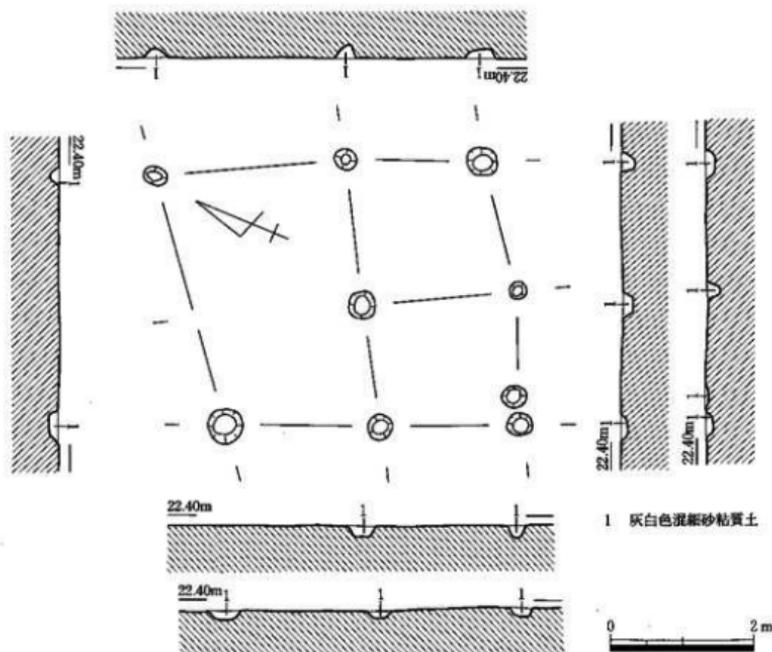
I A区のB4グリッドで検出した掘立柱建物である。桁行2間(4.60m)、梁行2間



(3.40m), 床面積14.6㎡の規模を持ち、総柱構造である。建物の主軸をN62° Eの方向に向けている。この方向は後述するSD02・03と同じ方向性を持っている。9基の柱穴で構成されるが、なかには柱を固定するために石を用いた柱穴もみられる。柱穴内から中世と考えられる土器細片がわずかに出土している。

SB02 (第274図)

IA区のC4グリッドで検出した掘立柱建物である。桁行2間(4.58m)、梁行1間(3.72m)、床面積16.2㎡の規模を持つ。建物の主軸をN23° Wの方向に向けており、概ねSB01と同じ方向とみなすことができる。構造であるが、北辺中央に柱穴が存在していたならば総柱構造となり、存在していないならば建物内に間仕切りを持つ構造が想定される。全体に後世の削平を受けているため、検出した柱穴も下部のみが残存したような状態

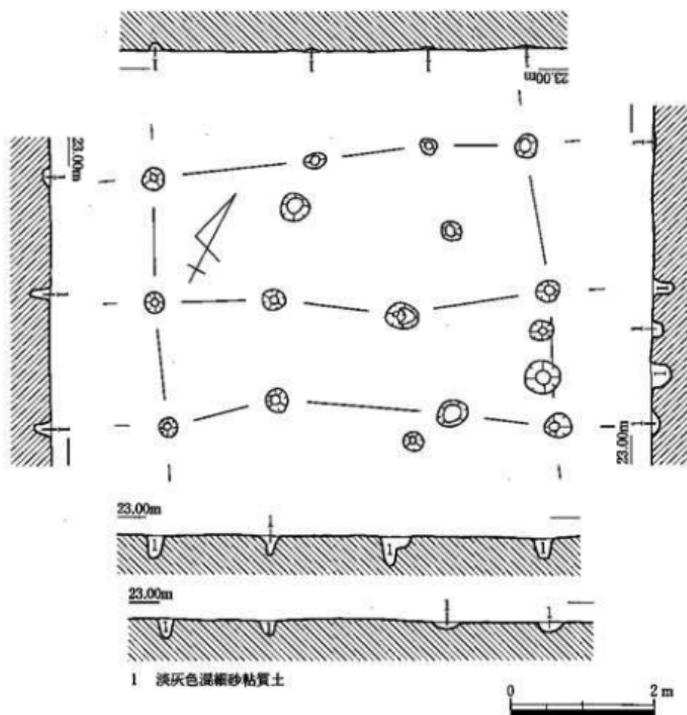


第274図 SB02平・断面図

であり、現状ではいずれとも判断できない。柱穴内からは中世と思われる土器細片がわずかに出土している。

SB03 (第275図)

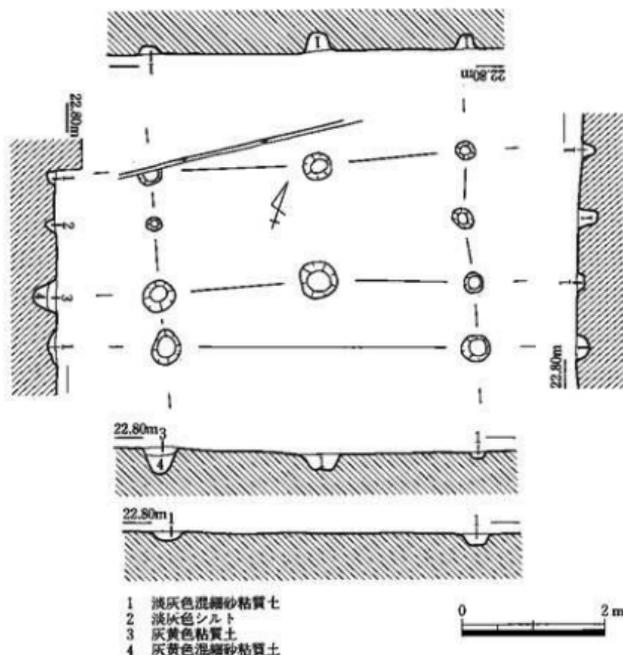
II C区のH6・7グリッドで検出した掘立柱建物である。桁行3間(5.44m)、梁行2間(3.52m)、床面積25.3㎡の規模を持つ。建物の主軸をN61°Eの方向に向けている。基本的には10基の柱穴で構成されると思われるが、それ以外にも7基の柱穴がみられる。柱穴の配列は歪んでおり、総柱構造であるかどうかは判断できない。柱痕を残すものもあり、その太さは18cmを測る。柱穴内からは中世の土師器・須恵器の細片が出土している。



第275図 SB03平・断面図

SB04 (第276図)

ⅡC区のG・H7グリッドで検出した掘立柱建物である。桁行2間(4.40m)、梁行2間(1.84m)、床面積8.1㎡の規模を持つ。建物の南側には庇が付属している。庇を含めた規模は4.40m×2.78mで、床面積は12.2㎡を測る。建物の主軸をN70°Eの方向に向けている。このSB04はSK20・21が埋没した後に建てられている。柱穴内からは中世の土器(土師器・須恵器)の細片がわずかに出土している。

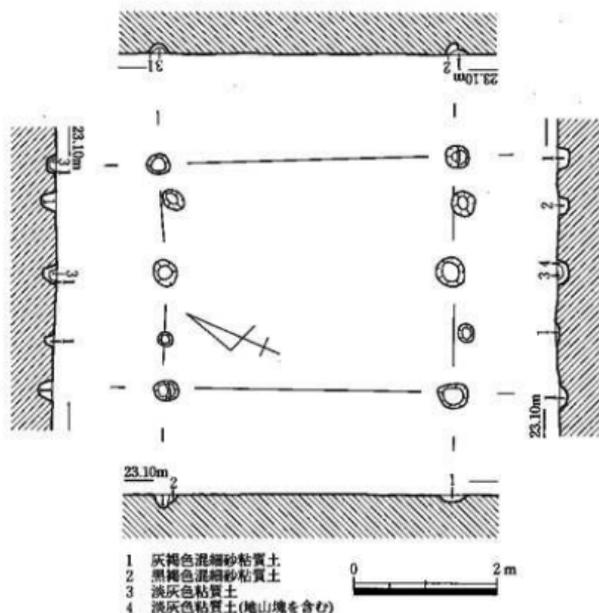


第276図 SB04 平・断面図

SB05 (第277図)

ⅢA区のJ8グリッドで検出した掘立柱建物である。桁行2間(3.38m)、梁行1間(4.18m)、床面積14.1㎡の規模を持ち、桁方向にそれぞれ2基の補助的な柱穴を有している。

桁行が4間の建物とみることもできるが、補助的な柱穴としたものは規模がやや小さいことから、2×1間の掘立柱建物に復元した。全体に著しい削平を受けており、柱穴の下部のみが辛うじて検出できた程度で、梁行が2間以上であった可能性も捨てきれない。建物の主軸をN25°Wの方向に向けている。柱穴内からは古代の土器（土師器）の細片がわずかに出土している。



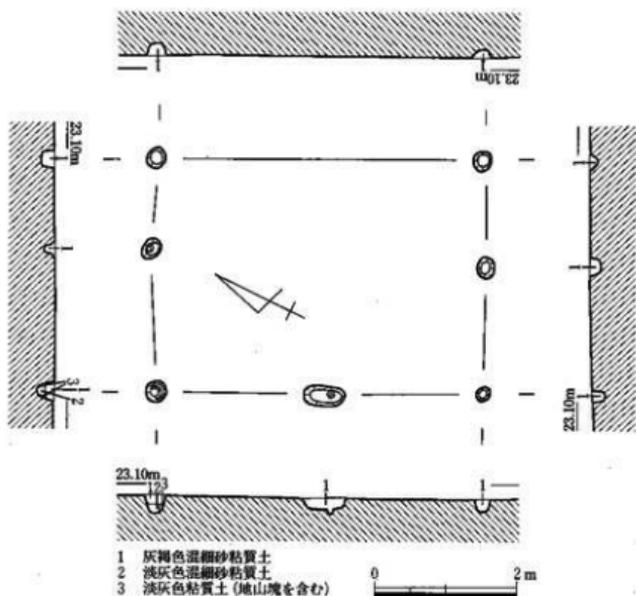
第277図 SB05平・断面図

SB06 (第278図)

ⅢA区のJ7グリッドで検出した掘立柱建物である。桁行3間(5.62m)、梁行2間(3.74m)、床面積21.0㎡の規模を持つ、総柱構造の掘立柱建物である。主軸の方向をN65°Eに向けている。柱穴のなかには柱痕を残すものも認められ、その太さは15cm程度を測る。柱穴内からは古代の土器(土師器・須恵器)の細片が出土している。

SB07 (第279図)

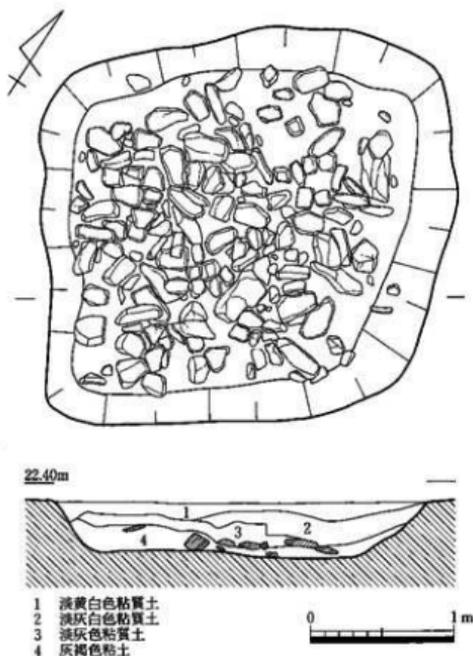
ⅢA区のJ7グリッドで検出した掘立柱建物で、SB06の東側に隣接している。桁行2間(3.24m)、梁行2間(4.60m)、床面積14.9㎡の規模を持つ。建物の主軸はN28°Wの方向で、SB06とほぼ同じ方向である。調査区の東側に現在の水路がありその部分の調査ができなかったため、2間×3間以上の建物になる可能性もある。柱穴には柱痕の残るものもみられ、柱の太さは13cmを測る。柱穴内からは図化できないが、古代の土師器片(杯)が出土している。



第279図 SB07平・断面図

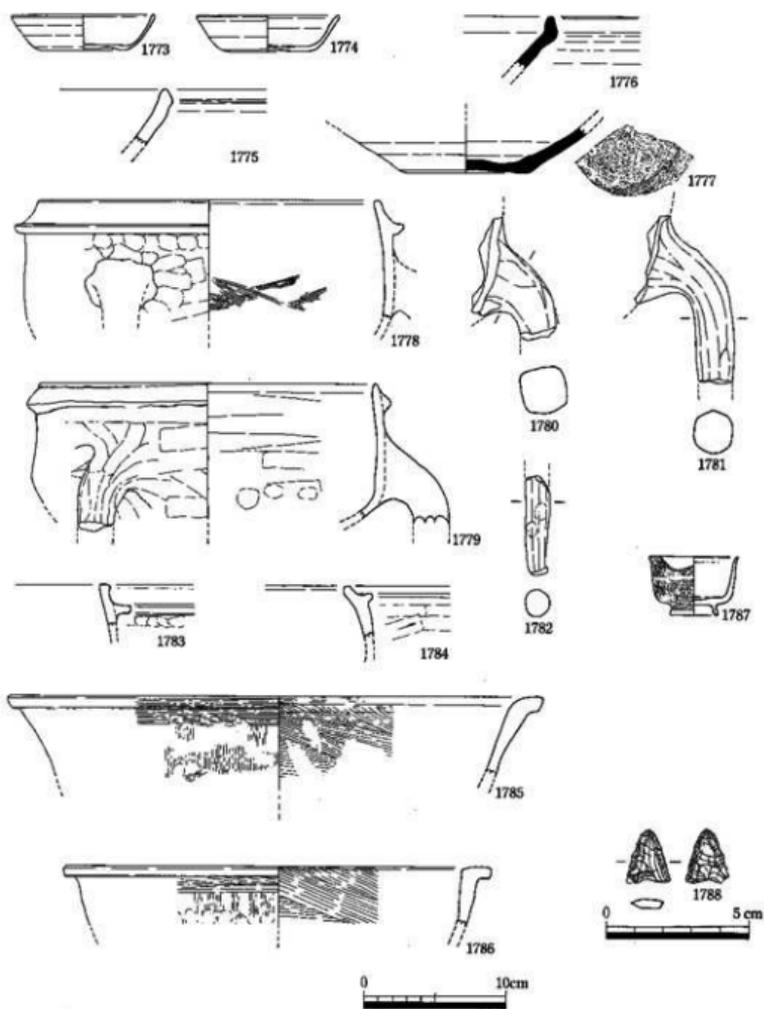
SK01 (第280~282図)

I A区のC4グリッドで検出した土坑である。平面形態は隅丸方形を呈し、長さ290cm、幅280cm、深さ40cmの規模を持つ。断面形態は皿状で、埋土は4層である。第3・4層には拳大から小児頭大の垂円礫・垂角礫を充填している。礫の中には被熱痕の残るものもみられるが、量的にわずかで散在していることや、土坑の壁面に被熱の痕跡がみられないことから、外部で熱を受けた礫を土坑内に入れたものと判断できるが、その性格については不明である。

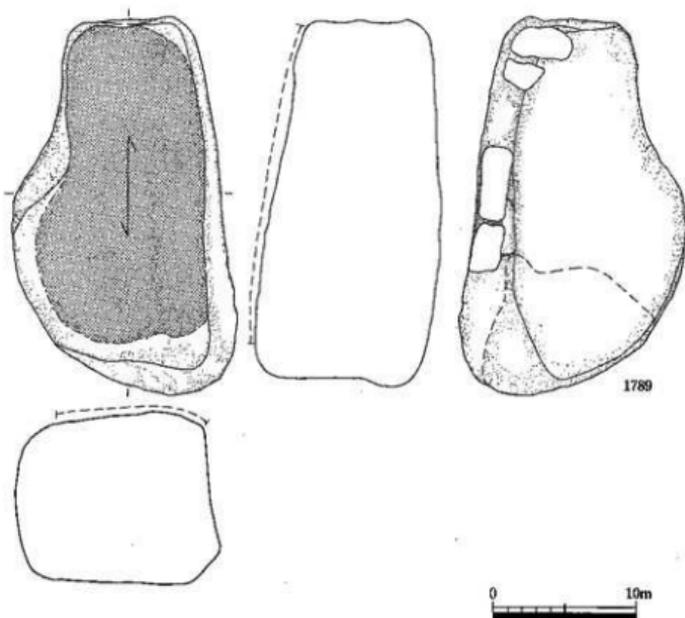


第280図 SK01平・断面図

土坑内からは土器と石器が出土している。1773・1774は回転台土師器の杯である。いずれも底部をへら切りしている。1776・1777は東播系の須恵器のこね鉢である。1778~1784は土師質土器の土釜である。いずれも口縁部のやや下に退化した髷部を有している。1785・



第281図 SK01 出土遺物①



第282図 SK01出土遺物②

1786は土師質土器の土鍋である。1789は自然石を利用した砥石である。これらの中世土器とともに、近世以降の磁器椀（1787）や、弥生時代の石鏃（1788）が出土しているが、この2点は混入したものであろう。

SK19（第283図）

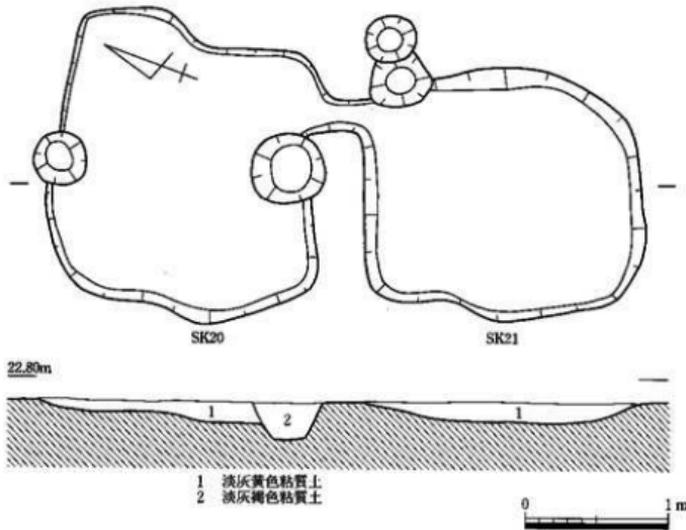
ⅡB区のG6グリッドで検出した土坑である。平面形態はいびつな長楕円形を呈し、長径112cm、短径41cm、深さ12cmの規模を持つ。主軸の方向はN35°Wで、埋土は単層である。中世と思われる土器（土師器・須恵器）の細片がわずかに出土している。



第283図 SK19平・断面図

SK 20 (第284・285図)

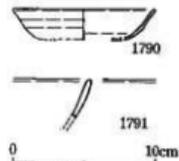
II C区のG 7グリッドで検出した土坑である。平面形態はややいびつな隅丸方形を呈し、長さ209cm、幅188cm、深さ14cmの規模を持つ。主軸の方向はN22° Wで、断面形態は浅い



第284図 SK 20・21平・断面図

皿状を呈している。埋土は単層である。すぐ南に位置するSK 21と浅い溝状遺構で連結している。

土坑内からは古代の土器細片がわずかに出土しており、うち2点を図化した。1790は回転台土師器の杯である。1791は黒色土器A類で、比較的深めの碗である。

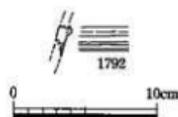


第285図 SK 20
出土遺物

SK 21 (第284・286図)

II C区のG・H 7グリッドで検出した土坑である。平面形態は隅丸方形を呈し、長さ196cm、幅178cm、深さ14cmの規模を持つ。主軸の方向はN22° Wで、断面形態は浅い皿状を呈している。埋土は単層である。浅い溝状遺構でSK 20と連結している。

土坑内からは弥生時代前期と古代の土器（土師器・格子叩き目を持つ須恵器）の細片がわずかに出土している。1点を図化した。1792は弥生時代前期の凸帯文系の甕形土器の口縁部破片である。周囲から混入したものと思われる。

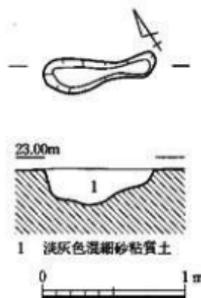


第286図 SK 2 1
出土遺物

SK 4 9 (第287図)

ⅢA区のJ7グリッドで検出した土坑である。平面形態は瓢箪のような長楕円形を呈し、長径80cm、短径24cm、深さ26cmの規模を持つ。主軸はN62°Wの方向である。断面形態はいびつな逆台形状で、埋土は単層である。

土器の細片がわずかに出土している。

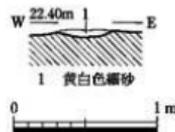


第287図 SK 4 9
平・断面図

SD 0 2 (第288図)

ⅠA区のB4グリッドで検出した溝状遺構で、掘立柱建物SB01のすぐ西側に位置する。検出長4.90m、幅38cm、深さ6cmの規模を持つ。断面形態は浅いレンズ状で、埋土は単層である。ⅠA区の北西隅付近でSD03と直交している。

遺構内から遺物は出土していないが、SB01の主軸と同じ方向を有していることから、中世の溝状遺構と思われる。



第288図 SD 0 2
断面図

SD 0 3 (第289図)

ⅠA区のB4グリッドで検出した溝状遺構で、掘立柱建物SB01のすぐ北側に位置する。検出長9.50m、幅38cm、深さ8cmとSD02と類似した規模を持つ。断面形態は浅いレンズ状で、埋土は単層である。SD02と同様に遺物は出土していないが中世の溝状遺構と思われる。

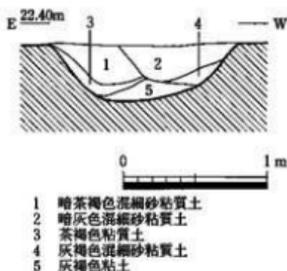


第289図 SD 0 3
断面図

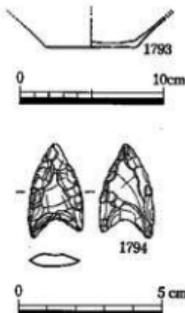
SD06 (第290・291図)

I A区のB3・4, C4グリッドで検出した溝状遺構である。わずかに蛇行しながら、概ね南西から北東の方向を持ち、SD10とほぼ平行している。一部をSD01及びSK01によって壊されている。検出長23.80m, 幅122cm, 深さ39cmの規模を持ち、断面形態は逆台形を呈している。

遺構内からはわずかに古代の土師器片・石器が出土している。1793は回転台土師器の杯である。1794はサマカイトを使用した凹基式の打製石鏃である。石鏃は混入したものであろう。



第290図 SD06 断面図



第291図 SD06
出土遺物

SD08 (第261図)

I A区のC3～5グリッドで検出した溝状遺構で、概ね南西から北東の方向を有し、検出長23.20m, 幅92cm, 深さ46cmの規模を持つ。本来はSD18と連続する1条の溝状遺構であったと考えられるが、土層観察用の畦とSD01が存在するために確認できていない。下位に存在するSD07がほぼ埋没した段階で掘られている。

遺構内からは中世の土器(土師器・須恵器)細片がわずかに出土している。

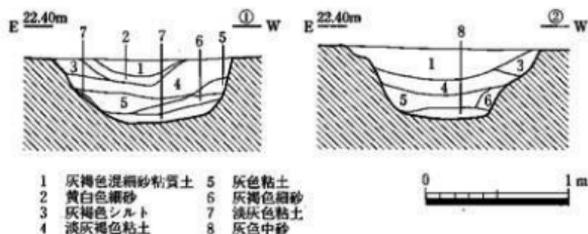
SD10 (第292～295図)

I A区のC3～5グリッドで検出した溝状遺構である。わずかに蛇行しながら、概ね南西から北東の方向を持ち、SD06とほぼ平行している。一部をSD01・09・SE01・SK05によって壊されている。検出長37.80m, 幅136cm, 深さ50cmの規模を持ち、断面形態は逆台形を呈する。埋土は砂質土と粘質土が基本的に交互に堆積しており、流水

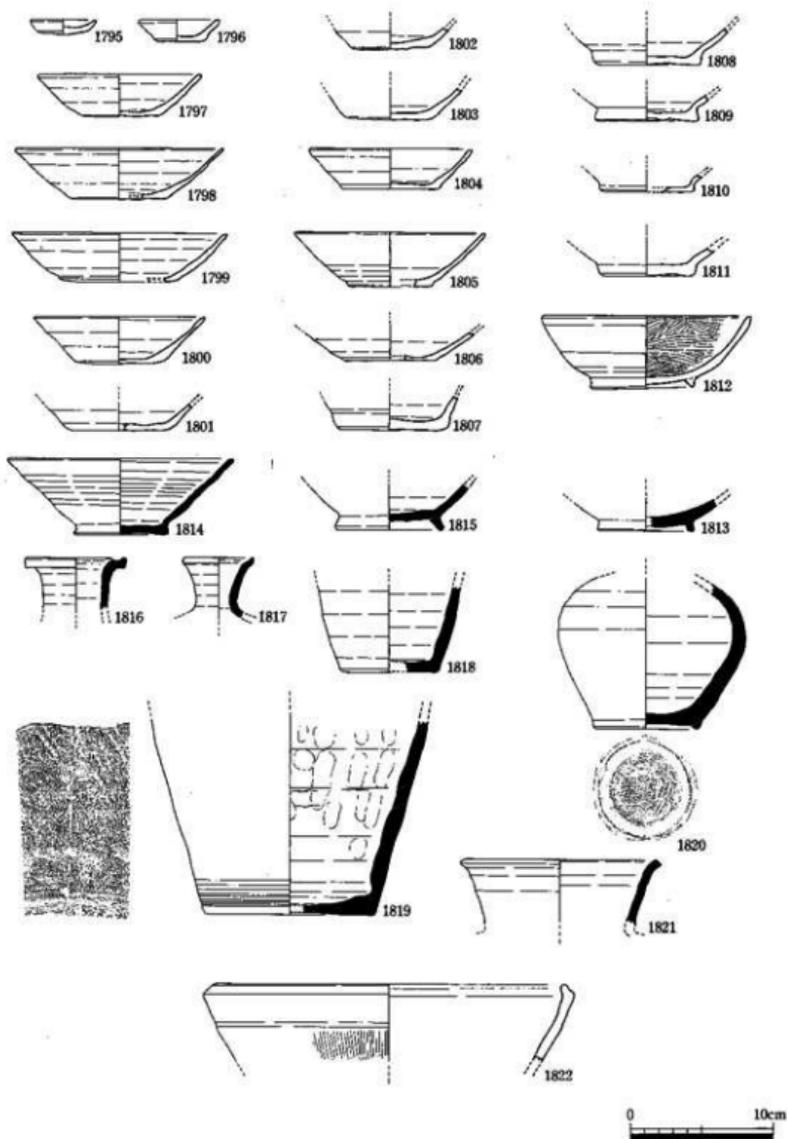
と滞水を繰り返しながら埋没したことがわかる。

遺構の中からは古代を中心とした土器が出土している。土器には土師器・黒色土器・緑釉陶器・須恵器・土師質土器がある。1795・1796は土師器の小皿である。底部はいずれもヘラ切りである。1797～1811は回転台土師器の杯である。いずれも底部はヘラ切りである。底部と体部の境は明瞭な稜を持つものが多く、体部はやや内彎するものが多い。1807～1811は円盤状高台を持つ底部である。1812は黒色土器A類の碗である。1813は緑釉陶器の碗である。削り出しによる高台を持ち、全面に施釉がみられる。1814・1815は須恵器の碗である。1814は円盤状高台と、直線的に外上方へ延びる体部を持つ。1815は内彎する体部を持ち、貼り付け高台である。1816～1820は須恵器の壺形土器である。1819は底外面の一部に布の汗痕がみられる。1820は底面にヘラ記号を持つ。1821は須恵器の壺形土器である。1822は土師質土器のこね鉢である。1823～1828は土師質土器の羽釜である。いずれも胴長の体部を持ち、水平に付けた鋳の端部を上方へ摘み出している。体部外面には縦方向のハケ調整が施されている。1829は土師質の土釜である。1830～1833は土師質の土鍋である。いずれも胴長の体部を持つものと思われる。体部外面は縦方向のハケ調整を基本としている。1834は土師質土器の銷壺である。内外面に粘土紐の接合痕と指押さえの跡を顕著に残す。1835・1836は土師質土器の竈である。1836は炊き口部右側の底部である。

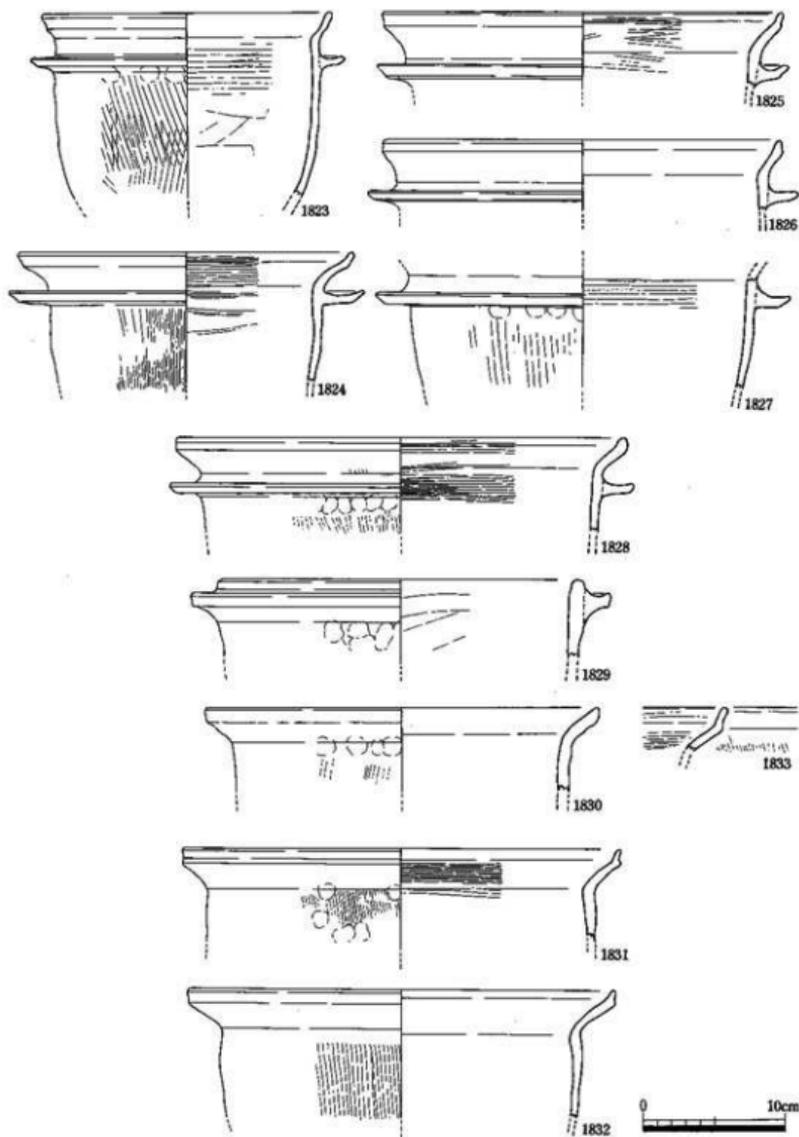
石器には打製石庖丁(1837)と打製石斧(1838)がみられるが、どちらも埋没段階で混入したものと考えられる。



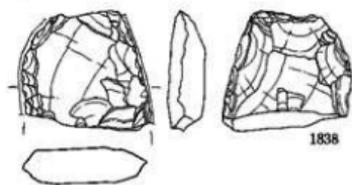
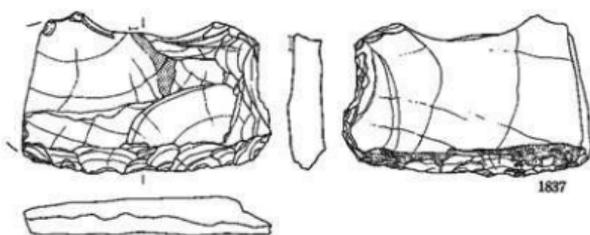
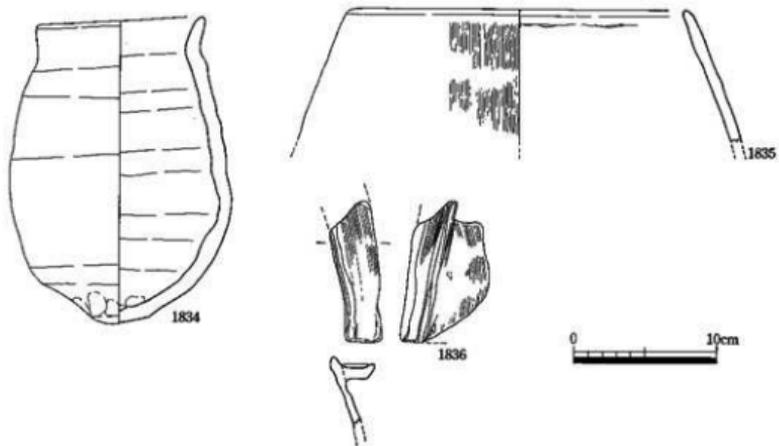
第292図 SD10断面図



第293図 SD10出土遺物①



第294図 SD10出土遺物②

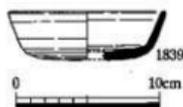


第295図 SD10出土遺物③

SD 11 (第296図)

I A区のC 3・4グリッドで検出した溝状遺構である。検出長7.50m, 幅212cm, 深さ0.93cmの規模を持ち, 概ね南西から北東の方向を有する。調査区内でSD 07と合流していることから, 弥生時代後期に属する溝状遺構の可能性がある。

遺物はほとんど出土していないが, 埋土の上位から古代の須恵器杯片(1839)1点とサヌカイトの打製石鏃(1840)1点がみられる。

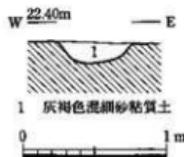


第296図 SD 11
出土遺物

SD 12 (第297図)

I A区のC 4グリッドで検出した溝状遺構である。検出長6.50m, 幅54cm, 深さ15cmの規模を持ち, 概ね南西から北東の方向を有する。断面形態は浅いレンズ状で, 埋土は単層である。

遺構内から中世の土器(須恵器・土師質土器)の細片がわずかに出土している。

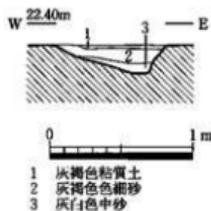


第297図 SD 12
断面図

SD 13 (第298図)

I A区のC 3・4グリッドで検出した溝状遺構である。検出長11.50m, 幅77cm, 深さ21cmの規模を持つ。概ね南西から北東の方向を有し, SD 12とほぼ平行している。断面形態は浅いレンズ状を呈する。

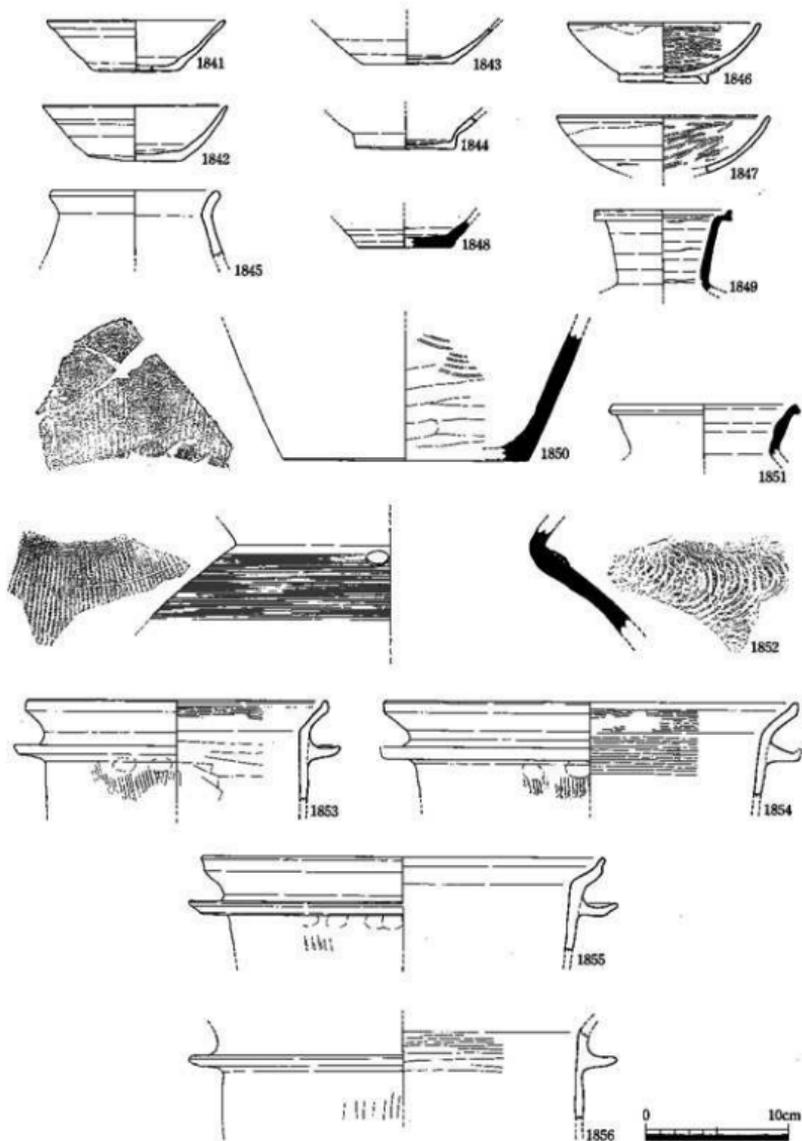
遺構内からは図化できなかったが, 須恵器の杯片, 格子叩き目を持つ須恵器甕の破片, 土師器の細片などがわずかに出土している。



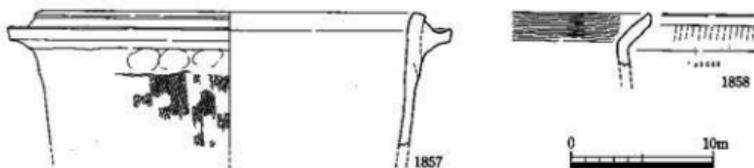
第298図 SD 13
断面図

SD 14 (第299~301図)

I A区のC 4, D 4・5グリッドで検出した溝状遺構である。検出長21.50m, 幅145cm, 深さ51cmの規模を持つ。SR 02(自然河川)から分岐して, 緩やかに弧を描きながら, 概ね南西から北東の方向を有する。埋土は基本的に砂質土であり, ある程度の流水があっ



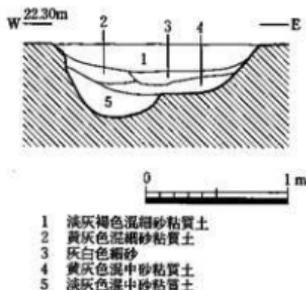
第299圖 SD14 出土遺物①



第300図 SD14 出土遺物②

たものと判断できる。

遺構内からは、古代の上器が比較的多めに出土している。土器には土師器・黒色土器・須恵器・土師質土器がある。1841～1844は回転台土師器の杯である。いずれも若干内彎する体部を持つ。1844は円盤状高台を持つ。1845は土師器の壺形土器である。甬壺の口縁部になる可能性がある。1846・1847は黒色土器A類の椀である。両者とも緩やかに内彎する体部を持ち、口縁部の外面が黒化している。1848は円盤状高台をした須恵器の杯である。1849・1850は須恵器の壺形土器である。1851・1852は須恵器の壺形土器である。1853～1856は土師質土器の羽釜である。胴長の体部を持ち、鈎の端部を上方に摘み出している。1857は土師質土器の土釜である。口縁部のすぐ下に鈎を貼り付けている。1858は土師質土器の土鍋である。

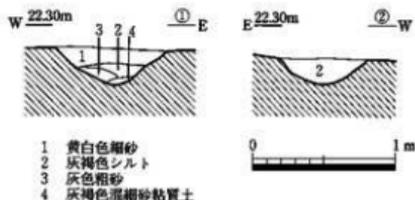


第301図 SD14 断面図

SD15 (第302図)

IA区のC3・4、D5グリッドで検出した溝状遺構である。検出長32.20m、幅78cm、深さ26cmの規模を持ち、概ね南西から北東の方向を有する。断面形態は逆三角形で、埋土は砂質土である。SD16とはほぼ平行している。SD01とSD21によって一部を壊されている。

遺物は中世と思われる土師器・須恵器・土師質土器の細片と、獣骨の破片がわずかに出土しているが、図化できるものはない。

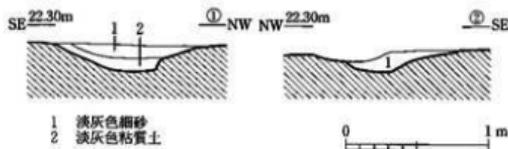


第302図 SD15 断面図

SD16 (第303図)

IA区のC3、D3・4グリッドで検出した溝状遺構である。検出長32.60m、幅101cm、深さ19cmの規模を持つ。方向は概ね南西から北東で、SD15とはほぼ平行している。断面形態は浅いレンズ状を呈する。SD01とSD21によって一部を壊されている。

図化できる遺物はないが、中世と思われる土師器細片がわずかに出土している。



第303図 SD16断面図

SD17 (第304図)

IA区のC・D3グリッドで検出した溝状遺構である。検出長12.70m、幅62cm、深さ11cmの規模を持ち、SD16とはほぼ平行しながら、概ね南西から北東の方向を有する。断面形態は浅い皿状で、埋土は単層である。

遺構内からは古代の須恵器・土師質土器羽釜の細片がわずかに出土している。



第304図 SD17断面図

SD18 (第7図)

IA区のC3グリッドで検出した溝状遺構である。検出長5.90m、幅78cm、深さ28cmの規模を持ち、概ね南からきたの方向を有する。本来はSD08と連続する1条の溝状遺構であったと思われる。断面形態は碗形を呈する。

遺物は中世と判断できる程度の土師器の細片がわずかに出土している。

SD19 (第7図)

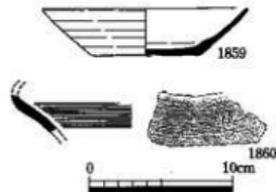
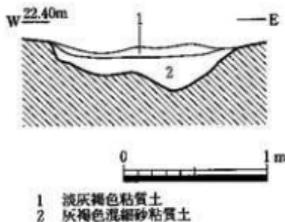
IA区のB・C3グリッドで検出した溝状遺構である。検出長3.20m、幅110cm、深さ36cmの規模を持つ。SD18と平行しながら、概ね南から北の方向を有する。断面形態は碗形を呈する。

中世の土師器・須恵器の細片がわずかに出土しているが、図化できるものはない。

SD20 (第305・306図)

I A区のD3・4グリッドで検出した溝状遺構である。検出長16.90m、幅126cm、深さ31cmの規模を持つ。東端をSD21によって壊されている。先述したSD27と連続する可能性もあるが、確認できてはいない。断面形態は厚めのレンズ状を呈する。

遺物は古代と考えられる土器細片がわずかに出土している。2点を図化した。1859は須恵器の杯で、緩やかに内彎する体部を持つ。1860は須恵器の甕形土器である。



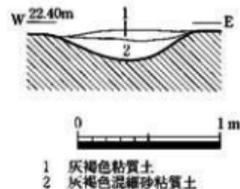
第306図SD20出土遺物

第305図 SD20断面図

SD21 (第307図)

I A区のD4・5グリッドで検出した溝状遺構である。検出長30.30m、幅94cm、深さ21cmの規模を持ち、南東から北西の方向を有する。SD01とはほぼ平行しており、SD21のすぐ東側に存在する現在の水路とも同じ方向である。断面の形態は浅いレンズ状を呈している。

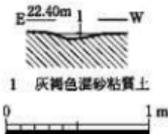
遺構からは出土した土器としては、土師器の高台付き碗や土師質土器の羽釜の破片、須恵器片等があるが図化できるものはない。



第307図 SD21断面図

SD22 (第308図)

I A区のD4・5グリッドで検出した溝状遺構である。検出長9.10m、幅32cm、深さ4cmの規模を持ち、SD14とはほぼ平行しながら、概ね南から北の方向を有する。著しい削平によって溝状遺構の痕跡を確認できたにすぎない。遺物は全く出土し



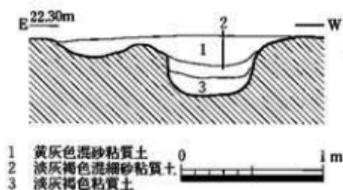
第308図 SD22断面図

ていないが、溝状遺構の方向性と埋上の類似から中世のものと思われる。

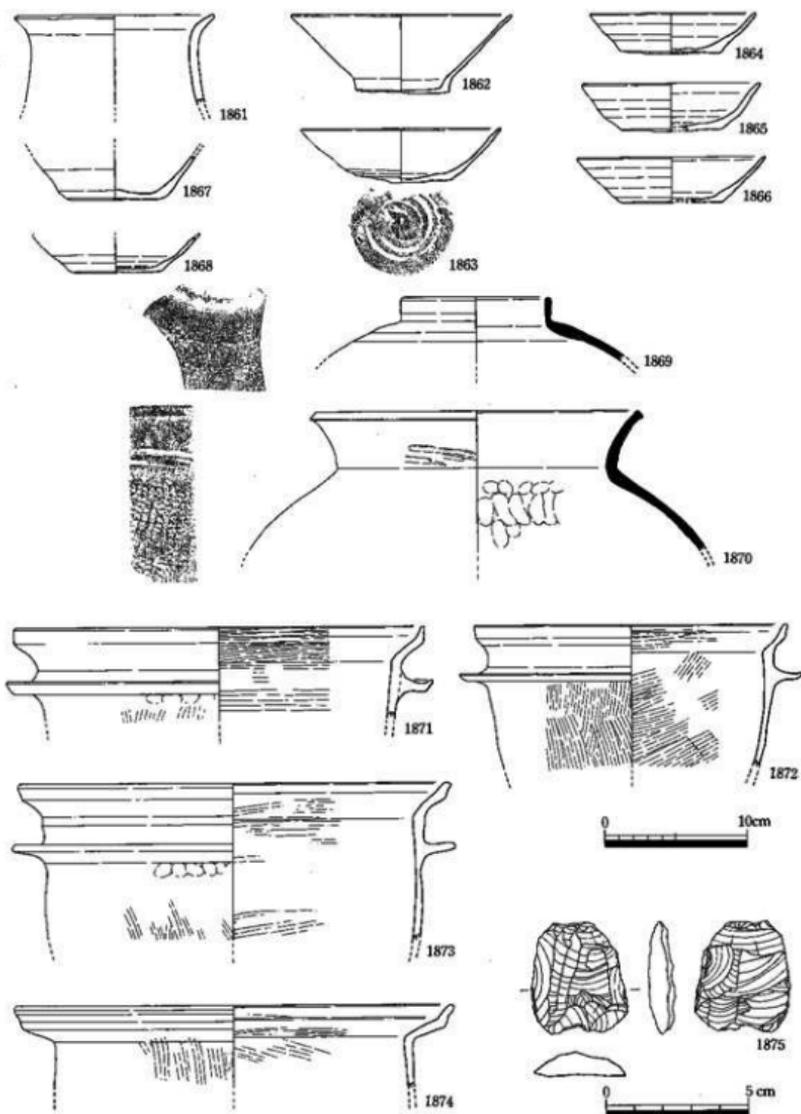
SD 2 3 (第309・310図)

I A区のC 4・5グリッドで検出した溝状遺構である。検出長17.30m、幅167cm、深さ43cmの規模を持つ。緩やかに蛇行しながら、概ね南から北の方向を有している。SD 1 4から分枝して、途中で底面の一部が盛り上がりさらに2つの溝状遺構に分かれるような形態を呈しながら、SD 0 7と合流するようである。

遺構内からは、弥生時代と古代の土器と石器が出土している。1861は弥生土器の壺形土器である。弥生時代後期の所産と思われるが、埋没時に周辺から混入したものであろう。古代の土器には土師器・須恵器・土師質土器がある。1862～1868は回転台土師器の杯である。底部と体部の境に明瞭な稜を持つものが多く、体部は内彎している。1862は円盤状高台を持っている。1869は須恵器の短頸壺である。強く張った肩部に、短く直立する口縁部を持つ。1970は須恵器の甕形土器である。1871～1873は土師質土器の羽釜である。胴長の体部を持つ。1874は土師質土器の土鍋である。1875は赤色チャート製の石器である。スクレイパーと判断したが、正確な器種は不明である。



第309図 SD 2 3 断面図



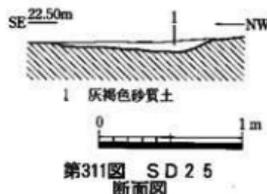
第310图 SD 2 3 出土遺物

SD 2 4 (第314・315図)

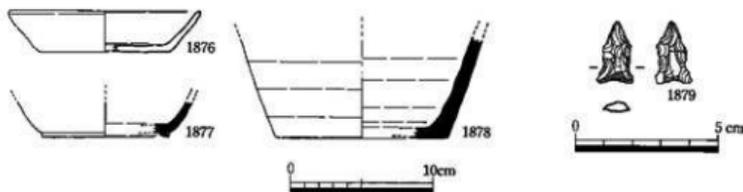
I B区のD 4, E 4・5グリッドで検出した溝状遺構である。検出長13.10m, 幅56cm, 深さ7cmの規模を持ち, 概ね南西から北東の方向を有する。断面形態は浅い皿状を呈し, 埋土は単層である。SD 2 9より新しいが, この箇所は溝状遺構が幾重にも重なりあっており, 調査時にはSD 2 5・2 9・3 0とあわせて遺物を取り上げたため, SD 3 0の部分で一括して報告する。

SD 2 5 (第311・312・314図)

I B区のE 4・5グリッドで検出した溝状遺構である。検出長は18.00m, 幅128cm, 深さ26cm以上の規模を持つ。概ね南西から北東の方向を有する。断面形態は浅いレンズ状を呈している。西壁に近い部分から古代の土器・石器が少量出土している。1876は回転台土師器の杯である。1877は貼付け高台を持つ, 須恵器の椀である。1878は須恵器の壺形土器である。1879はサヌカイトを使用した打製石鏃である。



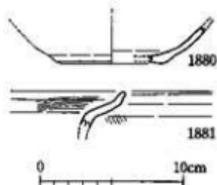
第311図 SD 2 5
断面図



第312図 SD 2 5 出土遺物

SD 2 6 (第265・313図)

I B区のD 4・5, E 5, I C区のE 5・6グリッドで検出した溝状遺構である。検出長33.60m, 幅148cm, 深さ24cmの規模を持つ。概ね南西から北東の方向を有し, I B区の途中からSD 2 7と重なるが, SD 2 7より新しい。断面形態はレンズ状を呈し, 埋土は単層である。



第313図 SD 2 6
出土遺物

遺物は古代の土器(土師器杯・須恵器・土師質土器羽釜・

土鍋)の破片がわずかに出土しているが、図化できたのは2点である。1880は土師器杯の底部破片である。1881は土師質土器の土鍋である。

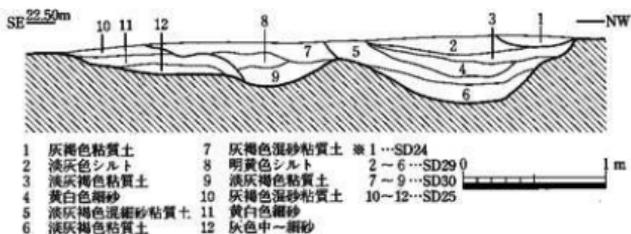
SD29 (第314・315図)

IB区のD4, E4・5, IC区のE5グリッドで検出した溝状遺構である。検出長27.50m, 幅174cm, 深さ48cmの規模を持つ。概ね南西から北東の方向を有するが、大きく弧を描いている。SD30より新しく, SD21より古い。溝状遺構の北端は後述するSX06(網塚)の下部へ連続しているようである。断面形態は碗形を呈している。

遺物はSD25・29・30と併せて取り上げたため, SD30の部分で一括して報告する。

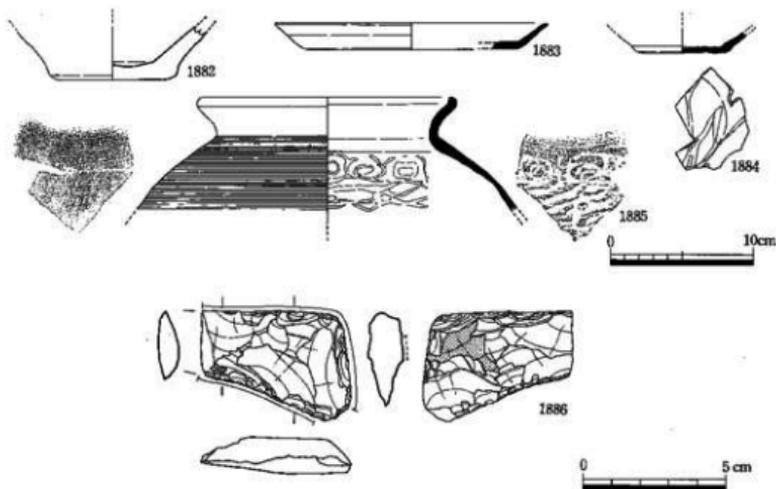
SD30 (第314・315図)

IB区のE4・5グリッドで検出した溝状遺構である。検出長11.80m, 幅126cm以上, 深さ30cmの規模を持つ。SD25より新しく, SD29より古い。SD29とSD25の間で溝状遺構の一部を検出したにすぎないため, 方向については確認できないが, 大きく弧を描きながら概ね南西から北東の方向を持つと思われる。



第314図 SD24・25・29・30 断面図

1882は弥生土器の壺形土器の底部である。弥生時代前期土器と酷似する胎土を持つ。1883は須恵器の皿である。底部は回転ヘラ切りである。1884は須恵器の杯である。底部はヘラ切りで, 外面に火漚がみられる。1885は須恵器の甕形土器である。体部内面に当て具痕が明瞭に残る。1886はサヌカイトを使用した打製石鎌である。



第315図 SD 24・25・29・30 出土遺物

SD 37

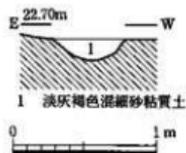
ⅡC区のG7グリッドで検出した溝状遺構である。検出長6.70m、幅65cm、深さ10cmの規模を持つ。概ね東西方向から屈曲して南東から北西の方向を有する。断面形態は浅いレンズ状で、埋土は淡灰褐色粘質土の単層である。

遺構内からは、古代と辛うじて判断できる程度の土師器細片がわずかに出土している。

SD 44 (第316・317図)

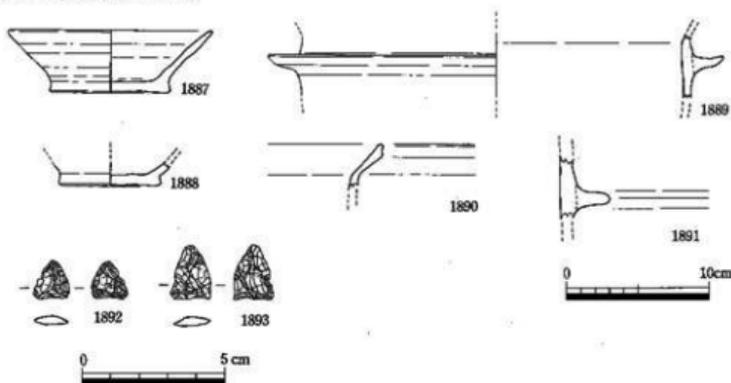
ⅢA区のI6～8グリッドで検出した溝状遺構である。弥生時代前期のSR04（自然河川）が完全に埋没した後に作られている。検出長32.20m、幅52cm、深さ16cmの規模を持つ。南東から北西の方向を有し、SD45と60～120cmの間隔で平行している。断面形態は浅いレンズ状を呈しており、埋土は単層である。

遺構内からは古代の土器と石器が出土している。1887・1888は回転台土師器の杯である。いずれも円盤状高台を持つ。1889～1891は土師質土器の羽釜である。1892・1893はサヌカイトを



第316図 SD 44
断面図

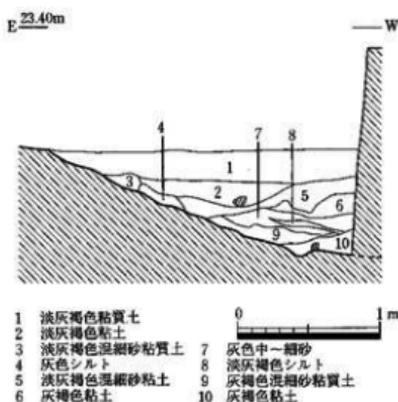
使用した打製石鏃である。



第317図 SD44出土遺物

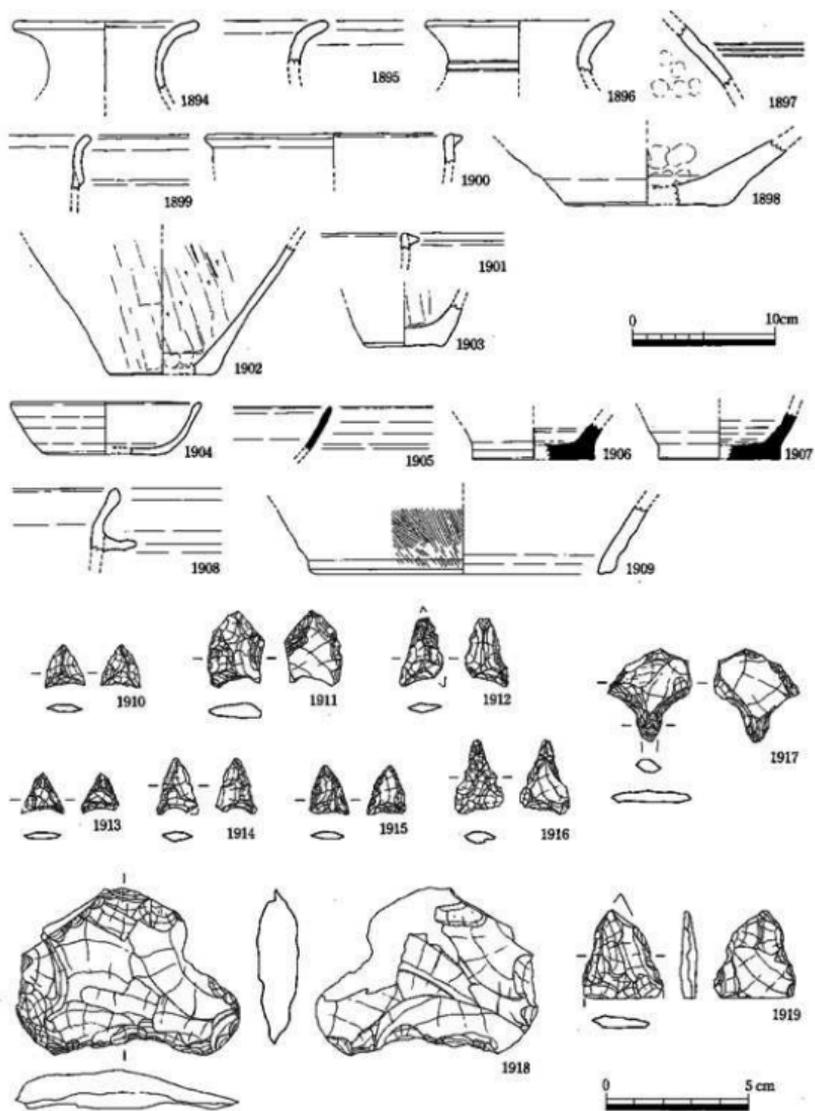
SD45 (第318~321図)

ⅢA区のI6・7グリッドで検出した溝状遺構である。SR04(自然河川)が完全に埋没した後に作られている。溝状遺構の西側は、市道前池五条線と重なっているため、全体を確認できてはいない。検出長27.50m、幅216cm以上、深さ76cm以上の規模を持つ。断面形態は大きく開いた逆三角形を呈している。概ね南東から北西の方向を有し、SD44と平行しているが、この方向は、現在も遺跡の周辺に遺存する方格地割りの方向と合致するものである。

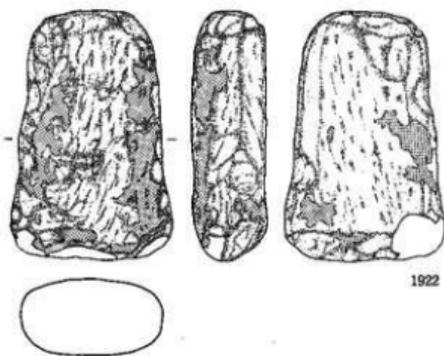
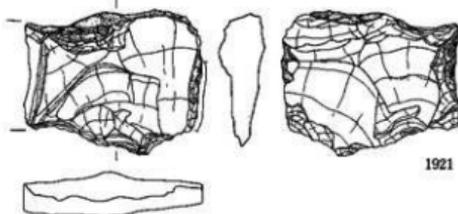
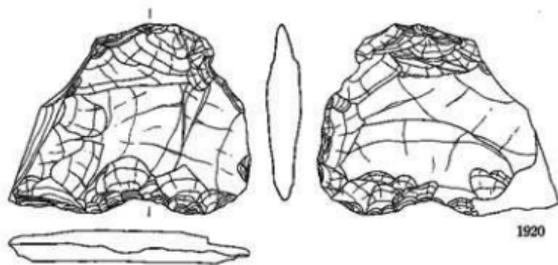


第318図 SD45断面図

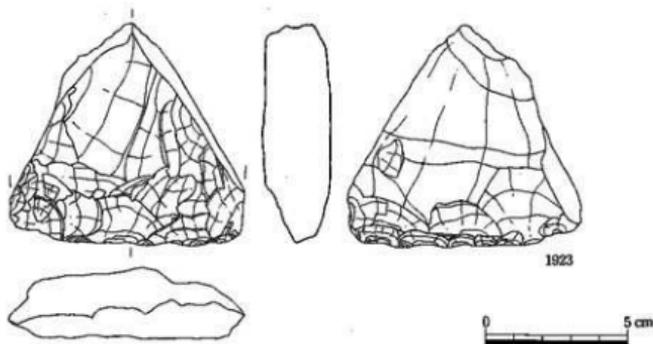
遺構内からは弥生時代前期と古代の土器・石器が出土しているが、弥生時代前期の土器・石器は下位に存在するSR04(自然河川)の遺物が混入したものと考えられる。1894~1903は弥生時代前期の土器である。1894~1898は壺形土器である。口頸部境は無文のもの(1894・1895)と削出凸帯を持つも



第319圖 SD 4 5 出土遺物①



第320圖 SD 4 5 出土遺物②



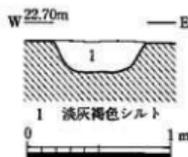
第321図 SD45出土遺物③

の(1896)がある。1898は大形品の底部である。1899~1903は壺形土器である。如意形口縁の1899は口縁部に段を持つ。逆L字形口縁の1900・1901は無文である。1904は回転台土師器の杯である。底部はヘラ切りである。1905は須恵器の杯である。1906・1907は須恵器の壺形土器の底部であるが、同一個体の可能性がある。1908は土師質土器の羽釜である。1909は土師質土器の甌形土器と思われる。1910~1923は石器である。石鏃・石錐・スクレイパー・石剣・石廬丁・石斧がみられる。1910~1916は打製石鏃である。凹基式と平基式がある。1919は打製石剣の先端部と考えられる。1921は打製石廬丁の未製品である。1922は磨製の太型蛤刃石斧である。緑泥片岩製で全体に敲打を施したのちに部分的に研磨した半製品(未製品)と思われる。1923はサヌカイトを使用した打製石斧である。

SD46 (第322図)

ⅢA区のI7グリッドで検出した溝状遺構である。検出長1.30m、幅64cm、深さ21cmの規模を持ち、SD44とSD45をつないでいる。断面形態は碗形で、埋土は単層である。

弥生時代前期の土器片と古代の土師器の細片がわずかに出土しているが、弥生土器は混入したものである。



第322図 SD46
断面図

SD47 (第323図)

ⅢA区のI7グリッドで検出した溝状遺構である。検出長1.10m、幅30cm、深さ16cmの

規模を持ち、SD44とSD45をつないでいる。断面形態はU字形で、埋土は単層である。

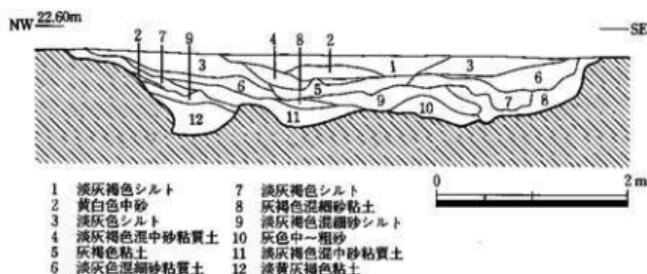
弥生時代前期の土器片と古代の土器（土師器・須恵器）片が出土しているが、弥生土器は混入したものである。



第323図 SD47
断面図

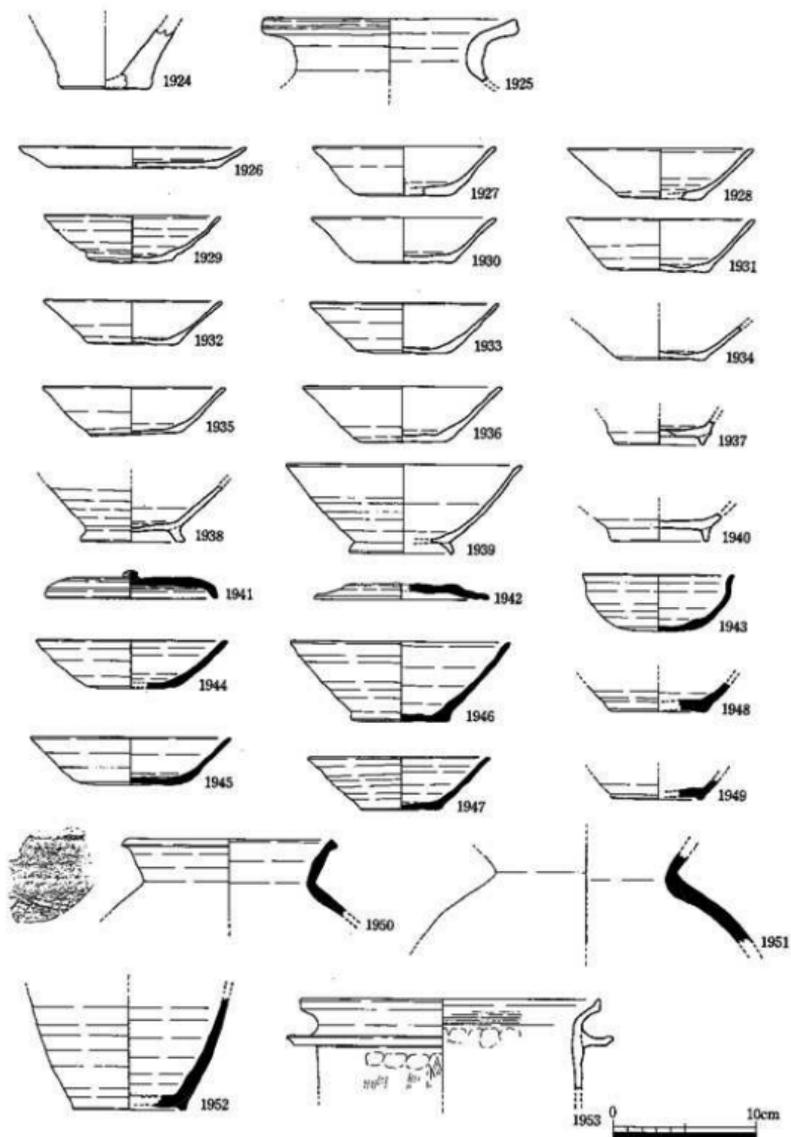
SR02 (第324~327図)

IA・B・C区のC3・4, D4・5, E5・6グリッドで検出した自然河川である。検出長63.45m, 幅562cm, 深さ85cmの規模を持つ。調査区内ではほぼ直線的に、概ね南西から北東の方向へ流下する。埋土は基本的に砂層と粘質土層が交互に堆積しており、流水と滞水を繰り返しながら埋没したことがわかる。IC区においては、SR02がほぼ埋没した段階でSD36が掘られており、時間的な先後関係をうかがうことができる。

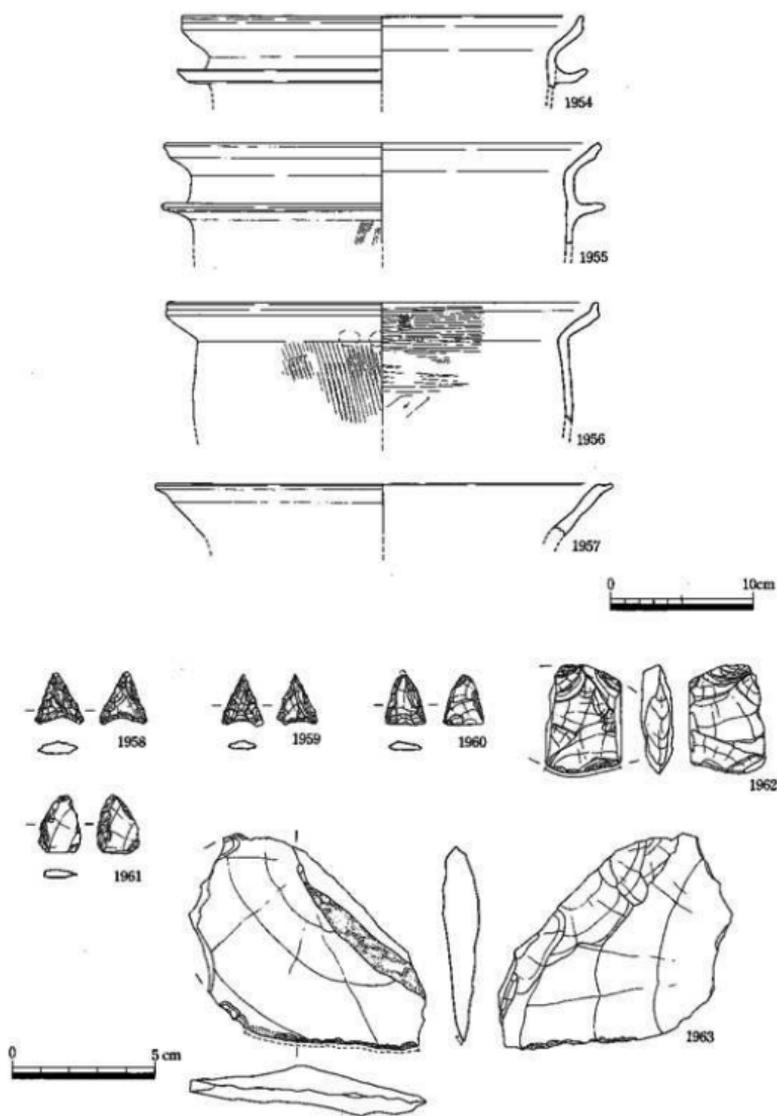


第324図 SR02 断面図

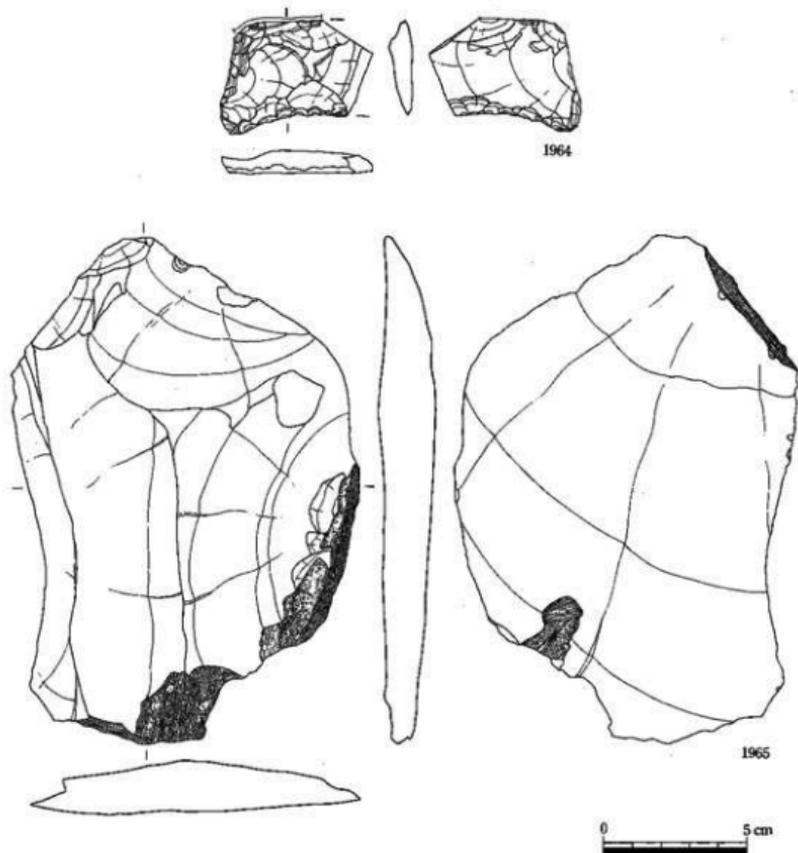
弥生土器, 古代の土器, 石器が多量に出土しているが、ほとんどが古代の土器である。1924は弥生時代前期の壺形土器の底部である。1925は弥生時代後期の壺形土器である。口縁端面に凹線をめぐらせている。1926は土師器の皿である。底部はヘラ切りである。1927~1940は回転台土師器の杯である。底部と体部の境に明瞭な稜を持つものも多く、体部は内彎するものと直線的に上外方へ延びるものがある。1928は瓦質焼成となっている。1929は円盤状高台を持つ。1935は底面に木目状の圧痕を持つ。1937~1940は貼付け高台を持つ回転台土師器の杯である。いずれも底部はヘラ切りによる。1941・1942は須恵器の杯蓋で



第325圖 SR 0 2 出土遺物①



第326図 SR02出土遺物②

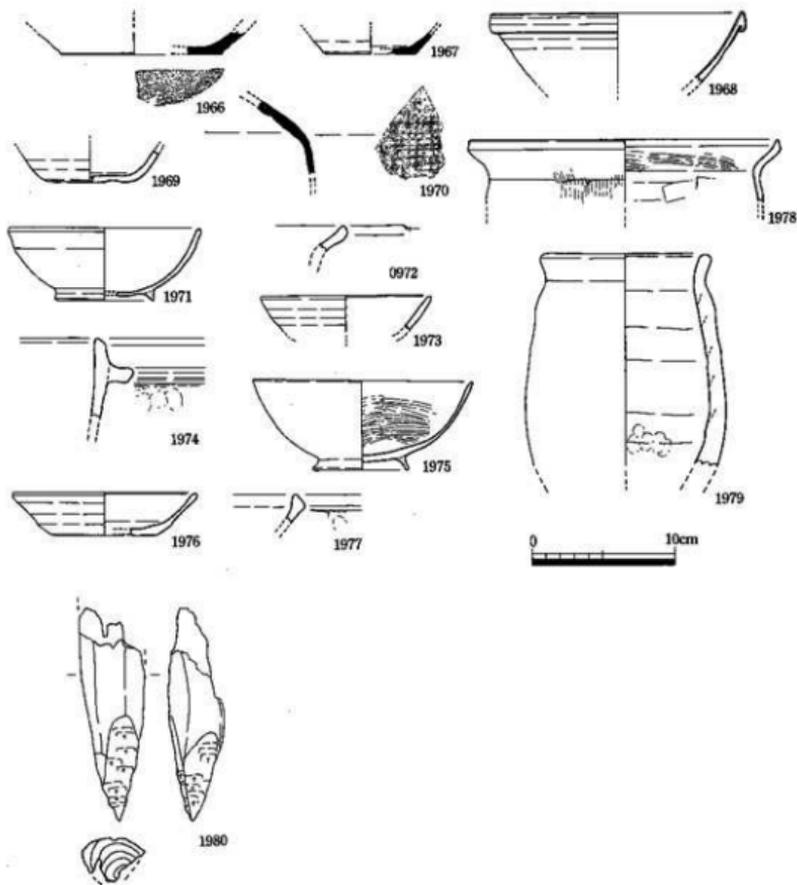


第327図 SR02出土遺物③

ある。1941は宝珠摘みを貼り付けている。1943は須恵器の杯身である。内彎して立ち上がる体部に緩く外反する口縁部を持つ。1944～1948は須恵器の杯である。1944・1945は内外面に火漚を持つ。1946・1948は円盤状高台を有する。1947は全体が焼け垂んでいる。1949は須恵器の椀と思われる。1950・1951は須恵器の甕形土器である。1952は須恵器の壺形土器である。貼付け高台を持つ。1953～1955は土師質土器の羽釜である。1956・1957は土師質土器の土鍋である。1958～1965は石器で、石鏃・楔形石器・スクレイパー・石鎌・石核

がみられる。1958～1961は打製石鏃である。凹基式と平基式のものがある。1962は楔形石器で、下側縁に敲打痕がみられる。1965は縦長の剝片石核である。

SP (第328図)

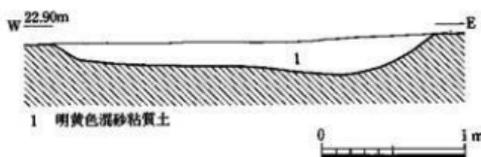


第328図 SP出土遺物②

ここでは柱穴から出土した古代以降の遺物を一括した。柱穴と出土遺物の対応については観察表に譲り、遺物を中心に記述する。出土した遺物には土器・木器がある。土器には土師器・黒色土器・須恵器・白磁・土師質土器がみられる。土師器には杯・鉢がある。黒色土器ではA類の碗が出土している。須恵器は杯・こね鉢・壺形土器がある。1966はこね鉢の底部で、糸切り底である。白磁は口縁部外面を玉縁状にする白磁碗IV類が出土している。土師質土器には土釜・土鍋・蛸壺がある。1979は蛸壺で、内面に粘土紐の接合痕を明瞭に残す。木器は1980の杭が1点出土している。

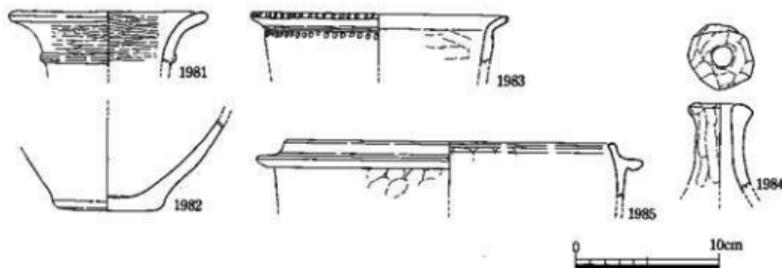
SX01 (第329・330図)

ⅡB区のG6グリッドで検出した不明遺構である。平面形態は楕円形に近い不定形を呈しており、長径860cm、短径392cm、深さ24cmの規模を持ち、ST01の東半部を大きく壊している。



第329図 SX01断面図

遺物は弥生土器と土師質土器の細片を採取しているが、弥生土器はST01から混入したものであると思われる。1981は弥生土器の壺形土器である。口頭部の境に1条の貼付凸帯を持つ。1982は壺形土器の底部である。1983は甕形土器である。如意形口縁で口縁部下にヘラ描き沈線1条と刺突文をめぐらせている。これらは弥生時代前期の土器で、ST01に属していたものであろう。1984は土製支脚である。1985は土師質土器の土釜である。



第330図 SX01出土遺物

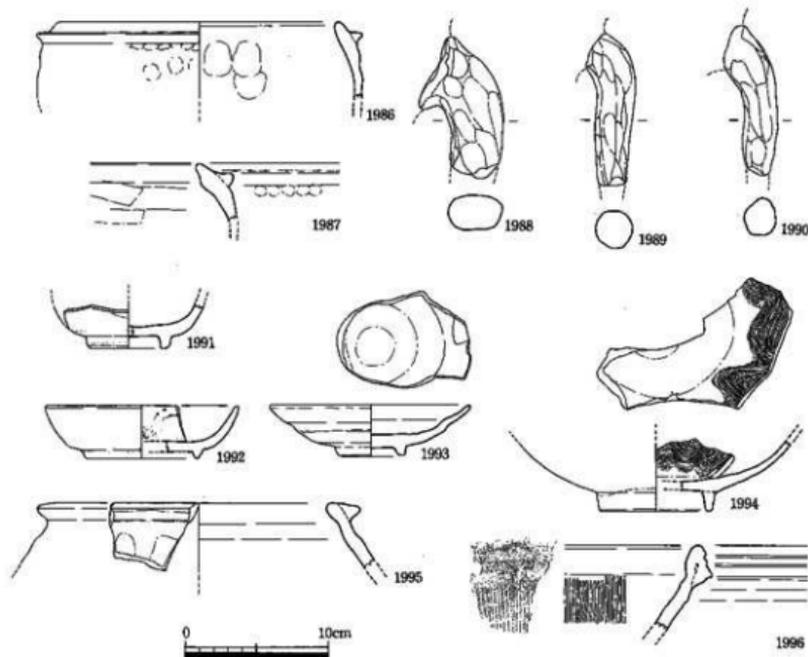
SX02

II C区のG7グリッドで検出した不明遺構である。平面形態は不定形を呈し、長さ280cm、幅260cm、深さ12cmの規模を持つ。一部は調査区外へ連続しているため、全体を確認できてはいない。断面形態は浅い皿状で、埋土は淡黄灰色粘質土の単層である。

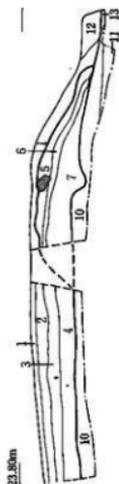
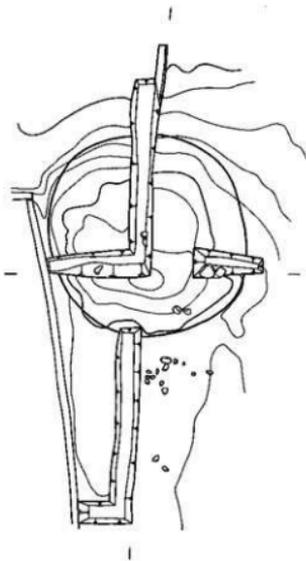
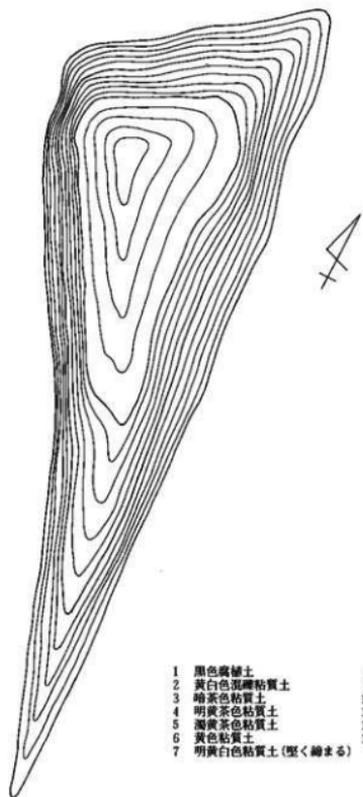
弥生土器細片、古代の土器（土師器・須恵器）細片、サヌカイトの打製石鏃片がわずかに出土している。

SX06 (第331・332図)

I C区のE5グリッドで検出した不明遺構である。円形の塚状を呈しており、地元では「網塚（あみづか）」の通称で呼ばれている。かつて頂部に小さな石の祠がお祭りされていたとの聞き取りを得ている。直径330cm、高さ92cmの規模を持つ。断面観察からは、地山



第331図 SX06 出土遺物



- | | |
|-------------------|------------------|
| 1 黑色腐植土 | 8 淡灰褐色粘質土 |
| 2 黄白色泥礫粘質土 | 9 明黄色粘質土 (堅く締まる) |
| 3 暗茶色粘質土 | 10 淡褐色泥礫粘質土 (地山) |
| 4 明黄茶色粘質土 | 11 灰褐色泥礫粘質土 |
| 5 濁黄茶色粘質土 | 12 暗灰色粘質土 (耕作土) |
| 6 黄色粘質土 | 13 淡灰色粘質土 (灰土) |
| 7 明黄白色粘質土 (堅く締まる) | |

第332図 SX06平・断面図

を削り出して整形したものではなく、土盛りによって形成したものであることが確認できた。埋葬施設等の有無については、断ち割りトレンチを設定して調査したが検出できず、単なる塚状の土盛りと判断している。

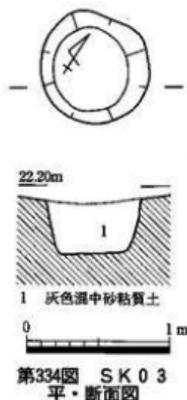
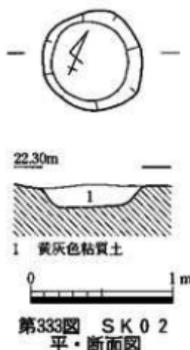
遺物は中世から近世かけての土器・陶磁器を採取している。1986～1990は上位の盛り土から出土した中世の土師質土器土釜である。1991～1996は表面の黒色腐植土層から出土した近世の陶磁器類である。

(5) 近世の遺構・遺物

SK02 (第333図)

IA区のC3グリッドで検出した土坑である。平面形態は円形を呈し、直径70cm、深さ17cmの規模を持つ。断面形態は逆台形で、埋土は単層である。

土坑内から、近世と考えられる土師質の風呂釜ないし野壺の破片が出土している。



SK03 (第334図)

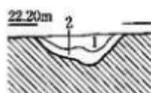
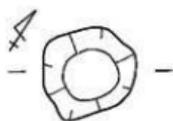
IA区のC3グリッドで検出した土坑である。平面形態は円形を呈し、直径80cm、深さ35cmの規模を持つ。断面形態は逆台形で、埋土は単層である。

土坑内から遺物は出土していないが、近世の土坑と考えられる。

SK04 (第335図)

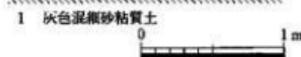
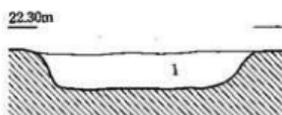
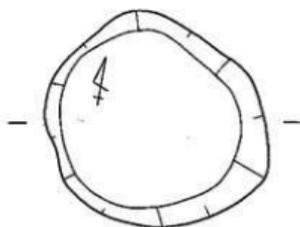
I A区のC3グリッドで検出した土坑である。平面形態は不整形円形を呈し、長径70cm、短径65cm、深さ20cmの規模を持つ。断面形態はいびつな逆台形を呈している。

土坑内からは近世と考えられる土器細片がわずかに出土している。



1 灰色粘土
2 淡灰色細砂

第335図 SK04
平・断面図



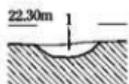
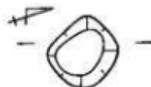
1 灰色泥礫砂粘質土

第336図 SK05
平・断面図

SK05 (第336図)

I A区のC3グリッドで検出した土坑である。平面形態は楕円形を呈し、長径160cm、短径150cm、深さ25cmの規模を持つ。SD10が埋没した後で掘られている。断面形態は逆台形で、埋土は単層である。

遺物は出土していないが、近世の土坑と考えられる。



1 灰白色泥礫砂粘質土



第337図 SK06
平・断面図

SK06 (第337図)

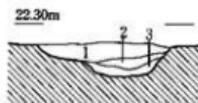
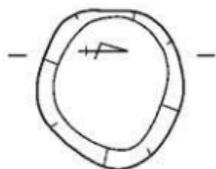
I A区のC3グリッドで検出した土坑である。平面形態は円形に近い隅丸方形を呈し、長さ48cm、幅43cm、深さ10cmの規模を持つ。断面形態は浅いレンズ状で、埋土は単層である。

遺物は出土していないが、近世の土坑と考えられる。

SK07 (第338・339図)

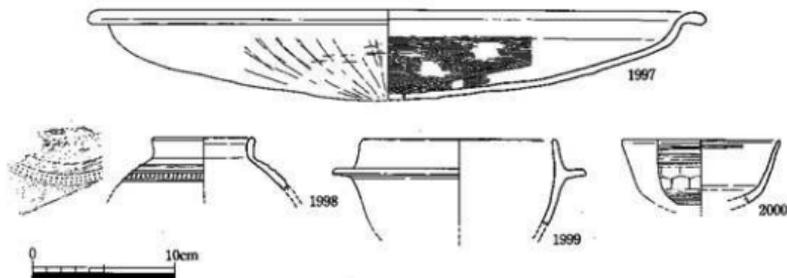
I A区のC3グリッドで検出した土坑である。平面形態は楕円形を呈し、長径112cm、短径105cm、深さ25cmの規模を持つ。

土坑内から近世の土器がわずかに出土している。1997は十師質土器の焙烙である。1998は瓦質土器の短頸甕と思われる。1999も瓦質土器の土釜である。2000は磁器の染付け碗である。



- 1 灰色混砂粘質土
- 2 淡灰褐色粘土
- 3 黄白色細砂

第338図 SK07
平・断面図

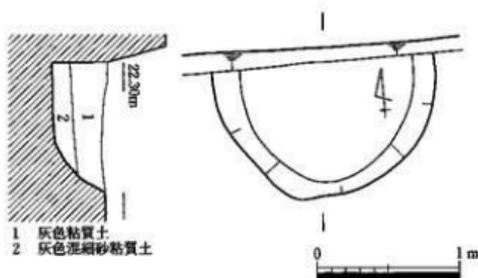


第339図 SK07出土遺物

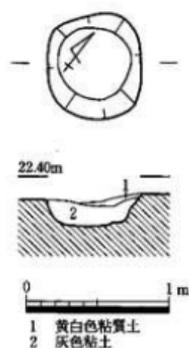
SK08 (第340図)

I A区のC3グリッドで検出した土坑である。一部が土層観察用の畦に重なっているため、全体の形状は確認できていない。平面形態は円形を呈すると思われる、直径160cm、深さ40cmの規模を持つ。断面形態は逆台形で、埋土は2層である。

土坑内から近世の陶磁器片と瓦器片がわずかに出土している。



第340図 SK08平・断面図

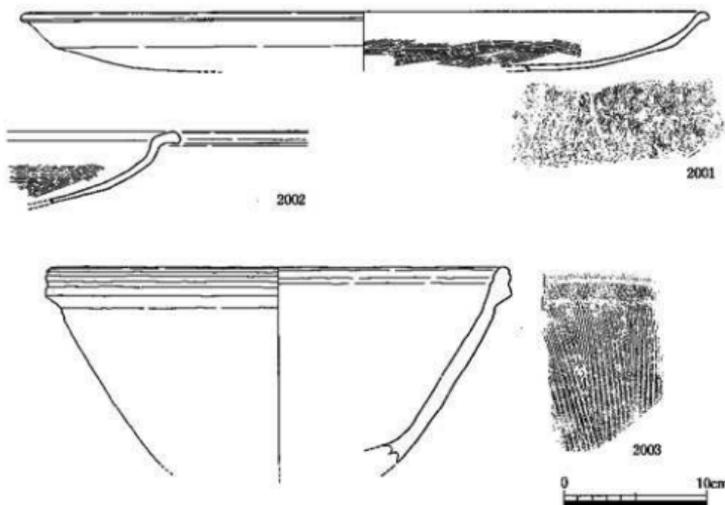


第341図 SK09
平・断面図

SK09 (第341・342図)

IA区のD3グリッドで検出した土坑である。平面形態は楕円形を呈し、長径75cm、短径65cm、深さ23cmの規模を持つ。断面形態は逆台形で、埋土は2層である。

土坑内からは近世の土器がわずかに出土している。2001・2002は土師質土器の焙烙である。2003は陶器の摺鉢である。

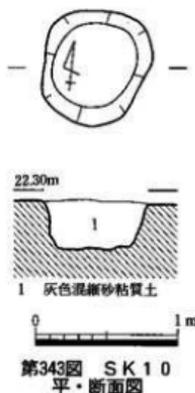


第342図 SK09出土遺物

SK10 (第343図)

I A区のD3グリッドで検出した土坑である。平面形態は楕円形を呈し、長径82cm、短径70cm、深さ35cmの規模を持つ。断面形態は逆台形で、埋土は単層である。

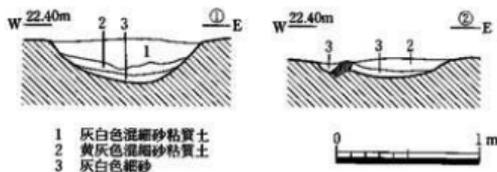
土坑内からは、近世の土師質の風呂釜ないし野壺の破片と平瓦がわずかに出土している。



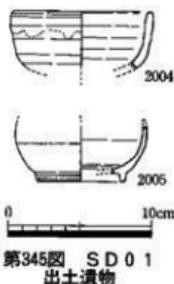
SD01 (第344・345図)

I A区のB4、C3・4グリッドで検出した溝状遺構である。検出長42.90m、幅105cm、深さ30cmの規模を持つ。概ね南東から北西の方向で、SD21及び遺跡周辺に遺存する方格地割とほぼ一致する方向性を有する。断面形態は基本的にU字形である。溝状遺構の中央部の西壁面には、拳大の礫を貼り付けたものを延長約4mにわたって検出している。この部分はSD11の埋土に当たるため、軟弱な土層となっている。つまり溝状遺構の西壁面の崩壊を防ぐための施設と判断される。

遺構内からは近世の陶磁器がわずかに出土している。2004は陶器の碗で、2種類の釉を使用している。2005は磁器の染付け碗である。



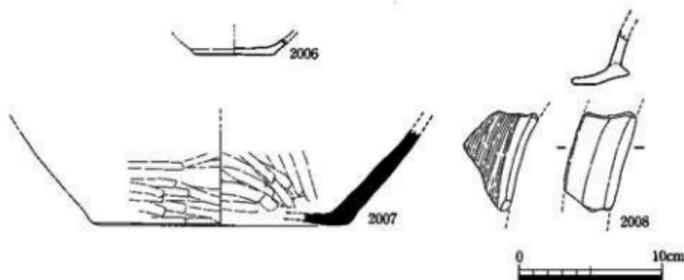
第344図 SD01断面図



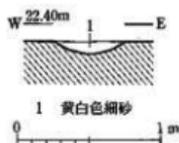
SD09 (第346・347図)

I A区のC4グリッドで検出した溝状遺構である。検出長5.60m、幅48cm、深さ9cmの規模を持つ。概ね南東から北西の方向を有し、SD01と平行している。遺構内からは古代の土器が出土しているが、これらは下位に存在するSD07・10からの混入と思われる。SD01と同様に近世の溝状遺構であろう。

2006は回転台土師器の杯である。円盤状高台を持つ。2007は須恵器の壺形土器の底部である。底面に重ね焼きの痕跡が残る。2008は土師質土器の甕である。炊き口の上方付近の破片である。



第347図 SD09 出土遺物

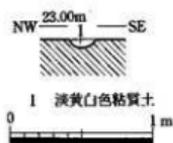


第346図 SD09
断面図

SD31 (第348図)

II A区のF6グリッドで検出した溝状遺構である。検出長8.40m、幅19cm、深さ6cmの規模を持つ。概ね南西から北東の方向を有しているが、この方向はSD01やSD09とはほぼ直行する方向である。断面形態は浅いレンズ状で、埋土は単層である。

近世と考えられる上器細片がわずかに出土している。

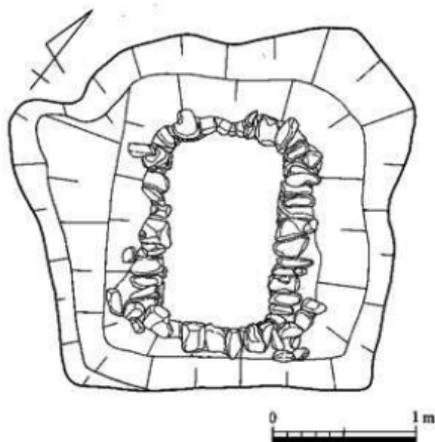


第348図 SD31
断面図

SE01 (第349図)

I A区のC3グリッドで検出した井戸である。平面形態は隅丸長方形を呈しており、長さ284cm、幅256cmの規模である。主軸はN33°Wの方向で、この方向はSD01とほぼ直交するものである。遺構検出面から深さ54cmの所で石組みを持つ。石組みは平面形態が隅丸長方形で、長さ139cm、幅76cmの規模である。石組みは、小児頭大の亜角礫・亜円礫を小口積みにして構築しており、約135cmの深さを持つ。さらに石組みの下には、丸太と板材を用いた木組み井戸枠がみられる。丸太材を組んだ枠の周囲に板材を縦方向に並べたものである。この井戸を掘り込んでいる基盤層は砂質土のため、現在でも湧水が激しく、木組みの井戸枠の上面まで断ち割ったところ、基盤層ごと崩壊したため、断面図は実測できていない。また、木組みの井戸枠の深さについても、同様の理由で確認できていない。石組みの上面から上は素掘りであるが、この部分は人為的に埋め戻されており、SE01は廃絶した井戸といえる。

石組み部分の埋土から近世の磁器片・瓦片がわずかに出土している。

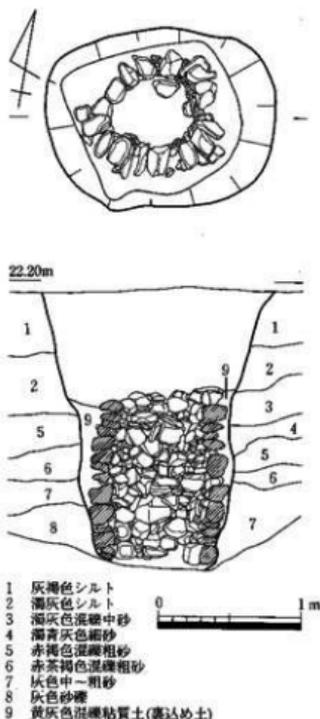


第349図 SE01平面図

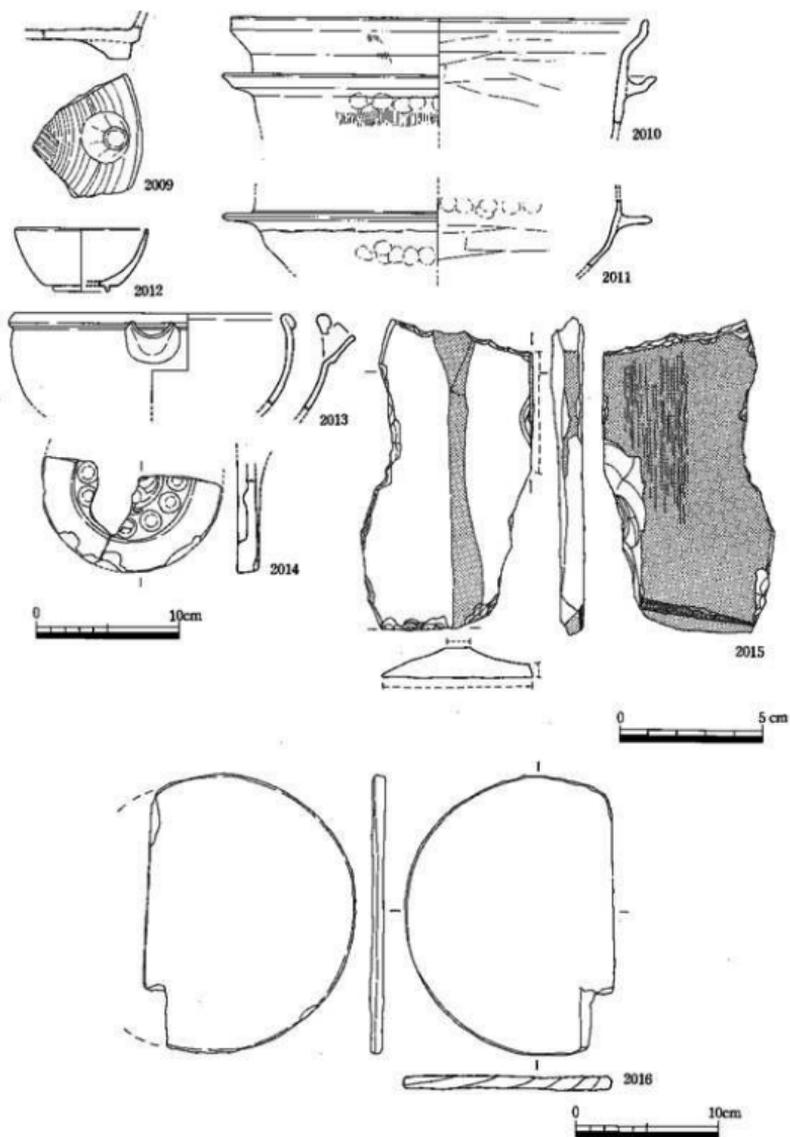
SE02 (第350・351図)

I A区のC3グリッドで検出した井戸である。平面形態は楕円形を呈し、長径158cm、短径128cmの規模である。遺構検出面から73cmの所から下は石組みが構築されている。石組みの上面は楕円形を呈しており、長径54cm、短径48cmの規模で、石組みの深さは123cmを測る。石組みは拳大から小児頭大の亜角礫・亜円礫を小口積みをも基本として構築している。石組み上面から上は素掘りであるが人為的に埋め戻されており、SE01同様、廃絶した井戸である。

石組み部分の埋土から、近世の陶磁器などが出土している。2009は土師質土器の鉢形土器である。糸切り底に貼付けの低い脚を持つ。2010は土師質土器の羽釜である。2011は瓦質土器の土釜で、水平に延びた鈎を貼り付けている。2012は施釉陶器の碗である。削り出し高台で関西系の陶器と思われる。2013は施釉陶器の片口である。口縁外面を玉縁状に肥厚させている。唐津系のものであろうか。2014は軒丸瓦の瓦当である。2015は砥石、2016は曲げ物の底板である。



第350図 SE02
平・断面図



第351圖 SE 0 2 出土遺物

(6) 包含層の遺物

ここでは、包含層から出土した遺物について、調査区ごとに報告する。

・ I 区包含層 (第352～354区)

2017～2035・2038～2055は I A 区包含層から、2036は I B 区包含層から、2037・2056は I C 区包含層から出土した遺物である。

2017は弥生土器の甕形土器の底部である。2018は弥生土器の壺形土器を転用した甕形土器である。2019・2020は回転台土師器の杯である。いずれも底部はヘラ切りである。2021は黒色土器 A 類の椀である。口縁部外面も黒化している。2022・2023は須恵器の杯である。2023は円盤状高台である。2024～2026は須恵器の壺形土器である。2026は貼付けの高台を持つ。2027～2030は須恵器の甕形土器である。2028・2029は頸部から上外方へ大きく開く口縁部を持ち、溝描き波状文をめぐらせている。この2点は同一個体の可能性が高い。2031は緑釉陶器の椀である。削り出し高台で、全面に施釉している。2032・2034・2035は土師質土器の土釜である。2034は足が付くものである。2033は土師質土器の羽釜である。体部は球形を呈しており、内外面ともにハケ調整を施している。2036は須恵器の平瓶である。2037は弥生土器の壺形土器の底部である。2038は獅子の顔面を表現した装飾瓦である。型押し作りによるものと考えられる。2039～2044は打製石鏃である。すべて凹基式である。2045は打製石鏃、2046は楔形石器である。2047～2049はスクレイパーである。2047は打製石庖丁の可能性もある。2050は打製石鏃である。2051は磨製石庖丁である。結晶片岩を使用したもので、部分的な研磨と穿孔がみられないことから未製品と思われる。2052は河原石を使用したものであるが、磨製の柱状片刃石斧と判断した。2053～2056は打製石斧である。

・ II 区包含層 (第355～362区)

2057は II A 区包含層から、2058～2083は II B 区包含層から、2084～2191は II C 区包含層から、2192～2196は II 区の包含層から出土した遺物である。

2057は弥生土器の甕形土器の底部である。2058～2063は弥生土器の壺形土器である。2058～2060の口頸部及び頸胴部の境には、ヘラ描き沈線をめぐらせている。2061～2063は底部である。2063は小形品である。2064～2066は弥生土器の甕形土器である。2064・2065は如意形口縁で、2065はヘラ描き沈線をめぐらせている。2066は口縁部外面に1条の貼付凸

帯を持つ凸帯文系の甕形土器である。これらは弥生時代前期の所産である。2067・2068は土師器の椀である。いずれも内彎する体部と貼付け高台を持つ。2069は黒色土器A類の椀である。2070は土師質土器のこね鉢である。2071は須恵器の壺形土器の口縁部である。2072～2076は土師質土器の土釜である。2077は土師質土器の插鉢である。2078・2079はいずれも平基式の打製石鏃である。2080は打製石錐、2081はスクレイパー、2082は楔形石器である。2083は打製石斧であるが、緊縛用の袢り両側縁のみならず、基部にもみられることから、石廬丁を転用した可能性がある。2084は縄文土器の浅鉢形土器である。2085～2102は弥生土器の壺形土器である。口頸部及び頸胸部の境が無文のもの(2087)、ヘラ描き沈線を持つもの(2088・2089)、貼付凸帯を持つもの(2090・2091)、構描き沈線を持つもの(2092)がみられる。2093～2102は底部である。2103～2115は弥生土器の甕形土器である。如意形口縁のもの(2103・2104)、凸帯文系のもの(2105・2106)、逆L字形口縁のもの(2107～2109)がある。2110～2115は底部である。2116は如意形口縁を持つ鉢形土器である。2117は高杯形土器である。2118は土製の紡錘車である。片面にヘラ描き文様と赤色顔料を施している。2086～2118の土器は弥生時代中期初頭の2092以外は、すべて弥生時代前期の所産である。2119～2125は弥生土器の壺形土器である。2119は口縁端部を上下に拡張し凹線を施しているもので、甕形土器の可能性もある。2123～2125は底部である。2126・2127は弥生土器の高杯形土器である。2119～2127の土器は弥生時代後期の所産である。2128は須恵器の皿である。2129は須恵器の椀である。2130は須恵器のこね鉢で、東播系のものと考えられる。2131・2132は土師質土器の土釜である。2128～2132の土器は古代から中世の年代が想定できる。2133～2157は打製石鏃である。凹基式(2133～2150)・平基式(2151～2153)・凸基式(2154)・有茎式(2156)のものがみられる。2158～2165は打製石錐である。2166・2167は楔形石器である。2168～2175はスクレイパーである。2169・2172は石廬丁の可能性ある。2176は打製石剣である。2177は打製石槍状の石器である。2178・2179は打製石廬丁である。2180は磨製太型蛤刃石斧の基部である。全体に研磨痕が明瞭に残る。2181～2191は打製石斧である。2182は小形品と思われる。2192～2194は打製石鏃である。2195はスクレイパー、2196は砥石である。

・Ⅲ区包含層(第363～370区)

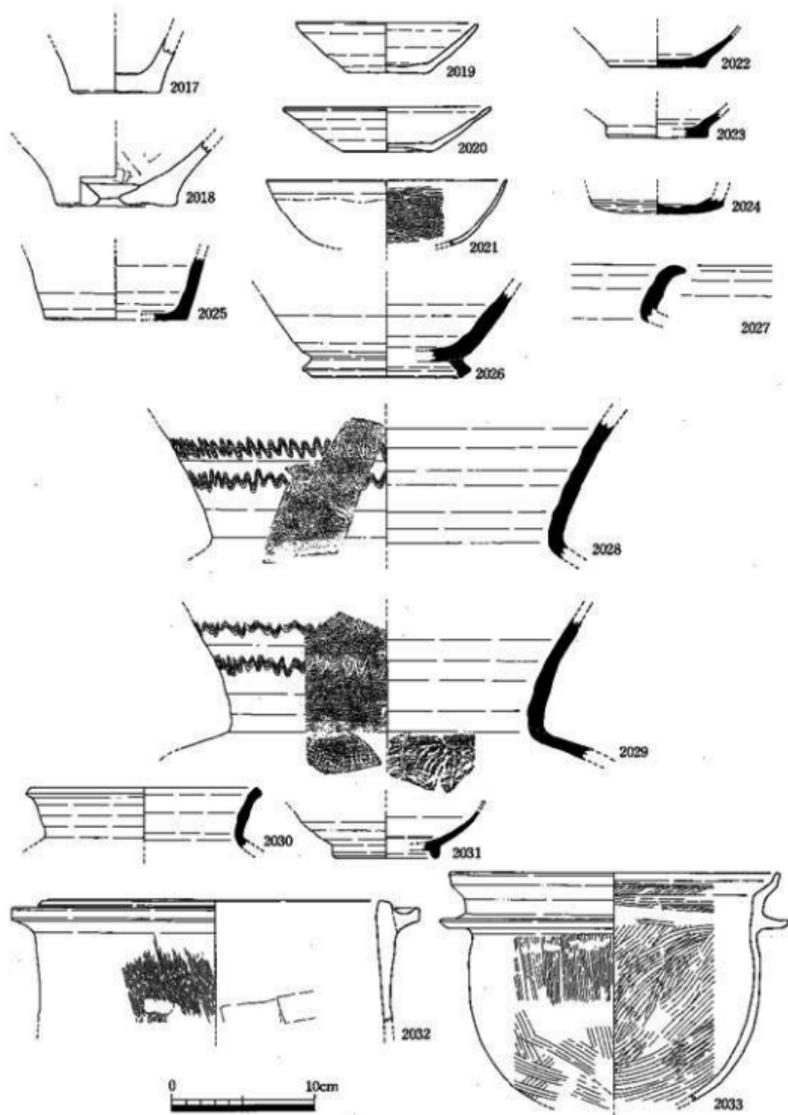
2197～2326はⅢA区の包含層から、2327～2374はⅢB区の包含層から出土した遺物である。

2197～2215は弥生土器の壺形土器である。口頸部及び頸胴部の境が無文のもの(2197～2200)、刺突文を持つもの(2203)、ヘラ描き沈線を持つもの(2204)、削山凸帯をもつもの(2205・2206)、貼付凸帯を持つもの(2207～2210)がみられる。2211は胴部上半にヘラ描きによる重弧文を施した破片である。2212～2215は底部で、2215は小形品である。2216～2226は甕形土器である。如意形口縁のもの(2216～2219)、凸帯文系のもの(2220)、逆L字形口縁のもの(2221～2223)がみられる。2223は口縁部下に櫛描き沈線をめぐらせている。2224～2226は底部である。2227・2228は甕形土器用の蓋形土器である。2229は高杯形土器である。2230は管状土錘である。2231・2232は土製紡錘車である。2231は土器片を再利用したものである。2197～2232の土器は、弥生時代中期初頭に属する2223を除くすべてが、弥生時代前期の所産である。2233・2234は須恵器の杯身である。2235は黒色土器A類の碗である。2236は須恵器の皿である。2237・2238は緑釉陶器の碗である。2237は貼付け高台で、内面見込み部に2条の沈線をめぐらせている。近江産の可能性がある。2238は内面に印刻花(蝶)文を施している。京都産の可能性がある。2239は土師質土器の土釜である。2233～2239の土器は、7世紀初頭から古代後半の年代が想定できる。2240～2301は打製石鏃である。凹基式のもの(2240～2287)、平基式のもの(2288～2298)、凸基式のもの(2299)がみられる。2302～2307は打製石錐である。2308～2311はスクレイパーである。2312は打製石剣と思われる。2313は磨製石庖丁で、2314～2316は打製石庖丁である。2317は磨製大型蛤刃石斧、2318～2320は磨製柱状片刃石斧である。2321は小形の磨製扁平片刃石斧である。2322～2326は打製石斧である。2327～2341は弥生土器の壺形土器である。口頸部及び頸胴部の境が無文のもの(2327)、段を持つもの(2330・2331)、ヘラ描き沈線を持つもの(2332)、削山凸帯を持つもの(2333)、貼付凸帯を持つもの(2334・2335)、櫛描き沈線を持つもの(2336)がみられる。2337～2341は底部である。2342～2352は甕形土器である。如意形口縁のもの(2342～2346)、凸帯文系のもの(2348・2349)がみられる。2350～2352は底部である。2353は甕形土器である。2354は如意形口縁をした鉢形土器である。2355は甕形土器の蓋形土器である。2327～2355の土器は、弥生時代中期初頭に属する2336以外は、すべて弥生時代前期の所産である。2356は緑釉丸瓦の破片であるが、玉縁の短さ、緑釉の質感、内面にも施釉がみられることなどから近世の所産と考えられる。2357～2367は打製石鏃である。凹基式のもの(2357～2365)と平基式のもの(2366・2367)がある。2368・2369は打製石錐である。2370～2372はスクレイパーである。2373・2374は打製石斧である。

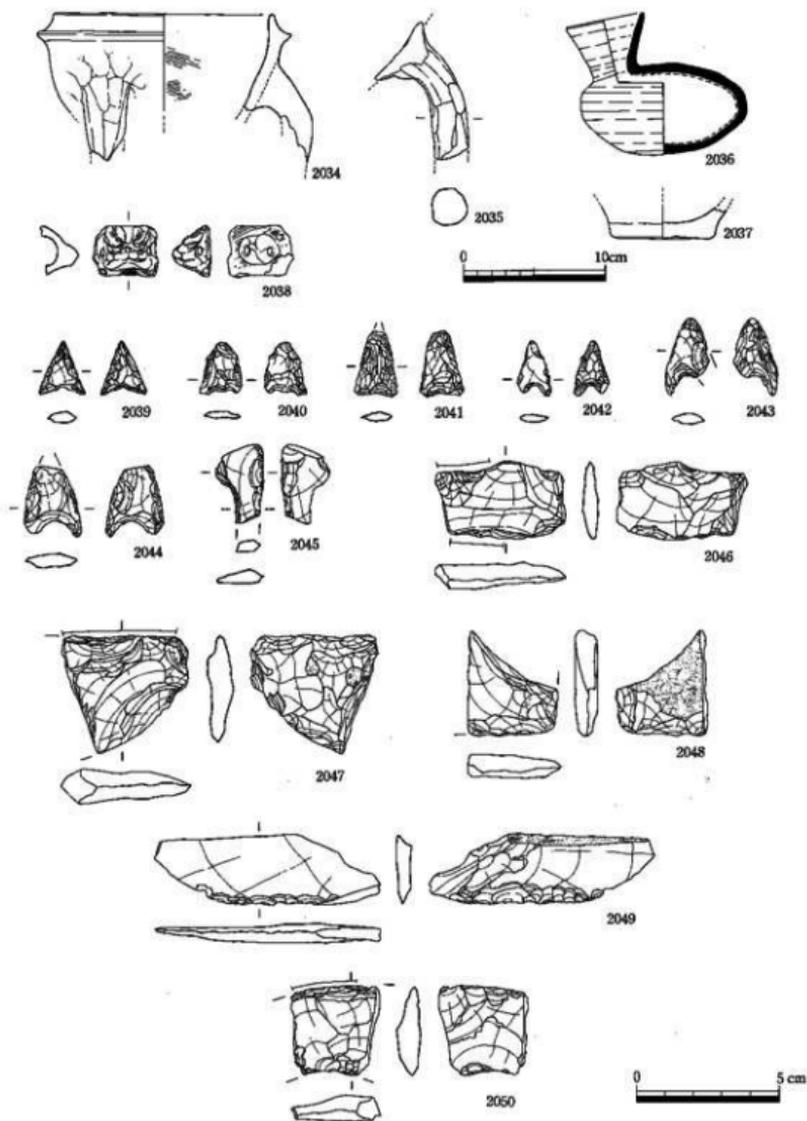
・IV区包含層（第371～374図）

2375～2419はIV A区の包含層から出土した遺物である。

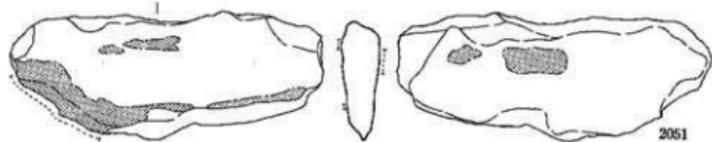
2375～2400は弥生土器の壺形土器である。口頸部及び頸胴部の境が無文のもの（2375～2378）、ヘラ描き沈線を持つもの（2379～2389）、削出凸帯を持つもの（2390）、貼付凸帯を持つもの（2391）がみられる。2392～2400は底部である。2401～2404は甕形土器である。すべて如意形口縁で、口縁部下にヘラ描き沈線をめぐらせている。2405・2406は如意形口縁の鉢形土器と判断したが、甕形土器も可能性がある。2407・2408は甕形土器用の蓋形土器である。2409は土器片を再利用した土製紡錘車の未製品である。2410～2412は打製石鏃である。2413は打製石錐である。2414・1415はスクレイパーである。2415は破損した打製石斧を再利用した可能性がある。2416・2417は打製石斧である。2418は緑泥片岩を使用した、やや扁平な形態をとる磨製大型蛤刃石斧である。2419は砂岩を使用した石皿の破片である。



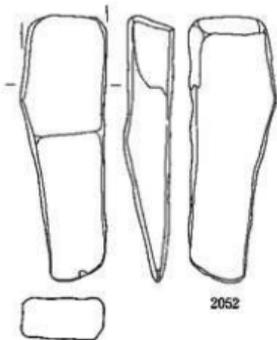
第352图 I A区包含层出土遗物



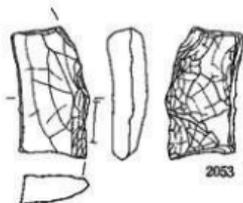
第363图 I A~C区包含层出土遗物①



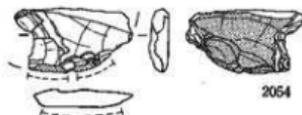
2051



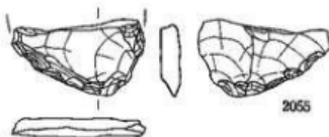
2052



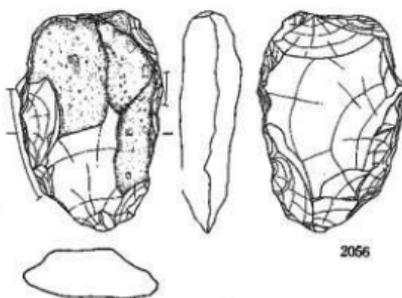
2053



2054



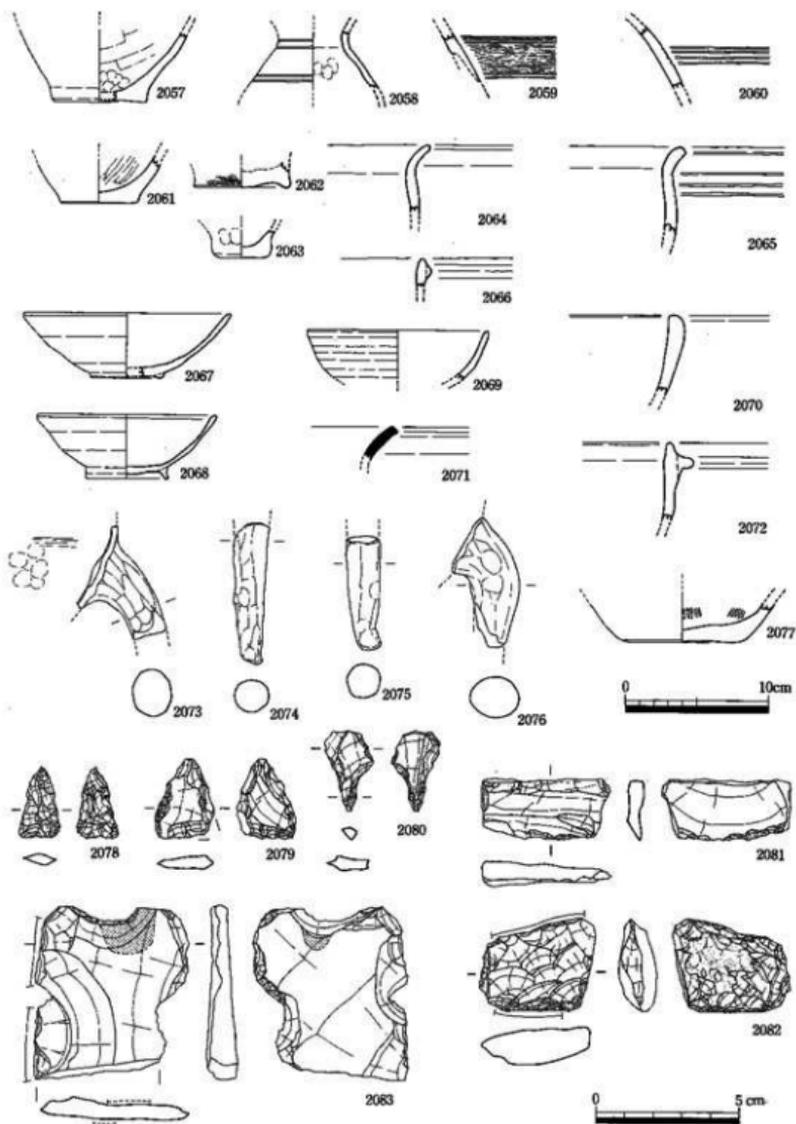
2055



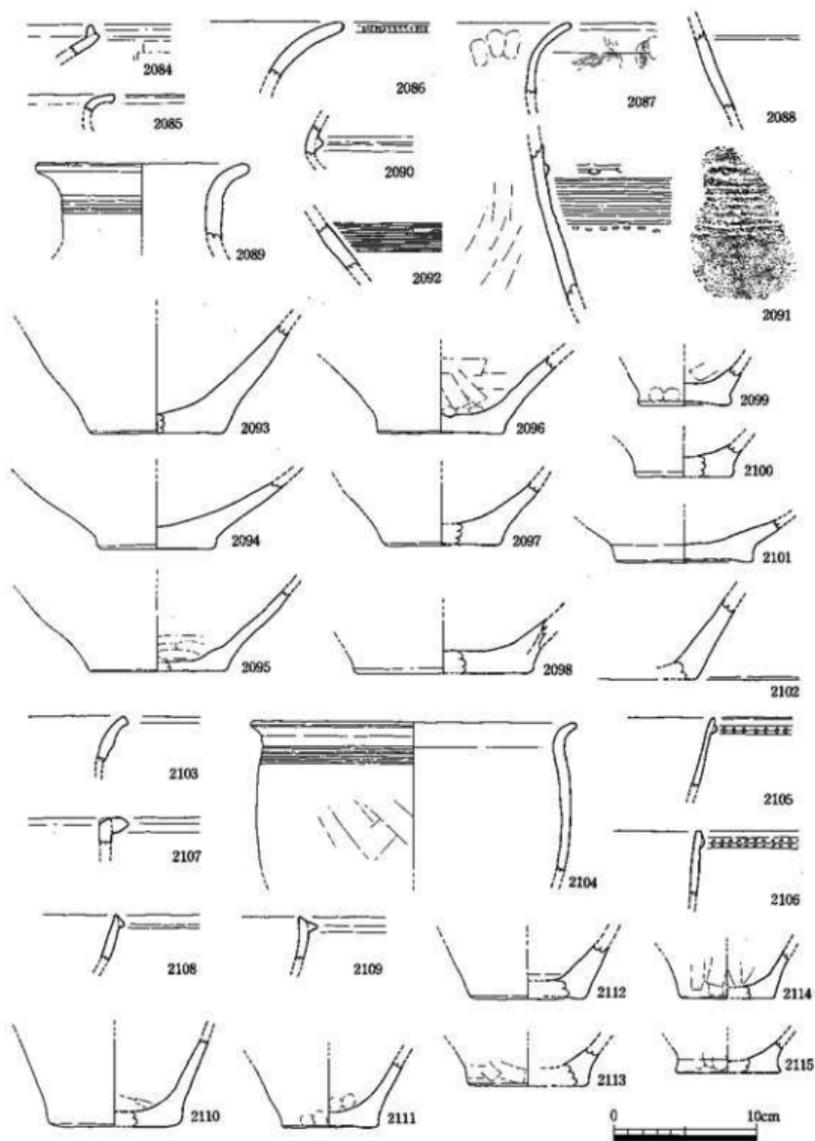
2056



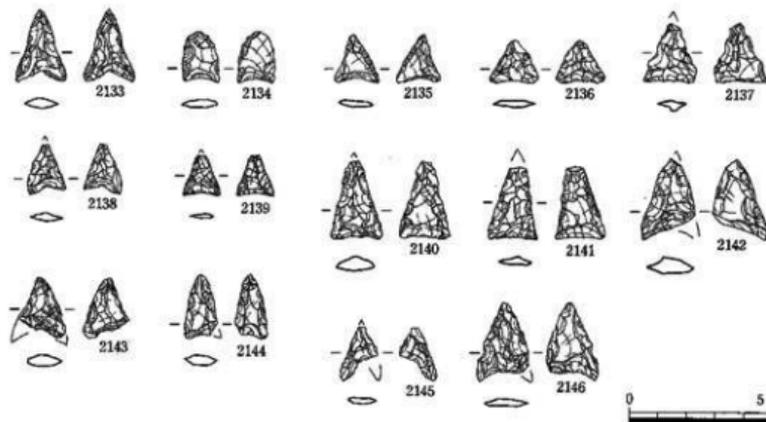
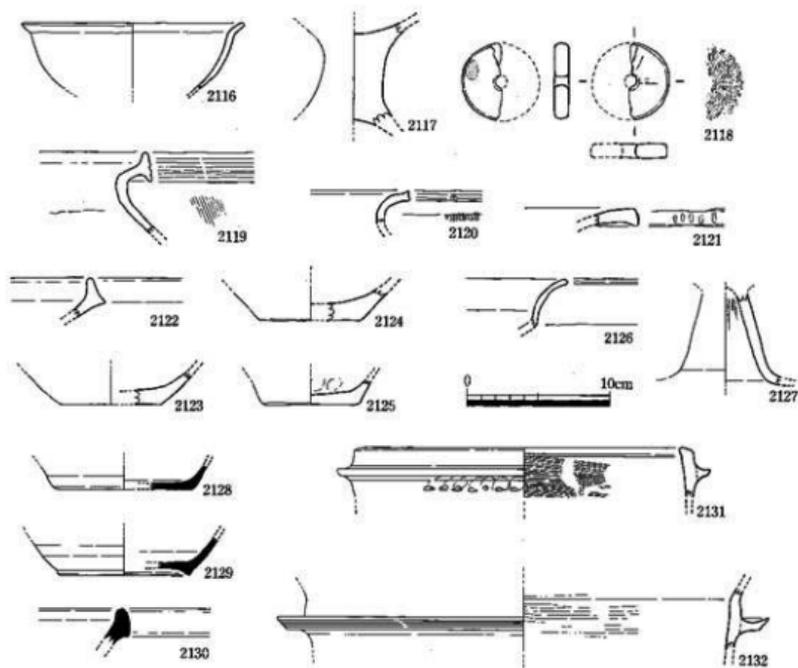
第354图 I A~C区包含層出土物②



第355图 II A·B区包含层出土遗物



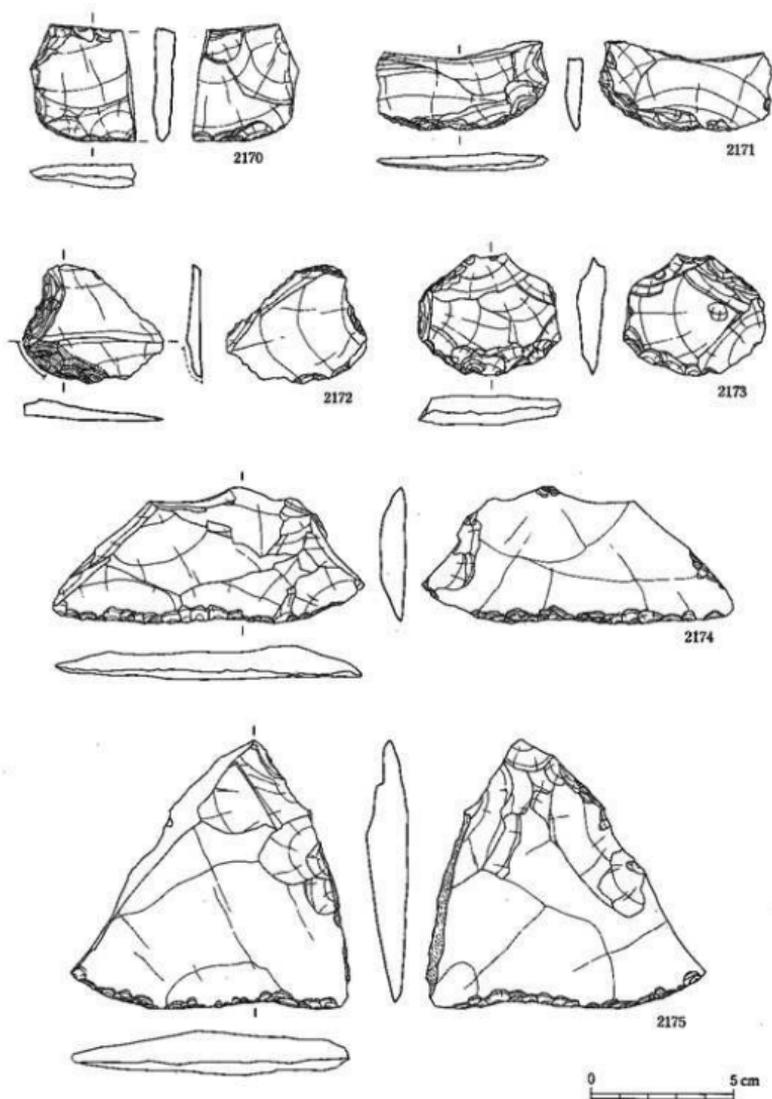
第356图 II C区包含层出土物①



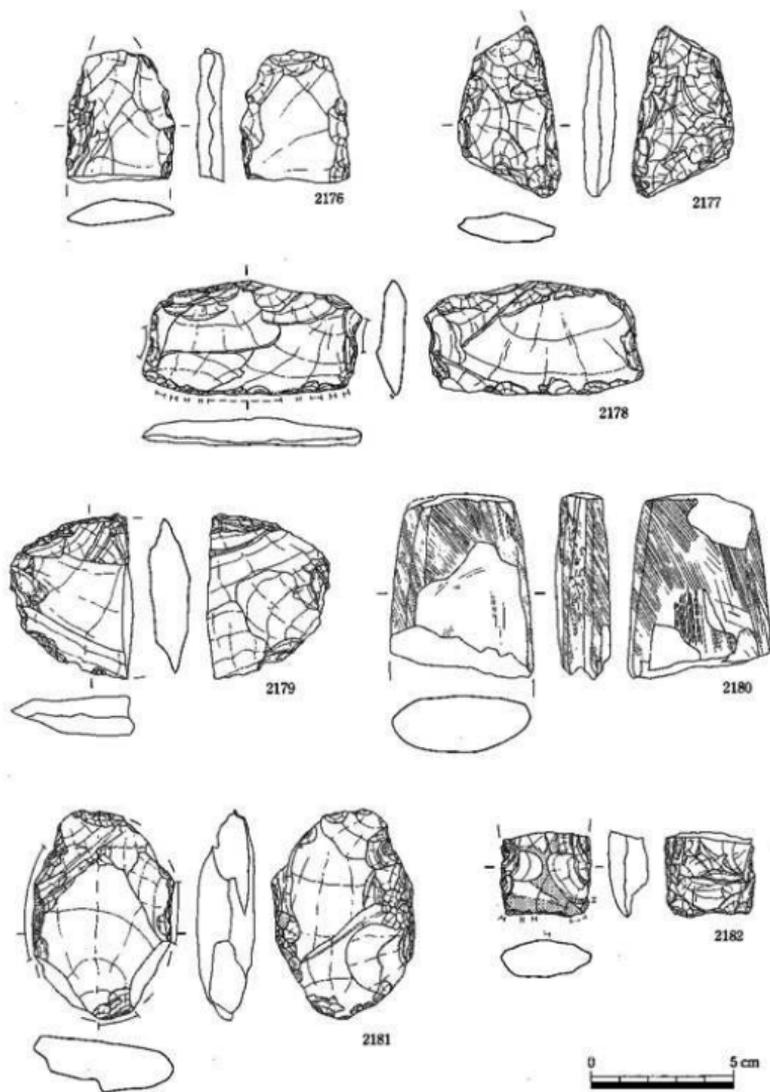
第357图 II C区包含层出土遗物②



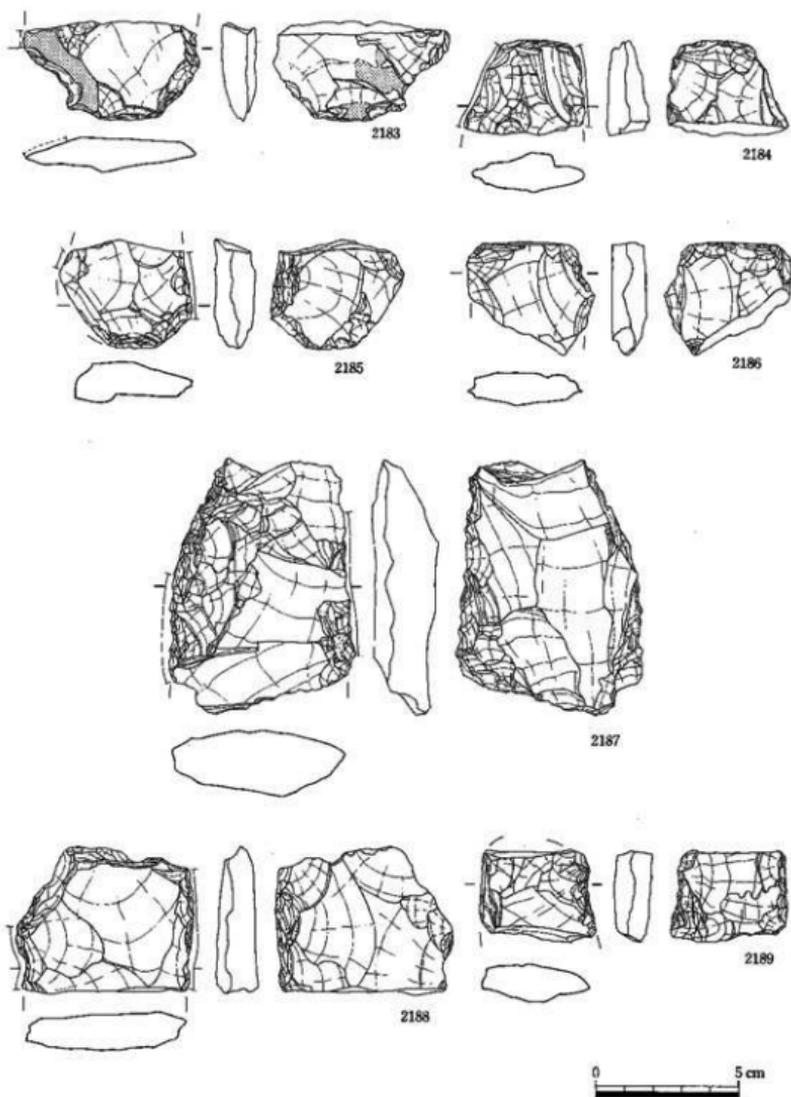
第358图 II C区包含层出土遗物③



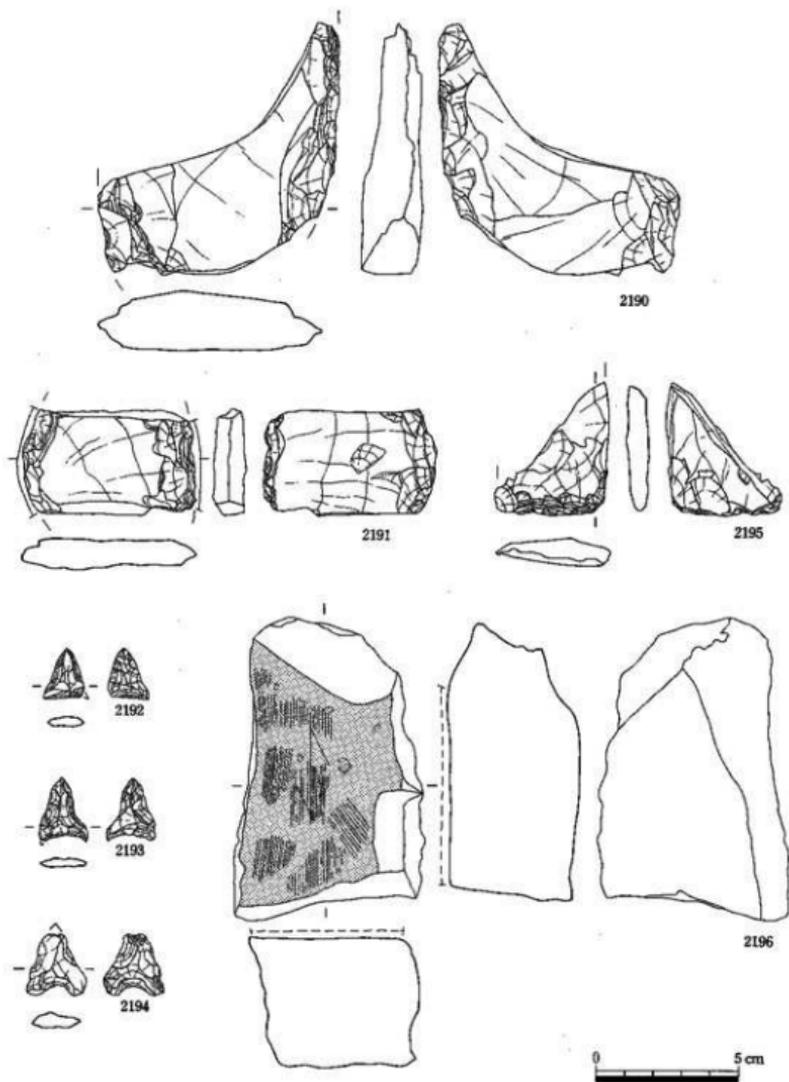
第369图 II C区包含层出土遗物④



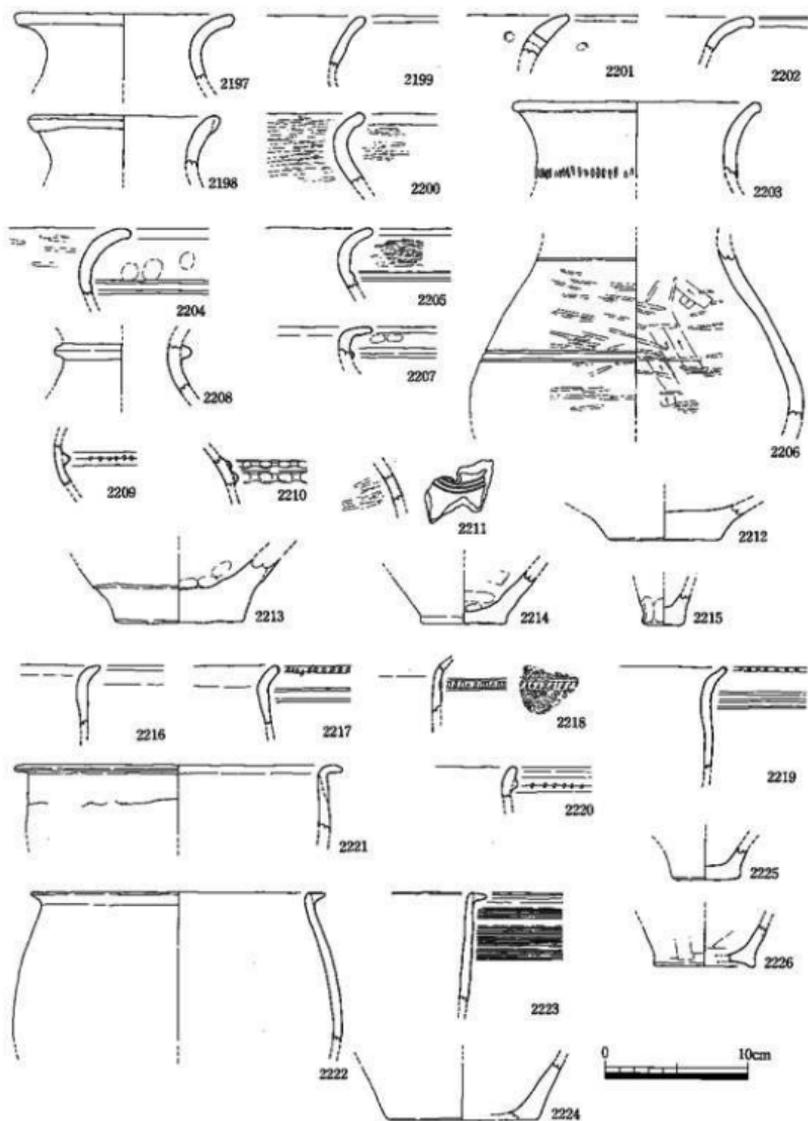
第360图 II C区包含层出土遗物⑤



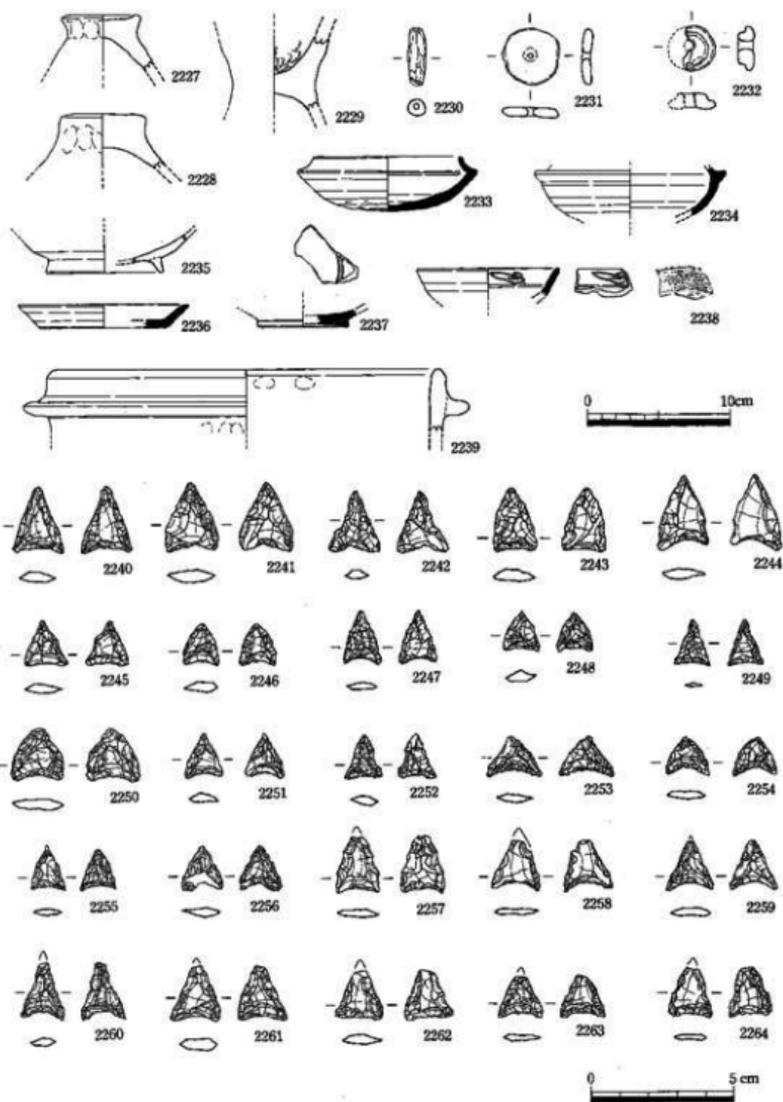
第361图 II C区包含层出土器物⑥



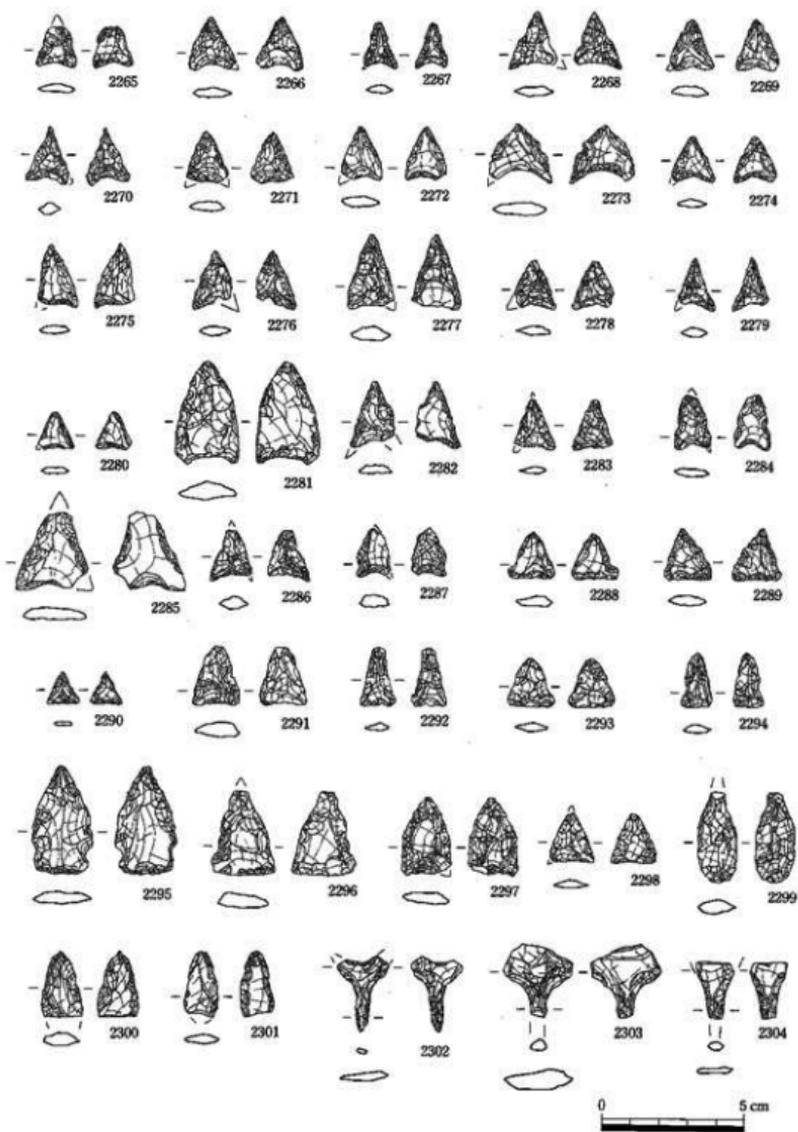
第362图 II C区包含層出土遺物の⑦



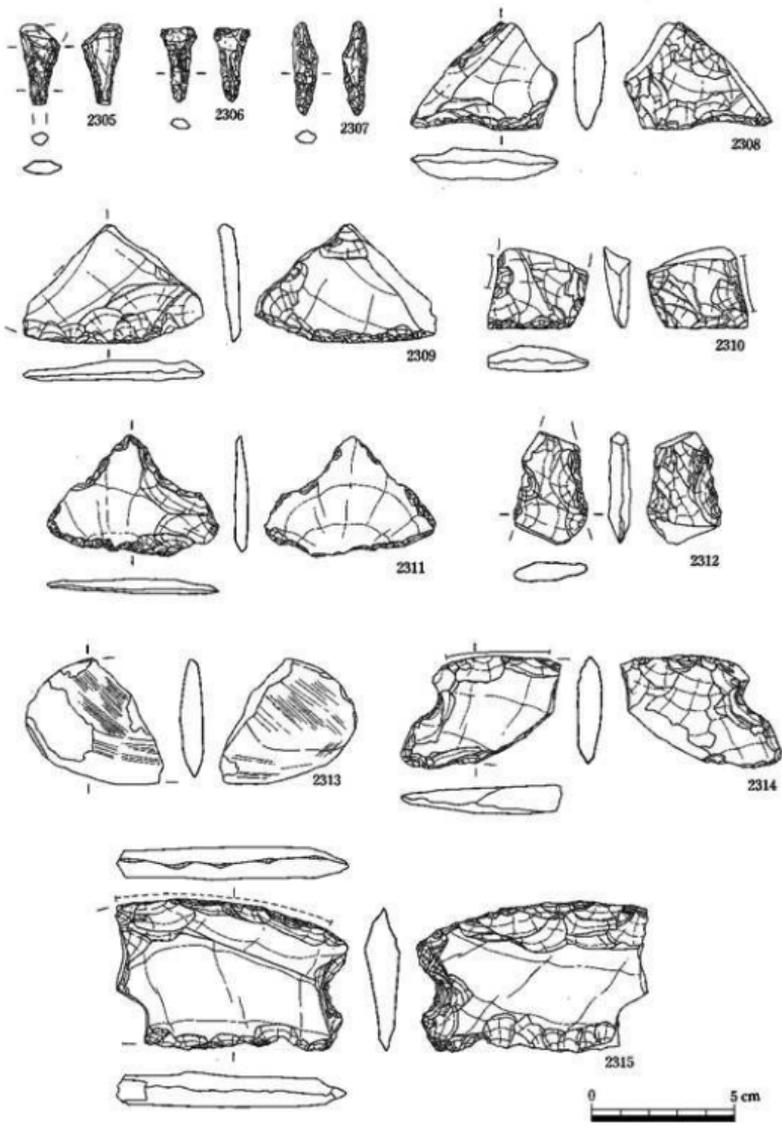
第363图 III A区包含层出土遗物①



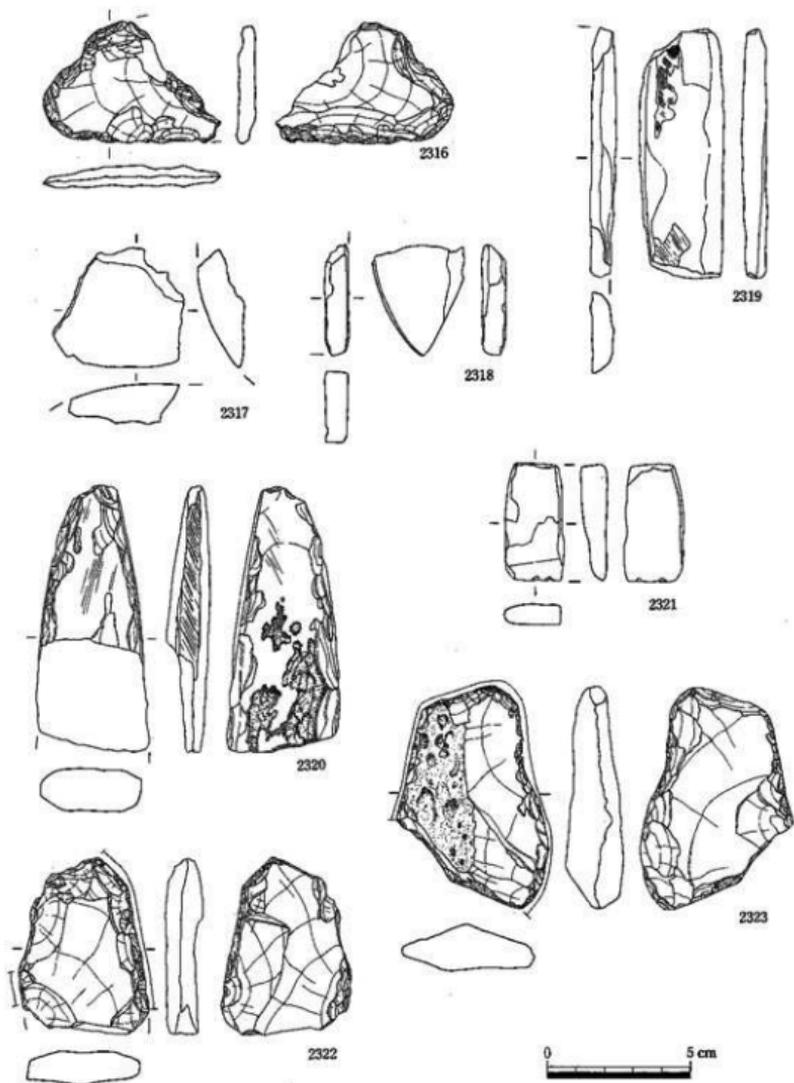
第364图 III A 包含層出土遺物②



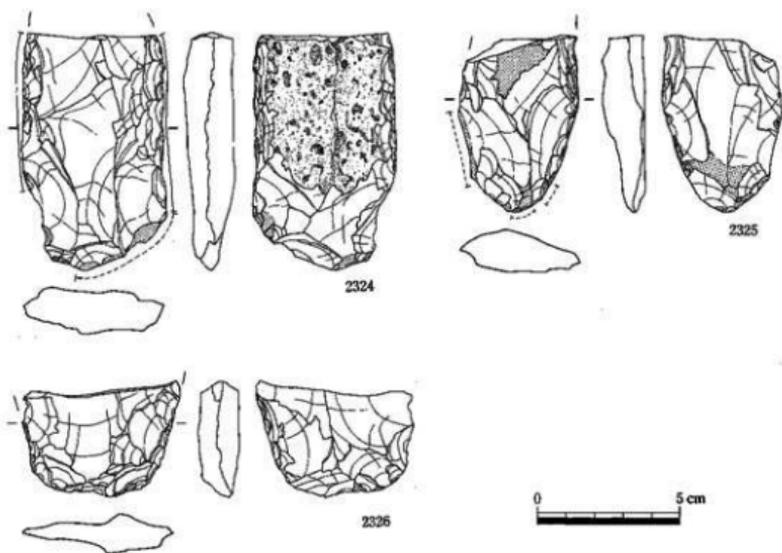
第365图 III A区包含层出土物③



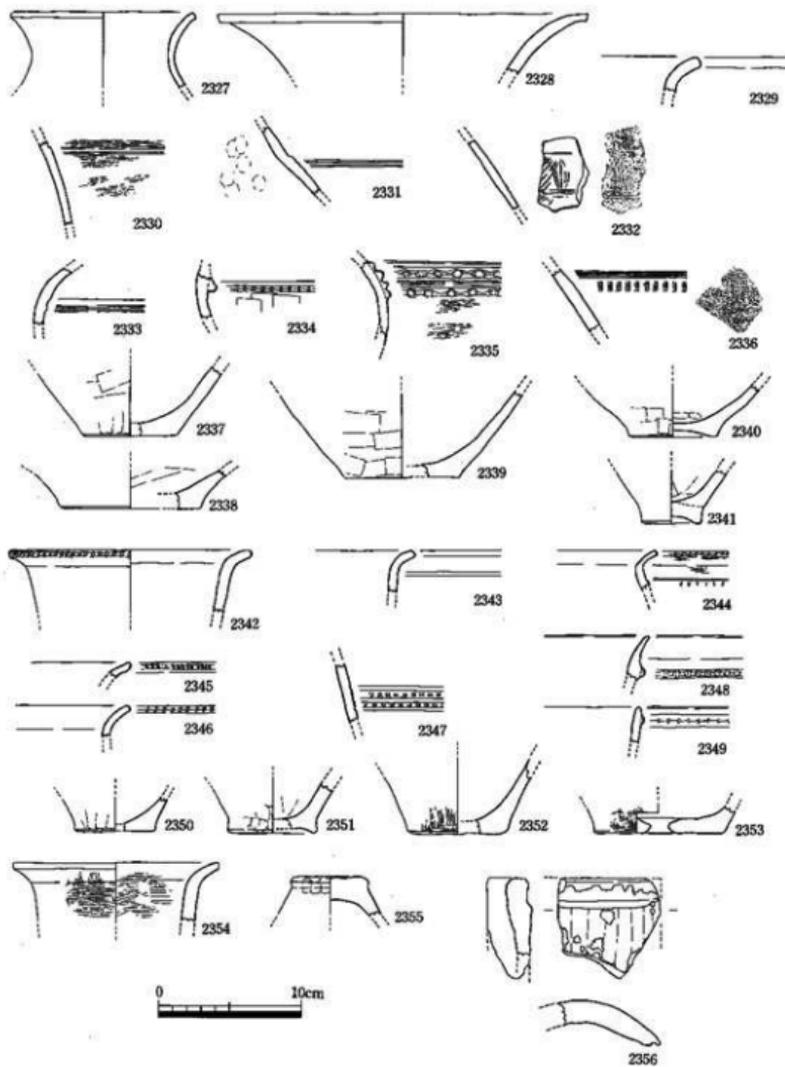
第366图 III A区包含层出土遗物④



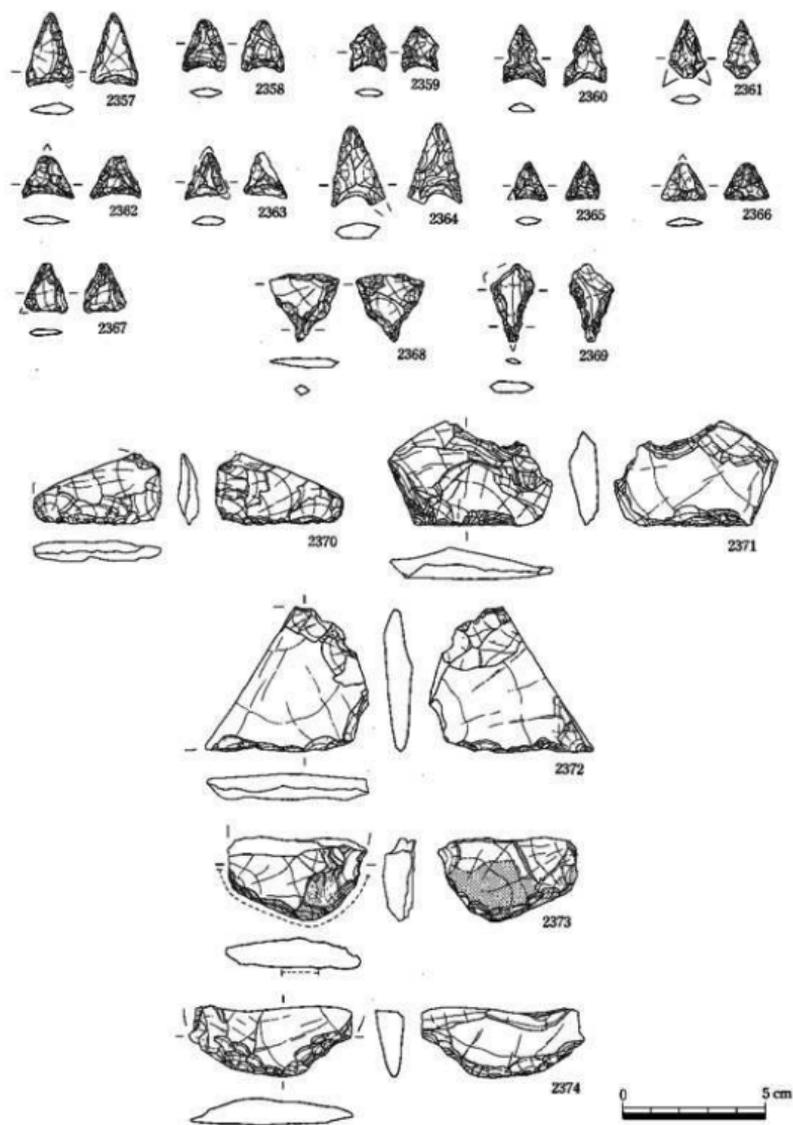
第367图 III A区包含层出土遗物⑤



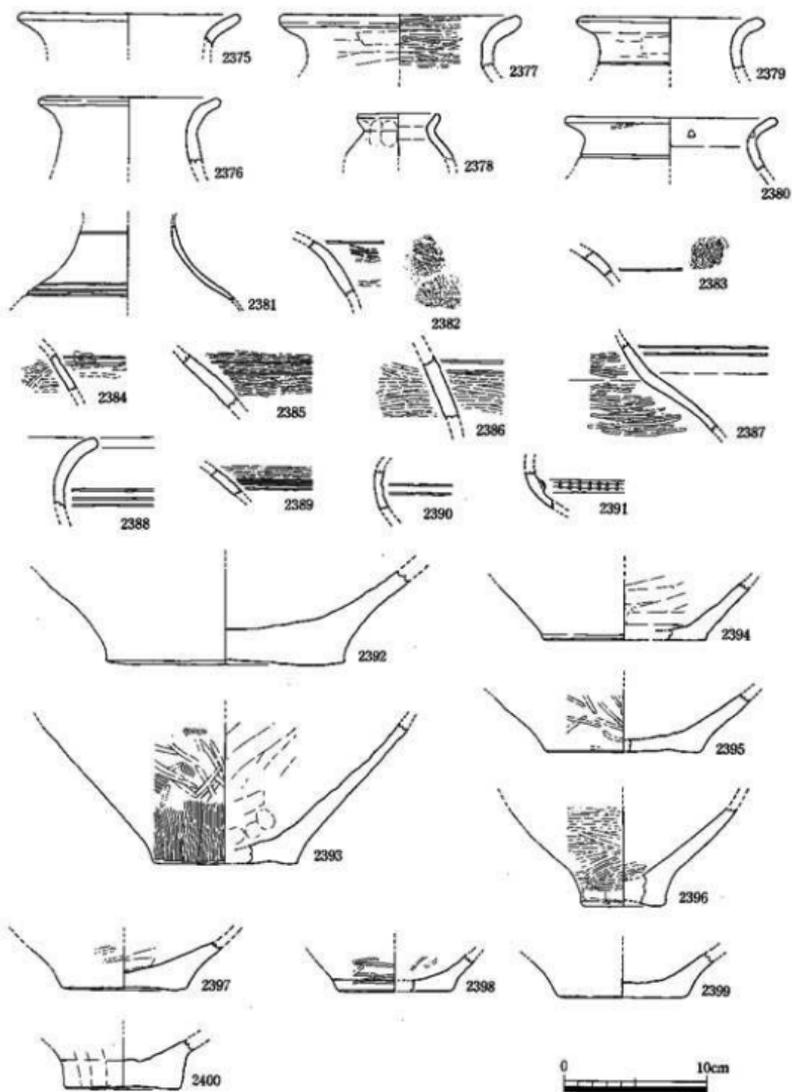
第368图 III A区包含层出土物⑥



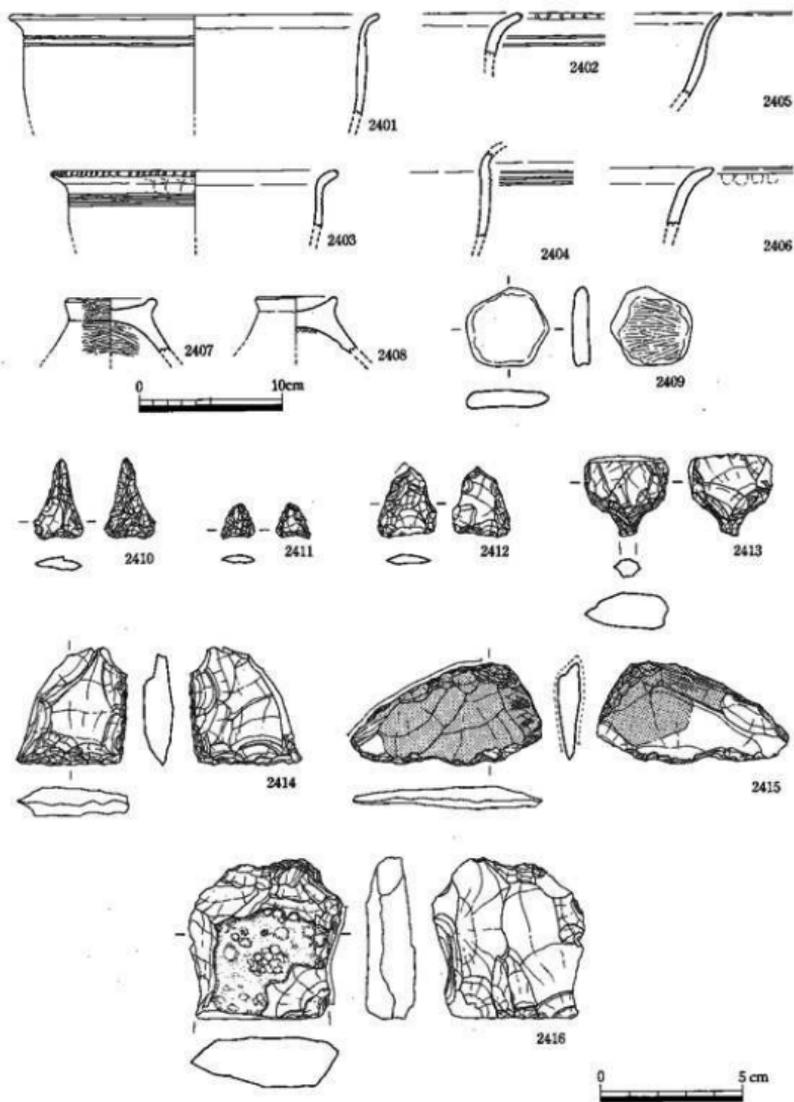
第369图 III B区包含层出土遗物①



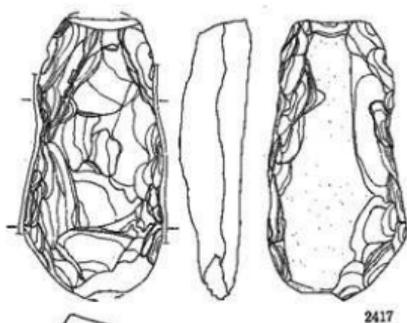
第370图 ⅡB区包含层出土遗物②



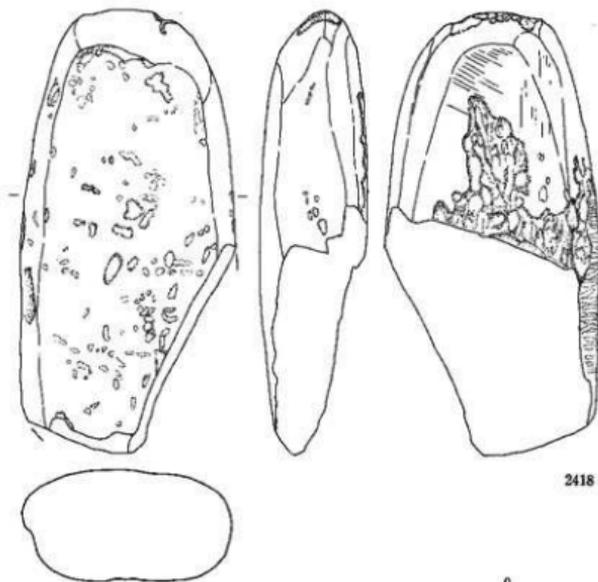
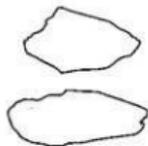
第371图 IV区包含层出土遗物①



第372图 IV区包含层出土遗物②



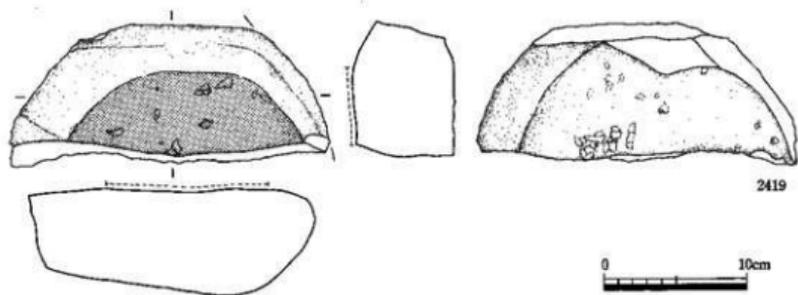
2417



2418



第373图 IV区包含层出土遗物③



第374图 IV区包含層出土遺物④

- 註(1) 壺形土器ないし壺形土器の底部に穿孔したものを、ここでは一つの独立した器種と認めて、甌形土器として把握している。本遺跡では墓の可能性のある土坑が比較的多く存在しており、特に壺形土器において、甌形土器といわゆる「供献土器」との区別が困難な状況であるため、底部の中央に穿孔したものを甌形土器とし、それ以外の胴部下半などに穿孔したものはいわゆる「供献土器」として扱う。
- (2) 近畿地方を中心に検出されている木棺の組み合わせ方法を見ると、ほとんどの木棺が両小口板を両長側板で挟み込んだものである。管見では本遺構のような組み合わせ方法は未だ確認されていないようである。なお、本遺構の構築については、ほぼ木棺大の垂直の壁面を持った墓壇を掘り、壁面に側板をもたせかけるように差し込んで固定し、遺骸を納めた後に蓋をして埋め戻すという過程が復元できよう。この構築方法では、裏込めの土や棺を固定する石を全く必要としないものである。本遺構のような組み合わせ方法が、弥生時代の木棺の組み合わせ技法の1つとして確立されているのかどうかについては、今後の類例の増加に期待したい。
- (3) 溝状掘り込み（小口溝）の存在から木棺墓と類推した。
- (4) 本遺構の東側には掘り方の残欠とも考えられる浅い土坑状の落ち込みが存在し、その南部はSK45によって壊されているように見える。この落ち込みについては、ST06に付随するものか、SK45に付随するものか、あるいは全く別の遺構であるのかについては確認できていない。ST06との位置関係を見ると、ST06の北西部分が落ち込みよりも大きくはみ出しておりST06のほうが時期的に新しいように見える。土層の観察からもST06が後出するものと思われるが、両者の埋土は極めて類似しており積極的に支持するものとは言い難い。一方、SK45に伴うものとしても、その性格については判断に苦しむ。ここでは一応SK45に関連するものと、消極的に判断しておく。
- (5) 詳細にみると、区画内は溝状遺構の中央部の途切れた部分を境にして西部と東部に二分できる。東部は柱穴のみで土坑がみられないのに対し、西部は柱穴と土坑の両者がみられる。このことは、区画内においても居住区と貯蔵穴区（プラス居住区）という区別がなされていると見ることができよう。溝状遺構の中央部の途切れた部分は東西をつなぐ通路（陸橋）に相当しよう。
- (6) SD49の南端については、平成2年度の調査で続きを検出している。その結果、SD49の南端はSR04（自然河川）と接続していることが判明している。

森下英治 「龍川五条遺跡」『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概報 平成2年度』香川県教育委員会・（財）香川県埋蔵文化財調査センター・日本道路公団

(1991年)

- (7) 平成2年度の調査で、北西部分を除くほぼ全体の形態が推定できるようになった。SD49の続きは、平成2年度の調査区においては緩やかな弧を描きながらSR04（自然河川）とつながっており、平成元年度の調査におけるほど強い屈曲はみられない。
- (8) SD50の南端については、平成2年度の調査で続きを検出している。その結果、SD49（外環濠）同様、SD50の南端はSR04（自然河川）と接続している。

註(6)文献

- (9) SD50の続きも、緩やかな弧を描きながらSR04（自然河川）とつながっており、平成元年度の調査におけるほど強い屈曲はみられない。
- (10) 善通寺市所在の彼ノ宗遺跡では、SH01と同時期の竪穴住居の埋土からガラス製小玉や土玉などが1～2点出土しているものが多い。調査担当者はこれを竪穴住居廃絶時の祭祀に伴うものと評価している。

笹川龍一 『彼ノ宗遺跡－弘田川河川改修工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告－』善通寺市教育委員会(1985年)

第4章 自然科学調査の成果

龍川五条遺跡から出土した木製品の樹種

(株) パリノ・サーヴェイ

はじめに

龍川五条遺跡周辺では、隣接する龍川四条遺跡の他、郡家一里屋遺跡・郡家大林上遺跡で出土した木製品の樹種同定が行われている（パリノ・サーヴェイ株式会社，1993a）。また、同じ丸尾一坂出平野の東端に位置する下川津遺跡、川津下樋遺跡、川津中塚遺跡、川津一ノ又遺跡でも出土した木製品の樹種同定が行われている（島地・林，1990；能城・鈴木，1990a；パリノ・サーヴェイ株式会社，1996）。これらの調査結果から、本地域では過去に50種を越す木材が様々な用途に用いられていたことが明らかとなっている。また、これらの調査結果から、製品の用途によって木材の使い分けがあったことも明らかになりつつある。今後さらに資料蓄積が期待される。

本報告では、龍川五条遺跡から出土した木製品の樹種を明らかにし、当該期の用材選択について検討する。

1. 試料

試料は、出土した弥生時代前期以降の木製品20点（試料番号2669～2688）である。各木製品の詳細については、樹種同定結果と共に表4に記した。

2. 方法

剃刀の刃を用いて、試料の木口（横断面）・榫目（放射断面）・板目（接線断面）の3断面の徒手切片を作製する。切片は、ガム・クロラル（抱水クロラル・アラビアゴム粉末・グリセリン・蒸留水の混合液）で封入し、プレバラートとした。プレバラートは、生物顕微鏡で木材組織の特徴を観察し、種類を同定する。

3. 結果

樹種同定結果を表4に示す。試料番号2674は樹皮であった。また試料番号2677と2685は、保存状態が良好ではなく、樹種の同定には至らなかった。その他の試料は、針葉樹2種類(モミ属・マキ属)、広葉樹6種類5(コナラ属コナラ亜属クスギ節・コナラ属アカガシ亜属・ヤマグワ・クスノキ・サカキ・ウツギ属)に同定された。各種類の解剖学的特徴などを以下に記す。

・モミ属 (*Abies* sp.) マツ科

早材部から晩材部への移行は比較的緩やかで、晩材部の幅は薄い。放射組織は柔細胞のみで構成され、柔細胞壁は粗く、じゅう状末端壁が認められる。分野壁孔はスギ型で1~4個。放射組織は単列、1~20細胞高。

・マキ属 (*Podocarpus* sp.) マキ科

早材部から晩材部への移行は緩やかで、晩材部の幅は薄い。樹脂細胞は早・晩材部の別なく散在する。放射組織は柔細胞のみで構成され、柔細胞壁は滑らか、分野壁孔はヒノキ型で1~2個。放射組織は単列、1~10細胞高。

・コナラ属コナラ亜属クスギ節 (*Quercus* subgen. *Lepidobalanus* sect. *Cerris* sp.)

ブナ科

環孔材で孔圏部は1~3列、孔圏外で急激に管径を減じたのち、漸減しながら放射状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1~20細胞高のものと複合放射組織とがある。

・コナラ属アカガシ亜属 (*Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis* sp.) ブナ科

放射孔材で、管壁厚は中庸~厚く、横断面では楕円形、単独で放射方向に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1~15細胞高のものと複合放射組織とがある。

・ヤマグワ (*Morus australis* poiret) クワ科クワ属

環孔材で孔圏部は1~5列、晩材部へ向かって関係を漸減させ、のち塊状に複合する。道管は単穿孔を有し、壁孔は密に交互状に配列、小道管内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は異性II~III型、1~6細胞幅、1~50細胞高で、しばしば結晶を含む。

・クスノキ (*Cinnamomum camphora* (L.) Presl) クスノキ科クスノキ属

散孔材で管壁は薄く、横断面では楕円形、単独まれに2~3個が放射方向に複合する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、放射組織との間では網目状となる。放射組織

は異性Ⅲ型，1～3細胞幅，1～20細胞高。柔組織は周囲状～翼状。柔細胞はしばしば大形の油細胞となる。

・サカキ (*Cleyera japonica* Thunberg pro parte emend. Sieb. et Zucc.)

ツバキ科サカキ属

散孔材で管壁は薄く，横断面では多角形，単独または2～3個が複合する。道管径は小さく，分布密度は高い。道管は階段穿孔を有し，壁孔は対列～階段状に配列する。放射組織は異性，単列，1～20細胞高。

・ウツギ属 (*Deutzia* sp.) コキノシタ科

散孔材で管壁は薄く，横断面では多角形，単独であるがまれに複合する。道管は階段穿孔を有し，段数は20～30。放射組織は大形の異性で，1～4細胞幅，鞘細胞が認められる。

試料番号	遺構名	層位	器種	時代・時期	樹種	報文番号
2669	SD07	下層	斧柄	平安時代～中世	モミ属	1721
2670	SD07	下層	板材	平安時代～中世	マキ属	1727
2671	SD07	下層	杭	平安時代～中世	コナラ属コナラ亜属クスギ節	1723
2672	SD07	下層	杭	平安時代～中世	ウツギ属	1726
2673	SD07	下層	杭	平安時代～中世	モミ属	1725
2674	SD07		板材	平安時代～中世	樹皮	
2675	SD07	下層	スプーン状	平安時代～中世	サカキ	1722
2676	SR02		曲げ物(底板)	近世	モミ属	2018
2677	SP15		杭?	平安時代～中世	針葉樹	1980
2678	SR04	下層	杭	弥生時代前期	コナラ属コナラ亜属クスギ節	1125
2679	SR04	下層	板材	弥生時代前期	コナラ属アカガシ亜属	1127
2680	SR04	下層	広楕	弥生時代前期	コナラ属アカガシ亜属	1121
2681	SR04	下層	板材	弥生時代前期	クスノキ	1123
2682	SR04	下層	用途不明	弥生時代前期	クスノキ	1122
2683	SR03	下層	板材	弥生時代前期	クスノキ	972
2684	SR03	下層	用途不明	弥生時代前期	モミ属	971
2685	SD07	下層	板材	平安時代～中世	広葉樹	1728
2686	SD07	下層	杭	平安時代～中世	コナラ属アカガシ亜属	1724
2687	SR04	下層	杭	弥生時代前期	モミ属	1124
2688	SR04	下層	杓子形	弥生時代前期	ヤマグワ	1126

表4 木製品の樹種同定結果

4. 考察

試料の多くは杭材と板材であり、他には斧柄、スプーン状、曲げ物（底板）、広楾、杓子形が各1点づつある。斧柄にはモミ属が確認された。モミ属の柄は下川津遺跡で1点確認されているが（能城・鈴木，1990 a），これまでの調査事例ではコナラ亜属やアカガシ亜属などに代表される強靱な木材が多い。しかし、柄に使用されている木材には、下川津遺跡だけでも多くの種類が確認されており、必ずしも強靱な木材が選択的に利用されていたとはいえない。石斧の使用条件によって木材の選択幅が異なっていた可能性もある。今後、考古学的な情報と合わせて検討すべき課題である。

スプーン状とされる製品はサカキに、杓子形はヤマグワにそれぞれ同定された。同様の製品については、これまでも各地で樹種同定が行われている（島地・伊東，1988；伊東，1990）。それらは多くの樹種が確認されており、特定の樹種が選択されていたとは考えにくい。木材の選択には、それぞれの時代の加工技術が大きく関係する。多くの樹種が確認されている背景には、それぞれの時代の加工技術で加工が可能な木材であれば、樹種に関係なく利用された可能性もある。なお、ヤマグワとサカキでは、サカキの方がより堅い材質を有している。あるいは、加工技術の進歩と同時に用材選択の幅がより堅い木材まで広がったのかも知れない。

曲げ物については、これまで各地で調査された多くが針葉樹であり、特にヒノキ属の利用が多い（島地・伊東，1988；伊東，1990）。香川県におけるこれまでの調査例（能城・鈴木，1990 a；バリノ・サーヴェイ株式会社，1992；未公表資料）でもヒノキ属が圧倒的に多く、同様の傾向が認められる。今回同定されたモミ属は、下川津遺跡の底板に1点確認されている（能城・鈴木，1990 a）。針葉樹材は比較的均質で、薄い板状の加工が容易な種類が多い。加えて、ヒノキ属は耐水性に優れており、このことが針葉樹材、特にヒノキ属が多く利用された背景として考えられる。小數ながらモミ属、スギ、ツガ属などが利用されている背景については、曲げ物自身の用途や使用者の違いなどが考えられる。また、モミ属は2点とも底板であるから底板と側板とで用材が異なっていたことも考えられる。いずれにしても、現時点では県内における出土例が少ないため、今後の資料蓄積を待ちたい。

広楾はアカガシ亜属であった。県内では、下川津遺跡や林・坊城遺跡で行った楾・鐮の樹種同定結果でもアカガシ亜属が多い（島地・林，1990；能城・鈴木，1990 a；バリノ・サーヴェイ株式会社，1993 b）。同様の傾向は畿内一帯で確認でき、特定の樹種が選択さ

れていた様子が見られる。今回の結果もその一例といえる。

板材には、マキ属、アカガシ亜属、クスノキ、広葉樹、樹皮などが認められ、様々な木材が板に利用されていたことがうかがえる。これらの木材は、材質や加工性の違いやそれぞれの形態を考慮すれば、用途が異なっていた可能性がある。例えば試料番号2679は、その形態から鉄の木製品の可能性が指摘されている。樹種は、鉄の用材として一般的なアカガシ亜属であり、鉄の加工途中である可能性が高い。アカガシ亜属は、木材組織の特徴から複合放射組織を利用した柁目板となることが多い。したがって、本試料も柁目板の可能性が高い。その他の試料については、その形態や樹種から用途を推定することは困難である。

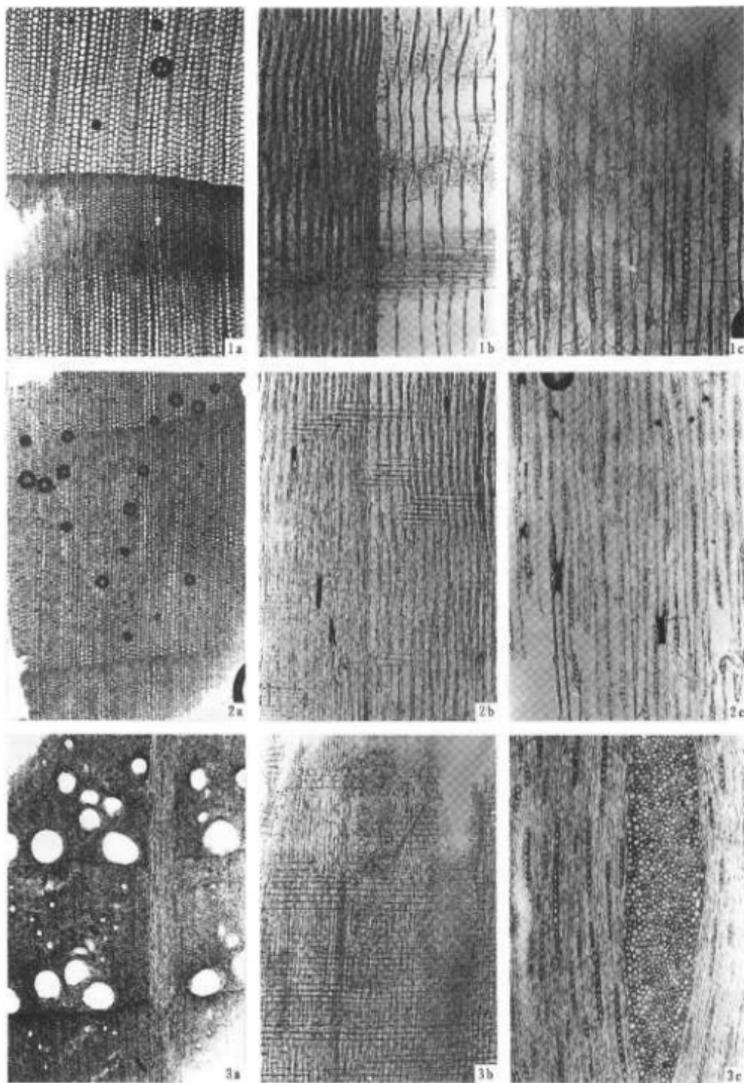
杭材は、平安時代～中世にクヌギ節、アカガシ亜属、ウツギ属、モミ属、弥生時代前期にモミ属、針葉樹、クヌギ節、アカガシ亜属が認められた。また、隣接する龍川四条遺跡で出土した弥生時代後期の杭材にはアオキが同定されている（未公表資料）。これらの杭材は、これまで各地で行われてきた調査結果から、遺跡周辺に生育していた樹木を利用した可能性が高い。また、時には製品を加工した際の枝材などの余材や廃材の転用なども行われたことが考えられる。本遺跡における結果も、樹種に統一性が無いことから、遺跡周辺に生育していた樹木が利用されたと考えられる。使用されている樹種は、特に時代による違いは認められない。

善通寺市永井遺跡では、縄文時代後期中葉の木材化石群集の樹種同定から、多様な落葉広葉樹からなる森林の中にアカガシ亜属などの常緑広葉樹や針葉樹が混じり、林縁や林内の空き地には灌木や蔓植物が生育する古植生が推定されている（能城・鈴木、1990b）。今回の結果からも同様の植生が推定でき、縄文時代後期から中世まで、遺跡周辺の植生は基本的には変化していないことが考えられる。

〈引用文献〉

- 伊東隆六（1990）日本の遺跡から出土した木材の樹種とその用途Ⅱ。木材研究・資料，26，P.91～189
- 能城修一・鈴木三男（1990a）昭和63年度調査の分析委託結果。「瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告Ⅶ 下川津遺跡 一第2分冊一」，P.533～567，香川県教育委員会・（財）香川県埋蔵文化財調査センター・本州四国連絡橋公団

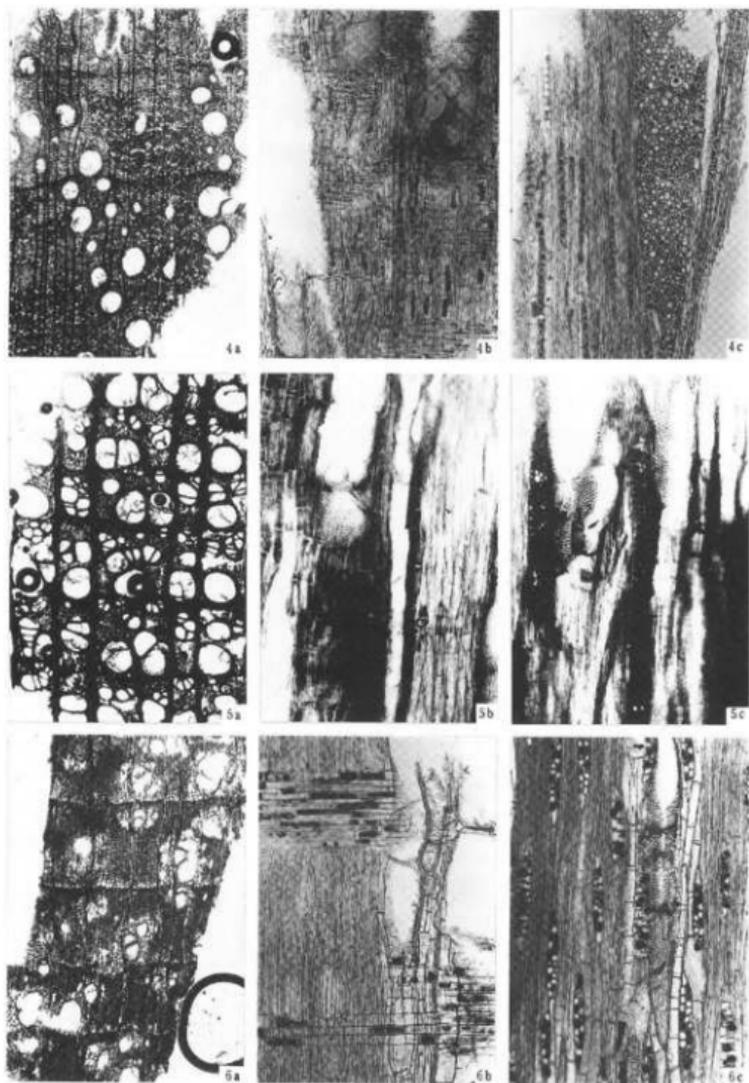
- 能城修一・鈴木三男（1990b）普通寺市永井遺跡の木材化石群集。「四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第9冊 永井遺跡（附編・観察表・写真図版編）」, P.823~864, 香川県教育委員会・（財）香川県埋蔵文化財調査センター・日本道路公団
- バリノ・サーヴェイ株式会社（1992）木製品の樹種。「高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第1冊 東山崎・水田遺跡 第1分冊」, P.358~369, 香川県教育委員会・（財）香川県埋蔵文化財調査センター・建設省四国地方建設局
- バリノ・サーヴェイ株式会社（1993a）郡家一里屋遺跡出土木材等分析委託業務報告。「四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第12冊 郡家一里屋遺跡」, P.227~233, 香川県教育委員会・（財）香川県埋蔵文化財調査センター・日本道路公団
- バリノ・サーヴェイ株式会社（1993b）林・坊城遺跡自然河川出土木材の樹種。「高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第2冊 林・坊城遺跡」, P.224~238, 香川県教育委員会・（財）香川県埋蔵文化財調査センター・建設省四国地方建設局
- バリノ・サーヴェイ株式会社（1996）川津下橋遺跡における植物性遺物の同定。「四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第21冊 川津下橋遺跡」, P.174~185, 香川県教育委員会・（財）香川県埋蔵文化財調査センター・日本道路公団
- 島地 謙・林 昭三（1990）昭和61年度調査の分析委託結果。「瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告Ⅶ 下川津遺跡 一第2分冊一」, P.520~532, 香川県教育委員会・（財）香川県埋蔵文化財調査センター・本州四国連絡橋公団
- 島地 謙・伊東隆夫編（1988）日本の遺跡出土木製品総覧, P.296, 雄山閣



1. モミ属 (試料番号2673)
 2. マキ属 (試料番号2670)
 3. コナラ属コナラ亜属クスギ節 (試料番号2671)
 a: 木口, b: 柃目, c: 板目

200 μ m: a
 200 μ m: b, c

第375図 木材(1)



4. コナラ属アカガシ亜属 (試料番号2679)

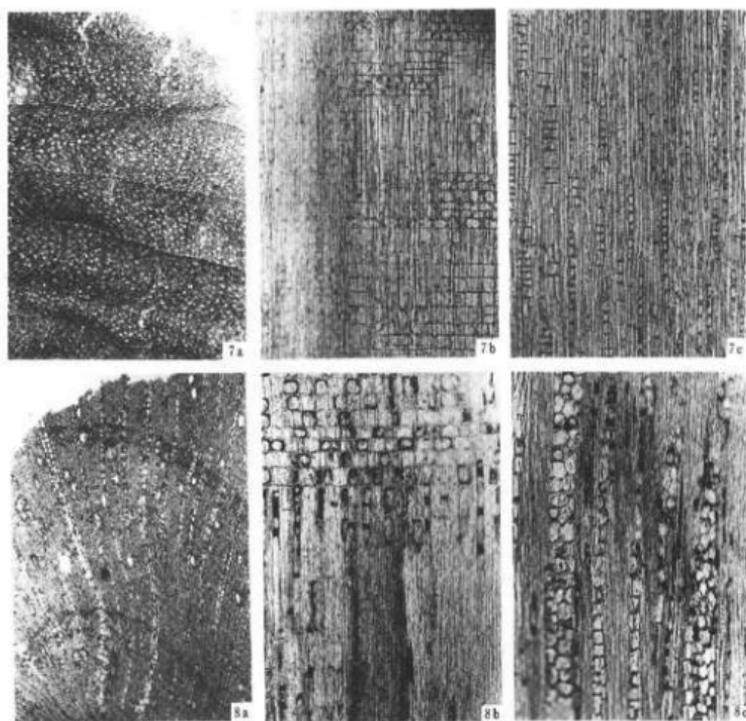
5. ヤマグチ (試料番号2688)

6. クスノキ (試料番号2682)

a: 木口, b: 柱目, c: 板目

200 μ m : a
200 μ m : b, c

第376図 木材(2)



7. サカキ (試料番号2675)
 8. ウツギ属 (試料番号2672)
 a: 木口, b: 柾目, c: 板目

200 μm: a
 200 μm: b, c

第377図 木材(3)

第5章 まとめ

第1節 遺構について

(1) 遺構の変遷(第378・379図)

これまで述べてきたように、龍川五条遺跡では弥生時代前期から近世にわたるまでの複数の時期の遺構を検出している。これらの遺構は出土した遺物の年代観から大きく5つの時期に分けることが可能である。ここでは時期別にまとめた遺構をととして、龍川五条遺跡の時代ごとの変遷を概観する。

I期

I期は弥生時代前期を中心とした時期で、弥生時代中期の初頭をわずかに含んでいる。これ以前の遺構は確認していないが、縄文時代晩期の土器が自然河川SR01・04から少量出土していることから、周辺に縄文時代晩期の遺構が存在する可能性がある。

当該期の遺構はII区からIV区にかけて、すなわち自然河川SR03・04の両側に位置する微高地上に展開している。東微高地上には自然河川SR04を一部に取り込む形で2条の環濠をめぐらせた環濠集落が営まれている。環濠の内部には竪穴住居と掘立柱建物およびそれらに伴うと考えられる土坑、さらに集落の内部を区画する溝状遺構SD48がみられる。SD48によって囲まれた部分にも建物の存在が想定されることから、この集落の建物の在り方には環濠という大区画の内部に存在するものと、さらに区画溝SD48という小区画の内部に存在するものの2種類がみられることがわかる。SR04および二条の環濠SD49・50からは弥生時代前期後半を中心とした遺物が多量に出土しているが、上層では一部に櫛描文を施した土器も見られることから、この環濠集落は弥生時代前期中頃に始まり弥生時代中期初頭にかけて存続したことがわかる。

一方、西微高地上には周溝墓ST01・02・03と木棺墓ST04・05および多数の土坑が群在している。これらの上坑の一部は墓になるものが含まれていると思われる。すなわち、西微高地上には墓域が形成されているといえよう。墓の在り方をみてみると、周溝による明確な区画を持ったもの、区画を持たないものに大きく二分することができよ

う。さらに区画を持たないものは、木棺を使用するものと使用しないもの（単なる土坑墓）に細別することができる。西微高地上の遺構からは遺物の細片が少量しか出土していないが、弥生時代前期に属するものが大半を占めると考えられる。したがってこれらの墓は環濠集落を営んでいた集団の墓と想定できる。集落内の建物の在り方と墓の在り方ともにそれぞれが「区画する」という共通項で2種類の在り方を示していることは、両者の対応関係を示唆しているようでもあり興味深い。

調査区内において居住域（環濠集落）と墓域を確認することはできたが、経済の基盤となる生産域については確認していない。おそらく調査区の近辺に埋没している旧河道や低湿地が生産域として土地利用されたのであろう。しかもそれは土器に残された靱痕や石磨丁・木製鎌の存在などから主に水田として使われたことは想像に難くないであろう。

Ⅱ期

Ⅱ期は弥生時代後期末から古墳時代初頭にかけての時期である。この時期の遺構は前段階に比べると極めて少なく、ⅡC区の溝状遺構とⅢA区の竪穴住居を除いて詳細は不明である。Ⅰ期に微高地間を流下していた自然河川SR03・04は埋没をほぼ完了しており、ⅡC区ではその上に2本の溝状遺構SD38・39が作られているが、この溝状遺構の方向がかつての自然河川と同じ方向であることは、微低地となっていたことを示しているといえる。ⅢA区では竪穴住居SH01を1棟検出しているが、単独で存在しているとは考え難いことから調査区の北側あたりで数棟の拡がりをみせるものと思われる。Ⅰ区では旧流路の可能性もある溝状遺構SD07などから当該期の遺物が出土しているが、量的には少ない。Ⅰ区は前段階から引き続いて不安定な低地・湿地であったと思われる。

Ⅲ期

Ⅲ期は古代である。Ⅰ区には自然河川SR02が形成され、それと同じ方向を持つ溝状遺構が多数作られている。これらの溝状遺構は単に水を引く・排する以外に周囲の土地を乾かす目的も有している可能性があると思われる。ⅡC区ではわずかに土坑がみられるがその性格は不明である。ⅢA区の調査区西端近辺では完全に埋没したかつての自然河川の上に現代の地割りと同じ方向を持つ溝状遺構SD44・45が作られる。SD45はかなり規模の大きな溝状遺構で条里の坪界の位置にあたるものと思われる。ⅢA区の東半部分には掘立柱建物が3棟みられる。いずれの掘立柱建物も主軸の方向をSD45と平行ない

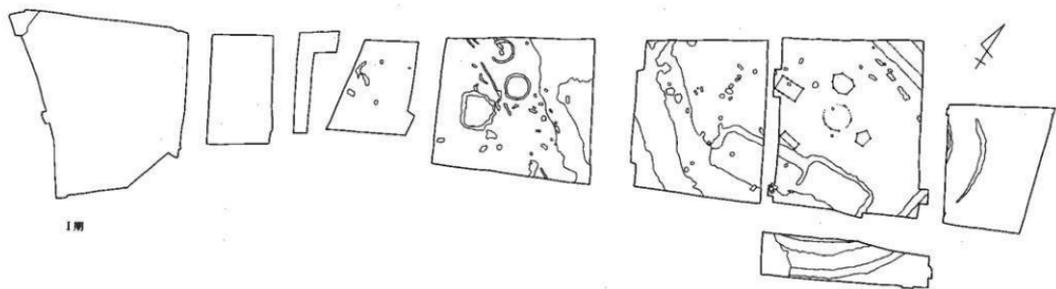
し直交させるものである。これらのⅢ期の遺構からは概ね10世紀を中心とした遺物が出土しており、平安時代に属するものと思われる。

Ⅳ期

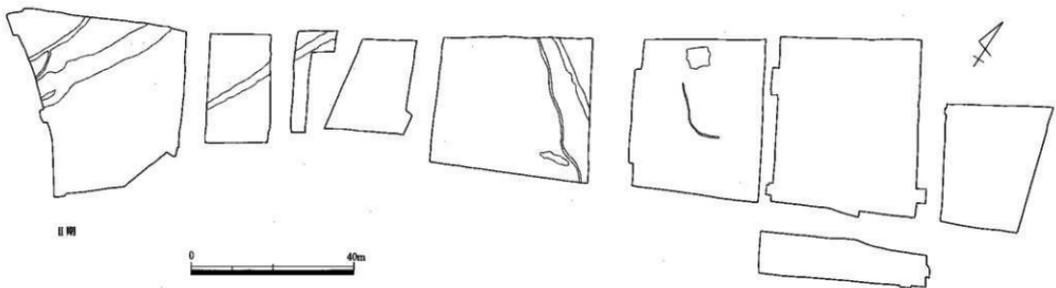
Ⅳ期は中世である。この時期になるとⅠ区の自然河川や溝状遺構はほとんど埋没してしまい、前段階の溝状遺構と同じ方向の若干の溝状遺構以外に掘立柱建物がみられるようになる。これはⅠA区のすぐ西に存在する段丘崖が形成された結果、前段階までは不安定であったⅠ区が段丘化して安定した土地に転じたために居住地として土地利用することが可能となったためと考えられる。段丘崖の形成時期は弥生時代中期と古代末の2時期が推定されているが、当該地にみられる段丘崖の形成は後者の古代末の年代観と一致している。ⅠC区にはSX06（網塚）がこの時期に作られているが、その性格については不明である。ⅡC区では2棟の掘立柱建物がみられる。ⅢA区からⅣA区にかけては当該期以降の遺構は全くみられなくなる。これは居住域や墓域としてではなく、遺構の残りにくい水田や畑などの生産域として土地利用されたことを示唆する可能性がある。

Ⅴ期

Ⅴ期は近世以降の時期である。当該期の遺構はⅠA区に限定され、現在の地割りと同じ方向の溝状遺構と少数の土坑および井戸が作られている。他の調査区では遺構が全く認められないことから、前段階から継続して生産域としての土地利用が継続したものと考えられる。



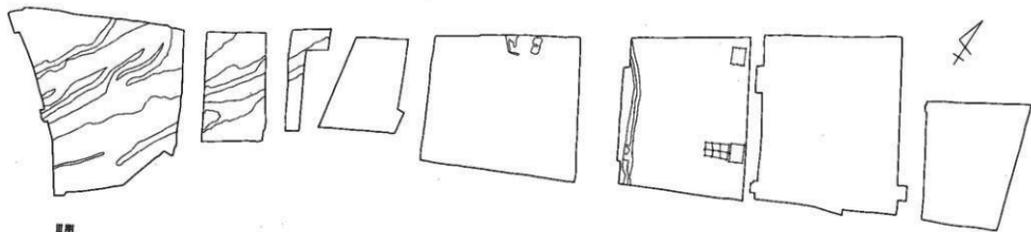
I期



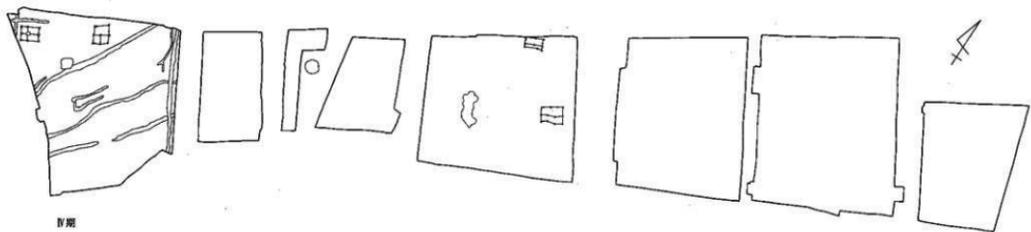
II期



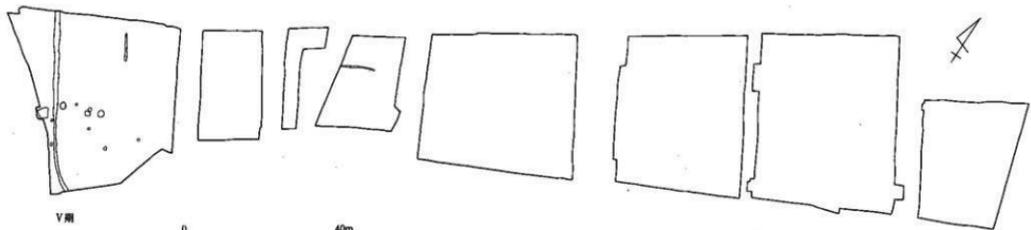
第378図 遺構変遷図①



Ⅲ期



Ⅱ期



Ⅰ期

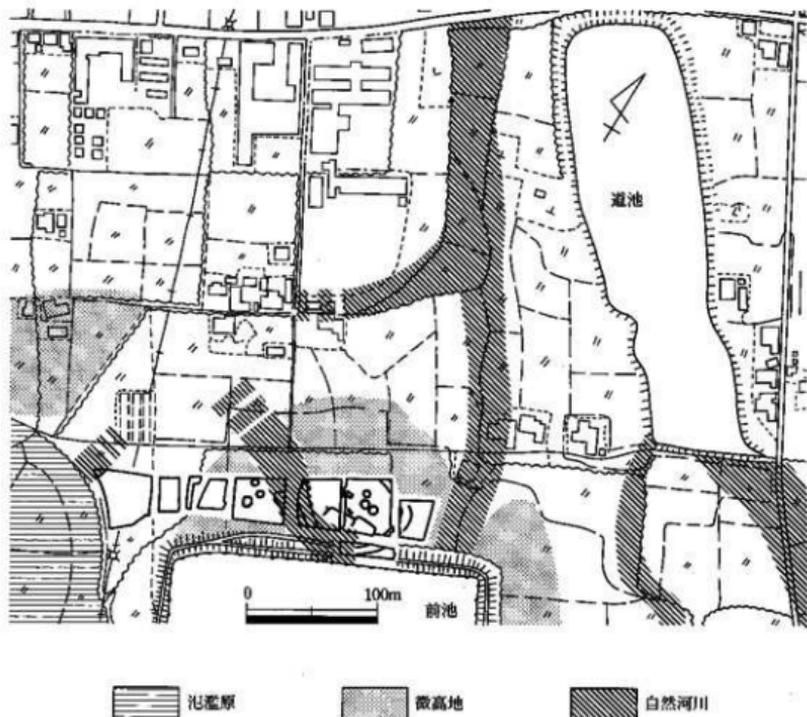


第379図 遺構変遷図②

(2) 環濠集落 (第380図)

龍川五条遺跡では、弥生時代前期後半～中期初頭にかけての環濠集落を検出した。県内における同時期の環濠集落は、現在のところ龍川五条遺跡の他に丸亀市中の池遺跡²⁾と志度町鴨部川田遺跡³⁾の2遺跡しか確認されておらず、当該期の環濠集落については未だその内容などがはっきりしない状況である。ここでは龍川五条遺跡の環濠集落の外部と内部の様相についてまとめを行いたい。

遺跡の所在地の周辺の地形については、すでに復元が試みられており⁴⁾、複数の自然河川と微高地と氾濫原が推定されている。環濠集落の立地する東微高地の両側には自然河川(西側の自然河川はSR03・04)が北流しているが、東側の自然河川は調査区の北方



第380図 遺跡周辺の旧地形復元図

約150mほどで西からの自然河川と合流して東微高地の北限となっている。東微高地を画するこれらの自然河川は、いわば天然の環濠とみなすことも可能であり、検出した2条の環濠(SD49・50)を内環濠とすると福岡県板付遺跡の外環濠に相当するものになる。環濠とこれらの自然河川の間については、一部(IVA区)を調査しているが著しい削平によって遺構は全く確認できていない。板付遺跡では貯蔵穴群や墓域が形成されていることが判明しており⁴、龍川五条遺跡でも遺構が存在する可能性は高いといえよう。東微高地と自然河川(SR03・04)を介して隣合う西微高地には、当該期の墓域が形成されているがこれについては後述する。

環濠集落の内部の様相についてであるが、削平を受けてはいるものの、2条の環濠をはじめ竪穴住居・掘立柱建物・土坑・区画溝などを確認している。環濠は微高地の西側を北流する自然河川(SR04)を一部取り込みながら2条平行してめぐらされており、その平面形は隅丸長方形に近い形態を持つもので、その規模は長径(東西)約80m、短径(南北)約60mに復元することができる。環濠の土層断面からは近辺に土壘が存在していないようであるが、環濠の間には全く遺構が確認されていないことは、ここに土壘が存在した可能性を示唆するものとも考えることもできる。入口については調査した範囲においては検出していないため確実ではないが、区画溝の一部を掘り残して陸橋状の通路にしたものを検出していることから、集落の入口も同様の陸橋状のものが想定される。建物は竪穴住居3棟・掘立柱建物2棟を復元したが、これ以外にも当該期の柱穴が存在していることから、建物の総数はもう少し多かったものと思われる。土坑は、長方形・楕円形・円形など様々な平面形をしており、数基でまとまるものや単独で点在するものなど統一性は見られない。その性格としては貯蔵穴・廃棄土坑・土墳墓などが考えられるが、個別の土坑について明確にする事はできなかった。注目すべきは、環濠によって周囲から区画された集落内をさらに画する区画溝である。平面形は明らかに方形を意識していると考えられ、中央部に陸橋状の通路を有している。区画された部分には土坑の他に柱穴が多数存在していることから、建物が存在していたことが想定される。区画内における建物の数はおそらく1~2棟程度で、区画外の建物の数よりも少なかったと考えられる。一つの集落内において、区画される建物と区画されない建物の二者が見られる(区別がなされている)ことは、墓域における区画される墓と区画されない墓という墓の在り方と対応するものであり興味深い。建物や墓の在り方が、一つの共同体を構成する成員層の在り方を反映するならば、成員の社会的な位置においても異なる2つのグループ(それが等質的な関係あるいは主従関係か

どうかは判断できないが)が存在していたことを示すことになる。この問題については、今後さらなる多角的な検討・検証作業が必要であり、ここではその可能性を指摘するにとどめる。

(3) 墓域

環濠集落と自然河川(SR03・04)をはさんで位置する西嶺高地において、周溝墓・木棺墓・土坑(土壌墓の可能性を持つものを含む)からなる弥生時代前期～中期初頭にかけての墓域を検出している。

周溝墓は、円形のもの2基(ST02・03)・方形のもの1基(ST01)の計3基を確認している。ST01・03は削平を受けて、主体部の痕跡さえとどめていなかったが、ST02では木棺を使用した主体部の痕跡を確認することができており、ST01・03も同様に木棺を使用した主体部が想定される。

木棺墓は2基(ST04・05)を確認している。ST04は平面長方形の床面の四周に、木棺の側板を固定するための溝状の掘り込みが遺存しており、長側板を小口板で挟み込んだ木棺の組み合わせ方法が推定される。一方のST05は平面隅丸長方形の床面に、小口板を固定するための一対の溝状の掘り込みが遺存しているもので、確実ではないが小口板を長側板で挟み込んだ木棺の組み合わせ方法が推定できよう。ST04からは碧玉製の管玉6個が出土している⁹⁾。

主に周溝墓群の南東付近を中心に分布する土坑群は、平面形が長方形・楕円形・円形など様々なものがみられ、その一部は土壌墓の可能性を持つものが含まれているものと考えられる。土坑の平面形が長方形ないし隅丸長方形で、断面形態が方形ないし逆台形で、床面が平坦な土坑が、土壌墓である可能性が高いものといえよう。

龍川五条遺跡の墓域では上記の3種類の埋葬形態を確認しているが、土坑群の一部と2基の円形周溝墓は、概ね自然河川(SR03)の流下する方向と同じ方向を持って配列されているように見える。さらに、ほぼ同じ方向を持つ溝(SD34)が円形周溝墓と方形周溝墓の間に位置しており、あたかも両者を隔てているようにも見えるが、意図的なものであるのかについては判断できていない。この墓域にみられる埋葬形態は、区画されるもの(周溝墓)と区画されないもの(木棺墓・土壌墓)に大別することが可能である。後者はさらに木棺を使用する(木棺墓)しない(土壌墓)に二分することができるが、区画の有無の方が視覚的にもその差がより大きなものであるといえよう。検出した範囲におい

では、区画される墓は3基で、区画されない墓よりも数は少ない。これは先述した環濠内における建物の数とその在り方とほぼ対応するものといえる。

弥生時代前期の段階では、墓域は西徹高地上に限られているが、中期初頭の段階になると、その一部（ST06・SK45など）は東徹高地の環濠内にも見られるようになる。この段階での墓域と居住域（環濠集落）との関係については、現在のところ判断できておらず今後の課題となろう。

第2節 遺物について

(1) 弥生時代前期の土器

龍川五条遺跡では、2条の環濠や自然河川や土坑及び包含層などの中から、ある程度まとまった量の弥生時代前期の土器が出土している。それらの土器個々については第3章第2節において述べた。ここでは、それらの土器の示す傾向を検討していきたい。なお、ここで分析の対象とする土器は、出土量の多いSD50（内環濠）とSR04（自然河川）から出土したもので、この両遺構での土器の点数は1,315点を数える⁹⁾。

まず、器種構成についてみると、壺形土器・無頸壺形土器・甕形土器・鉢形土器・高杯形土器・（壺用・甕用）蓋形土器・甌形土器・土製品がみられる。SD50、SR04ともに壺形土器と甕形土器の2器種が90%近くを占めており主要な器種となっていることがわかる。壺形土器と甕形土器の比率は、SR04上層・支流で壺形土器が60%弱と高い以外は、概ね壺形土器40%強・甕形土器50%弱という値を示している。無頸壺形土器はSD50とSR04中層でしか出土しておらず、しかも7点とごくわずかである。鉢形土器はいずれも3%前後と少ないが、破片資料では甕形土器と個体識別ができないものもあることを考慮しても、主要器種になり得るほど多くはないものと思われる。高杯形土器は弥生時代を象徴する土器の一つであるが、極めて少なく器種として定着したとは言い難い状況

	壺	無頸壺	甕	鉢	高杯	蓋甕	甌	甌	土製品	小計
SD48	37(42.5)		46(52.9)	3(3.4)			1(1.1)			87
SD49	20(38.5)		24(46.2)	2(3.8)			2(3.8)	2(3.8)		52
SB60	198(43.0)	5(1.1)	219(47.8)	12(2.6)	2(0.4)	4(0.9)	12(2.6)	7(1.5)	1(0.2)	460
SB04下層	79(45.1)		82(46.9)	5(2.9)	1(0.6)	1(0.6)	3(1.7)	2(1.1)	2(1.1)	175
SB04中層	238(44.2)	2(0.4)	249(46.3)	20(3.7)	5(0.9)	3(0.6)	16(3.0)	4(0.7)	1(0.2)	539
SB04上層-支流	89(58.5)		51(35.9)	4(2.8)			2(1.4)		2(1.4)	142
SB03	11(32.4)		15(44.1)	4(11.8)	1(2.9)	1(2.9)	1(2.9)		1(2.9)	34

表5 土器の器種組成

※（ ）内は%，以下同様

である。蓋形土器には壺用と甕用の両者がみられるが、ほとんどが甕用のものである。龍川五条遺跡で比較的土器の出土量の多い、主な遺構における器種構成の比率は、表5にまとめたとおりである。

次に主要器種である蓋形土器と甕形土器について器形・文様を中心に整理する。

蓋形土器は、口径が30cm以上の大形品とそれ以下の中・小形品がみられる。いずれも器形全体が判断できる資料に乏しいため、口頸部の形態を基準にするといくつかの形態がみられる。大形品は、広く開いた頸部に大きく外反する口縁部を持つものと内彎気味の頸部に短く折れ曲がる口縁部を持つものがみられるが、ほとんどが前者の形態を取るものである。中・小形品では内傾する頸部に強く屈曲する口縁部を持つもの、頸部から連続的に外反する口縁部を持つもの、発達した頸部に大きく外反する口縁部を持つものなどがみられる。口頸部の境に施される区画文には、段・削出凸帯・ヘラ描き沈線・貼付凸帯・櫛描き沈線がある(表6)。大形品では段・ヘラ描き沈線・削出凸帯・貼付凸帯がみられるが、段は低く不明瞭な退化した段階のもので、ヘラ描き沈線も3条までの少条のものしか認められない。削出凸帯・貼付凸帯はごく少量である。中・小形品においても同様の区画文が施され、それぞれの文様も大形品とほぼ同じ傾向を示している。大形品にみられないものにヘラ描き沈線多条と櫛描き沈線があるが、その割合は多くはない。SD50・SR04の蓋形土器は、ヘラ描き沈線少条が盛行し、古い要素である段がわずかに残存し、新しい要素であるヘラ描き沈線多条・貼付凸帯が出現しはじめた段階のものと考えられる。

	無文	段	削凸	ヘラ少条	ヘラ多条	貼凸	櫛沈	小計
SD48	15(45.5)	2(5.4)	2(5.4)	18(48.6)				37
SD49	5(25.0)	8(15.0)	3(15.0)	8(40.0)	1(5.0)			29
SD50	50(25.9)	7(3.5)	36(18.2)	83(31.8)	23(11.8)	10(4.8)		198
SR04下層	31(39.2)	10(12.7)	6(7.6)	30(38.0)	1(1.3)	1(1.3)		79
SR04中層	67(28.2)	80(12.6)	39(16.4)	80(33.5)	10(4.2)	11(4.8)	1(0.4)	238
SR04上・支	31(37.3)	5(6.0)	9(10.8)	32(38.6)	1(1.2)	5(6.0)		83
SK03	3(27.3)	1(8.1)		7(62.6)				11

表6 蓋形土器の文様

甕形土器の器形については、口縁部から底部に向かってすばまるもの、膨らみを持つ胴部の上半が立ち上がるもの、胴部が強く膨らんで胴部最大径が口径とほぼ同じか凌ぐものなどがみられる。概して、胴部が膨らむものが多くみられる傾向があり、胴部最大径が口径を凌ぐものはわずかにみられる程度である。口縁部の形態には、折り曲げて成形した如意形口縁のもの、口縁端部からやや下がった位置に粘土紐を貼り付けた凸帯文の系譜をも